新第七独立機動艦隊奮戦記　～第七艦隊復活せよ！！～

新米士官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新第七独立機動艦隊奮戦記　～第七艦隊復活せよ！！～

【Ｎコード】
Ｎ７０７３Ｒ

【作者名】
新米士官

【あらすじ】
ある夏の２人の出会い……１人は皇族として使命と義務を背負う者、１人は英雄の孫として未来と世界を担う者…その再会は、世界を激動の渦へと巻き込む！
２人に立ち阻む『敵』…その『敵』の正体とは？
そして、最新技術により復活した『新第七艦隊』の実力とは…？
主人公・ヒロインの２人とその仲間達、艦魂達、そして、『異世界』メンバーも加わった『第七艦隊』の真の続編！
日本人を嘗めない方がいいですよ？！

1　プロローグ（前書き）

……と言う訳で小説第四篇です。（おいおい）
『異世界』との兼ね合いだから、優先順位は…『異世界』→本作→『外伝』…かと……。
果たして……大丈夫か、自分？

1　プロローグ

ある夏の日……世界が騒がしい事も気にせず、僕は何時も通りに小学校に来ていた。
夏休みの校舎・校庭には誰もいない……校庭横の大きな木の下が目的の場所だった。

私は初めて『地面』に降り立った。
今まで広い様で狭いあそこの固い『床』の感触に比べれば不思議なくらい、自然的だった。
近くに学校が見えた……私は気になって行ってみた。

それが…彼女との…出会い

それが…彼との…出会い

大きな木の下に居た彼女に……

目の前に居た彼に……

一目惚れした……

僅か1週間の邂逅……

それでも、忘れ難く……

一生の思い出……

別れの日…運動場の夏祭りの音楽が響く中……

彼が買ってくれたイルカのペンダントを胸に……

また会おうと……

再会を誓い……

手を繋いで帰った……

その後、毎年あの場所に行ったけど……会えなかった……

その後、毎年父に頼んだけれど……無理だった……

だけど……

けれど……

何年掛かっても…あの約束は果たそうと思う……

ただ…2人は知らない。

この再会は…大きな激動を生む事を……運命付けられていた事を……。

それを乗り越えた……ある2人と…その仲間達……その世界の物語である。

1　プロローグ（後書き）

次号から本筋です。
『異世界』を読んでる人なら一発で解る……筈。
ご意見ご感想をお待ちしております。

2　主人公・親友・級友・校長（前書き）

とにかく今の内に更新！…と言う訳で第二話です。
まあ…題名のままですけどね。

2　主人公・親友・級友・校長

……

果たしてここはどこだろう？
確か…ベッドの上…だったよな？

なのに……ここは小学校の門の前。
しかも、昔会った女の子が目の前を走り抜けた。
どう言う訳か追い掛けて……着いた所はあの大きな木。
しかし、女の子は消えていた。
仕方なく、木の反対側に回る。
そしたら……そしたら……さっきの女の子がそのまま大きくなったかの様な女の子が……

『♪～♪～♪～♪～』

「ふがっ……また、あの夢か……」

ここは神戸海軍士官学校敷地内の第三寮寮長室。
そして…彼が部屋の主にして、第三寮寮長福本勇気（ふくもとゆうき）第一士生だ。

福本
「長々と解説ありがとう……さてと…」

携帯電話のアラームを止め、寝間着からハンガーに掛かっている軍

服に着替える。
まあ、普通の生徒ならこれで終わりだが、彼の場合は少し違う。
祖父、父親から受け継いだ軍刀『大和の飛龍』とモーゼルミリタリー軍用大型拳銃（これは祖父から）入りのホルスターを装着する。

福本
「よし…」

最後に制帽を被り、洗面所の鏡でチェックすると部屋を出た。

福本
「う～～…今日もいい天気だな～～」

背伸びをしながら生徒寮から校舎へと歩く。
既に3月20日…卒業式も終わり、今いる生徒の大半が1・2年生だ。
その1・2年生も里帰り等で居ない生徒も多い。

「おはよう、勇気」

福本
「おはよう、和正」

福本に呼ばれた同級生…遠地和正（とおちかずま）。
あの『砲術の遠地』の孫であり、福本の親友兼相棒である。

遠地

「あ～、早速で悪いがさ……お前に呼び出し」

福本
「呼び出し？　誰が？」

遠地
「鬼方校長だ」

福本
「土方校長が？　何もやって無いが…」

遠地
「どうせ、お前の父さんが絡んでいるんだろうさ」

福本
「そうか、そうだよな…じゃあ、行ってくる」

神戸海軍士官学校校長室

コンコン

福本
「福本勇気、参りました」

「…入れ」

福本
「失礼します」

中から充分威圧感のある人物の声が響いてきた。
福本はその返事に従い入る。
そして、『校長』と書かれた立て名札の載る机にその人物……土方劉少将（ひじかたりゅう）……もちろん、元ネタは『宇宙戦艦ヤマト』の土方司令である。
この人物は『鬼方』『鬼の土方』『鬼校長』…等のあだ名を生徒達から頂戴する程の鬼教官である。
実際、風紀違反者がぶん殴られて口を切ったは当たり前、失神者や数メートル殴り飛ばされた者がいる程だ。
その為、一部生徒は「『アンドロメダ』に乗って死んでしまえ」…と言ったそうだ。
ちなみに、この威圧感をそよ風の如く思う人間の1人が福本勇気だったりする。

福本
「父が何か言ってきましたか？」

土方
「そうだ…福本、お前は居残りでは無いな？」

福本
「居残りなら、今頃自分はここにいません」

土方
「だな…次官からは東京の実家に戻って来いとの事だ。明日の飛行機でな」

福本
「わざわざ校長を通す必要も無いのに…解りました。明日の朝一番の便で帰ります」

土方
「そう伝えておこう」

福本
「では、失礼しました」

そう言うと校長室を退室した。

福本
「父さんも電話すればいいのに…面倒な事をするな～」

そう呟きながらある場所を通った時……

ワアァァァ！！

福本
「……またか」

そう呟くと近くのドアから中に入った。
福本が入ったのは武道棟…剣道・弓道・柔道・合気道等の武道関係の練習場が入っている建物。
そして、『フェンシング場』と書かれた練習場に入るとある人物と遭遇した。

「勇気か」

福本
「今日は何人抜いたんだ、セイバー？」

「先程１３人目を終えたところです」

素っ気無くと言うべきか…答えた人物はセイバー。
神戸海軍士官学校フェンシング部女子ルーキーエースにして、既に男子１００人を抜いた女剣士。
実は彼女、僅かな人間しか知らないがダリア・エステロール連合王国の第二王位継承者で『あった』。
過去形なのは本人自ら継承権を放棄したからだ。
まあ、武道一筋の女人に相手では平凡な男が挑んで勝てる訳無いが…。

山城
「で、さっきの黄色歓声はギャラリーか」

セイバー
「あぁ、別に気にしてはいないがな」

フェンシング場の上は客席であるから、練習中でも割りと簡単に見れる。
しかし、練習中に見に来る人間はそうそう居ない……1年前までは。

福本
「まあ…無理はするなよ」

セイバー
「大丈夫だ」

素っ気無く答えるセイバー。
果たして……今日は何人倒される事やら……。

さて、この福本・遠地・セイバーの3人を神戸士官学校の中ではこう称されていた。
『スリーイーグルス（3羽の鷲）』…と。

次号へ

2　主人公・親友・級友・校長（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

3　勇気　家に帰る（前書き）

新米士官
「実はこんな紹介するのが夢だった！」

福本（大介）
「あの『週刊宇宙戦艦ヤマト』の登場人物紹介みたいな？」

新米士官
「おう！　てな訳で登場人物紹介！」

『元帥の孫』にして、『スリーイーグルス』の1人、今作主人公。

福本勇気（ふくもとゆうき）　16歳　男性　一般将校科

誰もが認める今作主人公。
『異世界』では脇役ながらも、それで終わらぬ帝国海軍軍人。
祖父母と父親の事もあり、士官学校では教官からも信を受けている事もあり、士官学校生徒会特別委員。
そして、祖父の血を色濃く受け継いだ軍略・戦術家でありながら、初志貫徹・時には相手が誰だろうと意見を通す頑固者ながら、人の面倒見も良く、新設の第三寮寮長である。
実は料理が得意、だから、飢えた時の2人の料理係だったりする。
口癖は『障害は破壊してでも乗り越える』。

相も変わらぬ、福本勇気の相棒兼親友。『スリーイーグルス』の１人。

遠地和馬（とおちかずま）　１６歳　男性　戦闘科（砲術課程）

幼少時代から勇気と付き合いがあり、『砲術の遠地』の孫。
陸上の狙撃銃から戦艦の主砲まで自由自在に扱える、砲術課期待の星。
夢は『お祖父ちゃん同様、勇気の下で艦隊砲戦指揮』。
第三寮寮生で飢えた時は勇気にすがっていたりする。

異国の女剣士…正体は某国のお姫様！　『スリーイーグルス』の１人。

セイバー　１６歳　女性　戦闘科（陸戦課程）

神戸士官学校フェンシング部女子部員でルーキーエース。
僅か一年で男子１００人抜きを果たす女剣士。
ダリア・エステロール連合王国王家出身、第二王位継承者であったが、権力に興味が無い武道一筋な性格と、第一継承者の姉を困らせ無い為に王位継承権と王家を棄てた。（勇気は『国の為に国を棄てた』て言っている）
その後は福本伊吹中将が保護者代わりとなり、神戸士官学校に入学している。
本人は『王家』や『女』で見られたく無いようで、『私は私だ。それ以上でも以下でも無い』がある種の口癖。
ただし、飢えた時は勇気を頼ったりする事もしばしば。

常に厳しい神戸士官学校校長。
鉄拳制裁は当たり前。

土方劉（ひじかたりゅう）　５０歳　男性　海軍少将

指導が厳しく、『その鉄拳で殴られたら一生忘れない』と言われる『鬼教官』。
その反面、策略家であり、自らが教鞭を取る戦史・戦術・戦略の講義は学生達からの評判は高い。
次期、第一艦隊指揮官との呼び声もある人物。

3　勇気　家に帰る

3月21日
羽田空港

福本
「この人の多さは慣れないな…」

そう呟きながら荷物を牽く福本。
実際、必要品以外は荷物の中に入れてある。
さすがに軍刀は……。

下士官
「福本次官のお子さんですね。次官がお待ちです」

声を掛けて来た下士官の案内で車に向かった福本。
荷物をトランクに放り込み、後部座席に乗り込んだ。
もちろん、そこには海軍次官であり、父親である福本伊吹中将がいた。

福本（伊吹）
「突然、済まないな」

福本
「わざわざ校長を通じなくても良かったのでは？」

福本（伊）

「ついこの間から、神戸の士官学生が消えてるんだ。電話が掛かってきたら、ややこしいだろう?」

福本
「……まあ、確かに」

2月頃から数名の士官学生が行方不明になっている。
『福本（勇気）専用の先輩』・『スリーイーグルスのブレーキ役』とあだ名された山城正人士官候補生以下数名が行方不明になっており、軍と家族には箝口令を敷いている。
もちろん、事件・事故の両面で捜査継続中だが。

福本（伊）
「それより、母さんが会うのを楽しみにしていたぞ。まあ、いくら軍務に戻っても、息子は忘れられんのさ」

福本
「…そうですか」

福本勇気の母親、福本麻希（ふくもとまき）は勇気出産前には日本海軍陸戦隊連隊長だった経歴を持つ母親だ。
ただし、勇気を出産したあとは育児休暇を取っており、勇気が神戸士官学校に入学を契機に現場復帰、現在は陸戦隊教官の職を勤めている。

福本
「久しぶりだな…母さんの料理も…」

福本（伊）
「誰かの手料理を食べているのか?」

福本
「山城先輩の家にはちょくちょく…あとは土日に自分で作るぐらいですね…なにせ、腹を空かせる人間がいますから」

福本（伊）
「ほう…そうなのか」

福本
「…それで、なんでいきなり帰って来いと？」

福本（伊）
「それは夕食の時に話そう」

福本
「…わかりました」

そして……夕食時

福本（伊）
「さて…突然帰って来いと言ったのは他でも無い……お前には許嫁がいる」

福本
「……へ？」

…あの～、聞き間違いでしょうか？　確かさっき、『許嫁』がどうこうと……イイナズケですよね？

福本（伊）
「あぁ、許嫁がいると言ったんだ」

福本
「……まさか、この流れからすると、会えって事ですか？」

福本（伊）
「そうだ」

福本（麻希）
「それも、明日にね」

福本
「あ、明日！？」

普通に語る父親と、にこやかに笑う母親……なんでこんなに憎たらしいと思うのか？

福本（麻）
「場所はここ。ちゃんと軍装で行きなさい」

福本
「……うそ…」

……場所、帝国ホテルなんですけど…しかも、軍刀も持って行けと…？

福本
「……念のために訊いておきますが……拒否権は…」

福本（伊）・（麻）
「「無い♪」」

……事が終わったら、この2人を当分、外に出れない様にしてやる…と勇気は思った。

福本
「はぁ…」

溜め息を吐きながら勇気はベッドへと身を預けた。

福本
（許嫁か……恋愛結婚だったお祖父ちゃんとお祖母ちゃんの子供で同じく恋愛結婚だった父親が、そんな反対の事をするか？）

それに、母親が何にも言わないと言うのがおかしい…逆に薦めている。
つーか、もしお互いに相性合わなかったらどうすんだ？

福本
（まあ…両親は俺の初恋なんて知らないし……知ってるのは山城先輩・遠地・セイバー…あとはお祖父ちゃんとお祖母ちゃんぐらいだからな…）

本人に会っているのはお祖父ちゃん・お祖母ちゃんだけだし…。

福本（伊）

「勇気…言い忘れていた事がある」

福本
「父さん？」

扉越しに父親の声が聞こえた。

福本（伊）
「その許嫁には４月から神戸士官学校に通ってもらうからな」

福本
「……へ？」

福本（伊）
「それだけだ…おやすみ」

ほほう…双方当事者への確認も無く、相性合わせもまだなのに無理矢理にでも結婚させようって魂胆ですか？

福本
（…ええ度胸やん。事が終わったら、親父から始末つけよ）

……密かに危ない考えを持っている息子でした。

次号へ

3　勇気　家に帰る（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

4　許嫁？　初恋相手！？（前書き）

今回は極甘……かな？
甘い物が苦手な方はご注意を。

登場人物２

主人公の母親にして、元は陸戦隊隊長！　料理はお任せお母さん。
福本麻希（ふくもとまき）　５３歳　女性　海軍大佐（兼主婦）

福本勇気の母親にして、福本伊吹の嫁、元は海軍軍人。
浅間山荘では伊吹と共に肩を並べた『戦友』である。
一時期は兼業主婦だったが、勇気が小学１年の三学期から神戸士官学校入学まで育児休暇を取得、入学後は現場復帰している。現在は陸戦隊教育部長。
料理の腕も良く、勇気には『将来の為』と言い料理指導していたため、勇気もある程度は料理が出来る。

4　許嫁？　初恋相手！？

3月22日　帝国ホテル前

福本
「う～ん…この格好はどうかと思うけどな…」

帝国ホテルの前で軍服を着て軍刀を持った福本が呆れていた。

福本
（まあ、百歩譲って軍服は良いよ……軍刀はどうよ、軍刀は）

そう思いながら帝国ホテルのフロントに向かう。

福本
「福本勇気の名前で予約をしているだが…」

フロント係
「福本勇気様ですね……はい、お連れ様は既にお部屋にいらっしゃいますよ。お部屋は…こちらになります」

そう言うとメモ用紙に部屋番号を書いてくれた。

福本
「ありがとうございます（てっきり、お見合いみたいな設定になってると思っていたんだが…）」

部屋を取ってあるとゆう事は……まさかね…。

福本
「…とにかく…行くしか無いか…」

福本
「……ここ…だよな」

そう呟くと、部屋番号を見る……もちろん、間違い無い。
ますます不安になっていく勇気……両親が何か仕掛けていないかと。
まあ、部屋の周りを彷徨いても意味は無さそうなので行動をおこす。

コンコン

「…どうぞ…開いてます」

この声を聞いた瞬間、勇気の体に電撃が走った。
そう……この声は忘れもしない、あの夏の思い出……自分が軍人を目指す目的とした……

福本
（馬鹿！　何を考えている自分！　いくら無理矢理だからって幻想抱いてどうする！）

自分自身を叱責しつつ、心を落ち着かせてから、ゆっくりとドアを開ける。
しかしだ……中の相手は中々入って来ない心配に思ったのか、ドアの前まで来ていた。

そう……ドアを開けた瞬間、相手と御対面……

福本
「あっ！」

「……うそ…」

……許嫁だから…お互い初対面の筈……だが……

福本
「……セルベリア…」

「……勇気…」

そう…相手は間違い無く、あの夏に出会い…再会を約束した相手。お互い、最後の日に教え、今まで…あの夏の日から決して口にしなかった相手の名前を呼んだ……言ってしまえば相手に会えない様な気がして…それが怖くて…それが嫌で…希望を消したく無かったから……ずっと心で呟き続けた相手の名前……。「…うそ…うそじゃないよね……幻想じゃないよね？　勇気よね？」

勇気
「…あぁ…そうだよ、セルベリア…こんな形だけど……会えたよ」

「ゆうき～～！♪」

ガバッ！

やっと会えた愛しき初恋相手は泣きながら勇気に抱き付いた。
そんな勇気に出来る事は…そんな彼女をしっかりと受け止め抱き締める事だった。

福本
「１０年…だよね、セルベリア？」

「うーん…正確には９年だけどね」

セルベリア……あの夏に出会い、恋して、いつか再会しようと約束した相手。

セルベリア
「けど…許嫁って聞いたから嫌々来たのに……なんでこうなった訳？」

福本
「まあ、多分だけど……お互いの両親は何かしらの理由でこの関係に気付いたんじゃないかな？」

それだと話は大いに解る……特に家の父親は…。

セルベリア
「あぁ…私の父も有り得るかも」

福本

「そうなんだ……そう言えば、９年間も何してたの？　毎年あの時期にずっと何時もの所で待ってたのに」

セルベリア
「……許嫁だから言うけど……私の家はアーヴ皇族……しかも、私は第一皇位継承者なの」

福本
「あぁ…そう言う事か。納得納得」

そう言うと勇気は座っていたベッドにゴロンと転がる。
アーヴ人及びアーヴ皇族の事は父親から散々聞いている。
そして、彼らが何れ程の苦労の末にこの地球に来たのかも……

セルベリア
「…驚いた…そんな軽い反応しかしないのね」

福本
「伊達に『英雄の孫』はやってないからね…それに愛した人間の素性を一々気にしてたら、まともに恋なんてやれたもんじゃないよ」
つまり、恋人の家族の地位も名誉もお家事情も関係無い……と言う事。

セルベリア
「……大好き～♪♪」

福本
「うお、ちょっと!?」

……甘～～い日々の始まりと言うべきかは置いといて……勇気

はそんな恋人に抱き付かれるのでした。

福本

「勝手に閉めるな～～！」

次号へ

4　許嫁？　初恋相手！？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

5　仲間との接触（前書き）

本日から『新第七艦隊』か『外伝』を更新致します。明日は『外伝』の方を更新しようかと思います。

5　仲間との接触

3月23日　午前6時10分　帝国ホテルの一室

福本
「……」

さて、ここで問題です。
ただいま、なせ、福本勇気が黙っているのか？
次の3つより選択して下さい。

1　お漏らししたから。

2　いつの間にか部屋が変わっていたから。

3　許嫁が一緒のベッド、しかも、半裸で寝ていたから。

さあ、どれ！？

福本
「うるさい、作者。ちなみに正解は3番だ」

正解まで言うのかい。

福本
（う～ん…あれからお互いの身の上話と思い出話に華が咲いて、話が一段落したから先に寝ちゃって……あれ？　じゃあ、俺は寝惚けて何かやったか！？　え？　マジ！？！？）

1人悶々と悩む福本。
そうこうする内に……

セルベリア
「う〜〜ん…おはよ〜〜〜う」

福本
「おはよう……ねえ、昨日の夜、俺が何かした？」

この質問に最初はきょとんとした顔だったが、周りの状況にクスクスと笑い始めるセルベリア。

福本
「お〜い、出来れば答えてくれ〜〜」

セルベリア
「ごめんごめん、私の寝相を言うの忘れてた」

福本
「寝相？」

セルベリア
「そうそう、私ね、寝る時は半裸か薄着で寝るの。しかも、親しい人がいる時はその隣でね」

福本
「あ〜、つまり、今回は安心して半裸で俺のベッドの俺の隣に寝た…と？」

セルベリア
「そう言う事♪」

福本
「……出来れば薄着で良いから着て下さい」

セルベリア
「私達、許嫁よ？」

福本
「この小説は18禁じゃあ無いから。あと、俺の問題」

セルベリア
「ウブね～」

福本
「作者、レイプとか無理矢理とか嫌いだから」

……話が大いにズレてるぞ。

セルベリア
「それより、朝ご飯食べたい」

福本
「そうだね。行こうか」

朝食後

福本
「しかし…これからどうするかね？」

行けとは言われたが、翌日はどうしろとは言われていない。

福本
「勝手に部屋を引き払って良いのやら…判断に迷う…」

遠地
「あ、勇気！」

福本
「ん、和正？　それにセイバー？　なんでここにいるんだ？」

遠地
「え、聞いて無いのか？　護衛の増援の事？」

福本
「護衛の……増援？」

まさか…と思った時、セルベリアが抱き付いて来た。

セルベリア
「勇気、これからどうするの？」

遠地
「勇気、護衛対象と仲良くするのはいいが、ベタ過ぎやしないか？」

セルベリア

「別にいいでしょう。あなたに関係無いんだから」

遠地
「いや、関係有るんですけど」

……微妙と言うか、何も知らない2人は常識と認識の範囲内で言い合う。

セイバー
「待て、和正。どうも様子がおかしい。それにあのやり手の次官が我らに護衛任務を押し付けて終わりな訳が無い」

…冷静なる元王族女騎士は正確克つ的確な判断を下した。

福本
「……だな、3人共、場所を変えよう」

再びお部屋

遠地
「……マジかよ」

セイバー
「あの次官がやりそうな事だ」

セルベリア
「…つまり、私が護衛対象？」

福本
「って言われて来たんだよな？　和正もセイバーも」

遠地
「あぁ、昨日いきなり連絡で『人手が足りないから、2人に手伝って欲しい』って言われた」

セイバー
「それで、手伝い内容が『勇気が護衛している人間の護衛』…つまり、増援要請だった訳だ」

そんな事だろうと思った。
あの親父は妙に人の出来事を面白くする癖がある。
今回もそれだろう。

福本
「それで、予定かなんか聞いて無い？」

遠地
「あぁ、それなら聞いてる。部屋を引き払って、靖国神社き行き、その後は国防省に行って、家で夕食…だな」

セイバー
「私も聞いた。本来なら、『家で夕食』と聞いた時点で気付くべきだったな」

まったくだ。
護衛対象が海軍次官の家で夕食なんて余程の個人事か国家機密級な会談だ。

福本
「あの親父め…まあ、それは置いておくとして、出るのはいいが…
…服は預かってないか？」

セイバー
「それならこれだ。『軍服なら大丈夫』と言われて渡された」

福本
「ありがとう。セルベリア、これに着替えて…着方は解るよな？」

セルベリア
「大丈夫大丈夫、それくらいなら着なれてるから」

あっけらかんに言うとセイバーから風呂敷包みを受け取り、脱衣場に入った。

遠地
「で、説明してもらおうか？　何で許嫁兼初恋相手がアーヴ皇族の第一後継者なんだ？」

福本
「知らん。あえて言うなら偶然の産物だ。俺だって昨日始めて知ったんだからな」

遠地
「あ、そうなの？」

福本
「そうだ」

セイバー
「別に良いのではないか。それどころか、そうで無いと『英雄の孫』とある意味釣り合わね」

福本
「それはそれで困るけど…まあ、ありがとう」

セルベリア
「はいは～い、着替えたよ～」

遠地
「うわ…神戸（うち）の制服！？」

福本
「あ、セルベリアは４月から神戸に入るから」

セイバー
「おやおや…当分は暇に成りそうには無いな」

次号へ

5　仲間との接触（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

6　父が語る　許嫁の舞台裏（前書き）

登場人物紹介３

勇気の初恋相手にして、許嫁！！？
アーヴ皇族家第一継承者！

セルベリア　１６歳　女性　一般将校科（予定）

福本勇気の初恋相手であり、この度、許嫁となった少女。
作中でも書いた通り、アーヴ皇族家及び皇位第一継承者。
アーヴ人は長きに渡る宇宙流浪生活と持ち前の数世代先の技術力（日本側計測）を持つ民族で、現在は日本に移住中。
彼女はその移住の先鋒隊の１人。
昔はお転婆娘の様だったが、今では普段は大人しい（あくまで『普段』です）。
神戸海軍士官学校一般将校科に二士生として入学予定。

6　父が語る　許嫁の舞台裏

夕食前　福本家

福本
「で、これはどう言う事か説明して下さい、父さん」

福本伊吹次官は息子勇気に遠地、セルベリア、セイバーの４人に「説明しろ」と迫られていた。

福本（伊吹）
「わかったわかった…だから、そう睨むな」

苦笑しながら息子達を諫める。

福本（伊）
「う～ん……そうだな、まず、お前と第一継承…いや、セルベリアとの接点を見付けたのは、実家の写真だ」

福本
「じいちゃんの？　写真なんてあったかな？」

福本（伊）
「あったぞ。カメラの調子を見るって言って撮ったやつがな」

セルベリア
「あ、まさか…」

福本（伊）
「さすがに最初は気付かなかったが、親父と母親の目は見逃さなかった様だな…直ぐに『アーヴ皇族に子供は居ないのか？』って訊かれて、慌て持って来てたアーヴ皇族の資料を探したぞ」

福本
「じゃあ、俺を迎えに来た日に、おじいちゃんの前で慌ててたのは…」

福本（伊）
「そう言う事だ。お陰で大変な目に遇ったぞ…それと、セルベリアの無断外出も御両親にはバレてる」

セルベリア
「う、嘘…何も言わないから、気付かれて無いと思ってたのに…」

福本（伊）
「子供の事は親がよく解るもんだ」

セイバー
「それで、その事が確認され、2人を許嫁にさせたのは何時の事です？」

福本（伊）
「それは最近だ。セルベリアが日本への派遣が決まった頃だから…2月ぐらいに久し振りの向こうの接触で決めた」

遠地
「そんな簡単に決めて大丈夫なんですか？」

福本（伊）
「大丈夫だ。過去に接触し、しかも顔見知りだから、問題は無いだろうとゆう判断だ。それにお互い再会を約束した様だし…世界的有名な『元帥の孫』とアーヴ皇族の『第一継承者』では文句は出ないだろう？」

福本
「それは置いておくとして…つまり、俺とセルベリアの関係は公認って事で良いんですね？」

福本（伊）
「『許嫁』と言う以上に公認の証明があるのか？　何なら証明書と証明写真と証明者を出そうか？」

福本
「そこまで言うなら要りませんよ」

少し呆れながら答えた。

福本（伊）
「あ、そうだそうだ、忘れるところだった。セルベリア、御両親から預り物があった」

セルベリア
「預り物？」

福本（伊）
「あぁ、渡せば解ると言っていたが……そうそう、これだ」

そう言いながら持って来たのは『サーベル』だった。

セルベリア
「これは…『朝日の神龍』！？」

遠地
「なんで日本名？」

セルベリア
「知らない…但し、これは我がアーヴ皇族家の家宝」

セイバー
「家宝か…抜いていい？」

セルベリア
「えぇ、どうぞ」

受け取ったセイバーが抜いた。
しかし、現れた姿は『サーベル』では無く『刀』だった。

福本
「なるほど…外装は『サーベル』だが造りは『日本刀』か。鞘は太く長いのもだが、材質は軽く丈夫な物を使っているな」

セルベリア
「当たり前よ。アーヴ皇族家の初代皇帝自ら打って鍛えて造った物よ」

セイバー
「ほほう、それは凄い」

鞘に収めながら言った。

遠地
「自分で造ったって言うのがまた凄いな」

福本（伊）
「となると…我が日本には2振りの『龍』がいる訳だ」

セルベリア
「2振り？」

福本
「あぁ、俺の腰の物は『大和の飛龍』。同じ『龍』だよ」

セルベリア
「へぇ～」

福本（麻希）
「さあ、みんな、夕飯よ。難しい話は後にしましょう」

福本（伊）・セルベリア・遠地・セイバー
「「「「はーーい！」」」」

福本
「ところで母さん、母さんは何時知ったの？　許嫁の件は？」

福本（麻）
「あら、その時に同席していたのよ」

福本（伊）

「許嫁の話を進めたのも、お互いの母親だ」

福本・セルベリア・遠地・セイバー

（（（（（母親ってある意味怖いな～））））））

次号へ

6　父が語る　許嫁の舞台裏（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

7　神戸海軍士官学校第三寮

3月28日

神戸海軍士官学校内　第三寮　寮長室（福本の部屋）

福本
「基本的に第三寮は去年の2月中旬に完成して、俺らが最初に入ったからまだ綺麗なんだ。しかも、四階建てで、一階づつに５０部屋計１５０部屋。四階は大ホールになってて、お風呂は一階の非常階段の直ぐ近くに男女別の大浴場なんだ」

セルベリア
「ふーう…で、部屋は1人部屋なの？」

福本
「いや、設計上は相部屋設計で、収容人数は３００人。壁は防音素材を採用の頑丈な壁なんだってさ」

セルベリア
「それでいま入っている人数は？」

福本
「7組の３０名…ちなみに、俺もセルベリアも7組だよ」

セルベリア
「それはわかった……で、私が勇気と相部屋なのはなんで？」

福本
「……それは俺も解らない…まあ、親父が弄ったに決まってるんだけど」

あの父親の悪戯心が動いたに違い無い…そうとしか考えられない。

セルベリア
「あぁ、やっぱり…まあ、私は勇気と相部屋で嬉しいわ」

福本
「ありがとう…問題は俺の身が保つかな…」

そこかいな……。

福本
「当たり前だ。この小説は１８禁指定と違うだろう？」

はい、確かに…。

遠地
「おーい、外の商店街から色々と買って来たぞ～」

そう言いながら、外に買い物に出ていた遠地とセイバーが両脇に抱えた袋を置いた。

福本
「ご苦労様。さて、何を買って来たんだ？」

セイバー
「昼食は蕎麦にしようと和正が言ったから蕎麦にした」

福本
「引っ越し蕎麦の代わりか？」

遠地
「別にいいだろう？」

福本
「まあ、いいが…でそっちの袋は？」

遠地
「夕飯の食材。どうせだから、すき焼きにした」

福本
「すき焼きって…作者の影響を受けて無いよな…まあ、いいか。蕎麦はざる蕎麦でいいよな？」

セイバー
「別に構わん」

セルベリア
「私も同じく」

福本
「わかった。お昼には出すから少し待ってろ」

そう言うと福本は蕎麦と長ネギの入った袋を掴むと隣の部屋に消えた。

セルベリア

「ねえ、まさか、この部屋に台所があるの？」

セイバー
「ある。台所に冷蔵庫、食器洗い機、オーブン、炊飯器…ある程度ならちゃんとした料理が出来る」

何故か『断言』するセイバー。

遠地
「だから、土日は福本の所で昼食や夕食を食べたりする時があるけどな」

セルベリア
「ふーん…じゃあ、勇気は料理が出来るの？」

セイバー
「主計科の調理課程の人間よりは劣るかも知れないが、出来る方だと思う」

遠地
「そうだな」

この会話の間にも隣の台所からは蛇口の水の音や、冷蔵庫を開ける音が聞こえる。

セルベリア
「あれば主婦ならぬ、主夫よね？」

遠地
「うーん、あれを主夫と言うのかは知らないが…珍しいと言えば珍

しいな」

セイバー
「そんな我らが『元帥の孫』にも弱点が1つ…元帥同様、英語が苦手だ」

セルベリア
「英語が？」

遠地
「と言っても海軍用語とか船舶用語は話せる。ただ、一般日常会話の方が苦手なだけだ」

セイバー
「まあ、人間なんてものは結局そう言う物だ。完全無欠なんて有りはせん」

遠地
「確かにな」

そう言うと2人は携帯電話を取り出す。

セルベリア
「あの…いきなり携帯電話を出して何を…」

遠地
「いや、電話番組の登録をな」

セイバー
「イザと言う時に知らないと困る」

セルベリア
「あぁ、本当ね」

合点がいったらしく、セルベリアもケータイを出した。

遠地
「おい、勇気。お前は登録したのか？」

福本
「あぁ、ケータイ貰った瞬間に登録した」

セイバー
「早っ！！」

遠地
「まったく、飾りっけも無いドコモなのに、登録は早いな」

テーブルにあった福本のケータイを弄りながら呟く。

セイバー
「ん、これは…」

遠地
「あ…おい、勇気。まさか、この写真まだ持ってたのかよ！？」

福本
「別にいいだろう。減る物じゃなし」

セルベリア

「どれどれ」

セルベリアが横から覗くと、画面には陽気にVサインを出す福本と、その横で頭を抱えながら苦笑する男の写真たった。

セルベリア
「なに、これ？」

遠地
「去年の夏頃、うちの同期生が異性で好きな幼馴染みの政略結婚を妨害しようとしたら、偶々交渉に来てた武器密売組織とマフィアに遭遇、逃げ回ってたら、政略結婚相手の正体を掴んだ勇気とその写真の先輩…山城正人先輩が駆け付けて全員張り倒した時の写真。まあ、殆んど倒したのは福本だけどな」

セイバー
「その山城正人先輩は現在行方不明…訓練航海で神戸に帰還したら突然居なくなっていた…と言う訳」

福本
「おまえら、その話を続けると蕎麦を食わさんぞ」

遠地
「行方不明から1ヶ月も経っててよく諦めないよな」

福本
「あの先輩が早々簡単に死ぬかっての…さて、それよりも蕎麦だ」

……まさか、この約4ヶ月後に再会するとは誰もこの時は予想すらしていなかったが……。

次号へ

7　神戸海軍士官学校第三寮（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

8　始業日

4月1日　神戸海軍士官学校

神戸海軍士官学校の年度始めは早い。
4月1日には朝早くに起床ラッパが鳴り響き、生徒達は飛び起きて制服を着ると校庭にクラス毎(ごと)に集合・整列し、土方校長の短い訓示を受け、国旗拝礼、国歌斉唱（雨天時は講堂体育館）、その後、朝食である。
朝食後は年度初の風紀検査……ここで違反者は土方校長の『ありがたい』鉄拳制裁を受ける……を無事通過すると、年度初授業となる。
ただ、本日7組は少し違う授初業となっていたが……。

2年7組教室

「…と言う訳で、年度編入になるが新しい仲間に成ったセルベリアだ」

今までの経緯を7組担任である栗田正春(くりたまさはる)大尉が説明し、セルベリアを紹介していた。

セルベリア
「1年遅れて入ったけど、よろしくね」

この挨拶に男女共に受けは悪く無かった。

ただ、男子はアーヴ皇族と聞いて余計な期待を持った様だ。
しかし……

セルベリア
「あ、口説こうなんて考えても無駄よ。だって私には福本勇気って言う許嫁がいるからね」

男子・女子
「「「「「「「「「「…な、なんだって!!?」」」」」」」」」」

ちなみに7組は男子15人、女子15人のバランス型である。
だから、当事者本人である福本と事情を知る遠地・セイバー、一部人間を除けば驚くのは当たり前と言えば当たり前だ。

福本
（うわ～、一気にクラスメイト（特に男子）の視線が痛く成ったな～）

男子1
「おい、勇気！　どうゆう事だ！」

男子2
「確固たる説明を要求する!!」

男子3
「お前の許嫁と言うのが余計に許せんわ!!」

栗田
「こらこら、騒がしくするな」

男子４
「いや、ある意味納得出来ませんよ！」

男子５
「島津！　大谷！　２人は何か言う事は無いのか！？」

名前を言われた２人……島津輝正（しまづてるまさ）と大谷日向（おおたにひゅうが）はお互い顔を見合わせると苦笑しながら言った。

島津
「お前らな…それなら英語以外で福本を越えてみろよ。まあ、１００年は掛かるだろうな」

大谷
「それに勇気は福本元帥の孫、福本伊吹次官の息子…許嫁相手としては悪くないと思うよ。まあ、他人が口を挟んでも何にも成らないさ。つまり、言うだけ無駄たね」

ここまで言われると言った方は完全に分が悪い。
無論、本人達も解っているから、「結局、勇気には敵わないよな～」と陽気に言って、潔く退いた。

栗田
「さて、ガス抜きが済んだところで、今学期の行事予定を確認する。セルベリアは勇気の隣に座れ」

セルベリア
「わかりました」

1時間目終了後

まあ、当然と言えば当然で…セルベリアの周りにはクラスメイトが人垣を作る。

男子1
「しかし、福本も許嫁って大変だな～」

男子2
「お前、大丈夫か？　問題起こしてポイ…は無しだぜ」

福本
「…それぐらいしかないのか？　話す事は？」

女子1
「けど良いな～。セルベリアちゃんと勇気君って相性良さそうだし～」

女子2
「そうよね～、福本君って世界一信頼が置ける異性だよね～」

セルベリア
「……どう言う事？？」

女子3
「あ、そっか、聞いて無いんだ。勇気君は恋愛相談とかよく聞いてくれるんだよね～」

セイバー
「だから、勇気は女子からも人気がある」

遠地
「まったく、恐ろしいわな～」

福本
「おい、だから、なんで…」

ガララ…

教室の引き戸が開き、栗田教官に続き、土方校長が入って来た。
この瞬間、人垣は崩れ、直ぐに自分の席に座り、しーんと静まり変える。
2時間目の始まりだった。

次号へ

8　始業日（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

9　クラスメイト

授業終了後　第三寮　寮長室

遠地
「やっと1日が終わった～～」

福本
「お前が疲れてどうするんだよ。1年長く居るのに」

遠地
「いいじゃねえかよ…勇気～、なんか無いか～？」

福本
「あのな…」

セルベリア
「あはは……私も何か欲しい…な～」

福本
「…2人揃ってかよ…まったく」

苦笑しつつ、近くの戸棚を開ける。
しかし…中は空っぽ。

福本
「あぁ、忘れてた、この間、みんなで食べてから補充してなかったんだった」

遠地
「う～そ～だ～ろ～」

福本
「残念ながら本当だ。まあ、あと、数分待てば…」

コンコン

島津
「勇気、支援物資到着だ～」

福本
「お、遠慮すんな、入れ入れ」

島津
「じゃあ、失礼するぜ」

大谷
「同じく、失礼するよ」

「…入ります」

福本
「お、島津に大谷、長門じゃないか。また珍しい組み合わせだな」

大谷
「長門は僕らに付いて来ただけだよ。まあ、福本の部屋に用があったらしいけど」

福本
「本当か、長門？」

「……（コクン）」

尋ねられた長門摩耶（ながとまや）は無言で頷いた。
まあ、頷いたと言っても顔が０，０１ｃｍ程動いたかどうかの際どい頷きだが…。

福本
「あはは、そうかそうか…あ、忘れるところだった。セルベリア、名前ぐらいは聞いたかも知れないけど、念のため紹介しておくよ。右が島津輝正、真ん中か大谷日向、左が長門摩耶。島津は戦闘科、大谷は作戦科、長門は情報科だよ」

島津
「まあ、俺は戦闘科砲術課程だけどさ、専門は対空攻撃さ」

大谷
「僕も、福本君の代わりにクラス委員長をやってるげどね」

長門
「……」

遠地
「いや、なんか喋れよ」

支援物資こと、酒保（売店）の袋から森永の板チョコを取り出しな

がら、遠地がツッコミを入れる。

福本
「しかし、長門は凄いよな～、パソコン弄らせたら水を得た魚だからな」

セルベリア
「なんで??」

大谷
「なにせ、彼女は3年前に海軍の極秘データベースに侵入して、データを閲覧、そのまま帰った人物ですからね」

福本
「あの時は国防省全体がパニックになったからな……何処の諜報機関がやったのか大騒ぎしてみれば…長門だったって訳」

大谷
「まあ、仕方ないと言えば仕方有りませんね。彼女の家は今でも有名なＩＴ企業の重役の娘さんだった訳ですから」

福本
「まさか、１３歳の娘にデータベースの防御を突破されるとは思っていなかったからな」

長門
「…弱すぎ、脆すぎ、隙が有りすぎ…第一防御線は１０秒で抜けれた」

島津

「…全防御線を抜けるのに掛かった時間は？」

長門
「…3分」

セルベリア
「…防御線はいくつあった？」

大谷
「10以上かな？」

福本
「15だ。ちなみに15番目の防御線は最長の1分で抜けられた」

遠地
「で、見たデータベースってなんだったんだ？」

長門
「…艦艇の改装データベース」

島津
「…それは軍事機密だな…で、なんで長門はここに居るんだ？　軍事機密の無許可閲覧は程度によっては禁固刑から無期懲役…下手すれば死刑だろう？」

福本
「それは親父が原因さ。急いで逮捕しようって言う周りを宥めて、「今回の事はいい教訓となった。しかし、当事者を捕まえて失態を闇に葬るか、或いは毒をもって毒を征する事にするかの重要な局面だ」って言って、長門の罪を取り消す代わりに、神戸士官学校に推

薦入学させる事にしたんだよ」

セルベリア
「なるほど…ハッカーにはハッカーで対抗しようって事ね」

大谷
「本当に君のお父さんは転んでも只では起きない人だね」

福本
「まあ、福本家は普通じゃあ飽き足らない家だからな」

セルベリア
「けど、良く長門も嫌がらずに入ったわね？」

長門
「……士官候補生なら、艦艇改装データベースも軍事機密データベースも覗けるから便利」

遠地
「…お前、実はオタク？」

島津
「あはは、そんな訳が…」

長門
「……（コクン）」

5人
（（（（（あっさりと認めたよ、おい！！））））））

長門の無言の頷きにズッ転けたい衝動を抑えながら、心中でツッコミを入れる。

セルベリア
「じゃあ、データベースを見た理由も…」

長門
「…艦艇の３Ｄ画像を作ろうと思って見ただけ」

福本
「なるほど、なるほど…なんか、長門らしいや」

……とまあ、個性的キャラの多い福本の周りでありました。

次号

9　クラスメイト（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０　陸奥と悪者（前書き）

明日より、火曜日まで更新が遅延するかもしれません。
なお、次号は一気に時系列が飛びます。
また、明日は『外伝』を更新（予定）です。

登場人物４

７組クラスの若担任

栗田正晴（くりたまさはる）　２７歳　男性　海軍大尉

福本達のクラス、７組の若き担任。
年配が多い教官達の中では異様に若い。
過去の出来事で目を負傷、土方校長が神戸士官学校に引っ張ってきた。
我の強い７組を普通に統率している。

『対空屋』の血を引き継ぐ孫

島津輝正（しまづてるまさ）　１６歳　男子　戦闘科（砲術過程）

島津少将（元出雲艦長）の孫にして、福本達のクラスメイト。
遠地同様、腐れ縁の様な状況で祖父の母校に進学、祖父同様に対空戦を専門に扱っている。

大谷日向（おおたにひゅうが）　１６歳　男子　作戦科

１２．８クーデター（事件）の海軍側首謀者柿宮少将の下で参謀役だった大谷大佐（終戦時）の孫。
祖父の海軍残留の恩義も有って、福本に付いて行く形で神戸士官学校に入学、「恩義の事はいい」と言う福本の作戦参謀役の位置に自然となった。
低姿勢の好青年。

パソコンを動かせば天下一の腕　天才天然ハッカー

長門摩耶（ながとまや）　１６歳　女子　情報科

海軍の機密データベースをいとも簡単に見てしまった天然（あるいは天才）ハッカー。
ＩＴ企業重役の娘で、幼い頃からパソコン教育（基礎だけ）を受けた事がある。
免罪の代わりに神戸士官学校に推薦入学、本人は自由に機密データベースを覗ける為、満足している。
趣味は３Ｄ画像化、時々パソコンゲーム等をやったりする。
容姿は簡単に言うと眼鏡っ子、その為、某漫画の情報統合思念体に似ている。

１０　陸奥と悪者

４月２日　神戸海軍士官学校　練習戦艦陸奥

セイバー
「やはり、４月２日の艦内掃除は本当だったな」

福本
「うん、何せ、親父が居た頃に始まったからな、『陸奥掃除』はね」

セルベリア
「丁度配備された頃だから？」

大谷
「その通りですよ。大正生まれだから…陸奥はかなりの古参兵ですね」

長門
「…ちなみに、一番は三笠です」

福本
「あっはっはっは、確かにそうだな。しかし、歳関連の話は無しだ」

艦橋でモップ、雑巾、その他掃除用具を使い、掃除をする７組メンバー。

遠地
「あぁ、確かに。女の前では歳の話は厳禁だ」

全員が頷いた。
何故なら……

「みんな～、おはよう！！」

そう言いながら、何時の間にやら福本の後ろに女性がいた。

福本
「おはようございます、陸奥さん」

遠地
「おはよう、陸奥」

島津
「元気そうで何よりだ」

陸奥
「当たり前よ。伊達に長生きはしてないわ」

大谷
「おやおや…」

7組のメンバーは一時掃除の手を止め、陸奥と挨拶を交わす。

陸奥
「さて、あなたがセルベリアね。よろしく」

セルベリア

「え、あ、はい…よろしくお願いします…」

陸奥
「うふふ、「なんで私を知ってるの？」って言う顔ね。まあ、当然かしら？」

福本
「当然ですよ。あ、セルベリア。彼女がこの艦の艦魂である陸奥さん」

陸奥
「さっきの答えだけど、日本海軍の情報なら、ある程度までは自動的に入って来るの」

福本
「何せ、陸奥さんは中将だからね。大体の情報は入ってくるんだよ」

陸奥
「まあ、今は予備役中将だけどね。それでも、海に出れるだけマシね」

栗田
「こら、お前達。口を動かすより、手を動かせ」

全員
「「「「「「「「はーい」」」」」」」」

担任の栗田大尉の一声に7組全員が持ち場に戻る。
ちなみに、この『陸奥掃除』は昼間まで続く事になる。

掃除終了後

遠地
「お腹空いた～～」

島津
「右に同じ～～」

福本
「あっはっは、お疲れさま～～」

7組のメンバーは空きっ腹を抱え、食堂に向かっていた。

「わっはっはっはっは！　7組の諸君はご苦労だな！」

食堂の前まで来た時、わざとらしく声を掛ける人物がいた。

福本
「辻本か」

相手を確認すると、福本達の顔が嫌な顔をした。

辻本
「まあ、艦橋の掃除なんてのは7組にお似合いだな。行くぞ」

そう言うと笑いながら去って行った。

ただ、従者の様に付いていた生徒が頭を下げると直ぐに後を追った。

セルベリア
「…誰？」

大谷
「辻本信夫（つじもとのぶお）、『エリート』の1組生徒です。『戦争は密室やるもんだ』とか『現場は駒だ』、『今の海軍は不公平だ』と言う低能バカですよ」

長門
「…ちなみに辻本きよみ元社民党議員の血縁者」

島津
「もう1人は村山純（むらやまあつし）。村山富市の孫だ」

セイバー
「『首相になりかけた男』の孫か」

福本
「ただ、村山は辻本と比べ者に成らないくらい、頭の回転は早い奴だ…あいつの下で無ければ、俺が貰ってるんだがな～」

遠地
「おいおい、グループの作戦参謀役は大谷だぞ？」

大谷
「1人2役は大変だよ。出来れば『次席参謀』が必要かな？」

島津

「あっはっは、違いないや」

セイバー
「悪物を見た、早く食堂で食べよう」

セルベリア
「そうね」

遠地
「あぁ～、腹減った～」

島津
「メシ～、メシが俺を待っている～」

長門
「…早く食べたい」

大谷
「やれやれ…まあ、皆一緒か」

福本
「そうだな、よし、メシだ～！」

次号へ

１０　陸奥と悪者（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

11　許嫁の『特技』（前書き）

危うくこの関連話を入れ忘れるところでした。
次号で一気に２００８年（魚釣島事変後）へと時系列を移します。

登場人物　５

未だ現役の『予備役中将』
陸奥（むつ）　？歳　海軍予備役中将
言わずと知れた練習戦艦陸奥の艦魂。
既に艦籍は練習戦艦に成っているが、未だ現場に復帰可能。
伊達眼鏡は止めている。
無論、歳の話は無し。

『無能エリート』な男
辻本信夫（つじもとのぶお）　男　１６歳　作戦科
我の強い７組を『下等』にしか見れない１組生徒で辻本きよみ元社民党議員の血縁者。
その言動から『無能』・『アホ』・『士官失格』と陰口を叩かれている。
超保守的（の上に無知）な人間。
福本とは兵棋演習で連敗記録を更新中。

『無能エリート』の寡黙でクールな参謀役

村山　純（むらやまあつし）　１６歳　作戦科

村山富市の孫で辻本信夫同様に１組生徒。
普段は辻本の従者の様に近くにいる。
但し、その影響下から抜け出すと、多種多様な作戦を考え出す参謀役で、行動的克つ主張を曲げない。
福本も『あいつの下でなければ…』と言う程、見込みがある。

11　許嫁の『特技』

福本（兼寮長）の部屋

セルベリア
「特技…ですか？」

島津
「そうそう、福本は料理、長門はパソコン、セイバーはフェンシング…と言う具合に何か得意な事はあるでしょう？」

部活を終えたセイバーを交えて話が盛り上がっていた。

セルベリア
「う～ん……あるにはあるんだけど……う～ん……」

福本
「無理に公表しなくていいぞ。まあ、無いなら無いでいいし…」

島津
「なんだ？　許嫁も知らないのか？」

福本
「…あのな、何でもかんでも早期に知らんとあかんのか？」

島津
「いや～、許嫁だから、あ～んな事も、こ～んな事も……済まん、だから、軍刀だけは止めてくれ（－－；）」

微妙にヤバい事を言った島津も、漸く勇気が愛刀『大和の飛龍』に手を伸ばしているのに気付いて言うのを止めた。

遠地
「同じ戦闘科の人間として言わせてもらえば、絶妙なるタイミングでの判断だったな」

セイバー
「あと数秒後に気付いておれば、確実に危なかっただろうな」

大谷
「島津、空気読もうね」

福本
「まったくだ」

島津
「いや、お前は軍刀持とうが、モーゼル持とうが半端無いから…と言うより危ないから」

引き吊った笑いを浮かべながら島津が言った。

セルベリア
「うーーん……仕方ない、みんなにはバラしちゃうわ」

福本
「いいのか？　別に強制はしないが…」

セルベリア

「いいのいいの、どうせ何時かは話さなきゃならないし……ちょっと待ってね」

そう言うと、部屋から出て行った。

島津
「……悪い事したか？」

福本
「本人が話すって言ったんだから、別にいいよ」

長門
「…私も気になる」

大谷
「君のパソコンでも解らないのかい？」

長門
「アーヴ皇族のデータは強力に防御されてる…だから、見れない」

セイバー
「まあ、そんな簡単に閲覧できたら、世の中は終わりね」

遠地
「いや、終わりは言い過ぎだろう」

そんな会話が交わされている時、いきなり福本が動いた。

島津
「どうした、勇気？」

福本
「いや…セルベリアの声がしなかったか？」
遠地
「いいや、しなかったぞ」

島津
「おいおい、お芝居ならもう少し…『お芝居では有りませよ？』…うお！！？」

…一番驚いてます…島津が。

島津
「お、お、大谷、い、いま、せ、セルベリアのこ、声が…」

大谷
「聞こえたよ。どうやら、『特技』とはこの事の様ですね」

さも当然とばかりの大谷。
遠地、セイバー、長門も確り聞こえていたらしく、キョロキョロと周りを見ていた。

セルベリア
『あはは…驚きますよね～。アーヴ皇族は何かしらの特殊能力があるんです。私はこの通りテレパシーが使えます』

福本
「そうだったのか…無理矢理みたいで済まないな」

セルベリア
「ううん、但し、当分の間は秘密にね」

セイバー
「いつの間に部屋へ入っていた？」

セルベリア
「うふふ、ひ・み・つ♪」

福本
「いやいや、だいたい解るから」

福本の言葉にセルベリアを含めて全員が笑っていた。

……無論、セルベリアの『特殊能力』については後々にクラス全員に知られる事になるが、本人自身は「何時かはバレる」と解っていたので騒ぐ事にはならなかった。
そして……物語は２００８年へと向かう……。

次号へ

11　許嫁の『特技』（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

12　異動（前書き）

すみません……システムか何かの異常で更新が遅れました。

12　異動

２００８（平成２０）年８月１６日

国防省海軍次官室

コンコン

福本
「父さん。来ましたよ」

福本（伊吹）
「おぉ、来たか。入れ」

福本
「失礼します」

父親に呼ばれた勇気は海軍次官室に入った。

福本（伊）
「突然で悪いが…お前とセルベリア、長門は異動してもらう」

福本
「やって父親のこき使いから解放される訳と？」

福本（伊）
「…それは皮肉か？」

福本

「真実ですから」

神戸海軍士官学校卒業後、勇気、セイバー、長門は福本次官に引っ張られる形で国防省に配属され、福本次官の手足として働いていた。

福本
「それで、どこに異動です？　連合艦隊ですか？　陸戦隊ですか？　それとも別の部署ですか？」

福本（伊）
「異動先は……ここだ」

そう言いながら見せた辞令書を一読した福本は苦笑を浮かべた。

2日後……8月18日　神戸鎮守府

山城
「で、回された場所がこの天城だった訳か？」

福本
「その通りです」

セルベリア、長門と共に天城の艦長室にやって来た勇気は先輩兼艦長（兼主席参謀）の山城に挨拶と共に辞令書を見せた。

山城
「まったく…まあ、人手が足りない訳じゃあないが、気軽に乗って

いてくれ……あ、まさか、この時期だからか？」

福本
「…と言いますと？」

山城
「うん、実は経産（経産省）や農水（農林水産省）とかから、シーシェパードをなんとかしてくれって要請があってな…2日後に天城が該当海域に向かって出撃するのさ」

長門
「…シーシェパードのホームページにはこれからの予定が大々的に書かれている」

いつの間にやら開いたのか、長門がノートパソコンを開いて見ていた。

セルベリア
「だから、牽制する為に？」

山城
「あぁ、いくら何でもそこまでやられたら、意地も出てくるしな。それに例え期限と数が決められているとは言え、捕鯨が出来ないと生活出来ない人間も存在すると言う事さ」

軍人の任務は国防である。
その国防の唯一無二と言える目的は国民の生命・財産を守る事である。

コンコン

佐野
「艦長。天城出撃準備は完了しました。後は出撃を待つだけです」

山城
「お、そうか…佐野、福本達の部屋を確保しておいてくれ」

佐野
「わかりました」

部屋の中を確認した佐野は返事だけすると出て行った。

山城
「まあ、向こうが事を起こさない限り、警告だけで済む……何かやる気なら、容赦しないがな」

福本
「それが基本方針ですね？」

山城
「あぁ…あ、そうだ。今夜の天城さんの相手はそっちでしてくれ。こっちも色々有るからさ…必要なら、シルヴィアが……勝手にするか」

セルベリア
「勝手にワインでも出して飲んじゃいますか？」

山城
「うん、その通り…あの癖だけはどうにかならないものかな…」

苦笑しながら答える山城。

長門
「…主計科のリストだと、ワイン用の小型冷蔵庫を購入してる」

いつの間に開いてのか、ノートパソコンで主計科のデータを閲覧していた。

山城
「……長門、頼むから犯罪になる様な事にはなるなよ？」

長門
「…大丈夫、バレないから」

山城・福本・セルベリア
（（（もの凄～～く、不安だ…））））

次号へ

12　異動（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

13　トラック諸島にて（前書き）

18年冬のオリンピックが韓国に決まったそうです。

福本
「作者…また、『失敗しろ』とか思ってない？」

……何の事やら…その前に韓国でオリンピックがやれるの？

山城
「何故そう思う？」

石原都知事が再選する前後の産経新聞で始めて知ったけど……東京の予算が幾らか知ってる？

佐野
「関係有るんですか？」

大いにある…で？

シルヴィア
「知らぬ。幾らだ？」

東京の予算は約4兆円…韓国の国家予算と同じくらいだって。

4人
「「「「……えぇ！！？」」」」

つまり、東京単独でオリンピックする様な物…いや、国防を国に任

せているから、多少の余裕は東京都にも有るけど、韓国にそれだけの余裕があるか、そして、参加国のニーズに応えられるか、会場・選手村・その他関係施設等の用地・建設が出来るかどうか……だね。まあ、情報が少ないから、実際は何も言えないけどね。

13　トラック諸島にて

8月28日　トラック諸島

戦争終結から63年が経過したトラック諸島は既に独立国であるミクロネシア連邦に統治権は委譲されていた。
しかし、天然の良港であるトラック諸島は日本海軍では大規模戦技訓練・演習などで使用したい時はミクロネシア連邦政府に国防費などから費用を出して借りていたりする。
これはミクロネシア連邦政府にとっては貴重な外貨取得の方法であり、手持ちの海軍（無論、日本帝国海軍から見れば小規模）の訓練も同時に行い、日本海軍と共に戦技を研いでいた。
ただ、近年は観光や海底資源採掘などで外貨を稼いでいたが……。

天城は一時寄港としてトラック諸島に入港していた。
ここで最新情報取得と補給、休憩などを目的とした一時寄港だった。

福本
「う～～ん…南方だから暑いな～」

セルベリア
「そう？　そんなに感じないけど…」

長門
「……普通」

福本
「すみませんね、１２月生まれなんでね。少し暑さに敏感なんです」

先輩である山城から許可をもらって福本・セルベリア・長門は上陸して、メインストリートを歩いていた。
無論、夏服に軍刀、拳銃を装着してだ。
まあ、必要は無いだろうが。

セルベリア
「あ、路面電車が来たわ。あれに乗る？」

福本
「いや、いい。我慢して歩く」

長門
「…意地張ってる」

福本
「嫉妬するよりは大分マシだ」

ちなみにトラック諸島などの『南洋委託統治地域』は日本帝国政府の手によって上下水道などのライフラインの整備だけで無く、路面電車が運行していた地域もあった。
残念ながら現在は無いが、この世界では日本帝国が存続した為、残っている。

福本
「ん……あれは…」

セルベリア

「どうしたの？」

福本
「前に居る女の子…あれは…」

長門
「……なに？」

福本
「…間違いない。ちょっと行こう」

「太平洋で迷子になるなよ！」…と言うのは同期達からの言葉だった。
なら反対に訊こう……お前らはどれだけ地中海が小さいか知っているか？
何の予備知識も無しに太平洋に出れば気が狂うに違い無い。
実際、私はビック7の練習戦艦に乗って航海した……何回、気が狂いかけて、死にかけたか…何回、仲間に助けられたやら……今やいい思い出だ…。

福本
「チャオ！　ユリウス！」

ポン！

「ひゃわ！！！？」

いきなり両肩を叩かれて、驚いて数センチ程体を浮かせた。
慌て振り向くと、唖然とする肩を叩いた本人と後ろから追い掛けて来る連れ2人の姿……って顔見知りばかりだし！！

「勇気！？　貴様、何故ここに居る！？　いや、その前によくも私を驚かせてくれたな！！！」

福本
「ま、待て、ユリウス！　いくら何でもそれは無いだろう！？」

「うるさい！！！」

「……何を公共面前でしている？」

……ここでまたタイミング良くこいつが現れる…私と同じ制服を着ながら「やれやれ」と言いたそうな顔で……。

福本
「チャオ、マーリオ…頼むから助けてくれ」

「…本気を出したら簡単だろう…ユリウス、そこら辺で止めろ」

「う……わかった」

ユリウスとマーリオ……イタリア海軍軍人で有りながら、福本達が三士生の時に神戸士官学校の7組へ留学していた。
だからこそ、福本も気軽に声を掛けれたが……。

セルベリア
「…訓練航海？」

マーリオ
「あぁ、新造の駆逐艦2隻に乗せられてね」

場所を変えて南国風のカフェに入った5人は冷たい物を頼んで話していた。

ユリウス
「まあ、こいつと一緒の艦で無かったのが救いだが」

マーリオ
「なんでそう機嫌が悪いだ？」

ユリウス
「ふん…そう言う3人こそ、何故ここに居る？　左遷されたか？」

長門
「…何気に酷い」

福本
「いや、戦艦天城乗艦を命ぜられて、これからシーシェパードから捕鯨船団を守りに行く」

マーリオ
「ん、じゃあ、さっき「日本の戦艦が入港した」と言っていたのは天城の事だったのか？」

セルベリア
「えぇ、そうよ」

ユリウス
「シーシェパードの連中も哀れだな。行った先には『最強の１６インチ戦艦』が待っているのだからな」

長門
「…そこまで有名？」

マーリオ
「あぁ、世界は違うが、１８インチ戦艦を沈めた１６インチ戦艦だからな」

福本
「おやおや、有名になったな～（先輩が聞いたらなんと言うか…）」

ユリウス
「まあ、シーシェパードの連中に同情なんぞ要らん。面倒だから、全て沈めていいぞ」

セルベリア
「イタリアでも妨害活動をしてるの？」

マーリオ
「あぁ、マグロ漁船を狙う時がある。しかも、イタリアマフィアが

武器をシーシェパードに流していると言う噂がある程だ」

福本
「そうなのか？　今度、親父に言って調べてもらった方がいいな」

ユリウス
「もし、それが本当で撲滅作戦を実施する時には私達にも協力させてくれ。日本の漁民を守る事はイタリアの漁民を守る事に繋がり、延いてはイタリアの名誉と国民を守る事に繋がるからな」

福本
「あぁ、わかった…と、注文した物が届いた様だ。続きは飲みながら話そう」

セルベリア
「賛成！」

次号へ

13　トラック諸島にて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４　シーシェパードＶＳ帝国海軍　１（前書き）

さて、反日海賊集団とマジの日本帝国海軍の対決です。

１４　シーシェパードＶＳ帝国海軍　１

９月４日　該当海域　天城艦橋

福本は本日（と言っても艦橋に来てから一時間程しか経過していないが）何度目かの位置確認を行った。
先ず、護るべき捕鯨船団は視界に納められるがかなり離れている…
…捕鯨船団を護る軍艦が捕鯨を邪魔しない為だ。
そして、周囲には２隻の駆逐艦が警戒していた。
艦載ヘリを飛ばし、警戒の穴を塞いでいる。
艦橋は艦長席に座らず佐野と話をしながら指揮を執る山城、その横でシルヴィアが佐野と山城の会話を聞いていた。
長門は折り畳み椅子と机を出して来て、ノートパソコンを見ていた
…シーシェパードのサイトに新たな動きが無いか調べる為だ。
セルベリアは隣に居る、風華さんは通信オペレーター席、宮里少佐は戦闘指揮所……軍医の横井少佐が艦橋に何故か居る。

福本
「横井さん…なんで艦橋に居るんです？」

横井
「決まってるじゃない。医務室は暇なの。それにコーヒーは艦橋で飲む方が美味しいの」

福本
「…そうですか」

…まあ、擁するに「相手をしてくれる人間が居ない」と言う事だ。

佐野
「現れませんね。奴ら」

山城
「まあ、まだ始まったばかりだ。それに奴らは自分達のサイトで大々的に宣伝していたからな…簡単には諦めないだろう」

双眼鏡を片手に周囲を見た佐野と山城が喋る。

山城
「長門、動きはあったか？」

長門
「……変化なし」

山城
「わかった。続けてくれ」

長門
「…了解」

……普段通りの艦橋の風景である。

シルヴィア
「海に潜った…と言う可能性は無いのか？」

佐野
「潜水艦ですか？　まあ、近年の物は無理でもUボートぐらいならあり得そうですが……どうですかね？」

山城
「解らん。奴らのする事は常識ある日本人には理解不能なところが有るからな…何をするかはこちらが訊きたいよ」

福本
「今や金さえあればスティンガー対空ミサイルやＲＰＧ…下手すれば軍の最新兵器が携帯火器とは言え買えますからね」

山城
「それだから、変な団体は見張らなきゃならんのだよ…社民党みたいな奴らは特にな」

艦橋に居た全員が苦笑した。
実際、あの政党ほど首を傾げる事を言う政治政党はいないからだ。

佐野
「艦長、レーダーに反応有り。艦種はトロール漁船と小型高速艇」

山城
「やれやれ…駆逐艦と捕鯨船団、艦載ヘリに連絡。本艦も警戒及び戦闘態勢」

佐野
「了解」

ブザーの音と共に戦闘配置に就き警戒態勢に入る乗組員達。

福本

「レーダーの設置位置の関係で我々が先に探知しましたね」

山城
「あぁ。さて、奴(やっこ)さん達はどう思うかな？　狙った捕鯨船団に戦艦が居たらな」

ニヤリと山城は笑った。
確かにそうだ…戦艦と喧嘩するのは普通に考えてやりたく無い。

山城
「だが、注意しないとな。何をするか解らん輩が揃っているからさ」

福本
「はい」

佐野
「艦長、戦闘配置に就きました」

山城
「ん、わかった」

レーダー探知距離から更に視認距離に接近したシーシェパードの船団。
トロール漁船3隻に黒塗りの小型高速艇が1隻の計4隻。

佐野
「間違いありません。黒塗りの三胴船体は『ゴジラ』号です」

山城
「著作権侵害で訴えようか？　東宝に借名許可すら取得していないから」

福本
「それは東宝と外務省と弁護士に相談して下さい。まあ、円谷監督で泣いている事は確かですがね」

シルヴィア
「正人、動いた。向こうの1隻が捕鯨船団に接近する」

山城
「佐野、機関全速。天城を捕鯨船団とシーシェパード船との間に割り込ませろ。射撃準備もしておけ」

佐野
「了解」

次号へ

１４　シーシェパードＶＳ帝国海軍　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

15　シーシェパードVS帝国海軍　2

速度を上げた天城は捕鯨船団と接近するトロール漁船の間に割り込んだ。
トロール漁船と垂直線上の位置に来ると速度を下げ、右舷に設置された25mm・40mm機銃、10cm65口径高角砲、15，5cmケースメント副砲がトロール漁船に狙いを定めた。

天城艦橋

山城
「こちらは日本帝国海軍高速戦艦『天城』。捕鯨船団の護衛である。それ以上、捕鯨船団に近付くなら発砲する。繰り返す、それ以上、目的無く近付くなら不審船と見なし発砲する」

船外拡声器を使い、近付こうとするシーシェパードのトロール漁船に向かって山城は警告する。
続けて英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語などを使い同じ主旨を伝え、モールスや発灯信号で警告を繰り返す。
これに接近して来たトロール漁船は速度を落とし、並走しながら進む。

シルヴィア
「案外あっさりと従ったな」

山城
「どうだろうね…事を起こす気なら、こちらを油断させる為かも知

れない。佐野、警戒を厳重にしろ」

佐野
「はい」

最初からシーシェパードを信用する気は無い日本海軍。
だいたい、夜中に標的漁船の船底に爆弾を仕掛けて『撃沈』したりする奴らをどう信用しろと？

佐野
「艦載ヘリが3隻に近付きます」

福本、セルベリアも双眼鏡を片手に3隻の集団を監視していた。
山城も福本も感付いていた…怪しい、スプラッシュコールも何もおこさない、異様な雰囲気、異様な静けさ、嵐の前の静けさ…だと。
だから、2人とも双眼鏡から目を離さなかった。注意深く4隻の動き、乗組員達の動きを観察する。何かを落とす事も見逃さない様に……。

長門
「……動き有り」

何時も通りの音量、何時も通りの音質……の筈の長門の声に福本・山城は長門の方に振り向いた。

長門
「サイトの予定欄が更新された。内容は『これより海の破壊者に正義の鉄槌を下す』…和訳だけど、原文見る？」

山城・福本

「「いや、いい」」

先輩と後輩の息の合った返答だった。
果たして、シーシェパードは日本海軍戦艦の艦橋で自分達のホームページを見張っていたと思うだろうか？
彼らからすれば、日本本土から漸く通達があって自分達のやろうとする事に気付く……これが粗筋だった筈だ。
だが、その目論みは崩れた。

風華
「艦長さん！　ヘリからの通信です！」

レシーバーに全神経を集中させていた風華が叫んだ。
叫びながら彼女は自らが座る通信席にある『オープン』のボタンを押してから、映像の受信ボタンを押した。
直ぐにスピーカーからヘリの無線交信、スクリーンにヘリからの撮影映像が映った。

『こちら一号機！　シーシェパードの奴らは拳銃……訂正！　マシンガンをこちらに向けて撃っている！　これより応戦する！！』

『ドドドドド！』

パイロットの報告の次に機銃の射撃音がスピーカーから聞こえてきた。
ここまでくれば間違い様も疑い様も無い。
故に山城の決断は素早かった。

山城
「これよりシーシェパードを危険武装集団……海賊と認定！　特別指令３０２に従い、これを撃滅する！！」

艦橋にいた全員が頷いた。
ちなみに、『特別指令３０２』とは福本次官及び連合艦隊司令部から通知された捕鯨船団護衛に対する指令で、攻撃あるいはそれに類する行為を受けた場合は、シーシェパードを海賊と見なし攻撃して良い…と言う事前承認だった。

『こちら右舷銃座！　並走するトロール漁船より発砲！　繰り返す、発砲した！　応戦許可願う！』

佐野
「こちら艦橋！　許可する。繰り返す、許可する！　構わん！　海賊は掃討せよ！」

近くに居た佐野がマイクで叫んだ。

『了解！！』

静寂だった海に双方の発砲音が木霊する『戦場』となった。

次号へ

15　シーシェパードVS帝国海軍　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６　シーシェパードＶＳ日本海軍　３

唐突に始まった銃撃戦……しかし、相手は所詮、素人の集まりだった。
まあ、兵役に就いていた人間が居たとしても、余りにも状況が悪すぎた…特に天城に喧嘩を吹っ掛けたトロール漁船は。
彼らの持つマシンガンでは天城の機銃座に装着された機銃操作員防御用の防弾板を貫く事は不可能だった。
では、反対に天城の４０ｍｍ・２５ｍｍ機銃はどうか……航空機迎撃用大口径機銃を人に向ければどうなるかなんて少し考えれば解る。
そもそも、漁船で戦艦に喧嘩を売るがの大間違いだ。

天城艦橋

……そんなこんなの状況で天城は優位（当たり前だが）に銃撃戦を進めていた。
しかし、福本は不可解に思った……そもそも、なぜこれ程、派手にやる必要があるのか？……と。
そう思いながら双眼鏡でヘリと撃ち合っている方を見た……直ぐに異変に気付いた、『ゴジラ』がいない。

福本
「先輩！　ゴジラ号がいません！！」

山城
「なに…探せ！　仲間と捕鯨船団との間の何処かにいる筈だ！」

手空きの人間が双眼鏡片手に周辺を探した。
山城は漸く計算結果を出した…あのゴジラ号が消えた事で成立した計算結果…シーシェパードが敵いもしない銃撃戦を挑む目的と作戦が。

セルベリア
「いました！　２時の方向、本艦の前を通過する進路で最大速にて捕鯨船団に接近する気です！」

セルベリアが叫ぶ。
既に日本海軍では『ゴジラ』号の速度が２４ノットである事は入手していた。
故に全速力となれば移動距離の測定は可能だ。

山城
「宮里、撃てるか！？」

宮里
『無理だ！　副砲も高角砲も射角外で撃てない！』

天城の副砲はケースメント副砲、高角砲も主に左右両舷に配置している為、進路上の敵は撃てない。

福本
「先輩、主砲なら仰角調整すれば撃てます！」

山城
「だが……そうか、宮里、聞こえたか！？」

宮里
『バッチリ聞こえた！　一番・二番主砲塔、砲撃用意！　散布界は絞るな！　ゴジラの未来進路に発射する！』

多分、使う事の無いだろうと思われていた天城の４１ｃｍ主砲に４１ｃｍ主砲弾が装填される。

佐野
「『ゴジラ』は進路を保ち、捕鯨船団に向かいます！」

山城
「捕鯨船団は退避出来たか！？」

風華
「まだです！」

捕鯨船団の速度と『ゴジラ』号の速度を考えれば意味が有るかは解らないが、山城は訊いた……予想していた答えだった。

宮里
『主砲砲撃用意完了！　何時でもいける！』

福本
「タイミングを合わせないと逃げられちゃいますよ！」

山城
「だが、どうやって…」

その時、スクリーンがいきなりカウントダウン画面に変わった。

長門
「…そうくると思って計算した。零になったら砲撃すれば確実」

山城
「長門！　お前、いったいいつの間に天城のシステムに侵入したんだ！？」

長門
「…ついさっき。侵入方法は天城に訊いた」

全員
「「「「「「……」」」」」」

……一時的に全員が沈黙した。

山城
「…まあ、その話は後だ！　先ずは『ゴジラ』退治が先だ！」

福本
「ですね！」

無理矢理感たっぷりの話の終わらせ方だが、今は論議する時間は無い。

佐野
「カウントダウン開始。４０秒前！」

山城
「こちら、艦橋。右舷全銃座に告ぐ。これより４０秒後、主砲を発砲する。対音、対ショック防御！」

山城がマイクで警告を終えた時、シルヴィアがある事に気付いた。

シルヴィア
「あのトロール漁船は大丈夫か？」

福本
「自業自得です」

それよりもあのトロール漁船に気付かれて、『ゴジラ』号の進路が変わる方が問題だ。
それが心配だった……しかし、結局は変わらなかった。

佐野
「１０秒前！　９、８、７、６、５、４、３、２、１…」

山城
「てぇー！！！」

ズドーン！！ズドーン！！

世界で三番目に強力な主砲が火を吹いた。
１トンの鉄の塊が放物線を描いて飛来する。
それが小型高速艇に向けられたらどうなるか？……簡単な事だ。

佐野
「弾着、いま！！！」

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

４本の水柱が上がった。
高々と上がる水柱を天城艦橋に居た全員が見ていた。
そして、水柱が収まると同時に佐野が報告した。

佐野
「『ゴジラ』の反応は消えました…当然かも知れませんけどね」

次号へ

１６　シーシェパードＶＳ日本海軍　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

17　後始末

捕鯨海域は何時もの通りの静かな海に戻っていた。
唐突に始まった銃撃戦は唐突に終わった……ヘリと撃ち合っていたトロール漁船が大慌てで逃げたからだ。
駆逐艦2隻で追跡する事も出来た。
しかし、今回は護衛任務であって、海賊の討伐任務では無い。だから、山城はヘリで追跡させるだけに止めておいた。
その間に待機させていた大西少尉（魚釣島の一件で昇進した）率いる第零陸戦隊は高速艇でトロール漁船に乗り込み、瞬く間に制圧した。
無論、これ程制圧が簡単に完了した理由があった。
と言うのも、やはり至近距離にいたトロール漁船にも主砲発射の轟音と衝撃波をもろに受けたからだ。
轟音で甲板に出ていた構成員は難聴になった……当たり前だが。
衝撃波はブリッジの窓ガラスを叩き割るだけでなく、甲板の構成員を張り倒した。
そこに音響閃光弾を放り込めば事は済んだ。
だからこそ、大西達の任務はあっさりと成功した。
そして、証拠探しもあっさりと終わった。
何せ、轟音・衝撃波・音響閃光弾・陸戦隊の前にはシーシェパード構成員も証拠を処分させる暇を与えなかったからだ。
だからこそ、天城の艦橋にはたちまち証拠のリストが届いていた。

天城艦橋

山城

「まあ、予想は出来ていたが……異常だぞ、これ？」

佐野
「元々が異常ですからね…言い様がありません」

届いたリストに溜め息を吐きながら検分する山城と佐野。

福本
「先輩、先程届いた証拠の１つの日記ですが…中身が凄いですよ」

山城
「ん、どれどれ……うわ…」

一読した瞬間、山城の顔は嫌な物を見たと解る顔になった。

山城
「…ふむ、１年前の地中海での件はやはり奴らの仕業だったか」

佐野
「本当ですね。これは確実な証拠ですよ」

山城
「これを調べたら、とんでも無い事の証拠にもなりそうだな」

それからページを捲って読んだ山城が苦笑しながら言った。

福本
「公開されたら事でしょうね。シーシェパードの支援者も下手をしたら外を歩け無くなりますよ？」

山城
「まあ、これをどう使うかはお前の親父さん達の仕事だ。但し厳重に管理・保存しないとな」

佐野
「金庫か何かに放り込みますか？」

訊かれた山城は少し考えると、頭を振った。

山城
「いや、証拠が全て集まってからにしよう。まだまだ時間が掛かりそうだし」

風華
「艦長さん、艦載ヘリからです。オーストラリアの領海に逃走したそうです」

山城
「そうですか…引き返しても構いません。お疲れ様でした…とお伝え下さい」

風華
「わかりました」

セルベリア
「逃げられちゃいましたね」

山城
「まあ、いいさ。捕鯨船団は護れた事だしね」

……実際のところはシーシェパードの活動を黙認しているオーストラリア政府と揉め事を起こさない為だ。
しかし、『ゴジラ』号はオーストラリア船籍なので結局は一緒だ…
……まあ、今回はオーストラリア政府も大変な事になるだろうが。

シルヴィア
「それで、あのトロール漁船はどうする？」

山城
「もちろん、持ち帰って調べる。トラックに技術士官達を派遣してもらうよう要請した。抜かりは無いよ」

2週間後……天城は任務を終えトラック諸島に寄港した。

次号へ

17　後始末（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１８　一件落着？

更に２週間後……１０月１２日

帝都東京　国防省内海軍次官室

福本・山城
「「失礼します」」

福本（伊吹）
「お、来たか。ソファーに座って待っていてくれ」

そう言いながら、福本伊吹は次々と書類に判子やサインをしていく。
そして、手早く書類を片付け、担当官に渡し、担当官が退出すると
２人と反対側のソファーに座った。

福本（伊）
「今回もやってくれたな…まあ、あの海賊共は大嫌いだったから、
清々したがな」

福本
「父さん…だからこそ、色々と揉めたんじゃなかったの？」

福本（伊）
「ふん、あんな奴らに文句が言えるなら、何度でも揉めてやる」

福本

「父さん…」

ゴジラ号の撃沈とトロール漁船及び乗組員の捕縛はシーシェパードだけで無く、ゴジラ号の船籍があるオーストラリア政府からも抗議を受けた。

シーシェパードは置いておくとして、オーストラリア政府は正式な外交ルートからの抗議であり、謝罪と賠償、犯人（と言うことらしい）の受け渡しを要求してきた。

対し日本政府はトロール漁船から収集した証拠と艦載ヘリ、天城や駆逐艦、捕鯨船団の映像を公開し、外務省は「日本国民の生命及び財産を護っただけである」と中川外務大臣直々に駐日オーストラリア大使に返答した。

日本国内ではシーシェパード側から攻撃を受けた事だけで無く、トロール漁船の証拠類からゴジラ号にＲＰＧ等の携帯重火器が搭載され、捕鯨船団を襲撃する計画がされていた事に怒りの声が上がり、日本政府も正式にシーシェパードを『海賊・テロ集団』に認定し、より一層の取り締まり強化に乗り出した。

また、オーストラリア政府に対しは証拠だけで無く、オーストラリアのシーシェパード幹部とオーストラリア政府の環境相がレストランで会談していた時の映像と音声を世界に公開したところ、オーストラリア政府はこの件からあっさり手を引いた上に、環境相を更迭した。

しかし、そんな事で事態が収まる訳が無く、政府内部は混乱の渦中にあるそうだ。

山城

「ですが…よく環境相とシーシェパード幹部の事が解りましたね？」

福本（伊）

「簡単さ、駐豪大使館ではシーシェパード幹部と政府関係者の密会

は噂だったからな。諜報部を使って調べさせてもらった」

福本
「まったく……あ、あの件はどうなりました？」

福本（伊）
「あぁ、イタリアマフィアがシーシェパードに武器流してるって噂か？　いま、諜報部に言って水面下で調査している。本当なら重要な情報だ。上手くすれば、シーシェパードに痛手を与えられるからな」

福本
「そうですか」

福本（伊）
「それと、当分は天城に乗って、山城を見ておけ。後々役に立つから」

山城
「次官、あと2年もすれば勇気は俺を追い越しますよ。心配しなくても」

福本（伊）
「わかってるよ。だが、色々と経験する方がいいだろう？」

福本
「父親にこき使われる経験ですか？」

福本（伊）
「おいおい…山城の次はお前が皮肉を言う番か？」

困った様に苦笑しながら福本伊吹は言った。

ピリリピリリ…ピリリピリリ…

福本（伊）
「（ピッ）もしもし…あ、麻希か？……うんうん、それで？……
わかった、じゃあ（ピッ）」

山城
「奥様からですか？」

福本（伊）
「あぁ、今夜は泊まっていかないかって。セルベリアとシルヴィア
を捕まえたから」

福本
「捕まえたって…」

山城
「まあ…奥様が宜しいのであれば良いですが…」

次号へ

18　一件落着？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

19　現在のラバナスター

１０月１９日（シリルティア王国側　１０月２６日）

ラバナスター

捕鯨船団護衛の任を終えた天城は第零艦隊に復帰した。
扶桑・山城・愛宕・龍驤は訓練任務を終え連合艦隊に復帰した為、第零艦隊の構成は以下の通り。

戦艦　天城　駿河　常陸（旧ライオン）

空母　飛龍　征龍　富士　戦龍（旧アンティータム）

ヘリ空母　日向　伊勢

強襲揚陸艦　竹島

航空巡洋艦　天河

重巡洋艦　鳥海　蔵王

軽巡洋艦　金剛ＩＩ　足柄ＩＩ　銀河　鶴月

駆逐艦　磯波　浦波　綾波　敷波

フリゲート　白神　大間　珠洲　日御　佐多

輸送艦・揚陸艦　一号輸送艦　大隅　神州丸　金華丸　佐渡丸　香椎丸　ありぞな丸

潜水艦　伊２９　黒潮

給糧艦　竜宮（旧ホワイトハウス）

海防艦　１０隻

駆潜艇　１８隻

戦艦３、空母４、ヘリ空母２、強襲揚陸艦１、航空巡洋艦１、重巡洋艦２、軽巡洋艦４、駆逐艦４、フリゲート５、揚陸艦・輸送艦７、潜水艦２、給糧艦１、海防艦１０、駆潜艇１８……計６８隻が第零艦隊の指揮下にある。

戦龍ことアンティータムは修理後に第零艦隊に配備された。

竜宮ことホワイトハウスは調査終了後に良好状態にあった事から改装、給糧艦に艦種変更され、第零艦隊の一翼を担っている。

最後に常陸ことライオンはイギリス戦艦で、詳細は別の機会に述べるが、何らかの理由で放棄・漂流しているのを回収、改装後に『常陸』と命名され、第零艦隊に配備されていた。

日本海軍駐留基地内　福本の部屋

福本

「…と言った状況ですので、僅か４日程の聞き取り調査ですが、ボニファス伯爵だけで無く、ラバナスターの住民達にも日本軍・日本

企業・日本人に対する不平不満は無いと思われるます。ですが、念のために聞き取り調査を続行する事を入れて、今回の報告とさせていただきます。福本勇気……打てたか？」

長門
「……うん、大丈夫。ちょっと修正したけど、これでいいと思う」

ノートパソコンを勇気に見せながら長門が言う。

福本
「……うん、これで大丈夫。あとは…」

手早くメール送信画面を出し、いま打たれたばかりの報告文を『国防省　海軍次官』の宛先を選び、送信した。

福本
「さて、報告も終わった事だし…」

そう言いながら直ぐ近くに置いていたお風呂セットを抱えた。

長門
「……また行くの？」

福本
「あぁ、ここの風呂より、日本人街の銭湯が気持ちいい……長門も来ないか？」

長門
「…いい、お風呂なんてどこも一緒」

セルベリア
「そうとも限らないわよ！」

そう言いながらセルベリアが入って来た……お風呂セットを抱え…
…シルヴィアと山城を連れて…。

セルベリア
「やっぱり、お風呂こそ日本の文化！　銭湯はその代表例よ！　日本にとっては大切な交流の場！　それに銭湯によっては湯質も違うし……（続く）」

山城
「…何であんなに熱心に風呂について語れるんだ？」

福本
「多分、第三寮のお風呂が良かった為かと…」

シルヴィア
「まあ、確かに日本の風呂は良いものだな」

セルベリアのお風呂に対する演説（？）を横目で見ながらその後の予定を決める3人。
そして……

セルベリア
「それに！　長門の好きなイチゴミルクがあるけど？」

長門
「……行く」

福本・山城・シルヴィア
（（（絶対にイチゴミルクに動かされたな））））

イチゴミルクの誘惑に負けた長門が加わった。

ラバナスターの日本人街は2つの区画に分割されている。
大通りを中心とした一帯が『商業区』（但し住民は『商店街』と呼ぶ方が多い。）と住宅及び学校・区役所・保健所・警察署などが存在する『生活区』である。
人口は8万人、割合は主に転移して来た軍人達の家族が多く、次に進出企業関係者と家族で大半を占めていた。
無論、日本人街と言ってもラバナスターの港街と繋がっているだけに、ラバナスターの住民もやって来る為、特に商業区は賑わいが絶えていなかった。

福本
「毎日来ていますけど、本当にここは賑やかですね」

山城
「まあ、今やラバナスターの目玉の1つだからな。ここは」

……お風呂セット片手に大通りを歩く5人。
ちらほら軍人も目に付くが、大半は私服姿の住民ばかりだ。

シルヴィア
「まあ、この時間帯だ。仕事を終えて、行き付けの居酒屋か銭湯に行き、一息吐くつもりだろう。あるいは夕食の買い物かな」

言い終えたシルヴィアが気付いた……勇気とセルベリアがニヤニヤしている事を…。

シルヴィア
「……どうした？」

福本
「いえ、余りにも詳しいので…」

セルベリア
「旦那さんの夕食でも作っているのかと思いましてね…」

シルヴィア
「……ふん」

耳を真っ赤にさせながらシルヴィアが顔を背けた。

次号へ

１９　現在のラバナスター（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

20　銭湯（前書き）

銭湯のお話です。
しかし……これを書いていたら銭湯に行きたくなったのは必然なのだろか？

20　銭湯

日本人街　商業区内の銭湯

カラカラカラ……

「いらっしゃい！…と、これは若旦那でしたか」

山城
「元気そうで何よりだよ大将。ただ、その『若旦那』ってどうにかならない？」

引き戸を開けると威勢の良い声がカウンターから聞こえた。
既に山城とは顔馴染みらしく、陽気に喋っている。

銭湯の大将
「それは無理だよ、若旦那。若旦那と奥方が居たから、この街の皆がこうやって生活が出来てるんだからさ！　なあ、みんな？」

銭湯の大将の声にひとっぷろ浴びて寛いでいた全員が肯定の声を上げた。

銭湯の大将
「…と、まあ、こんなとこさ」

山城

「負けたよ…あ、何時もの通り、これは預かっといてくれ」

そう言うと軍刀『神風』を銭湯の大将に預ける。

銭湯の大将
「はいよ、お連れの方々も腰の物をどうぞ」

シルヴィア
「わかっておる」

手慣れた様子でシルヴィア、勇気、セルベリアもそれぞれの軍刀を預けた。
ちなみに拳銃は靴入れに入れている。

山城
「じゃあ、頼むよ」

銭湯の大将
「おう、任せときな」

数分後……男湯

福本・山城
「「はぁ～～～……」」

湯船に入った2人は正に「気持ち良い～～」と言わんぐらいに顔を綻ばせていた。

福本
「先輩は人気者ですね～」

山城
「よせやい、任務をこなしているだけさ。まあ、この歳で大佐、戦艦艦長って事もあるんだけどさ」

福本
「それでも、シルヴィアさん共々頼りにされている事は良いことですよ？」

山城
「まあ、そうだな……ところで勇気、お前も未だ持ってたんだな」

福本
「…何をですか？」

山城
「惚けるな。辞表の事だよ」

福本
「あぁ、胸ポケットから見えてました？」

山城
「あぁ、胸の裏ポケットだろう？　あるいは懐の中か？　お前も本当に変わって無いよな～」

福本
「士官学校の時も胸ポケットに退学届を入れていましたからね～。

何時でも辞めれる様に」

山城
「『辞めさせられる様に』の間違いだろう？　あの時からお前は大胆だったからな～…土方校長へ入学初日に退学届を出しに行くし」

福本
「土方校長には先に知っておいた方が良いと思いまして……先輩の驚き顔は忘れませんよ」

山城
「もう少しマシな事を覚えていてほしいがな」

……この様に男共が思い出話に華を咲かせている頃……

その頃……女湯

セルベリア・シルヴィア
「「はぁ～～、生き返る～～」」

長門
「……」

……同じく寛いでいた。

シルヴィア
「ところでセルベリア。勇気との関係はどうなの？」

セルベリア
「今のところ…平行線ですね」

長門
「……許嫁のまま。イチャイチャのバカップルは健在」

シルヴィア
「ふう～ん」

セルベリア
「シルヴィアさん、フェイナちゃんはどうですか？」

シルヴィア
「ん、フェイナか？　乳離れが早い事以外は至って普通だ」

長門
「……大きくなった？」

モニュモニュ

シルヴィア
「ふにゃあ！？」

……いつの間にやらシルヴィアの胸を揉んでいた長門。

セルベリア
「…長門」

長門

「……また負けた」

シルヴィア
「…なに、あれ？」

セルベリア
「えーと……色々と有るんですよね…人って」

シルヴィア
「…何となくわかった」

……女性陣は世間話に華を咲かせていた。

３０分後……

福本・山城
「「いい湯だった～～」」

少し軍服を着崩しながら出て来た福本と山城。
その時……

「おかわり！！」

「大将、おかわりお願いしま～す」

銭湯の大将
「いいよ、少し待ってな」

この声に興味半分でその方向を見た福本と山城はずっ転けかけた。
何故なら……

佐野
「あ、艦長……どうもです」

ルーデル
「あ～～、生き返る～～…冷たい牛乳～～」

……佐野とルーデルが居たから…。

山城
「おまえら…すっかり常連だな」

苦笑しながら呟いた。

シルヴィア
「あ～、いい湯だった」

セルベリア
「あ、佐野大尉にルーデルさん？　来ていたんですね」

長門
「……イチゴミルク」

……とばかりに賑やかな日本人街の銭湯でありました。

次号へ

20　銭湯（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

21　シリルティア王国海軍

10月23日（シリルティア王国側　30日）

あの対米戦を曲がりなりにも経験したシリルティア王国海軍。
あれから1年7ヶ月余が経過したが、いまなお海軍は成長途中であった。

天城艦橋

佐野
「来ました。第一艦隊です」

山城
「うん、時間通りだ」

海上に現れた新設のシリルティア王国海軍第一艦隊。
編成は以下の通り。

戦艦　イナバ（因幡・旗艦）　サヌキ（讃岐）　ヒゴ（肥後）

空母　シュンフウ（隼風）　ハクホウ（白鳳）

（航空）偵察巡洋艦　ダイゴ（大剛）

重巡洋艦　ヒバリ（雲雀）　フゲン（普賢）

軽巡洋艦　バンリ（万里）　センリ（千里）

防空駆逐艦　テンクウ（天空）　センクウ（占空）　ライクウ（雷空）　セイクウ（征空）

駆逐艦　１６隻

計３０隻

この艦隊の上空にはシュンフウ・ハクホウ・ダイゴから発艦した艦上機・水上機が展開していた。

艦上戦闘機『ライテン（雷天）』……９５式艦上戦闘をベースに鷲井が開発。殆ど外見・スペック共に一緒。唯一の違いは１３ｍｍ軸内機関砲装備。

艦上攻撃機『ケンライ（剣雷）』……ソードフィッシュ雷撃機。

水上偵察機『カモメ（鴎）』……９３式練習機『赤トンボ』の水上機型を改良した水上偵察機。ダイゴに搭載。

……と何とか航空機を製造していた。（日本の協力を得て）

福本

「これから数日間は艦隊行動演習でしたっけ？」

山城

「あぁ。漸く数と性能が揃ったから、艦隊行動を一度見直すそうだ」

長門
「……それを私達は特等席で見物できる」

佐野
「只の見物じゃあ無いぞ。それに対する評価もする事に成ってるんだからな」

山城
「だが……本当にあれをやっても良かったのか？」

シルヴィア
「構わん、広瀬大佐とドレイク大将の認可は降りている」

福本
「…『あれ』とは？」

山城
「いや…残念ながら、今は教えられない…つーか、今回の事の発端はお前の親父さんだ」

福本
「また、父親ですか…」

……父親はいったい何をロクでも無い事を思い付いて実行させたのやら…。

福本
「……本当に思い付かない…」

候補が有り過ぎて…特定は不可能だった。

山城
「う～～ん……これは非常に難しいな」

シルヴィア
「いや、前途多難と言ってくれれば良い」

福本・セルベリア・長門
（（（やっぱり、解ってたんだ…））））

やはりと言うべきか……結果は良くはなかった。
戦隊単位での訓練は行き届いていた……しかし、艦隊行動となると危なっかしいと言った部分が見られた。
お互いの進路を妨害するだけで無く、衝突しそうになったり、隊列が乱れたり、旗艦の指示がちゃんと通達されていなかったり……と前途多難な姿が浮き彫りになった。

福本
「戦隊単位での訓練はちゃんとしていますから、あとは艦隊行動時の指示の問題ですね。本来なら艦隊旗艦の指示を見るべきなのに戦隊旗艦から何も言わないから進路変更しなかったり……あとは性能面に付いて活けてないかと…」

山城
「だな。今まで戦艦は８ノット、巡洋艦でも１６－８ノットで巡航速で走っていたら良かったのに、いきなり艦隊全体が１８ノット航行だからな。当分は『月月火水木金金』だな」

無論、本人達が良く解っているだろうが。

佐野
「艦長、ルーデル機より通信。どうぞ」

山城
「うん、ルーデルさん、山城です」

ルーデル
『最後の確認だけど、本当にやって良いのよね？』

山城
「えぇ、ちゃんと許可は取れているので……まさか、訓練用爆弾を積載してませんよね？」

ルーデル
『して無いわよ。だって、撃沈しちゃうから』

山城
「あはは……では、よろしく」

ルーデル
『オッケー♪』

そこで通信が切れた。

福本
「…まさか…そう言う事ですか？」

山城
「……そう言う事だ」

その数分後……ルーデル大佐搭乗の雷龍はシリルティア王国海軍艦隊に襲い掛かった。

３０分後……

山城
「…で、長門。ぶっちゃけ言ってどうだ？」

長門
「……ストレートに言って艦隊の９割を損耗。つまり壊滅」

ノーパソでシミュレーション解析していた長門の言葉に半ば予想出来ていた結果に誰も損耗については何も言わない。

セルベリア
「空母撃沈、次に巡洋艦を襲撃、駆逐艦に向けて撃って……まあ、壊滅しますね」

佐野
「彼女が居れば、２年掛けて造った一個艦隊が２回…僅か１時間程で全滅ですか…」

山城
「さて、この結果をイナバに転送してくれ。まあ、頭を抱える事に

は変わり無いけどな」

次号へ

21　シリルティア王国海軍（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

22　ある朝のボニファス邸（前書き）

これぐらいなら18禁で無い……筈だ。

22　ある朝のボニファス邸

１０月２５日（シリルティア王国　１１月１日）

ボニファス邸　客室

『残酷の天使のテイゼ…』

ピッ

福本
「……どこだっけ？」

何時設定したかも憶えていないケータイの目覚ましで目を覚ました勇気。
周りを見てから自分の部屋で無い事に疑問を呟く。
そして、眠気から覚めたばかりの頭を少し捻ってから、漸く答えを導き出す。

福本
（そうか…昨日、先輩とシルヴィアさんに誘われて、ボニファス伯爵の屋敷に……で、そのまま寝たんだ）

そこまで思い出して視線を下にやると、そこには半裸で眠る許嫁のセルベリア。
自らの首に巻かれていたで有ろう両手は勇気が起きた為、ほどけて勇気の枕に載っかっている。

未だに直らないこの癖……克つ就寝時は勇気に抱き付いて就寝するから、そのまま3年間、何も起こらなかったのが不思議なくらいだ。

福本
「……起きるか」

気持ち良く眠るセルベリアを起こさない様に注意しつつ、勇気は着替えて客室を出て行った。

客室を出た勇気はそのまま食堂へと降りて行った。
家に居る時の習慣でついつい居間か食堂に足を運ぶ……山城家に泊まった時もそうだった。
その何気無い習慣に従い食堂に来た勇気はある人物が居た。
この屋敷の主であり、この一帯の領主であり、シルヴィアの祖父であるボニファス伯爵だった。

福本
「おはようございます。伯爵閣下」

ボニファス
「おぉ、君か。おはよう」

勇気の声にニッコリと微笑みながら、人懐っこい声で返した。
そして、視線を読んでいた読売新聞の朝刊に向けた。

ちなみに日本人街でシェアが有るのは読売新聞と産経新聞の二紙で、ラバナスターとその周辺に住む有識者はこの二紙を読んでいるそうだ。

ボニファス伯爵もそうなのだろう……しかし、今のボニファス伯爵の姿は写真に収めても「イギリスの老貴族が日課の新聞を読んでいる」と言ったっておかしく無い光景だ。
だが、日課を邪魔する事は福本も避けたいので、机の上に丁寧に折られていた産経新聞を拡げた。
第一面は皮肉にも第零艦隊に関連する事……つまり、『シリルティア王国駐留軍期間延長協議』と『日シ防共条約協議』の国会承認決議の事だった。
無論、双方共に何の不満も無い事だけに両国協議はスムーズであり、あとは日本政府の承認のみ……なのだが、これを妨害しようとする大アホ馬鹿野郎共がいる。
その名は社民党（＋民主党の極一部洗脳或いは賛同議員）！！！
またも福本次官と論戦を展開して打ち負かされたと言う記事だった。
まあ、当然であろう……あの親父に勝てる人間はそうそういない。
他の紙面を確認し、丁寧に折って机に置いた。
と同時にボニファス伯爵も読み終わった読売新聞の朝刊を丁寧に折って机に置いた。

ボニファス伯爵
「昨夜は良く眠れたかな？」

福本
「はい。いつの間にやら寝ていましたので…気付いたら、既に朝でした」

ボニファス
「ほっほっほ、そうか。孫と婿は朝早くから曾孫を連れて遠駆けに行ったのう。まったく、元気な夫婦じゃ…もっとも、儂も昔はそうじゃったがな」

福本
「（娘さんを連れて行くって話は聞いてたけど…本当だったんだ…）自分も朝の鍛練時間を多少は持っていますよ。ただ、今朝は寝坊しましたけど」

ボニファス
「いや、結構、結構…そう言えば彼女…セルベリアとは許嫁だと婿から聞いたが、本当か？」

福本
「はい…まあ、初恋相手でも有りますが…」

ボニファス
「ほうほう…では、夜の営みの方はどうかの？」

福本
「へ……は、いやいやいやいや！　未だです！　って言うか、その話に！？？」

ボニファス
「ほっほっほ、済まぬ、済まぬ。刺激が強かったかのう」

福本
「はぁ…強いと言うか…強すぎと言うか…」

ボニファス
「では密かに教えよう。昨夜、孫と婿は『夜の営み』をしていた様だぞ」

ベチャッ

福本
「あはは…ははは……マジですか…」

机に突っ伏した福本は苦笑した。

ボニファス
「おっと、勘違いしてはいかんぞ。部屋が偶々、向かいで聞こえただけだからな」

福本
「…そうなんですか…あはは…ははは…」

頭を抱えながらまた苦笑。

山城
「おはようございます、ボニファス卿。お、勇気、おはよう」

福本
「おはようございます…先輩、元気ですね」

山城
「あぁ…で、お前は何で突っ伏しているんだ?」

福本
「…まぁ、色々とあったものですから」

そう答えるのが精一杯だった。

次号へ

22　ある朝のボニファス邸（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

23　運命の旅順軍港　前編（前書き）

急展開……と言うわけではありませんが、新たな一歩が踏み出されます。
ちなみに、そろそろ大学のレポート提出時期なので、更新を月曜日以降約1～2週間一時停止させて頂きます。

23　運命の旅順軍港　前編

12月15日　旅順軍港

一月程飛んだこの日、福本・セルベリア・長門の3人は福本伊吹次官に連れられ『誕生日当日日帰り旅行ｉｎ旅順』と名付けられた『視察』に来ていた。

福本
「…父さん、上記の名前、どうにかなりませんか？」

福本（伊吹）
「別にいいじゃないか、本当の事なんだし」

福本
「……視察と旅行を一緒にしないで下さい」

…親子の会話か、と思わずツッコミを入れたくなる会話をしつつ、4人は旅順軍港の中を歩く。
大型艦用ドックは巡洋艦の建造が主に行われており、戦艦の姿は見られ無い。
実際、現在建造中の航空戦艦伊勢・日向は神戸と長崎で建造中で公式（と言っても海軍内部）に建造されている戦艦はここに存在しない。
そう……公式には……

長門
「……勇気、あれ」

福本
「え、なに……え？」

長門が指差す方を見ると、２つのドックで大規模な造船作業が行われている。
しかし、その作業は福本にとっては『知らない』造船作業……。

福本
「父さん、あのドックの造船作業は…」

福本（伊）
「ん？　あぁ、ちょっとした試作品さ。気にするな」

長門
「……了解」

福本
「…わかった」

納得は出来ないものの、それ以上訊いても効果は無さそうなので、とりあえず納得しておいた。

一通り回って、本部棟に戻って来た４人は休憩所で一息吐いていた。

福本（伊）
「さてと……３人共、これからちょっと地下に行くぞ」

福本
「地下？　防空壕か核シェルターの視察ですか？」

セルベリア
「それとも、地下司令部？」

福本（伊）
「うーん…全然違うな。まあ、とにかく付いて来い」

まるでコースが決まっていたかの様な足取りで福本次官を先頭にズンズンと進んで行く。
その後ろを3人は付いて行った。
そして……行き止まりに到着。

福本
「……父さん」

福本（伊）
「慌てなさんなって…確かこの辺に…」

周辺の壁を叩き、隠しボタンを見つけ、それを押すと今度は何かの承認装置が出てきて、伊吹は耳を承認装置に押し付けた。

セルベリア
「…なんですか、それ？」

福本（伊）
「耳紋承認装置さ。耳の形は個人によって違うそうだ。最近では指紋と同じぐらい犯罪捜査で証拠に成ったりするそうだ…いや～、科学って怖いよな」

長門
「……だと、耳を切り取って押し付ければ良いわけですね？」

福本・（伊）・セルベリア
「「「……」」」

長門
「……何かおかしい事を言いましたか？」

福本
「長門……さらりとヤバい事を言ったよな？」

福本（伊）
「それとだな……耳だけ切り取って押し付けても意味は無いぞ」

セルベリア
「……ごめん、一瞬悪寒がした」

三者三様の意見だが……取り敢えず言える事は「表現がエグい」と言いたいのだろう。

福本（伊）
「……取り敢えず進むぞ」

いつの間にやら、行く手を阻んでいた壁が消え、地下への階段が現れた。
その階段を事も無げに降りて行く伊吹次官を3人はまた付いて行く。
そして、漸く明るく広い場所にたどり着いた。

福本
「……ここは？」

福本（伊）
「そこの窓から見てみろ。答えが解る」

近くにあった窓から外を見た福本達は驚いた。

福本
「あれは…薩摩！？」

長門
「……その向こうに有るのは二番艦土佐…播磨型もある」

セルベリア
「次官、まさか、あれは…」

福本（伊）
「あっはっは、そうだ、その通り！　この旅順軍港には第七艦隊の１０戦艦の内、６戦艦がこの地下ドックにモスボール保管している。もっとも、現在は近代化改装中だかね」

確かに溶接工達が火花を散らして溶接したりしている。
また、艦橋や主砲などと言った艦上構造物も今のところは一部しか見られない。

福本
「……ですが、何故それを秘密に？　息子である自分にも？」

福本（伊）

「…言って置くが、お前だから余計に隠していた。そして、お前だからこそ、今ここで秘密を明らかにした」

セルベリア
「矛盾する回答ですね」

福本（伊）
「だろう？　だから、今からその理由も明かす。勇気、新生第七艦隊司令長官はお前…福本勇気少佐が成るんだからな」

3人
「「「……はあ！？」」」

次号へ

23　運命の旅順軍港　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４　運命の旅順軍港　後編（前書き）

時間が多少出来たので更新致します。
ちょっと早いですが、薩摩型の改装データを公開しました。

２４　運命の旅順軍港　後編

旅順軍港内地下ドック

福本
「……父さん、まさかボケた？」

福本（伊吹）
「…馬鹿者、お前はこの時点で海軍少佐に昇進だ。次いでに言うと、セルベリアも少佐、長門は大尉に昇進だ」

そう言うとまた歩き始めた。
その後ろを３人はまた付いて行く。

福本（伊）
「何れ第七艦隊が必要に成るだろうと親父…お祖父さんが残したんだが…それが今と成った訳だ」

福本
「…それとこれと何の関係が？」

福本（伊）
「簡単だ。第七艦隊は独立艦隊、イザと成れば指揮官の採択が全てを握る。また、艦隊指揮官は統率力が物言う…それを合わせれば適任なのはお前しかいないし、お前達しかいない」

セルベリア
「ですが、適任者は他にいるのでは？」

福本（伊）
「適任者を探すのは簡単だ。問題はその後だ。まあ、その内解るだろうさ」

今度はエレベーターに乗り、作業フロアに降りて行った。
そして、エレベーターから降りるとに1人の技術士官が気付いて近付いて来た。

「いや～、福本次官。視察に来るう言うてましたけど、勇気はん達も連れて来たんや～」

福本
「渡瀬！　お前、ここにいたのかよ！？」

渡瀬こと渡瀬津波（わたせつなみ）は女子ながらも技術科所属で七組の生徒だった。

渡瀬
「勇気はんも元気そうやな～。卒業から直ぐにこっちへ配属されて、このＳ７ＦＺ計画の主任やねんで～」

セルベリア
「Ｓ７ＦＺ計画？」

渡瀬
「そや。『新（Ｓ）第七（７）艦隊（Ｆ）増強（Ｚ）計画』の略称なんや」

福本

「待てよ…主任と言うことは播磨型・薩摩型の改装図面を書いたのは渡瀬なのか!?」

渡瀬
「さすが勇気はん！　察しがええな～。それだけやのうて、室蘭の伊豆型戦艦の改装図面や第七艦隊配属艦の設計図面を引いたのもわてなんよ?」

長門
「……うわ～」

セルベリア
「…さすが、計画主任ね」

福本
「…まったく、いつか世話に成ると思っていたが、こんなに早く成るとは思ってなかったよ」

渡瀬
「わてもや。それに、この計画は2学期の後半に福本次官から誘われたんよ?」

福本
「……父さん」

福本（伊）
「仕方ないだろう?　機密なんだからさ」

……ここまで来ると職権乱用の気がしないでもないが……。

渡瀬
「けど、うちは嬉しいんよ？　技術士やったら誰だって飛び付きたくなるプロジェクトを任せられたんやからな～」

福本（伊）
「あっはっはっは、なあ？　渡瀬もこう言ってる訳だし、いいだろう？」

長門
「……何か上手く丸めこられた気がする」

セルベリア
「そうよね」

福本
「それで渡瀬。戦艦は何時稼働出来る？」

渡瀬
「そやな～…薩摩型は来年の４月には稼働出来るわ。播磨型はもうちょい先になるけどな～」

福本
「わかった……」

了承の返事をして薩摩を真っ直ぐ見上げる勇気の目は嬉々としていた。

福本（伊）
「惹かれるか？　それとも血が騒ぐか？　福本家の血がな」

福本
「…親子と言うものは面倒ですね」

福本（伊）
「面倒でもあるが最大の理解者である事もまた事実だ」

セルベリア
「それで目標性能は？」

渡瀬
「まあ、こんなとこやな」

薩摩型改装後データ

基準排水量　８４５００ｔ
最大排水量　９２５００ｔ
全長　２４３，６ｍ
全幅　３７，８ｍ
速度　３６ノット
機関　原子力機関（艦船用新型原子炉使用）
航続距離　燃料棒交換まで航行可能

４３ｃｍ６０口径連装砲×５基
１５，５ｃｍ７５口径連装速射砲×１６基
５７ｍｍ５０口径単装電磁砲×８基
『桜花』四連装対艦ミサイル発射筒×４基
『征空』ＶＬＳ対空ミサイル×６基
『潜龍』ＶＬＳ対潜ミサイル×２基
４０ｍｍ単装自動稼働機関銃×１０基

２５ｍｍ単装自動稼働機関銃×２２基
航空機　４機（ヘリ搭載）

福本
「……なあ、この５７ｍｍ５０口径単装電磁砲ってレールガンか？」

渡瀬
「そや、凄いやろ？」
事も無げに言った渡瀬。

福本
「俺の記憶が確かなら、レールガンの開発には約３０年必要じゃあ無かったのか！？」

渡瀬
「アーヴ人科学者の技術は凄いわ～。新技術や新方式の宝庫や。レールガンもその１つや」

セルベリア
「やっぱり、私達が関わっていたのね」

渡瀬
「まあ、先ず試作程度の５７ｍｍサイズや。対空・対小型船舶用に調整してあるさかい」

長門

「……面白くなってきた」

福本
「面白くってな……まあ、期待して待っとくよ」

渡瀬
「任せてな～、大阪の職人魂見せたるさかい！」

福本
「あぁ！」

次号へ

２４　運命の旅順軍港　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

25　へ…イタリンへ（前書き）

時間が出来ましたので更新致します。
ちなみに不定期ですが、二次作小説を執筆しています。

25　へ…イタリンへ

２００９年1月１０日　ローマの空港

福本
「う～～ん…やっぱり、旅客機に乗ると肩が凝る」

セルベリア
「そう？　私はあの着陸艇の座席の方が肩凝るんだけど」

長門
「……普通」

三者三様の感想を述べながら3人はタラップを降りて行った。

福本
「さて…ユリウスとマーリオは何処だ？　迎えに来ている筈だが…」

セルベリア
「…多分あれね」

セルベリアの指差す方を見ると、私服の男子と軍服の女子がこちらを見ていた。

福本
「……だな。チャオ、ユリウス！　マーリオ！」

マーリオ

「チャオ、勇気、セルベリア、長門。イタリアへようこそ」

セルベリア
「出迎えありがとう、マーリオ。でも……なんで格好がバラバラなの？」

マーリオ
「いや…任務の性格上、私服の方がいいかな～…と思って着て来たんだけど…ユリウスは軍の任務だからって…」

ユリウス
「軍の任務だから軍服なんだ」

……女子なのにお洒落気が無いとは思っていたが、まさかここまでとは……。

福本
「なあ、ユリウス。この任務って極秘任務だったよな？」

ユリウス
「当たり前だ。事前に知られては極秘任務では無いでは無い」

福本
「じゃあさ、軍服着た人間2人が私服の民間人3人を迎えに来るってておかしくないか？」

ユリウス
「おかしくは……あるな」

マーリオ

「はぁ…だから私服にしようって言ったんだよ。極秘任務なのに軍服で来る馬鹿なんていないって」

ユリウス
「グウ……何時か叩きのめしてやる」

マーリオ
「はいはい…さあ、車を待たせてあるから早く行こう」

福本
「車？　誰が？」

マーリオ
「俺の叔父さんが手配してくれたんだよ」

セルベリア
「そっか、マーリオの叔父さんってイタリア海軍高官だったけ？」

マーリオ
「イタリア海軍総司令官だよ」

苦笑しながら言ったマーリオを先頭に４人はぞろぞろと続いて歩いて行った。

さて、勇気達がイタリアにやって来たのは無論、任務である。
そこで、時系列を１週間前に戻して内容を説明しよう。

１月３日　帝都　国防省海軍次官室

福本（伊吹）
「さて、年明け早々に呼んだ理由は簡単だ。調査していたマフィアによる、シーシェパードへの武器横流しの件だ」

福本
「それで、どうでした？」

福本（伊）
「ビンゴだった。押収した武器の線と噂の線、同時に探りを入れたらピタリと繋がった…しかも、とんでもない所に糸が繋がった」

セルベリア
「とんでもない所？　何処ですか？」

福本（伊）
「資金の出所だが…モナコ公国の王族の方々に行き着いた」

長門
「……山本カジノの怨み？」

福本（伊）
「さあな…モナコは外務省担当だからそっちに任せるとして、マフィアはイタリア政府の担当だ。で、駐在武官に電話してみたんだが…」

福本
「問題でもあった？」

福本（伊）
「問題有りまくりだ。今やイタリアマフィアはそれなりに浸透している。対立するファミリーを潰す為に警察に密告したり、警察幹部がマフィアと繋がっていたり、時には政治家とも繋がっている場合もあるそうだ」

セルベリア
「つまり、下手に動くとその筋から漏れると？」

福本（伊）
「あぁ。だから、イタリアの飲み友達で海軍総司令官のピエーニ・カラロット大将に電話したら、極秘作戦で動く事になった。首相とかには話を通しておくとさ」

福本
「なるほど…で、イタリアに行って一緒にそいつらをぶん殴って、証拠か何かを持って来いと？」

福本（伊）
「出来ればモナコ公国を脅せる証拠を頼む」

福本
「了解」

これが1週間前の事だった。

車中

福本
「それで宿泊先は？」

マーリオ
「ローマでも指折りの高級ホテルに予約しておいたそうだよ」

福本
「……こう言う場合、余り目立たない安宿だろう？」

マーリオ
「海軍の公用車に乗ってる人間が安宿に泊まったらおかしいだろう？」

勇気の隣に座っていたマーリオが答える。

福本
「なら、最初から公用車使わなきゃいいんだよ。それこそ……他のやり方があっただろう？」

マーリオ
「まあまあ…襲撃までの事はこちらに任せてほしいな。わざわざ車を二台に分けたわけだし」

福本
「なんだよ、それ……で、それからは？」

マーリオ
「昼食は外で食べる。叔父さんが予約を取ってるからね。１２時２０分前には迎えに来るよ。その後はショッピングかな」

福本
「……本当に大丈夫なんだろうな？」

マーリオ
「大丈夫、大丈夫。イタリン人を少しは信用したらどうだ？」

一応は信用しているんだがな……問題はやり方なんだが…。

マーリオ
「お、着いたな。じゃあ、後でな」

福本
「あぁ」

次号へ

25　へ…イタリンへ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

26　密談の昼食（前書き）

時間が出来ましたので更新致します。

登場人物紹介

マーリオ　男子　１９歳　イタリア海軍大尉

イタリア海軍の若手将校で、一年間神戸海軍士官学校に留学していた１人。
本人は意識していていないがかなりのイケメン。だから行く先々でモテていたりする。
叔父さんであるピエーニ・カラロット大将の影響もあって海軍軍人になった。

ユリウス　女子　１９歳　イタリア海軍大尉

マーリオとコンビを組む若手将校で、同様に神戸海軍士官学校に留学していた１人。
マーリオがモテている事にイライラしており、少し不機嫌。
イタリア貴族の家柄出身で国に掛ける情熱は人一倍強いが、マーリオのお陰（？）で空回りしている。

ピエーニ・カラロット　男性　５４歳　イタリア海軍大将

マーリオの叔父さんで現イタリア海軍司令長官。
福本伊吹海軍次官とは飲み仲間でお互いに情報交換をしている。
彼の父親は重巡ゴリツィアの乗り組みの若手大尉だった為、日本海軍にはそれなりに繋がりがあったりする。

26　密談の昼食

荷物をホテルの部屋……福本とセルベリアは相部屋、長門は廊下を挟んだ向かいの部屋。鍵はセルベリアと長門が取った……に置き、迎えに来たイタリア海軍の公用車に乗り込み、予約してあると言うレストランに向かった。

予約のレストラン

福本
「……」

セルベリア
「……」

長門
「……」

何故か沈黙。

マーリオ
「…どうしたの？」

福本
「いや…少し高級そうじゃないか、ここ？」

マーリオ
「そうかな？　俺も叔父さんに連れられて来た事有るけど？」

福本
「それなら良いけどさ…」

少し場違いでは無いか？…と考えつつ、マーリオに言われるまま、中に歩みを進める福本一行。
ちなみに後ろには私服に着替えたユリウスが続く。

マーリオ
「予約を取っているんだ。予約人の名前はピエーニ・カラロット。昼食の予約で確か人数は６人の筈だ」

店員
「ピエーニ・カラロット様ですね？　少々お待ち下さい」

カウンターの店員に話し掛け、予約を告げる。
そして、パソコンの予約リストで確認出来た店員が出て来た。

店員
「ピエーニ・カラロット様、予約人数６人で間違い有りませんね？」

マーリオ
「あぁ、間違い無いよ」

店員
「わかりました。御二階を予約されておりますね。ご案内致しましょう」

呼び鈴を鳴らし、案内の店員に案内され、５人は二階の予約された部屋に通された。

福本
「……秘密会談用か？」

マーリオ
「まあ、ある意味では主旨は間違って無いよ。元々は不倫相手との密会場」

福本
「……まさか、政府御用達？」

マーリオ
「裏認定だけどね」

福本
「…おいおい」

ツッコミを入れたいとも思ったが、テーブルに座りマーリオの叔父さんを待っておく。

１０分後……

カラロット
「すまんすまん、会議が少し長引いてしまった」

そう言いながら店員に案内されて入って来た。
そして、店員が退室したのを確認するとカラロット大将は勇気を見た。

カラロット
「いや、馬鹿騒ぎ仲間の息子と昼食を共にする事に成るとは思わなかった」

福本
「あの…父はどの様な人でしたか?…と言うか、父ってイタリアに来た事あるんですか?」

カラロット
「はっはっは、君のお父さんか? 今と変わらんぞ…いや、昔の方が暴れていたかな?」

……まあ、人間若い時は色々と有りますからね……。

カラロット
「それと彼は一時期、イタリアの臨時駐在武官だった。ちょっとした日本とイタリアとのイベントの前だったんだが、大使館の駐在武官が腹痛を起こして倒れてな。イブキはその武官の代理人だったのさ」

マーリオ
「それで、叔父さんは?」

カラロット
「ん、イタリア側の使い走りだったな」

…パシりかよ。

カラロット
「まあ、そんな話は後だ。メニューを取ってくれ、今日は何が旨いかな？」

注文した料理が来てからカラロット大将は本題に入った。

カラロット
「さて、今回の事だが…近々、海賊とマフィアで取り引きがある様だ」

福本
「本当ですか？　何時、何処で？」

カラロット
「今はそこまでは解らん。しかし、１週間以内に取り引きをする筈だ。海賊共が使う船もマークしてある。今少し待ってくれ」

セルベリア
「ところで、今回動員出来る戦力の方は如何ほどですか？」

カラロット
「うむ、ミサイル艇やフリゲート、ヘリは展開出来る様にしている。地上兵力は合同演習と言う事で憲兵隊を動員する」

福本

「ほう、カラビニエリ部隊ですか。よく動員出来ましたね」

カラロット
「はっはっは、上層部には友達が多いのさ」

セルベリア
（ねえ、カラビニエリ部隊って？）

長門
（…イタリアの憲兵隊。山岳のアルピーニ部隊、軽歩兵隊のベルサリエリ部隊に並ぶイタリアの屈強部隊。兵士の練度、装備、戦歴共に各国の憲兵を越えてる）

セルベリア
（ふーん）

カラロット
「この後はショッピングだそうだね？　くれぐれも勘づかれ無い様に楽しんで来たまえ」

福本
「わかりました」

……その後、昼食は世間話が続いた。

次号へ

26　密談の昼食（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

27　イタリアでの夜（前書き）

本日より連載を再開致します。
しかし……その初っぱながこれって……。

27　イタリアでの夜

ホテル……福本・セルベリアの部屋

セルベリア
「あぁ～、楽しかった！！」

福本
「それはなにより。君ははしゃぎ過ぎていたから早めにシャワー浴びたら？」

夕食をホテルのレストランで食べ、部屋に戻って来た2人は早速寛ぎタイムに移行していた。

セルベリア
「うん、そうする～。あぁ、映画の『ローマの休日』みたいだったな～」

福本
「ん、確かに似てるな……だが、彼女は結婚前最後の外出であって、君は軍人とは言え、自由がある訳だし…」

セルベリア
「も～、気分の話よ。き・ぶ・ん！」

福本

「はい、わかっております、お嬢様」

これを言って、あるいは聞いてからお互いにクスクスと笑う許嫁の2人。

セルベリア
「じゃあ、お言葉に甘えて先にシャワーを浴びてくる」

そう言うとバスタオルを持って浴室に消えた。
そして福本は、自分の鞄から読書用の本を取り出して読み始めた。
タイトルは『第二次大戦時における日本軍の準備と福本元帥（著者田母神俊雄）』……つまり、身内の本だった。

……暫くして……

福本
「……あれ？」

ふとして目が覚めた勇気。
照明は薄明かるくしてあり、勇気はベッドで眠っていた。

福本
（あれ…確かシャワーを浴びて…それでセルベリアにジュース渡されて……あり、そこから記憶が……）

……何故か記憶が無い福本。

セルベリア

「う、もう起きちゃったの？」

その声に振り向くとセルベリアが慌て壁に隠れた。

福本
「…まさかさっきのジュースに何か盛った？」

セルベリア
「おほほほ、アーヴ皇族がそんな事する訳…」

福本
「盛ったんだね？」

セルベリア
「…スミマセン、盛りました。アーヴ製の睡眠薬を」

福本
「効果は？」

セルベリア
「一番ちっちゃい計量スプーンの４分の１の量で７２時間です（；―；）」

……ある意味危なくないですか？

福本
「て、どれくらい盛ったの！？」

セルベリア
「えーと、２時間ぐらい寝ちゃう程度かな？」

福本
「で、実際は？」

セルベリア
「２０分でした（；―；）」

……俺って睡眠薬耐性でもあんのか？

福本
「もう怒らないから出て来てよ」

セルベリア
「うぅ……恥ずかしい」

福本
「顔が真っ赤だから？」

セルベリア
「違う…格好が…」

福本
「…とにかく、このままだと気まずいから出て来てよ」

セルベリア
「…うぅ、わかった」

か細い声で出て来たセルベリアに勇気は危うく鼻血を出しそうになり、鼻を押さえた。

福本
「ちょ、待っ、なに！　その紫色の薄いネグリジェは！？」

セルベリア
「勇気が原因でしょう！？　何時までもこんな良い女を抱かずに放置してるから、こっちから仕掛けたのよ！！」

いつの間にやら、ベッドにいる勇気に詰め寄るセルベリア。

福本
「おいおい…こっちの身にもなってくれよ…下手にやったらギクシャクすると思ってたのに…」

セルベリア
「…え、じゃあ、私の事を考えて？」

福本
「それ以外に何の理由がある？　言っとくけど、飽きてポイすると思っていたなら正直に言ってくれ、は…」

セルベリア
「ごめんごめん。誘っても何もしてこないから、ちょっとね…」

福本
「いや…押し倒しておりますが？」

セルベリア
「……あ」

いつの間にか勇気を押し倒していた事に気付いて途端に顔を真っ赤

にするセルベリア。

福本
「まあ、そっちも了承したと言う事でこっちも反撃させてもらいますか」

セルベリア
「え…きゃっ！」

身軽な身のこなしで立場を逆転させ、セルベリアをベッドに押さえ付ける。

福本
「さて、ご希望はありますか、お姫様？」

セルベリア
「……優しくしてよ？」

福本
「わかっておりますよ」、お姫様

次号へ

27　イタリアでの夜（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

28　翌日早朝

1月11日　早朝

福本
「ふぁ～～…良く寝た」

……余り多くは言いたくないので、昨夜の事は触れないでおくが、どうやら良く眠れた様だ。

福本
「さて…セルベリアを起こさない様に…」

隣で熟睡中のセルベリアを起こさない様にベッドを抜け出し、シャワーを浴びて服を着ると静かに部屋から出て行った。

ホテルのレストラン

福本
「おはよう、長門」

長門
「……おはよう」

ホテルの一階のレストランへ降りて来た福本は、ノートパソコンを

開いて熱心に操作する長門を見つけ、声を掛けた。

福本
「朝も早く、エスプレッソ飲みながら随分熱心だね…何をしてるんだ？」

長門
「……天城の３ＤＣＧ制作。実際測ったからリアル感があると思う」

福本
「…長門、お前ってパソコン持たせたら何でもやるな」

ＣＧ・ブログ制作から、ハッカー・システム破壊まで……ある意味恐ろしいのがパソコンを持った時の長門だ。

長門
「……それが私。パソコン上なら私は無敵」

福本
「おいおい…で、他に何を作ったんだ？」

長門
「あとは…現在の大和、陸奥、翔鶴、龍驤、愛宕、天龍…昔の装備なら武蔵と長門とかも入ってる」

福本
「さすが、改装情報を盗もうとしただけはあるな」

長門
「当たり前」

ここまで話とき、ウェイトレスがやって来た。

福本
「えっと…じゃあ、このサンドイッチセットとカプチーノをお願いします」

注文したサンドイッチを食べている時にセルベリアと一緒にマーリオとユリウスがレストランに入って来た。

福本
「チャオ、マーリオ、ユリウス。どうしたんだ?」

セルベリア
「予定が変わったそうよ…あ、美味しそう♪　私もサンドイッチにする~。飲み物はアップルティー」

福本
「わかった。2人は?」

ユリウス
「ん、私は別に何でも…」

マーリオ
「じゃあ、朝食は食べて来たからレモンティー2つ」

福本
「わかった。すみません、注文お願いします」

3人の注文を言い終え、向き直った。

福本
「それで、どうゆう風に予定が変わった?」

マーリオ
「諜報部が漸く取り引き場所を探り出した。案内するから、出来る限り早く外出したいんだが…」

福本
「わかった。まあ、先ず朝食を食べてからにしよう。詳しくは後で部屋で聞くよ」

それから3時間後……

福本
「…で、なんで取り引き場所に向かうのにイタリアが誇る超特急『エウロスタイルイタリア』に乗らなきゃならないんだ?」

あれから荷物を持って公用車に乗り込み、エウロスタイルイタリアに急いで乗り込んだ。
さすがに始発は無理だったが、人が少ない時間の列車に乗る事が出来た。

マーリオ
「どうやら向こうは静かな漁村か何処かで取り引きするみたいだね」

セルベリア
「それで、戦力の移動はどうなってるの？」

マーリオ
「カラビニエリ隊には叔父さんが行って色々と工作するみたい」

福本
「ふむ…長門、ノートパソコンで…」

長門
「…既にＧｏｏｇｌｅに繋いで地図をロード中。あと少し待って」

福本
「さすがだ。で、現地の指揮は誰が執るんだ？」

マーリオ
「カラビニエリ隊が執る。但し、僕らは独立行動が認められているよ」

福本
「なら、お言葉に甘えて独立行動をさせてもらうか」

次号へ

28　翌日早朝（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

29　現地にて

更に3時間後……

ラスペツィア近くの漁村

福本
「いや～、静かでいいね。観光で来るには最適だ」

そう言いながら周りを見る勇気。
一見したところで、こんな閑静な場所でイタリアマフィアと反日エコテロリスト共が取り引きする様には見えない。
しかし、世の中の皮肉で、あり得ないと思う場所であり得ない事が行われるものだ。

マーリオ
「おかしいな…先発のチームが到着している筈なんだけどな…」

セルベリア
「何時出発したの？」

ユリウス
「始発に乗り込んだから、既に着いている。無論、私服の旅行者を装っているがな」

福本
「なら、その辺りを歩いてればその内出会うんじゃないの？」

マーリオ
「うーん…まあ、駅の近くに居るとは言ってないから……取り敢ず周辺を観光でも」

ユリウス
「まあ、妥当な判断だ」

長門
「……暇潰し」

そう言いながら5人はブラブラと歩き始めた。

「こちらカラス。目標を捕捉、情報通り、イタリア人の男女を連れています」

『天狗よりカラス。イタリア人男女の特徴を伝えよ』

「えーと…男はイケメンですね。女は堅物ぽいです、どうぞ」

『それは本当か？』

「間違いありません。写メしましょうか？」

『いや、いい。追跡を続行せよ』

「了解…なんでこんな面倒な事をやるのかね？」

そうボヤキながら追跡を続けるのであった。

「ふむ…今回はまた面白い事に成ったな」

副官

「なりましたか？」

「あぁ、なった」

ヘッドセットを外しながら呟くと副官が訊いてきた。

「まったく、ここまで来ると、いよいよ日伊海軍上級幹部が共謀したと判断するのが妥当だ」

何時もの癖で左腰のサーベルの柄を撫でようと右手を左腰に伸ばすが、装着していない事を思い出し、慌て右手を引っ込める。

副官

「いったい何処まで知っているのか…いや、何処まで知らされてい

るのやら」

「構わん。あいつは我々と会って、直ぐに大体のところまでは気付く」

そう言うと普段通りに歩き出した。

福本
「ふむ……なあ、マーリオ」

マーリオ
「なんだ？」

福本
「例の先発チームはイタリア人か？」

マーリオ
「カラビニエリ隊なら多分…」

福本
「そうか…なら、後ろから日本人が付けて来てるんだが…」

マーリオ
「え…？」

福本
「振り向くなよ。尾行されたら無闇に振り向くな…って教わらなか

ったか？」

ユリウス
「…私は聞いた事が無いぞ」

福本
「おっと…俺の親父だからかな？」

マーリオ
「…多分、そうだよ」

セルベリア
「しかし、なんで私が付けられてるのよ？」

福本
「多分、今回の関係だと思う」

マーリオ
「まさか、今回の事が…」

長門
「なら、イタリア人が付けて来る。わざわざ目立つ東洋人を使わない」

福本
「だな。まあ、その内…いや、そこの角から出てくるよ」

その言葉通りに数秒後、その角から出て来た人物は長門を除く3人が驚いた。

福本

「よっ、セイバー。イタリアで会うとは偶然かな？　それとも親父に仕組まれた必然かな？」

セイバー
「やはり、気付いたか。さすがだ」

福本
「いや、日本人の尾行者を使ったから気が付いた。陸戦隊参加は…親父だな？」

セイバー
「まあ、積もる話は場所を変えてしようではないか」

あるホテルのカフェ

セイバー
「昨年末からカラビニエリ隊への研修として私が選抜した9人と共にイタリアに来ていた」

福本
「ほんと、親父ってそこら辺の根回しだけは得意だよな～」

マーリオ
「…多分、私の叔父も加わっているかと…」

セルベリア
「なんでこんなに根回しの上手い人間が集まるのかしらね？」

福本・マーリオ
「「さぁ～？」」

セイバー
「話を戻すが、このホテルがカラビニエリ隊との集合場所だ。何でも、元海軍少佐が経営するホテルだからだとかでな」

福本
「なら、ゆっくり出来る訳だな」

次号へ

29　現地にて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

30　大物捕り（前書き）

いや、しかし、韓国も遂にやったな。

山城
「あぁ、今回の自民党議員の入国拒否ね。確か竹島近くのウルルン島の『竹島博物館』に行く予定だったとか」

普通ならこの時点で国交断絶、あるいは宣戦布告と受け止められてもおかしくないよ。
つーか、竹島の『博物館』建てる意味が解らない。
南京大虐殺の博物館と同レベルだと思うよ。

シルヴィア
「つまり、嘘で固めた『虚島史』か？」

多分ね。
それともう1つ、3人の中の1人は元陸自の佐藤正久（さとうまさひさ）大佐（一佐）、イラク派遣で先遣隊隊長。
向こうでは『ザミュール・サトウ』のアラブ名まで贈られた人。

山城
「おいおい…元大佐で現国会議員に韓国の国自体が喧嘩売ったのか？　普通なら今頃戦時体制だぞ」

自衛隊にも喧嘩を売ったよ。
更に、俺の記憶が知ってる限りはイラク関連で韓国は何もして無い……イラクの恩人を侮辱したからイラクも下手したら喧嘩を売った事になる。

まあ、だから二流国なねよね、韓国って。

３０　大物捕り

１月１３日

セイバー達と合流した福本達に、カラビニエリ隊が合流したのは午後３時過ぎ頃であった。
そのまま新たな報せも無いまま、カラビニエリ隊との打ち合わせとブリーフィングを行い、１２日を過ごし、その夜に明日に取り引きが行われる事とその場所を伝える報せを受け、密かに準備が行われた。

取り引き場所の漁村

福本
「静かだな」

チャーターした漁船に乗って漁船を見る勇気。
他には陸戦装備のセルベリア、長門、セイバー、マーリオ、ユリウス、陸戦隊９名が乗っていた。

福本
「しかし、マーリオの叔父さんも驚きだな。西イタリアの地下組織と繋がっていたなんて」

マーリオ
「叔父は西イタリア出身だったから、前大戦のレジスタンス組織と

はそれなりに繋がりがあるんだ」

セルベリア
「だけどそれ以上話すのは彼らに迷惑よ」

ユリウス
「そうだ。我々の記憶以外には記録しては成らない…これがカラロット大将からの言伝てだ」

福本
「わかってるよ…さて、もうそろそろ取り引きの始まりだな」

そう言うと再び双眼鏡で漁村を見た。
すると、高級車が次々と止まり、車中から高級スーツに身を包んだ人間が降りてきた。
それが合図だったかの様に今度は漁船が現れた。

ユリウス
「手慣れている…くそ、あの様子だと、かなり取り引きをしたに違い無い！」

怒り心頭のユリウス……今の彼女に駆逐艦1隻でも有れば瞬く間に問答無用の艦砲射撃を行っただろう……無論、それはそれで後が面倒な事なので、実行出来ないのは今のところ幸運である。

セルベリア
「幹部とボディーガードがボートに乗り込んだ…漁船の上で取り引きするつもりだな」

福本

「よし…悟られ無い様にゆっくりと漁船に近付け…みんな、戦闘用意」

甲板の色と同じ色の布に隠れながら勇気は指示を出す。
無論、全員は無理な為、陸戦隊員が漁船後部に陣取っている。
あと、長門はこう言った体力が要るような（軍人レベルで）事には向かないので、下で待機している。
そして、ゆっくりじっくりと漁船は漁船に接近していく。

福本
（くう…やっぱり、こう言う時だけは時間の経過は遅いな…船の進みまで遅く感じるし）

ジリジリとしながらも耐える勇気。
その時、隣のマーリオが囁いた。

マーリオ
「カラビニエリ隊が漁船のマフィア達の制圧に乗り出した。いよいよ、これからだ」

福本
「よし。タイム合わせ１０秒…９、８、７…」

静かに数えながら自らを落ち着かせる勇気。

福本
「１、０！　セイバー！」

咄嗟に布を払い除けた勇気が叫んだ。

セイバー

「躑弾筒！　ぐずぐずするな！　てぇー！！」

ポン！　ポン！　ポン！

シャンパンのコルク栓が飛ぶ様な音が響き渡った。

福本
「目を瞑れ！　耳を塞げ！　くるぞ」

着弾と同時に閃光とキーンと言う音が襲う。

福本
「速度上げて！　乗り込む！」

勇気達の乗る漁船は１５０トン程度の近海漁船に対し、相手は５００トン程度の大型の遠海漁船だ。
普通なら無謀もいいところだが、接着すると福本が先陣をきって乗り移った。

福本
「効果てきめんだな。要らん手間が省ける」

音響閃光弾でのたうち回るシーシェパードとマフィアの幹部達とボディーガード。

マーリオ
「確かに。さて、ブリッジと機関室を制圧して、戻るとしよう」

福本
「あぁ、そうだな…ん」

パン！

勇気の持っていたモーゼル拳銃が発射された。
銃弾は甲板に転がっていた拳銃を弾いた。
そして、その拳銃を取ろうとしていたボディーガードの右手が止まった。

福本
「次は右手を撃ち抜くよ。セイバー、後は頼む」

セイバー
「わかった」

ブリッジと機関室の制圧を終え、漁村に向かったところ、こちらも制圧は終了していた。
まあ、カラビニエリ隊相手では多少の腕利きが居ても、結局は慣れた軍人には敵わない…と言ったところであろう。

次号へ

３０　大物捕り（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

31　イタリアの次は室蘭に（前書き）

先ずは広告。
この作品に出したいキャラや、読者の分身を出してほしいとゆう方は感想かメッセージで御送信下さい。

31　イタリアの次は室蘭に

2月1日

イタリアでの大物捕りから19日が経過した。
日本軍はイタリア軍と協力し、主にシーシェパードの面々を尋問して証拠固めをしていた。
但し、マスコミがヤイのヤイのと五月蝿く騒ぐのを警戒して取り調べはビデオカメラとボイスレコーダによって全過程を記録していた。
欧米各国のマスコミは国会答弁を注視し、連日記者が押し寄せ、何時もより聴衆が多かった。
そんな中でも『特異』だったのが社民党の福島みずほ党首のやり取り。
初日は福本次官と論争…いや、痴話喧嘩と言っていいだろう…を繰り広げ、その翌々日からは田母神空軍次官と山県陸軍次官のローテーションになった。
理由は……現在、報告待ちにて出席不可能…であった。

山城
「…やっちゃって良かったんですか、福本次官?」

福本（伊吹）
「やっちゃっていいんだよ」

国防省の海軍次官室でテレビを点けて見ていた。

福本

「それで父さん。息子や山城先輩を呼んだのはなんでです？」

福本（伊）
「あぁ、先ずは先にイタリアではご苦労さん」

福本
「半分観光見物になってましたけどね」

福本（伊）
「ちゃんと任務は果たしたんだ。別にいいさ…さて、２人を呼んだのは理由がある。今度は室蘭に行ってくれ」

山城
「室蘭？　伊２９と黒潮が改装中ですが…何かトラブルでも？」

福本（伊）
「いや、無い。と言うより、伊２９も黒潮も現在錬成中だ」

山城
「どうゆう事ですか？」

福本（伊）
「二隻とも…特にミンゴーこと黒潮は耐用年数が限界に近かったから、伊１型潜水艦を何処かに売ると言う名目で建造しておいたんだ…後は解るだろう？」

福本
「なるほど！　後は春日さんや日進さんと同じ方法ですね！」

福本（伊）

「あぁ、だから、二隻は改装中の名目で錬成中だ。まあ、基本は一緒な上に歴戦のプロが乗っているから大丈夫だろう」

山城
「それは解りましたが…なら、なぜ室蘭に？」

福本（伊）
「うーん…2人は知っていると思うが、室蘭の地下ドックには第七艦隊の伊豆型戦艦４隻がいる」

福本
「今更ながらの話ですね…それが何か？」

福本（伊）
「実は伊豆型以外に別種の戦艦が一隻だけモスボール保存されている…しかも、これを知っているのは海軍内部でも僅かだ」

福本・山城
「「……はい！！？？」」

２人はお互いの顔を見ながら絶句した。
それもそうだ…存在の知られていない戦艦が室蘭にあると言われば誰だって驚きもする。

福本（伊）
「まあ、驚くのも無理は無い。本来なら歴史に名を刻まぬまま、消える事を運命付けられていたからな」

余り見せた事の無い哀しいとも自己侮蔑とも取れる表情に２人は興

味が湧いた。

福本
「話して下さい、父さん」

山城
「お願いします、次官」

福本（伊）
「……あれは13年前だったかな。アーヴ技術の導入で最新機材や素材を多く導入し始めて、それを軍事技術に生かす事が計画された。室蘭にある戦艦は海軍の実験台の様な存在だった」

福本
「敢えて戦艦にしたのは、容量の問題で？」

福本
「あぁ。戦艦で使えて駆逐艦に使えない…なんて事は余り無い。建造に3年、実験・実践に3年…全て北方で行った。隠れ易く、悪天候が多いから実験の回数も多いと判断したんだ」

山城
「それで3年を使って獲られたデータと機材・素材が今の艦艇に生かされた…と？」

福本（伊）
「その通り。実際、自動化による乗組員の削減もその艦のデータを基にした。無論、無人艦は不可能だ。いくらコンピューターの性能を上げても、人間が関わらないと船は動かないし、只の鉄の塊だ」

福本

「で、なんで室蘭に？」

福本（伊）

「データ収集後は解体の予定だった。しかし、中将になっていた私がモスボール保存する様に提言したのさ……それで秘密ドックのある室蘭に保存されている。あの子は世界を知らない、もうそろそろ日の当たる所に出してやりたいのさ……わかったか？」

福本・山城共に頷いた。

その頷きに納得した福本次官は言葉を続ける。

福本（伊）

「多分、第零艦隊の方に行くと思うからよろしく頼む。漸くバランスの悪い状況から改善されるな」

山城

「よく言いますよ…では失礼します」

2人は敬礼すると部屋から出て行った。

次号へ

31　イタリアの次は室蘭に（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

32　室蘭に（前書き）

登場人物

福本達の頼れる技術者

渡瀬津波（わたせつなみ）　１９歳　女性　技術少佐

南大阪市の町工場出身の技術将校で、元７組生徒。
長女だが、上の兄が町工場を継いだ事により、技術系教育の受けられる神戸士官学校に入学、勇気達と出会う。
生粋の関西人（つーか、大阪人）で、関西弁は流暢、故に７組のムードメーカーだった。

32　室蘭に

2月2日　室蘭

室蘭の海軍事務所に立ち寄った福本・山城達はその海軍事務所から伸びる階段と通路を歩いて室蘭の秘密地下ドックへと降り立った。地下ドックでは作業員達が動き回り、伊豆型戦艦の伊豆、伊賀、春日、日進の改装作業が行われていた。

そこを通過し、一番奥のドックへ向かう…そこに目的の物があった。

山城
「これが福本次官の言っていた…」

福本
「試験戦艦『磐城』ですね」

目の前には大和・播磨型戦艦並みの船体が入っていた。

長門
「……福本次官が渡してくれたデータによると、船体長、幅は大和型改装の数値を使ってる」

セルベリア
「つまり、大和型戦艦って事？」

長門
「平たく言えばそうなる」

山城
「『幻の４番艦』か…それで、これの今の責任者は…」

渡瀬
「あ、勇気は～ん！　正人はんもお久し振りでんな～」

山城
「その関西弁は…渡瀬だな」

苦笑しながら近付いて来る渡瀬を見る山城。

渡瀬
「あ、シルヴィアさんやな？　我ては渡瀬津波って申しまんすねん。あんじょうよろしゅうな？」

シルヴィア
「…あ、あぁ、よろしく」

福本
「あ～、シルヴィアさん、あんまり驚かないで下さいね。渡瀬は南大阪の町工場の出身なんで…」

シルヴィア
「南大阪…どこだ？」

山城
「南大阪市の事だよ。日本有数の中小零細企業の街さ」

渡瀬

「まあ、その話は置いて置くとして、磐城の確認が先でしゃろう？」

福本
「だな。で、状態はどうなんだ？」

渡瀬
「ちゃーんとモスボール保存されとったから、傷みも歪みも少なかったわ～。後は配線を弄ったり、パソコン様の配線引いたりするだけで済んだわ～」

福本
「じゃあ、直ぐにでも動かせる状態なのか？」

渡瀬
「そや。但し、洋上で戦闘行動やろう思うんやったら１２００名程は必要やな」

山城
「大和並みの船体で全盛期の半数で動かせるのか？」

渡瀬
「今の大和型かて、それぐらいの人数やで。そもそも、艦艇の自動化が進んだからな～、主砲塔かて、昔は５０人近くいたのに、自動装填装置のお陰で１０人程で済む様に成ったし…機銃や副砲、高角砲は自動稼働機銃や速射砲に変化したから、今やダメコンに人員が必要なんやで？」

山城
「わかってるよ。伊達に戦艦艦長をやっている訳じゃあないし」

福本
「だからと言って、完全自動化・無人艦化は無理でしょうね」

渡瀬
「そんな事したら、宇宙戦艦ヤマトのアンドロメダや無人艦の二の舞いや」

何度か出てきた宇宙戦艦ヤマトのアンドロメダ撃沈の話だが、実際、日本軍ではアニメ上の話で有りながらも真剣に受け止めていた。
一時期は兵器の無人化論が盛んになっていたが、白色彗星帝国と暗黒星団帝国以後はぱったりと途絶えた。

福本
「そう言えば、福島党首が軍の人員削減論をぶちかました時に…」

山城
「そうそう、福本次官が『お前は宇宙戦艦ヤマトを見てないのか？』って言って福島党首は赤っ恥かいたんだよな」

渡瀬
「あぁ、あれはほんまにおもろかったわ～。で、この子は何時出れるんや？」

山城
「今月中には正規乗組員を集めて、シリルティア王国に回航します。あと少しの辛抱ですよ」

渡瀬
「ほんまか？　なら、ちゃーんと見とくさかい、はよう引き取りに来てな～」

山城
「はいはい」

次号へ

32　室蘭に（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

33　国境侵犯（前書き）

舞台は再びシリルティア王国です。
いや、しかし…これだとどっちが主役やら……。

33　国境侵犯

2月6日（シリルティア王国　2月13日）

王都ユニオン

室蘭で磐城の状態確認を終えた5人は一度帝都によってから神戸に戻り、神戸軍用飛行場の軍用定期便でラバナスターに戻って来た。
そして、3日経った6日朝に王都ユニオンのアーネリア陛下より山城宛ての電報が届いた。
内容は……お茶のお誘いだった。

午後3時前　王城内アーネリア陛下私室のテラス

福本
「……来て良かったんですかね、自分とセルベリアは？」

山城
「だから、言っただろう？　電報には『お友達も是非御一緒にお越し下さい』って書いてあったんだからさ。その前に2人の顔を陛下は知っているよ」

シルヴィア
「何度か御会いになっているのだから、今更畏まる必要も有るまい。第一、そう言うお前達はどうなんだ？」

福本
「……あ」

セルベリア
「確かに……」

片や世界屈指の伝説的提督夫婦の孫、片や宇宙を流浪し、先進技術を持つ民族を統べる皇族の第一皇位継承者……そこらの王族こそが頭を下げそうな肩書きを持つ2人である。

山城
「と言う事でこの話はお仕舞い。この話は絶対に掘り返すな」

福本・セルベリア
「「了解です」」

その返事を聞いた山城は腕時計を見た…2時55分、3時5分前だ。

セルベリア
「シルヴィアさん、アーネリア陛下はこんな風にお茶の時間に呼ばれる事があるんですか？」

シルヴィア
「そうだな…今年は今回が始めてだが、昨年は何度か呼ばれた事があるな」

山城
「陛下もホッとしたい時間が欲しいんだよ。一国を背負うと言うのはそれだけ大変なんだよ…と、皇族にこの説教は要らなかったな」

あ、先に言っておくが、山城はセルベリアを卑下して言った訳では無いのでご注意を。

セルベリア
「もちろん、わかっております」

アーネリア
「すみません！　少し執務に時間が掛かりました！」

グロワール宰相を伴い、アーネリア陛下が私室に入って来た。
しかも、大慌てで。

山城
「いえ、まだ3時2分前なので遅れてはいませんが……それより、乱れたヘアスタイルを直されては？」

アーネリア
「え、あ……はい、そうします」

シルヴィア
「なら、私がお手伝い致します」

……なんだかな～…。

アーネリア
「ふぅ…やはり、このお茶の時間は心安らぎますね」

グロワール宰相

「それは何よりでございます」

給仕の入れたお茶を６人で楽しんでいた。

シルヴィア
「ですが、宰相閣下を御同席させたのは何か理由が有りますな？」

山城
「しかも、かなりの事…国権に関わる事と判断いたしますが…どうでございますか？」

福本・セルベリアも共に何かしろの『気配』を感知していた…あえて何も言わなかったが。

アーネリア
「ふぅ…やはり御二人は解ってしまいますね…宰相、例の物を」

グロワール宰相
「はい」

返事と共に懐から出してきたのはシリルティア王国北東部の地図。

グロワール宰相
「最近、我が国の北東部直轄統治地のシナノ平原に幾度か国境侵犯が発生している」

山城
「国境侵犯ですか…また、キナ臭い話ですね」

グロワール宰相

「うむ、シナノ平原は豊かな山の水と肥えた土、温暖な気候が相合わさって、我が国有数の穀倉地域なのだ」

シルヴィア
「それなら私も知っております。この地を抑えたからこそ、シリルティア王国は一国を造り上げる事が出来たと史書に書いて有りました」

アーネリア
「その通りです。そして、最近は日本他各国の支援で農業研究所を設立し、品種改良や効率の良い農業の樹立を求めて研究しています」

福本
「なるほど……それで国境侵犯の犯人は？」

グロワール宰相
「シナノ平原へ国境侵犯出来る国はただ一国、アッデュラー王国です」

そう言いながら地図の右端を指差すグロワール宰相。
確かに国境線を示す赤い線の右側に『アッデュラー王国』と書かれている。

グロワール宰相
「アッデュラー王国は２０数年前まで、この周辺でも屈指の王国で広大な領土を有していました。しかし、国力が衰退し、５年前から王位を捲る内乱状態であった」

福本
「ですが、内乱が終息し、国内を見てみれば、経済は混乱・崩壊状

態。しかも先立つ物がないから、隣の豊かな国の手近で肥沃な土地をぶん盗ろうって訳ですか」

アーネリア
「今のところは何とも…その可能性も有りますね」

セルベリア
「念のため、有事の備えはしておくべきかと」

アーネリア
「そうですね…あら、もう15分？　では皆さん、また今度…宰相、後は頼みましたよ」

グロワール宰相
「心得ております」

宰相の返事を聞いてアーネリアは私室から執務に戻って行った。

山城
「では、我々が視察と言う名目で現地を見て来てほしいと？」

グロワール宰相
「うむ…本来なら忠臣を派遣したいが手が足りん。だからと言って人選を間違い後々禍根を残したくは無いのでな」

だから、有る意味部外者で冷静な日本軍の視点で見て欲しい……と言うのがアーネリア陛下からの頼みだ。
聞くだけなら、自分勝手な…と言う発言も出てくるだろうが、今回

も今回で色々な事情が重なった結果で有る為、問題にはしない。

シルヴィア
「もちろん、2人も行くな？」

福本
「えぇ、どうせ親父もそう言うでしょうし」

セルベリア
「構いませんよ」

山城
「では、全員賛成ですので視察名目で行かせてもらいます」

グロワール宰相
「すまぬが、頼むぞ」

次号へ

33　国境侵犯（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

３４　現場視察（前書き）

本日８月６日……広島原爆投下の日でございます。
今年の慰霊祭には『はだしのゲン』の作者中沢啓治さんが出席なさるとか。

山城
「……で、お決まりの『核兵器廃絶』と今年から入る『原発エネルギー見直し』を市長が偉そうぶって発表すると？」

だから、毎度広島市長にはツッコミたいの、『あんたは世界情勢をちゃんと見てますか？』って。２０回以上は同じ事を言ってるけど、廃絶した国なんて無いよ？　逆に増えてるよ、核保有国はね。

福本
「ここで石原東京都知事の話ですね。「日本独自の核対応能力を持つ」って言うのが正しいんでしょうね」

当たり前だな。
『第三の被爆』が中国のオンボロ改造空母の劣化コピー艦載機搭載の核爆弾を受ける…なんて話は真っ平ごめんだ。

佐野
「その中国はこの慰霊祭を笑って見ているんでしょうね。「ほら見ろ、小日本は核兵器なんて持たないから何でもやれるな」って言いながら…」

だろうね。

4人

「「「「はぁ～～……」」」」

……今年は何時も以上に（アホの菅首相が原因）この国の現状をバカらしく思う6日でございました。

３４　現場視察

２月８日（シリルティア王国　２月１５日）　シナノ平原

福本
「空が広いな～～～」

シナノ平原を見渡せる丘に勇気は寝転がって空を眺めていた。

セルベリア
「本当ね…宇宙に居た時間が長かったから、こんなに空が広くて青いとは思わなかった」

隣で同じように寝転がっているセルベリアが呟いた。

福本
（そう言えば今まで任務やら休日やらであっちこっち行った覚えが有るが、こんな風にのんびりと空を眺める機会は無かったな……いや～、ホントに自然は凄いわ…）

何故か（あるいは当然か）自然に感銘する勇気。

山城
「勇気！　寝転がってイチャイチャするのはいいが、そろそろ行くぞ！」

セルベリア
「え！？　別にイチャイチャしてませんけど！」

シルヴィア
「そうやって2人で仲良く寝転がっておればそうにも見える！　早くしないと置いて行くぞ！」

福本
「すみません、いま行きます！　行こう、セルベリア」

セルベリア
「えぇ」

勇気がセルベリアの右手を掴むと急いで山城達の所へと駆けて行った。

さて、件のシナノ平原にやって来た福本一行。
メンバーは福本、セルベリア、山城、シルヴィア、長門の5人に加え、佐野、第零陸戦隊隊長大西少尉、パンター戦車砲手近藤少尉、の3人を加えた計8人での『視察』となった。
ただ……何故か近藤少尉が付いて来たのは解らないが……あえて気にしないでおく。
そして、8人はラバナスターの飛行場からシナノ平原に建設された飛行場に航空機で移動、そこから山城・シルヴィアが役所に立ち寄っている間に福本・セルベリアはゆっくりもったりと丘の斜面で寝転びながらイチャイチャ（おいおい）していた。

福本

「いや～、近藤少尉が運転出来るから助かりました」

福本とセルベリアは長門が乗っていた近藤少尉運転のジープに飛び乗った。

近藤

「パンター戦車を動かす為に運転は習った。ただ、それだけだ」

ハンドルを握る近藤少尉は無表情で言った。

セルベリア

「なら、なんで付いて来たんですか？　私達に？」

近藤

「そ、それは新たな戦場に成るやも知れぬ場所を見ておくのは士官の勤め！　何も疚しい事など無い！」

頬を薄赤く染めながら近藤少尉は全力否定した。

だいたい…疚しい事って何ですか？

近藤

「と、とにかく！　疚しい事も後ろめたい事も何も無い！　それと、道が悪くなるから喋るな！　舌を噛むぞ！」

……つまり、これ以上目的を探るな…と言いたいらしい。

まあ、本当に道が悪くなったので喋りませんがね。

山城

「で、一応ここが国境線なのね」

佐野
「はい。地図上ではそう成っています」

国境線……それは小さな林だった。
と言っても実際に『国境線』があるわけでは無いが、国境線設定時の計測で埋められた加工された石の指標が唯一の物証だった。

福本
「それで監視所が…あそこと」

林から２００メートル程下がった所に監視所…と言っても只の小屋…がある。

セルベリア
「まあ、中世の国境みたいなものね」

大西
「まさか、鉄条網と有刺鉄線で敷いて『国境』とするのもあれですしね」

近藤
「それで、この林の向こうは平地か？」

佐野
「その様ですね」

長門
「……地形から計算して、ここが最初の防衛ライン。後はあの丘ま

で退避しないと無理…農地を潰すなら話は別だけど」

シルヴィア
「守るべき民の生活の糧を潰すなどもっての他だ」

セルベリア
「なら、事が起きればここで防衛するのが最適ですね」

佐野
「その事が起きない事を祈りますよ」

山城
「そうでありたいものだ」

……しかし、この視察の4日後、再び国境侵犯が発生。
しかも、騎兵一個分隊の報告にシリルティア王国側も遂に対応を決めた。

次号へ

３４　現場視察（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

35　塹壕構築（前書き）

……はあ…。

山城
「いきなり溜め息かよ…で、原因は鈍菅か？」

うん…とっとと、マジで消えて欲しい。

福本（勇気）
「昨日の慰霊祭での発言で？」

まだ『我が国の悲劇を世界に広め、核兵器廃絶を…』云々の方がマシ……あの人はバカ？　アホ？　ＫＹ？　それとも精神異常者？

35　塹壕構築

2月16日（シリルティア王国　2月23日）　シナノ平原

福本
「ここは何時から工事現場になったんですか？」

山城
「勇気、それにツッコミは必要か？」

福本
「いえ、何も知らない人間が見たらなんと言うか、代弁しただけです」

……実際、そう言いたくなる光景が目前で広がっていた。
騎兵一個分隊の国境侵犯に対し、アーネリア陛下は限定的戦争準備を発令、日本政府にも正式に要請が入った為、派遣軍司令部は陸上部隊と工作機械を現地に投入した。
と言っても、余り重量の有る物は運べ無い為、小型機材が多くなったが。
それでも小型ショベルカーなどの穴掘りを得意とする物が投入され、その土を土嚢袋に入れて積み上げたり、掘った溝を塹壕に仕上げたりと、工事現地の様な状況になっていた。

福本
「で、まさかこんな所でイタリア製タンケットの物真似と御対面するとは思いませんでした」

山城
「まあ、形は似ているが…強化はされているぞ」

福本・山城の視線の先にはイタリア製Ｌ３軽戦車に似たシリルティア王国製一式装甲牽引車『ネコ』（小さくて可愛いと言うアーネリア陛下の言葉で命名）が排土板を装着して待機していた。

山城
「２０ｍｍ厚の装甲だからライフル弾で貫通なんて事は無いが…リベット方式なのが難点なんだよな」

福本
「いきなり溶接は無理ですよ…で、装甲車両はこのネコが約２００輌、イタチが約４０輌、ヒグマに至っては約２０輌……まあ、生産しているだけ、他国よりはマシですね」

イタチは一式軽戦車『イタチ』の事で、外見は日本製９５式軽戦車の車体にドイツ製ＩＩ号戦車の砲塔を載っけた様な軽戦車…但し、正面装甲は３０ｍｍ厚装甲採用で、車体に車体機銃、砲塔武装は２５ｍｍ機関砲に１３ｍｍ機銃を砲塔上部に設置している。
同じくヒグマは一式中戦車『ヒグマ』の事で、ドイツ製3号戦車の車体に日本製の一式中戦車の砲塔を載せた中戦車で、４０ｍｍ機関砲を改造した４０ｍｍ戦車砲と同軸機銃を砲塔に装備し、砲塔上部にこれまた１３ｍｍ機銃を装備、車体に車体機銃を搭載した中戦車だ。
漸く出来たばかりなので生産数は少なく、イタチ・ヒグマ共に王都ユニオンの訓練部隊に集中配備・運用中で余り見かけないが、ネコに至っては『装甲牽引車』と言う事と数が多い事もあって一部の砲兵隊や工兵隊などに配備されていた。
そして、今回その貴重なネコを3輌装備した工兵隊が現地に投入さ

れた訳だ。

福本
「ベローチェが排土板付けた姿なんてここでしか見られませんね」

山城
「まあ、確かに言えてるな」

ちなみに日本軍からは陸戦隊一個小隊、陸軍歩兵一個中隊（派遣軍より派遣）、工兵一個小隊（日本軍より派遣）、各種機材…と言ったところだ。
あとは、シリルティア王国軍の歩兵中隊と工兵中隊、砲兵小隊（９４式山砲装備）の編成である。

福本
「本当なら、戦車も欲しいところなんですが…無い物ねだりは無理だろし」

山城
「輸送機の輸送重量を知っているだろう？　それに滑走路が足りないから、ジェット輸送機が降りれないんだからな…それがある意味痛いところなんだよな…はあ～…」

プロペラ機なら降りられても、滑走距離が長いジェット輸送機を使え無い原因の一番が用地確保、二番がそのエンジン音……今はプロペラ機で我慢である。

福本
「ここならパラシュート投下も有りかも知れませんが…まあ、住民を困らせる訳にはいかないし、鉄道もかなり先の敷設だから、今は

期待薄……もう、止めます」

山城

「それがいいと思う。まあ、飛行機使えるだけ、マシと考えないと後がキツいよ」

……2人の間でこんな会話が交わされながらも、塹壕構築は進んでいた。

次号へ

35　塹壕構築（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

36　国境侵攻戦　1

2月19日（シリルティア王国　2月26日）　シナノ平原

福本
「あちゃ～…先輩、敵さんですよ」

山城
「まったく…林を全部焼き払っていたから、来るとは思っていたがな」

昨日の午後、国境沿いの林を焼かれた為、視界が開け、塹壕からも充分に敵の姿が見える。

シルヴィア
「ほうほう、この平原を取るためにあそこまで兵力を出して来るとは…嬉しくて涙が出てくるな」

セルベリア
「シルヴィアさん、それは皮肉ですか？」

山城
「おいおい…大西、準備は大丈夫か？」

大西
「大丈夫ですよ」

既に戦闘準備を終えた第零陸戦隊はあちこちで配置についている。

それは日本軍・シリルティア王国軍双方共に一緒で、既に戦闘配置を終えて、待機している。

福本
「どうします、先輩？」

山城
「そうだな…向こうが横列で進行なら、こちらの銃器で掃射する。更に向こうがフリントロックマスケット銃なら戦場では１００ｍで１５％の命中率…装填は立ってやるしか無いから…結果は自ずと見えるがな」

対し一番古い９９式歩兵銃でも有効射程５００ｍは有り、射撃速度も比較に成らない。

山城
「じゃあ、反対に訊くが、敵が大砲を持ち出して来たらどうする？」

福本
「そうですね…ライフリングの無い旧式大砲なら、後ろにあるシリルティア王国軍の９０式機動野砲を引っ張って来たらいいですね。まあ、旧式大砲ならですが」

山城
「やっぱりそうなるな」

……よく戦場の真ん中で暢気に対策を話せるね…この２人…。

ローエン
「本当にお変わりありませんね。御二人は」

山城
「おや、ローエン少佐。ユリアさんはお元気ですか？」

ローエン
「えぇ、久し振りの現場で少しはしゃいでいますが、まあ、大丈夫ですよ」

あ、そうそう。ローエン少佐とユリア隊長は昨年１１月中旬に入籍しました。
つまり、まだ新婚さんです。
つーか、新婚夫婦を戦場に出して良いのかよ？

ローエン
「何せ、こう言う近代戦を戦える人間は少ないですからね。経験者が見ておかないと、部隊全滅なんて事が有りますので」

…ベテラン部隊は大変で有りますね。

大西
「おやおや、敵の歩兵部隊です。横列でこちらに接近中！」

鼓手の叩く太鼓に歩調を合わせて接近してくる光景に山城も福本もローエンも…ぶっちゃけて言えば、いまこの瞬間も塹壕に居る日本軍・シリルティア王国軍兵全員が苦笑を浮かべていた。
次元が違うのだ……僅か４年で１００年分の戦争体系の変化を見たシリルティア王国軍だからこそ、日本軍を教師に学んだのである。

しかし、いま接近する敵歩兵部隊はそんな事と接点が無かったから横列で来る……これからたっぷりと味わうが…。

ローエン
「山砲、迫撃砲、用意。いいか、こちらは敵が見えるが、敵からこちらは見えない。塹壕にいる間は安心して撃て」
そう言いながら今回初実戦の新兵達に活を入れた。

福本
「短期戦に成る事を祈りますよ」

山城
「あぁ。まあ、あの福島はシーシェパードの件でズタボロだから、多分静かな筈だぜ」

あの後、シーシェパードの武器売買の証拠が固まり、また、モナコ公国の関与を示す証拠が見付かった為、福島党首は沈黙してしまった。
この為、福島党首と社民党は最近は静かである。
まあ、今は全然関係無いが。

福本
「とにもかくにも、やるしか無いですね」
福本は呟きながら６４式小銃を構え、引き金に指を掛けた。

次号へ

３６　国境侵攻戦　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

37　国境侵攻戦　2

アッデュラー王国軍陣地

「……不味いな」

「不味いですか？」

「不味い。危機的な程、不味い」

アッデュラー王国軍の陣地より単眼望遠鏡で戦場を視ていた女性の呟きに老年の将校が応えた。

「我が軍は２０年前まではこの大陸一の軍隊だった。しかし、僅か４年の内乱でこの様だ。だが、我が軍の指揮官共はもう勝った気でいる。不味いと思わぬか、セネイ？」

セネイと呼ばれた老将は陣地を一目見て、溜め息を吐いた。

セネイ

「流石はクシャナ様。確かにその通りでございます。まったく、兄上様が指揮権を別の人間に預けたお陰でこの低落ですわい。私が行って喝を入れてきましょうか？」

クシャナと呼ばれた女性は苦笑しながら応えた。

クシャナ
「止めておけ、セネイ。お主とは御付きであった奥方と共に２０余年も世話になった忠臣。揉め事を起こしてその忠臣を失いたくは無い」

セネイ
「この老骨をそこまで…ありがとうございます」

クシャナ
「やめろ、その言葉は後々になって言うこと。いま言うべき言葉では無い」

セネイ
「ですが、有り難き言葉に間違いはありませぬ」

クシャナ
「…そうか」

セネイ
「はい…ですが、我々は陛下の護衛を仰せつかったにも関わらず、護衛があなた様と自分、あなた様の侍従隊の１０名とは…」

クシャナ
「そう言うことだ、セネイ。誰もこの戦が我が軍の一押しで終わると考えておるからだ」

負ける筈の無い戦いに陛下の護衛など不要…と言う考えが目に見える。

そんな連中に対してクシャナはセネイと配下のスパイに命じ、シリルティア王国の内政状況を内々に調べていた。
ただ、結果が出る前にこんな事になったが。

ターン……タターン…タターン……

セネイ
「どうやら始まった様ですな…ですが、少し早い様な気がしますが…」

クシャナ
「気のせいではないぞ、セネイ。私の計算が正しければ壕から約２００ｍの位置だ。しかも、始めたのは向こうだ」
再び単眼望遠鏡を覗いたクシャナが言った。

同時刻　日本軍・シリルティア王国軍塹壕

ローエン
「今だ！　撃て！！」

タタタタタタタタン！！

待ってましたとばかりに９９式小銃を構えていた歩兵達が引き金を引き、ボルトを引き空薬莢を排出し、また撃つ。
そして５発撃つと新たに銃弾クリップを装填するが、その間に９２式重機関銃と９９式軽機関銃が連続射撃で弾幕を張る。
日本軍・シリルティア王国軍からすれば最早見慣れた光景だが、受

けるアッデュラー王国軍からすれば目を疑う光景だった。
フリントマスケット銃特有の黒色火薬の白煙が無い、装填の間が無い、その前に自分達の射程外から多数の銃弾が撃ち込まれるなんて状況は経験すら無い……これで横列で進めば結果は丸見えである。

山城
「大西、狙撃で将校や下士官を狙え。中世やソ連軍なら充分通用するぞ！」

大西
「了解！」

福本
「射撃を緩めるな。弾幕で押しきれ！」

６４式小銃と６４式軽機関銃で同様に…いや、それ以上に強力な弾幕を張る陸戦隊と福本達の面々。
もう結果は見えて……

シルヴィア
「む…敵が撤退したぞ！　射撃中止！」

セルベリア
「射撃中止！　射撃中止！！」

……塹壕の両軍が射撃を中止した時、既にアッデュラー王国軍は多数の死体と負傷者が出ていた。

アッデュラー王国軍陣地

セネイ
「退却した兵士達によりますと、シリルティア王国軍の銃撃は切れ目が無く、また、発射時の白煙が見えなかったそうでございます」

テントの中でセネイが集めて来た情報をクシャナに話していた。

クシャナ
「そうか……他には？」

セネイ
「は、これは兵士によって違いますが…銃は2種類、ベテラン兵士は5種類との事にございます」

そこから暫くはセネイが報告の為、一方的に話す事になった。

クシャナ
「…どの報告も私を憂鬱にしそうだな。セネイ」

セネイ
「は、しかし、我らが憂鬱に成ったとて、指揮する将軍達にはどうでもいい事でございましょう」

クシャナ
「まったくだ。それ故に始末が…」

兵士
「クシャナ様！　大変です！！」

転がる様に慌て入ってテントへ来た兵士が叫んだ。

クシャナ
「どうした？　なにがあった！？」

兵士
「は、ドワネー将軍の聖銀騎馬隊が敵陣へ突入しました！」

次号へ

37　国境侵攻戦　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

38　国境侵攻戦　3（前書き）

いや～、もともと菅のアホに愛国心も糞ったれも無いとは思っていたが……

福本（勇気）
「長崎の原爆慰霊祭に出ておきながら、日にち間違えるって…いや、把握して忘れるなよ…」

俺だって細かい事となると自信は無いが…最低限、終戦記念日と開戦日、広島・長崎の原爆投下日ぐらいは把握してるよ。

福本（勇気）
「まあ、ある人は疲れているんじゃないかって言ってるそうだけど……なら、とっとと疲労かなんかで辞任してくれ」

もっともだ。
そして、もう1つ、この話題。

山城
「何々『日本海の呼称』？　日本海の呼称に韓国がなんで文句をつけてんだ？」

その理由は読売新聞の七面にあるけど、まあ簡単に言えば「公海に日本の名前を付けるのはけしからん。俺達（韓国）は朝鮮半島の東側を『東海（とんへ）』って呼ぶから、併記しろ！」…って言ってんの。
つまり、国内事情を無理矢理押し付けてるのよ。
まあ、韓国政府は『日本海』が世界で指示されてる現実を知ってるからいいけど、問題は韓国メディアが現実も知らずに騒いでいる事

……この前、あんらたが騒いで日本の国会議員を強制退去させて世界に大恥かいたのを忘れたのかね？

山城

「で、竹島問題同様に歴史問題と見てる訳ね……なら、ロシアのバラチック艦隊と戦ってみろよ、韓国」

……韓国、もうそろそろ世界の現実を見ようぜ。

38　国境侵攻戦　3

日本軍・シリルティア王国軍塹壕

兵士
「敵軍接近!!　騎兵隊です!!」

ローエン
「戦闘用意!　急げ!」

再び戦闘態勢に入った両軍。
福本・山城・シルヴィア・セルベリアは双眼鏡で見る。

シルヴィア
「ほう、あれはアッデュラー王国の聖銀騎兵隊ではないか」

福本
「聖銀騎兵隊?　ただの騎兵では無くて?」

シルヴィア
「向こうは聖銀騎馬隊だがな。まあ、銀色に塗った鎧で敵陣に突っ込む姿が余程恐ろしかったのでいつの間にか『聖銀騎馬隊』が名前になってしまったそうだ」

山城
「おいおい、長篠の戦いの再現か?　それとも日露戦争か?」

長篠の戦いについては余りにも有名なので触れないでおく。
日露戦争も言うまでもないし、年末の『坂の上の雲』を見て頂けれ

ば解る筈だ。
しかし、山城の言った事は確かにその通りだった。

山城
「おい、福本。秋山好古大将がロシアのコサック騎兵隊とやり合う時はどんな対処方法だった？」

福本
「簡単な話です。そのまま戦ったら負けるから、騎兵は馬から降りて、機関銃と騎兵銃を撃ちまくれ、ですよ」

山城
「さすがだな。その通りだ」

そう…騎兵が消え、戦車が出てくる要因の１つである。

大西
「総員、射程内に入り次第、撃ちまくれ！」

さて、何も気付かす、何も気にせず騎馬の機動力で接近する聖銀騎馬隊。
あえて言うなら「不甲斐ない歩兵に変わって敵陣地を蹂躙してやる」…と思っていただろう。
しかし、そんな思惑は塹壕から２５０ｍの所で消し飛んだ。
今度は小銃・機関銃に加え、ローエンが山砲の使用を許可した為、山砲の榴弾まで加わった。
後はお分かりの通り、銃弾と榴弾の嵐の中に騎馬隊は突っ込んで……壊滅した。

フリントマスケット銃なら装填時間もあって近付けただろうが、ボルトアクション銃と機関銃の前には騎馬の機動力は無力だった。
しかも、指揮官のドワネー少将が先頭に立って突入したものだから、集中射撃を受けて真っ先に戦死、指揮継承がされずにマゴマゴしていたから余計に被害を増やした。
まあ、結局は自分達の不利を悟って勝手に引き上げたが……。

再びアッデュラー王国軍陣地

セネイ
「…と言うことでドワネー少将は戦死、聖銀騎馬隊は壊滅でございます」

クシャナ
「やはり、か?」

セネイ
「やはり、です」

クシャナ
「そうか……それで、将軍達はどうするつもりだ?」

セネイ
「今日の攻勢を中止し、明日到着する大砲で攻撃するつもりです」

クシャナ
「何門だ?」

セネイ
「５４門でございます」

クシャナ
「まあ、対応は間違っておらんだろう…だが、無駄だ」

セネイ
「無駄ですか…確かに我が国の大砲は大口径で少し短い物ですが…」

クシャナ
「城壁ならイザ知らず、壕に炸裂弾や鉄球弾を撃ち込んでも効果は薄い。それに向こうもそれくらい予想している。完全に空振りに終わるだろう」

まあ、元々この戦い自体が無駄な戦いであるが…。

クシャナ
「そう言えば、シリルティア王国に送った配下が今日か明日に戻って来る筈だったな？」

セネイ
「はい、どういたしますか？」

クシャナ
「使いを出してここに来る様に伝えよ。戦場でも敵況把握は必要だ」

セネイ
「わかりました」

次号へ

38　国境侵攻戦　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

39　国境侵攻戦　4（前書き）

また、北朝鮮と韓国がヨンピョン島でドンパチやったってね。

山城
「本当にあの国って頭と体がバラバラだよね。怖いぐらいに」

怖すぎるよ……で、それを知ってか知らずか、自己中国家は改装した空母を自慢気で訓練に出すってね……ついこの間、新幹線で事故ったのに。

福本（勇気）
「まあ、訓練中に事故って沈没しない様に……なったりして」

……なったら、楽だね。

39　国境侵攻戦　4

2月20日（シリルティア王国2月27日）

アッデュラー王国軍陣地

砲兵指揮官
「撃て！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！……

アッデュラー王国軍の54門の大砲が火を吹いた。
狙いはシリルティア王国軍の防衛線だ。

ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！……

クシャナ
「見た目は派手だが、効果は薄そうだなセネイ」

セネイ
「は…あの様子では我が方はクシャナ様の言われた通りかと…」

盛大に土砂を巻き上げる光景を単眼望遠鏡で冷ややかに見ていた。

クシャナ
「さて、シリルティア王国軍はどうするかな？」

日本軍・シリルティア王国軍塹壕

ヒュルルルルル……

ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！
ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！
ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！……

福本
「やっぱり、引っ張り出して来ましたね。大砲を」

山城
「歩兵がダメ、騎兵がダメとなれば、最後は火力でボコるのが手だ。まあ、最後は歩兵と騎兵の突入だけどな」

シルヴィア
「しかし、何も気付かずに第一塹壕線を砲撃するとは…事前偵察も何も無かった故だな」

セルベリア
「と言っても、ナポレオン時代の大砲だと被害範囲が限られるだけどね」

砲撃退避用・第二防衛線の第二塹壕線に退避していた日本軍・シリルティア王国軍。
つまり、いま砲撃している第一塹壕線には日本軍もシリルティア王

国軍も誰もいない。

山城
「ローエン少佐、砲兵部隊はどうですか？」

ローエン
「既に準備は完了していますよ」

有線式野戦電話を片手に言うローエン少佐。
その配線の先には独立第１特設機動砲兵部隊に繋がっていた。

砲兵陣地

下士官
「ハリオ中尉、ローエン少佐から応戦命令出ました！」

受話器を持ったベテランの下士官から名前を呼ばれた青年将校が頷き、スッと右手を上げた。

ハリオ
「よーし、９０式機動野砲、９２式加農砲（カノン）、てぇー！！」

展開していた９０式機動野砲（７５ｍｍ）８門と９２式１０センチ加農砲２門が火を吹いた。
双方余裕の１万メートル越えの射程（９０式機動野砲は１万４０００メートル、９２式１０センチ加農砲は１万８２００メートル）が有るだけに余裕でアッデュラー王国軍陣地まで届いた。
更に装填されていたのが触発信管の榴弾だから最悪だった。

何せ、目にも止まらぬ速さで突き進んだ榴弾は観測隊の観測したアッデュラー王国軍の大砲近くに着弾したからだ。

アッデュラー王国軍陣地

ヒュルルルルル……

ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！ズガーン！

兵士1
「うわー！？」

兵士2
「て、敵の反撃だ！！」

下士官
「お、落ち着け！　敵砲の数は少ない！　それより、敵砲の場所はどこだ！？」

兵士3
「わ、わかりません！　こちらからは見えません！」

下士官
「な、なんだと…」

ドガーン！！

近くにあった大砲の真下に着弾した榴弾が大砲をバラバラに吹き飛ばした。

クシャナ
「…やはり、シリルティア王国は大砲の更新を始めていたか」

単眼望遠鏡で砲兵陣地からの砲撃を確認したクシャナが呟いた。

セネイ
「ですが、あの距離ですと着弾観測が難しいと思いますが？」

クシャナ
「それなら空を見てみろ」

セネイ
「はぁ……なるほど、気球ですか」

いつの間にやらシリルティア王国軍から気球が上がっていた。

クシャナ
「今朝には上がっていた。既に我々の陣中など見え見えだ。最大射程で撃たれたならば、我々もうかうか出来んぞ」

砲兵指揮官
「退避！　退避しろ！！」

一方的に撃たれる大砲を捨て砲兵部隊は退避するしか無かった。

次号へ

39　国境侵攻戦　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

４０　幼き君主の決断

アッデュラー王国軍陣地

将軍達の集まったテントは沈黙が支配していた。
昨日は歩兵と聖銀騎馬隊を投入して失敗、今日は今日で砲兵隊を出して失敗した。
５４門の大砲の内４１門が破壊され、残りの大砲も使えるは使えるが、最早使っても無駄な事だった。
まだ日が暮れるまで7時間以上は有るが、将軍達の顔は妙に暗かった。

クシャナ
「お歴々が揃っていると聞いて来て見れば、この様は何であろうな？」

そう言いながら入って来たクシャナに将軍達が憤った。

将軍１
「なにを言うか！　陛下のお守りが口を出すな！」

将軍２
「そうだそうだ！　貴様が出て来る幕は無い！」

将軍３
「昨日と今朝はただ単に運が無かっただけだ！」

将軍４

「そうだ！　少し調子が悪かっただけで、次こそはシリルティア王国軍の防衛線を抜いてみせる！」

……空元気と言おうか、口だけは勇ましいと言おうか……どちらにしても、何の反省も検討もしていないのが丸見えだ。

クシャナ

「そして、また同じ事を繰り返す…負の連鎖とはこの事だな」

将軍１

「な、なんだと！？」

将軍２

「聞き捨てならぬ！」

将軍４

「まるで我々が無能と言っているみたいではないか！」

将軍３

「いくら宰相閣下の妹君と言え、それ以上言うと…」

怒りに震え、腰のサーベルに手を伸ばす将軍達……険悪な雰囲気になったテント……そこに入って来たのは幼い…と言っても１０代…の男の子。

「将軍達はこの狭いテントで何をしているか？」

将軍達

「「「「「陛下！！」」」」」

入って来た男の子は微妙に合っていない大きめの鎧を着ていた。
この男の子こそ、現アッデュラー王国国王アーサー（12歳）……
無論、名目上の国王である。
しかし、12歳の割には世の中を知っていると言うか、聡明と言う
か……とにもかくにも、愚君では無い。

アーサー
「将軍達に訊く。私の記憶が正しければ、3日前のこの時間に、将
軍達は「1日で奪取してみせる」と言った筈だが…相違はないか？」

将軍達
「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

……再び沈黙。
沈黙は答えなり…では無いが、完全に何も言えないのである。
真実では有るが、答えたく無い…しかし、何か言えば言い訳の様に
しか聞こえないだろう。
正に矛盾の様な沈黙である。

アーサー
「……わかった、クシャナ、済まないが同行して欲しい」

クシャナ
「……どちらへ？」

アーサー
「シリルティア王国軍陣地だ。潔く敗けを認め、引き上げる」

これを聞いた将軍達はもちろん慌てた。

将軍１
「い、いけませぬ、陛下！　敵陣に参るなどもってのほか！」

将軍２
「行ったところで殺されるのがオチでございます！」

将軍４
「あるいは捕虜か人質となり、連れて行かれますぞ！」

将軍３
「それにまだ負けと決まった訳では…」

アーサー
「うるさい！　将軍達に意見など求めておらぬ！」

将軍達
「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

幼い陛下から一喝され沈黙する将軍達。
クシャナがテントから出ようとする時、将軍達はクシャナに「止めてくれ！」と目で言っていた……無視したが……。

１時間後……日本軍・シリルティア王国軍陣地

山城
「なるほど、そんな事がありましたか」

アーサー
「えぇ…それで、停戦の件ですが…」

……監視所として使われていた小屋で停戦交渉が行われていた。

山城
「それについてはご心配無く。現地停戦については我々現場の事なので」

別にアッデュラー王国に侵攻しろ…などの指示は出されていない、ただ、シナノ平原の守備を命じられただけだ。

アーサー
「では…」

セネイ
「陛下！　一大事でございます！」

クシャナ
「セネイ！　我が軍の指揮は…」

セネイ
「クシャナ様、それよりも一大事です！　我が祖国は正体不明の敵により王都が占領されました！」

……一転、またもや騒動の始まりだった。

次号へ

４０　幼き君主の決断（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

41　伝達は疾風の如く（前書き）

いや…なんでこんな事になったのかね？

山城
「今回の『五山送り火』で薪からセシウムが検出された件？　あれを突き詰めて行けば、結局悪いのは菅だぜ？」

だよね。
けどね、不肖この某京都の大学で日本史近現代専攻の私はついつい裏を読んでしまいます。

福本（勇気）
「…と言うと？」

簡単、『市民』とか名乗る奴等が圧力を掛けたか、脅迫電話を掛けたか。
だって、『新しい教科書』策定でそう言った事があったんだし。

山城
「…否定出来ないのがこの世界の日本だな」

福本（勇）
「こっちなら親父が出て来て「大丈夫だから燃やせ！　今は主張よりも鎮魂！」って言いそうだけど」

……こんな日本に誰がした…って左翼のアホか。

41　伝達は疾風の如く

20分後……シリルティア王国首都（王都）ユニオン　日本大使館内　大使執務室

杉下大使は執務室で何時もの通りに執務をしていた。
大使館設置から3年、人事異動が少なく、面子が変わるよりも増える事の多い大使館は、シリルティア王国内日本関連部署もある為、あちこちの省庁から人が出向し、まるで複合庁舎の様になっていた。
まあ、貴族の屋敷だった為、人を放り込むスペースがあったから、余り困らなかったが…。
微妙に話が横道に逸れてしまったが、杉下大使は普段通りに外交案件を片付けていた。

「はい、マサル、お茶よ」

杉下
「うん、ありがとう、アンリ」

「どういたしまして」

あ、このアンリさんことアンリエッテさんはグロワール宰相の姪っ子で杉下大使の奥さん（同い年）です。
文学派で外国に憧れていたアンリエッテさんをグロワール宰相が気を効かせて杉下大使に会わせたのが出会いでございます。
……また、横道に逸れてしまった……。

アンリエッテ
「そうそう、日本軍から緊急伝も預かったんだけど？」

杉下
「そうか、シナノ平原の件が終わったのかな？　何々……！？」

一読した杉下は驚きを隠しつつ、神妙な顔付きになった。

アンリエッテ
「…マサル？」

杉下
「済まないがアンリ、今すぐ叔父様に会えるか連絡してくれないかな？　ぼくはこの事を本国に伝達しないといけないんだ」

アンリエッテ
「わかったわ。ちょっと行って来るね」

執務室からアンリエッテが出て行くと、杉下は直ぐに手近にあるパソコンから外務省と国防省にメールを送る為、文章を書き始めた。

更に２０分後……帝都東京　国防省内　海軍次官室

その日の海軍次官室は執務机に向かい執務をしながら、点けているテレビのワイドショーに出ている福島社民党党首がバカな事を言わ

ないか…とか、世間では何が人気か…とかに耳と感心を向けているのだが、その日は違っていた。
その日は海軍次官室に山県陸軍次官、田母神空軍次官が来室し、来年度の予算についての打ち合わせだった。
打ち合わせと言っても予算配分の打ち合わせでは無く、技術開発における技術協力出来ないか…と言う打ち合わせであった。
そんな中……打ち合わせていた時、海軍次官室に福本海軍次官直属の通信士官が飛び込んで来た。

士官
「福本次官、シリルティアより緊急伝です！」

『緊急伝』と判子が押された封筒の封を切り、丁寧に折り畳まれた紙を取り出す。
そして、一読したあと、元通りに折り畳み、山県陸軍次官に渡した。

福本（伊吹）
「アッデュラー王国とのいざこざが終わったと思えば、今度はアッデュラー王国自体が中国共産党軍に首都を陥落されられたそうだよ」

山県次官と田母神次官にそう言うと福本次官は机の電話の受話器を上げ、内線を選択、国防大臣室に繋いだ。

福本（伊）
「あ、石破大臣ですか？　福本です。ただいま現地から連絡がありました……はい、ですが新たな敵です。今度は中共軍ですよ」

更に更に２０分後……旅順軍港地下ドック

技術士官
「渡瀬少佐、福本次官よりお電話です！」

渡瀬
「はいな～、いま行くで～」

部下から受話器を受け取った渡瀬は直ぐに陽気な声で訊いた。

渡瀬
「何の用でっか、次官……話はわかりましたわ。それで……
薩摩と土佐の件ならこっちも報告がありましてな……」

次号へ

41　伝達は疾風の如く（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

42　手札

2月28日　帝都東京　国防省　海軍次官室

福本・セルベリア・長門の3人は海軍次官室に居た。
無論、呼ばれた理由はアッデュラー王国が中国共産党軍に占領された事についてだ。

福本（伊吹）
「既に聞いていると思うが、田母神さんの話だと偵察機が撮影した写真とビデオには戦車が写っていた」

福本
「はい。中国軍の９６式戦車・９９式戦車のどちらか、その混成…と陸自の皆さんは判断しています」

福本（伊）
「うむ…そして、海上を偵察した偵察機が見たのは…これまた中国共産党海軍の集結途中の艦隊だ」

セルベリア
「その件についても、海自の皆さんは中国艦艇に間違い無いと断定しています」

長門
「…映像からリアルな３Ｄ化を施したから、海自も陸自も正確な検証が出来た」

福本
「けど、父さん。そんな事を確かめる為に呼んだ訳じゃあ無いでしょう？」

福本（伊）
「その通りだ。磐城が第零艦隊に配備されたから大丈夫だと思うが…実際には手札が多い方が役に立つ」

福本
「まあ、それはそうですね。それで？」

福本（伊）
「そこで旅順の渡瀬に薩摩・土佐の工期短縮は可能かどうかを訊こうと電話したら……どうやら、作業がスムーズに進んで工期の大幅短縮が可能と言ってきてな」

セルベリア
「つまり、私達を薩摩・土佐に乗せて手札に加え様と言う事ですね？」

福本（伊）
「そうゆう事だ」

福本
「それはいいですが…乗組員はどうするんです？　いや、その前に工期短縮と言いましたがどこまで出来たんですか？」

福本（伊）
「乗組員は既に選抜し、待機してある。工期の方は…実は昨日、全て終わった」

長門
「…つまり、完成した？」

福本（伊）
「あぁ、こうなれば一刻も無駄に出来ないからな。今頃、地下ドックから地上ドックに移っている途中だろう」

長門
「…最も重要な艦長は？」

福本（伊）
「土佐は島津に任せた。薩摩は…勇気、司令兼務でやれ」

福本
「山城先輩みたいな話ですね。まあ、山城は主席参謀ですが…いや、もうほぼ司令ですね」

山城の現状を思い出しながら勇気が言った。

福本（伊）
「あはは…本来なら、今から着任しろ…って言いたいところだが、明日の朝イチで着任してくれ。そこから直ぐに神戸、シリルティアに向かい、第零艦隊と合流しろ。いいな？」

福本・セルベリア・長門
「「「了解！！」」」

福本（伊）
「それと…これは階級章だ。勇気、セルベリアは中佐、長門は少佐

だ。本来ならあと1ヶ月先になる筈だったが…早めに手配しておいてよかったよ」

そう言いながら机の引き出しから階級章を取り出す。

福本
「受け取りました、父さん」

福本（伊）
「頼むぞ。ここまでやって結果無しなら、勘当ものだな」

福本
「父さん、それは冗談ですか？」

福本（伊）
「勘当は冗談だが、結果は出せよ。いいな？」

福本
「わかりましたよ、父さん」

翌3月1日　旅順軍港

渡瀬
「あ、勇気は～ん！　待ってたで～！」

福本
「ごめんな、渡瀬。なんか急かしたみたいで」

渡瀬
「ええんよ、予定より早う出来たんやし…はい、これがマニュアルや。セルベリアに預けとくさかい、後でじっくり読んでや」

セルベリア
「わかったわ」

長門
「…了解」

渡瀬
「ほな、幸運を祈っとるよ」

福本
「そっちも播磨達を頼むぜ！」

渡瀬
「任しとき～」

次号へ

42　手札（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

43　古き戦友（前書き）

本日8月15日……小説を書き始めて三度目の終戦記念日です。

山城
「しかし…状況が悪くなる一方だよな」

まったくです…品も礼儀も知らない二流国家共に空母を保有され、領土を盗られ、同胞を拉致され、技術や文化をコピーされ、国会議員を追い返され……ロクな主張や措置も出来ず、国難時に場当たり・延命しか出来ない首相が居座るこの国……大東亜戦争で死んだ将官から名も無き兵士はこんな国にしない為に散ったのに、これじゃあ、あべこべも良いところじゃあないか！！

福本（勇気）
「菅首相は靖国神社に……行く訳ありませんね、去年は行きませんでしたし。まあ、歴史も知らんで『菅談話』を発表した人間なんて、靖国の英霊には迷惑だし、呪い殺したいでしょうね」

本当に消したいね……とにもかくにも、英霊の皆様、ありがとうございます。そして、安らかにお眠り下さい…合掌。

43　古き戦友

3月3日　東シナ海

戦艦薩摩艦橋

福本
「ひな祭り？」

セルベリア
「そう、急いでシリルティアに向かわなきゃならないし、今の内に騒いじゃおうと思って」

福本
「ふむ、俺は良いが…遠地、大谷、どう思う？」

遠地
「ドンチャン騒ぎは大歓迎」

大谷
「ぼくも賛成だよ」

福本
「長門と島津は？」

長門
「…別に構わない」

島津

『俺も良いぞ』

福本
「じゃあ、実施決定。ただし、夜からな。それと交代要員と食べ過ぎ・飲み過ぎに注意な」

セルベリア・遠地・大谷・長門・島津
「「「『「了解！」』」」」

旅順軍港から改装の完了した薩摩・土佐を受け取り、マニュアル片手に出港し、いま現在は急いで神戸に向かっていた。
そして……急遽、艦内でひな祭りが開催された。

午後3時頃……艦内調理場

福本
「セルベリア、どうだ？」

セルベリア
「あ、勇気。順調よ」

生活班調理部の人間と共に今夜のご馳走を作るセルベリア以下面々。
そして、準備具合を見に来た勇気。

セルベリア

「ただし、準備中だから物は見せられ無いけどね～♪」

福本
「…艦長兼司令として訊くが、もし勝手に見たら？」

セルベリア
「大変な事になるわね～♪」

……つまり、死人が出る、と言う事ですか？

福本
「わかった…じゃあ、他の所を見て来るよ」

セルベリア
「うふふ、行ってらっしゃーーい♪」

……なんかこれ、新婚夫婦の朝みたい…。

薩摩艦橋

念のために一度艦橋に戻ってみた。
艦橋には砲術長の遠地、オペレーター席に長門、勇気の代わりに薩摩の指揮を執る大谷の3人がいた。

福本
「済まないな、大谷」

大谷
「べつに。作戦参謀もいつか人を使う事になるからさ。練習だと思えばいいさ」

気にしていない、とばかりに語る大谷。

遠地
「それで、準備はどうなんだ？」

福本
「順調だってさ。ただ、ご馳走については出来上がりまで秘密だってさ」

遠地
「……大丈夫だよな？」

福本
「それ、本人の前で言える？」

遠地
「…止めとくは…死にそうだから」

長門
「…先ずは出来上がりまで待つ…これが最善」

まったくだ。

福本
「島津から何か連絡があったか？」

大谷
「いや、別に何も無い」

福本
「そうか…じゃあ、もう少し艦内を回って来るよ」

遠地
「おう、行ってらっしゃい」

……その後、機関室や主砲塔、上甲板を見て回った勇気。
艦内の殆どを見て回り、最後に自分の部屋である『長官室』の前を通った。

「それで福本長官のお孫さんはどうなの、姉さん？」

「う～ん…まだ喋って無いから…何ともね…」

福本
「うん？」

部屋の主である自分が部屋に居ないのに何故か部屋の中から声が聴こえてくる。
しかし、そこは海軍の世界的英雄夫婦の孫、直ぐに感付き自分の部屋に入った。

福本
「自分にご用ですか、薩摩さん、土佐さん」

「「ひゃわっ!?」」

……何故、そこまで驚くかな……。

福本
「やはり、自分の技量は気になりますか?」

インスタントのコーヒーを入れながら勇気は薩摩・土佐の2人に訊いた。

薩摩
「あはは…」

土佐
「正直に言えば……そうです」

福本
「まあ、当然でしょうけど」

1940（昭和15）年4月15日、祖父母と共に本格的活動を日本海軍で始めた2人にとっては祖父母の孫と言う事で、祖父母同様に『命を預けられるか』が気になるだろう。

福本

「では、ゆっくりと判断して下さい。自分も艦艇指揮は初めてなのでね」

とりあえず、こう言うぐらいしかなかった。

次号へ

43　古き戦友（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

４４　増援として（前書き）

しかし……現実に中国が空母を持ったこのタイミングで中国艦隊とやり合う事になるとは……世の中解らない…。

44　増援として

3月8日（シリルティア王国　3月15日）　ラバナスター　天城艦内長官室

福本
「戦艦薩摩及び土佐、本日より第零艦隊支援の任に就きます」

小澤中将
「ご苦労。全員が揃うのは始めてだが色々と聞いているよ」

勇気を筆頭にセルベリア、遠地、大谷、島津、長門のは6人は小澤長官へ挨拶に来ていた。

山城
「実はもう1人おりますがね…ここにはいませんけど」

小澤中将
「そうか…まあ、その事に関しては今度にしよう。では行くか、主席参謀」

山城
「はい。あ、お前らも会議に出席だぞ」

福本
「…状況に変化がありましたね？」

山城

「なかったらしない。それと、状況は微妙な事になったぞ」

天城会議室

既に天城の会議室には第零艦隊を率いる主要メンバーが揃っていた。
駿河の桃園宮・高橋コンビ、ひゅうがの滝口少将、空母航空隊指揮で飛龍乗艦の有馬少将、戦闘機隊指揮のガーランド少将……と言う面々である。
勇気達もその末席に座った。

山城
「皆さん、集まりましたね。では、報告を行います」

部屋を暗くし、情報科通信班士官がノートパソコンを動かして、勇気達も見た事のある写真を映し出す。

山城
「この写真は先だって中国人民解放軍によるアッデュラー王国占領を受け、同国唯一の港街を偵察した写真ですから、皆さんも見た事もあるでしょう。問題は昨日の偵察写真です」

写真が変わり、誰もが注目した…明らかに写っていなかった大型艦3隻が写っていた。

山城
「海自の協力による解析では、右端はウクライナより購入・改造した『ワリヤーグ』、真ん中と左端は中国国産空母との事です」

指し棒でさしながら山城が説明を続ける。

山城
「なお、中国艦隊は自国製イージス艦を配備しており、実力は未知数です…ただ、このイージスシステムはアメリカ製のコピーと言う事ですが」

ガーランド
「空母艦載機についてはどうなの？」

山城
「同じく海自の解析ですが…航空機はロシア製のＳｕ３３のコピーと言う判断ですが…こちらも未知数です」

……つまり、あまりにも最近過ぎるのと、コピー品ばかりで実力が解らないのだ。

山城
「とにもかくにも、敵である以上、油断出来ないのは何時もの事です。更に今回は地上部隊の懸念もあります。そこで我が艦隊は先手を取り、中国艦隊を攻撃・撃滅します」

高城
「出撃は明日明朝、海上決戦で中国艦隊を撃滅、制海権を確保し、後日上陸作戦で横腹を痛撃する……ですね」

山城
「その通りです」

この発言に質問も反論も反対論もなかった。
既に数度の戦いで冷静沈着な視点と考察、時に大胆不敵な行動を取りながらも敵の弱点を突いて撃砕してきた事が作戦実施に異論が出ず、信頼されている事の証拠であろう。

山城
「…では、これにて報告を終わります。明日の出撃に向け準備して下さい。以上」

山城
「あ、それで、薩摩・土佐の配置なんだが…実は困ってるんだよな」

報告会終了後、山城が勇気に声を掛けた。

福本
「あ、やっぱり…本当なら艦隊規模ならよかったんですが…」

山城
「まあ、それは仕方ない話だ。そこで二隻には前路警戒にあたってほしい」

福本
「駆逐艦の代わりですか…まあ、いいですよ。このまま無駄飯食らいと言われたくありませんしね」

山城
「済まんな…2グループで輪形陣を組むから、薩摩を第1グループ、土佐を第2グループの配置で頼む」

福本
「わかりました。ちなみにグループ編成は？」

山城
「この通りだ」

第1グループ

戦艦　天城・磐城

空母　飛龍・征龍

ヘリ空母　日向・伊勢

巡洋艦　鳥海・銀河・金剛ＩＩ・足柄ＩＩ

駆逐艦　浦波・敷波・綾波・磯波

第2グループ

戦艦　駿河・常陸

空母　富士・戦龍

強襲揚陸艦　竹島

航空巡洋艦　天河

巡洋艦　蔵王　鶴月

フリゲート　白神・大間・珠洲・日御・佐多

福本
「…竹島も加えたんですね」

山城
「迎撃するなら、数が多い方がいいだろう？」

福本
「否定はしませんが…では、薩摩は天城側に、土佐は駿河側に付けばいいんですね？」

山城
「あぁ、そうだ。じゃあ、頼んだぞ」

福本
「了解」

次号へ

４４　増援として（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

45　激突！　日中艦隊！　1

3月9日（シリルティア王国　3月16日）　海上

戦艦薩摩艦橋

セルベリア
「天城から連絡、偵察機隊が発艦したそうよ」

福本
「うん、わかった」

前路警戒に当たる薩摩・土佐の2隻。
この報告の直後、上空を『雷雲』偵察機隊が通過した。

遠地
「早速の実戦…なんだが、味気無いのは気のせいか？」

大谷
「大丈夫さ。その内、否応なしにその気がしてくるよ」

長門
「……同意見」

遠地
「そうか…なら、早く偵察機が敵を見付けてくれないかな？」

福本
「極端な奴だな」

遠地
「なにせ俺は伝統ある日本海軍砲術科の士官だぜ」

セルベリア
「今は戦闘班砲術科よ」

遠地
「いいじゃあないか、名称ぐらい。結局一緒なんだから」

薩摩
（……いいんですか？　こんなんで？）

艦橋の緊張感の無い空気に薩摩が勇気に小声で話し掛けた。

福本
（ふふふ、祖父母はそうでしたか？）

薩摩
（…福本・マリーダ両元帥の事を出すのは反則です）

福本
「さて、気張らずにいこう！」

艦橋員全員
「「「「「「「おう！！」」」」」」」

薩摩

（ダメだ、こりゃ）

呆れつつも、口元は笑っていた薩摩だった。

天城艦橋

山城
「偵察機から何か言ってきたか？」

佐野
「いえ、未だに変化ありません」

シルヴィア
「まあ、敵も早々に見付かる訳はないな」

天城
「気長に待とう。敵も我々を探しているのだしな」

小澤中将
「ほう、2年前ならシルヴィアに噛み付いたがな」

天城
「…ゴホン、そう言った事は…」

佐野
「見付けました！　雷雲5番機、敵中国機動艦隊を海上で発見！」

通信を受け取った佐野が叫んだ。

小澤中将
「先手を取ったな」

山城
「はい。全艦に通達、戦闘配置に就け！」

佐野
「わかりました！」

飛龍艦橋

1年を掛けて旅順軍港で大規模改装された飛龍は船体長・幅を延長し、飛行甲板をアングルドデッキに、艦橋を大幅に大型化させ、現代空母と同等の物へと生まれ変わっていた。
その飛龍艦橋で指揮を執る有馬正文少将は過去に翔鶴艦長や基地航空隊司令などの経歴を持つため、第零艦隊空母部隊再編において、シリルティア王国の練習航空隊付きアドバイザーから小澤中将の推薦を受け、空母部隊の指揮を執っていた。

矢萩
「偵察機より報告です。敵機動部隊発見との事」

有馬少将
「そうか…戦闘機隊と早期警戒機を先に発艦させ、対空警戒を厳にせよ。その後、攻撃隊を準備するんだ」

矢萩
「わかりました」

敬礼後、近くにいるオペレーターに各空母へ指示を出す矢萩。
そして、その光景を不機嫌そうな顔で見ている山口。

有馬少将
「どうしたのかね、山口艦長？　彼を盗られてご立腹かな？」

山口
「何でもありません」

……やっぱり不機嫌です。

薩摩艦橋

オペレーター
「艦長、本艦に向け機影接近」

福本
「敵味方識別装置は？」

長門
「…偽装もされてない。間違い無く敵偵察機」

福本
「そうか……よし、艦隊が見付かったら言ってくれ。対空ミサイル

用意」

セルベリア
「了解」

数分後……

長門
「敵偵察機、打電を確認」

遠地
「ミサイル用意完了」

福本
「撃て」

バシュウ！

ＶＬＳから発射された『征空』対空ミサイルが敵偵察機を撃ち砕いたのは１分後だった。

次号へ

45　激突！　日中艦隊！　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

46　激突！　日中艦隊！　2

天城艦橋

佐野
「有馬少将より、攻撃隊準備完了の連絡がありました」

山城
「機数は？」

佐野
「飛龍から２５機、征龍から２機、富士から４０機、戦龍から２０機。計８６機です」

山城
「各隊の指揮官は？」

佐野
「戦闘機隊は征龍のハルトマン中佐、攻撃隊は飛龍の斎藤大尉です」

山城
「戦闘機４１機、攻撃機４５機、電子妨害機１機か」

小澤中将
「主席参謀はどう思うかね？」

山城
「中国艦隊の実力が未知数ですのでなんとも…ただ、中国海軍は海上戦においては素人ですので、勝機はあるかと」

小澤中将
「そうか…確かに中国共産党軍は海軍すら持っていなかったからな。その師匠のソ連海軍も玄人ではなかったな」

山城
「とにかく、一度当たってみましょう。そうすれば解りますから」

シルヴィア
「…なにか、行き当たりばったりではないか？」

佐野
「仕方ないですよ。相手がデータの無い敵なんですから」

薩摩艦橋

福本
「第一次攻撃隊が発艦したか」

オペレーターの報告を聞いて納得する様に呟く勇気。

大谷
「先ずは一当てしてみるつもりだ。なにせ、相手の実力が未知数だからな」

福本
「俺も先輩と同じ立場なら、同じ事をするな」

遠地
「お前の場合、艦隊で一当てするけどな」

福本
「否定出来ないのがちょっとあれだけどな」

セルベリア
「……こんなんでいいのかしら？」

セルベリアが予備オペレーター席でノーパソを操る長門に話し掛ける。

長門
「……私達の任務は前路警戒。敵艦隊が水上レーダー探知内にでも入らない限り、このまま…あとは航空隊の仕事」

セルベリア
「まあ、それもそうね…」

笑いながら男性陣の会話を聞いていた。

1時間後……第一次攻撃隊

無線
『敵機動部隊、レーダーにて探知』

ハルトマン

「オッケ～、戦闘機隊はぼくに続いて。敵直衛機隊を撃滅するよ！」

大澤
『了解！』

岡田
『わかりました！』

ヴィクトリア
『了解ですわ！』

無線
『敵直衛機隊接近！　レーダー及び無線の妨害を行います！　こちらの交信周波数はブリーフィング通りです！　御武運を！』

ハルトマン
「じゃあ、行っくよー！　全機増槽投下！　速度アップ！」

戦闘機隊が増槽を投下すると、ハルトマンの乗るタイフーンを先頭に次々と速度を上げた。
そして……

ハルトマン
「全機、ミサイルロック解除！　各自獲物に狙いを絞れ！　ミサイル発射！」

チッ

バシュウ！

兵装ラックから解き放たれた５９式長距離対空ミサイル（空自の９９式空対空誘導弾・ＡＡＭ４に相当）がロックされた敵機に向かって突っ走る。
しかし、敵はミサイルの一撃を受けてからハルトマン隊に気付いた……しかも、編隊は乱れ、右往左往している。

ハルトマン
「じゃあ、一気に片付けさせてもらうよ！　突撃！」

斎藤
「随分派手に始めたわね。戦闘機隊も」

戦闘機隊の無線交信を聞きながら斎藤搭乗の『誠』の字が書かれた尾翼の雷風（空自のＦ２戦闘機相当のバージョンアップ型。帝国海軍開発）に率いられた攻撃隊は低空飛行で中国艦隊へと向かっていた。

斎藤
「全機、対艦ミサイル発射後は早急に離脱。あとはミサイルに任せておけばいい。撃て！」

チッ

バシュウ！

対空ミサイル同様に兵装ラックから解き放たれた４発の４３式空対艦ミサイル（空自の９３式空対艦誘導弾・ＡＳＭ２に相当）が敵中国機動艦隊へと向かっていった。

その頃……戦闘機隊

無線
『誰か～！　後ろに付かれた～！　助けて～！！』

１機の雷風が殲（Ｊ）１５（Ｓｕ２７フランカーの艦載機版Ｓｕ３３の中国製コピー…名称が間違ってたらごめんなさい）に追尾されていた。
そして、殲１５がミサイルを発射しようとした瞬間……

ドルルル！

ドオーン！

上空からのパルカン砲の一撃で爆散した。

ハルトマン
「大丈夫!?」

無線
『あ、はい！　ありがとうございます、ハルトマン中佐！』

岡田
『中佐、敵戦闘機は粗方片付けました。攻撃隊も離脱した様です。我々も離脱しましょう』

ハルトマン

「うん、全機引き上げるよ！」

次号へ

46　激突！　日中艦隊！　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

47　激突！　日中艦隊！　3（前書き）

さて……日中艦隊激突中ですが、もうすぐ５０話なので久し振りに特別編でも……。

福本（勇気）
「予定は？」

超未定！

福本（勇気）
「アホか！」

バキッ！

47　激突！　日中艦隊！　3

同時刻……中国機動艦隊旗艦　空母鎮遠艦橋

司令官
「レーダーと無線はまだ回復しないのか！？」

オペレーター
「は、はい！　レーダーも無線も未だに妨害されています！　直衛機隊との連絡取れません！」

直衛機隊とは『敵部隊と交戦中！』の無線交信を最後に途絶したままだ。
だから、敵部隊がどうなのかさえ解らない。

司令官
（くそ、日本鬼子（リーベンクイズ）がこの世界にいるのでさえ、想定外だったのに、空母随伴とは…）

実は偵察機が撃墜される前に日本艦隊である事を報せただけで艦隊陣容は伝えられていない。
もしここで偵察機が艦隊陣容を伝えていたら、中国艦隊もウカウカしていられなかっただろうが。

オペレーター
「レーダーに反応！　低空で近付く飛翔体を感知！　数は約２００！　距離３５キロ！！」

司令官
「なに！　なぜそんな至近距離なんだ！？」

オペレーター
「敵のレーダー妨害が強力なんです！　これは実戦を経験した軍隊がやる強力な妨害です！」

司令官
「くぅ、日本鬼子め！　東洋鬼共（トウヤンクィ）め！　なにをしている！　さっさと迎撃せんか！」

しかしだ……時既に遅しで、間合いに入られた対艦ミサイルを迎撃するのは難しかった。

ドンドンドンドン！
ドルルル！

ドーン！　ボムッ！　ズシャーン！

司令官
「いいぞ、いいぞ！　撃ち落とせ！！」

参謀
「無理です！　１００以上のミサイルをこの至近距離で全て迎撃するのは…」

司令官
「何を言うか！　蘭州型駆逐艦があるだろう！」

『チャイニーズ・イージス』の別称を持つ蘭州型駆逐艦が必死に弾

幕を張って迎撃していた。
しかし、参謀の言う事が現実であった。

ゴゴーン！！　ガガーン！！

司令官
「な、なんだ！？」

オペレーター
「抗州及び福州が被弾！！」

ロシアのソブレメンヌイ型駆逐艦を購入し、改名した抗州と福州。
不幸にもその2隻が被弾した。

参謀
「抗州は艦橋に命中！　福州は船体後部に被弾！　共に操舵不能！」

司令官
「被弾した艦など放っておけ！　今はミサイルを迎撃しろ！！」
その頃……薩摩艦橋

オペレーター
「艦長、対空レーダーに反応、ＩＦＦ（敵味方識別装置）に応答無し、第一次攻撃隊ではありません！」

福本
「落ち着け、距離と高度は？」

オペレーター

「距離は３５０キロ、高度は３０００メートル」

遠地
「随分遠くで探知出来たな…なんでだ？」

長門
「…薩摩は戦艦だから、艦橋のトップにレーダーがある。レーダーは高い位置に設置すれば探知範囲が広がる。だから前路警戒の私達が早く探知出来た」

福本
「その通りだ。土佐、天城、飛龍に連絡。敵攻撃隊探知。対空戦闘用意」

セルベリア
「了解」

艦隊上空

無線
『こちらホークアイ。薩摩探知の敵攻撃隊を確認しました』

ガーランド
「わかったわ、監視続行。直衛隊は全機続け」

直衛隊
『『『『『『『『『了解！』』』』』』』』』

上空を固めるのはガーランド少将率いる艦隊直衛隊、編成は征龍の戦闘機隊である。

ガーランド
（同性能機種との交戦……あとはこちらの腕とホークアイの管制能力次第ね）

無線
『ホークアイより、直衛隊へ。敵攻撃隊は至近。繰り返す、敵攻撃隊は至近』

ガーランド
「全機、ミサイル用意。各自目標を定め交戦開始。但し、私達の標的は対艦ミサイルを抱えた敵攻撃隊よ。邪魔者を片付けたら、直ぐに向かいなさい。以上」

次号へ

47　激突！　日中艦隊！　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

48　激突！　日中艦隊！　4

天城艦橋

佐野
「敵攻撃隊は８０機。ガーランド隊２０機に対し、敵２０機と交戦中」

山城
「となると、敵攻撃機は６０機。対艦ミサイル４本なら…２４０発か」

シルヴィア
「韓国艦隊より5倍の数のミサイルがこの艦隊に接近してくる訳か」

山城
「単純計算ではね……小澤長官、どうします？」

小澤中将
「主席参謀に任せる。君達の方が対処方法をよく知っているだろう？」

山城
「わかりました。全艦に通達、対空戦闘用意」

佐野
「了解」

薩摩艦橋

オペレーター
「敵攻撃隊、二手に分かれました」

福本
「左右挟み撃ちか、あるいは2グループを同時に叩くか…まあ、どちらにしろ、このまま傍観するつもりは無いが…」

一度スクリーンに映し出されたレーダー画面を見ると即決した。

福本
「土佐に連絡。本艦は左舷、土佐は右舷の編隊を攻撃せよ。以上」

オペレーター
「了解」

遠地
「対空ミサイル及び対空火器用意。対空戦闘だ」

土佐艦橋

オペレーター
「薩摩より入電、『薩摩は左舷、土佐は右舷の編隊を攻撃せよ』以上です」

島津

「妥当な判断だ。よし、対空屋の対空戦闘指揮を見せてやる。対空戦闘始め！」

砲術長
「よーそろ、対空ミサイル1番から6番、てぇー！」

バシュシュシュシュシュウ！

連続発射音と共に6発の対空ミサイルが左舷の編隊に向かって飛来して行く。

オペレーター
「……命中しました！　6機がレーダーよりロスト！　全弾命中です！！」

島津
「対空火器を使え無いのが悔しいところだが…まあ、今回は我慢だな…続けて対空ミサイル発射、敵編隊を出来る限りは削るぞ」

駿河艦橋

士官
「我が方に敵機18機接近！　天城には20機が接近！」

高城
「ふむ…薩摩の福本艦長と土佐の島津艦長……艦艇指揮においては初の実戦の筈だが……見事だ」

桃園宮

「こらー！　1人で勝手に納得せずに私を補佐しろ！！」

……本当に変わりませんね、この2人も…。

高城
「ごめん、ごめん。でもさ、気にならない？　彼らは艦艇指揮では初実戦でありながら、ここまで実戦に順応しているんだよ！」

桃園宮
「……それは我らと違って向こうが一から十まで士官学校で教わったからだろう？」

高城
「…君は少し現実的過ぎやしないかい？」

桃園宮
「現実離れした物は約2年前に見ている。あれ以上の物が有るとは私は思わん」

高城
「果たして…そうかな？」

桃園宮
「…何か言ったか？」

高城
「いや。各艦に伝達、対空ミサイル搭載艦は各個に攻撃始め。迎撃標的は1に航空機、2にミサイル、3・4が無くて、5にミサイルだ」

天城艦橋

佐野
「敵機２０機接近！」

山城
「後輩からのバトンタッチだ。ギリギリまで敵機を迎撃せよ。対艦ミサイル発射後はミサイル迎撃に集中。撃て！！」

バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！

陣形を組む金剛ＩＩ、足柄ＩＩ、日向、伊勢、征龍、銀河の対空ミサイルが発射された。
特にイージス艦たる金剛ＩＩ、足柄ＩＩはその識別・判別・照準能力をフルに使い、ミサイルを当てていった。

佐野
「第２グループより、全機撃墜の入電！」

風華
「レーダーより、敵機がミサイル発射！　艦長さん！」

山城
「全艦ミサイル迎撃に移行！　金剛、足柄は敵機も継続対処！」

佐野
「了解！」

天城艦橋

オペレーター
「敵機は戦闘機４機、攻撃機４機を残し壊滅。ミサイルも全弾迎撃出来ました」

遠地
「先ずは一安心だな」

福本
「あぁ、あとは敵艦隊がどれ程の損害を出したか…だな」

大谷
「確かにそれは気になるな」

セルベリア
「はい、戦闘後の息抜きタイムよ」

遠地
「お、サンキュ～♪」

次号へ

48　激突！　日中艦隊！　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

４９　激突！　日中艦隊！　５（前書き）

次号は５０話特別編でございます。
ただ……都合によっては更新が遅くなります。

49　激突！　日中艦隊！　5

中国機動艦隊旗艦　空母鎮遠艦橋

司令官
「……被害を報告しろ」

参謀
「は、抗州は浮いていますが操舵不能、福州は機関出力が半減しています。他にフリゲート6隻が撃沈、6隻が大破。駆逐艦は1隻が撃沈、3隻中破です。なお、直衛の戦闘機隊は40機中36機撃墜…ほぼ壊滅です」

司令官
「くっ…しかし、まだ我らは戦える。帰還してくる第一次攻撃隊を再編し、第二次攻撃隊を…」

オペレーター
「司令官！　新たな編隊を感知！　敵の第二次攻撃隊です！」

司令官
「な、くそ！　対空戦闘だ！　対空戦闘！！」

その頃……天城艦橋

佐野
「飛龍より連絡、第二次攻撃隊の準備完了です」

山城
「よし、第二次攻撃隊で打撃具合を見てみよう。具合によって艦隊を進出させようかな」

シルヴィア
「近接砲戦か？　それとも対艦ミサイル戦か？」

佐野
「それは敵の様子次第でしょう」

風華
「……艦長さん、偵察隊３番機から連絡！　中国機動艦隊とは別の機動艦隊を発見との報告です！」

佐野
「な、なんだって！？」

シルヴィア
「誤報か誤認ではないのか！？」

風華
「…いえ、違います。陣容は輪形陣の中央に空母１、その前後に巡洋艦クラス２、輪形陣構成の駆逐艦８、補給艦らしき艦影が空母の後方にいるそうです」

小澤中将
「…どう思う、主席参謀？」

山城

「中共軍では有る可能性は低いでしょう。孫子など兵法家はいますが、基本的に中国軍は大兵力で押します。兵力を分ける、しかも少数と言う事は余り有りません」

小澤中将
「では何かね？　味方の援軍か？」

山城
「それも無いでしょう。空母2隻で一個空母戦隊編成では空母1隻はあり得ません。また、福本勇気達第七艦隊の編成艦である可能性も有りますが、第七艦隊は空母が完成しておりませんから、可能性は零に近い」

シルヴィア
「…では、なんだ？」

山城
「それは直ぐに解るよ。3番機に連絡して下さい。その機動艦隊上空を通過してみて…と」

佐野
「え、正体不明艦隊の上空を通過ですか！？　危険ですよ！？」

山城
「もし敵なら、こんな暢気に偵察機から報告を受けていないが？」

佐野
「……あ、そうですね」

シルヴィア
「いや、簡単に納得するな」

簡単に納得した佐野にシルヴィアがツッコミを入れた。

同じ頃……天城艦橋

無線
『国旗と軍艦旗を確認しました！　国旗は日の丸、軍艦旗は十六条日章旗です！』

遠地
「あ～…これぞ異世界名物の転移現象か？」

セルベリア
「でしょうね」

大谷
「とりあえず、敵では無い様だね」

福本
「あぁ……まあ、そっちは山城先輩に任せるか。周囲は？」

オペレーター
「…今のところは全周囲、大丈夫です」

福本
「もうそろそろ、味方が帰ってくる頃だからな。向こうに潜水艦がいないとも限らんし…」

『こちらソナー室。進路上にスクリュー音探知、データから判断して、ロシアのキロ型潜水艦に酷似』

大谷
「中国艦隊の前衛かな？」

福本
「多分、そうだろう。ワリヤーグと言い、駆逐艦と言い、中国は同じ共産圏のソ連から買った事例が多いからな」

セルベリア
「向こうは怒り心頭でしょうね。艦隊の事を聞いていたらだけど」

福本
「まあ、敵である事は認識しているだろう。全艦に連絡、潜水艦の襲撃に警戒」

オペレーター
「了解」

福本
「1隻かどうかが解らないが、危険な芽は排除する。対潜水艦・対魚雷戦用意」

遠地
「了解。対潜水艦・対魚雷戦用意」

次号へ

49　激突！　日中艦隊！　5（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

50S　夏です！　海です！（前書き）

え～、更新遅延申し訳ありません。
次号から日中艦隊の激突に戻ります。
しかし……まさかこれ程、ビーチバレーを書くのが難しいとは……。

５０Ｓ　夏です！　海です！

さて……本来なら中共軍の激突の続編ですが…５０話なので特別編です。

ラバナスターのある海岸

新米士官
「…つー訳で！　夏だから海で遊ぼうぜ！！」

全員
「「「「「「「「「「「「「「「「おおう！！！」」」」」」」」」」」」」」」」

山城
「……中共軍と戦闘中だぞ？」

佐野
「もう～、艦長、固い事は言いっこ無しですよ！」

山城
「まあ、いいが…って、このビーチはどうやって確保したんだ？」

新米士官
「無論、君の嫁に手伝ってもらった」

シルヴィア
「フェイナも始めての海だからな」

福本
「ちょっと～、主役を脇に置かないで下さ～い！」

セルベリア
「そうですよ！」

新米士官
「……本当にどっちが主役？…ってツッコミ入れられたらどうしよう？」

福本
「そう思うなら、早く艦船を増やして下さい。そして、話を進めて下さい」

新米士官
「う……了解」

佐野
「……ところで、さっきから気になっていたんですが、真上に黒鷹が降りて来てのは何でですか？」

新米士官
「あぁ、言い忘れてた。今回はこちらだけで騒ぐのも何だと思って、ゲストを呼んでたんだった」

福本・セルベリア

「「先に言えよ！　先に！」」

山城
「待てよ…なあ、なんでここに着陸する？」

新米士官
「そりゃ、俺が誘導電波を出してるからさ」

懐から携帯無線機を出して答える。

全員
「「「「「「「……（－－；）」」」」」」」

福本
「退避！！！！」

バタバタバタバタバタバタバタ！！

つい先程まで福本達が居た所に砂煙を舞い上がらせながら黒鷹輸送ヘリ…ブラックホーク…が着陸した。

「へぇ、零戦に乗ってた事は有るけど、オートジャイロも良い物ね」

「あの…長官、オートジャイロに似てますが、これはヘリコプターですよ」

「え、乗る前に訊いたらオートジャイロがどうこうって…違うの？」

「参謀長…ちゃんと聞いていませんでしたね」

「うっ！（－－；）」

新米士官
「え～、とね先生からは連絡を受けております。初めまして、新米士官です」

山城
「あ、葉山平人少尉だ」

シルヴィア
「備前と酒匂も居るな」

福本
「……で、そちらの女性は？」

葉山
「あはは……連合艦隊司令長官の山本五十六大将です」

福本・山城・佐野
（（（違う！　こっちは女性じゃあ無いし、若くも無い！！））））

山本長官
「ありゃ～、やっぱりこの世界でも男？　しかも４３年戦死？」

山城

「え～、確かに男性ですが…４３年に戦死するどころか、４５年の終戦を五体満足で生き残り、その後、首相を経て国営カジノの特別理事長に就任しています」

山本長官
「…生きてるのは嬉しいけど、私、首相に成ったんだ…あはは…」

福本
「え～と…自分の祖父と共に『海軍の二大巨頭』と称されましたけど…あ、その時の祖父母があなたと同じぐらいだったと…」

山本長官
「あ、そうなの（あ～、よかった…仲間がいて…）」

新米士官
「と言うわけで重巡とね先生の『架空兵器達の戦史★戦姫達の物語★』の葉山平人少尉、備前さん、山本五十六長官、酒匂さんです」

シルヴィア
「で、このメンバーで終わりか？」

新米士官
「いや、もう一組ご招待して…」

「や、やっと、着いた～」

「だから、ヘリで行こうって言ったんだよ」

「せっかくヘリで迎えに来てくれるように手配してくれたのに」

「地図を貰ったら、『歩いて行こうぜ！』って言ったんだろうが！」

「あ、暑い～…み、水～～…」

新米士官
「…と言うわけで同じくご招待した『大東亜戦争奮闘記』の天地銀河先生、紅蓮崎刹那大将、姫崎玲奈中将、セイバー、アイリスのメンバーです」

福本
「いや、説明は後でいいから、先ず冷たい物を持って来いよ」

汗でぐっしょりと服が濡れた天地銀河先生メンバーに慌て冷たいお茶を運びながら勇気がツッコミを入れた。

３０分後……

新米士官
「水着は全員着せたが……いったいどこから調達したんだ？」

福本
「簡単だ。女性物はセルベリアと長門に任せた。代金なら海軍から出るし」

新米士官
「太っ腹な親父だね」

福本
「面白い親父でも有るけどな」

そんな会話を交わしていると女性陣が騒ぎながら脱衣場から出て来た。

酒匂
「わぁ～♪　わぁ～♪　前は泣かれたけど、今回は抱っこ出来た～♪」

備前
「酒匂！　次は私よ！」

山本長官
「こら、そこ、騒がない。フェイナちゃんが泣く」

姫崎
「赤ちゃんを産んだにしては…身軽ですね…」

シルヴィア
「まあ、昔から鍛えているからな」

アイリス
「うわ～♪　頬っぺたプニプニ～。可愛い～♪」

セイバー

「うわっ！　手足が小せ～！？　しかも…うわ、小指を握るな～～！」

……フェイナが大人気だった。

葉山
「…赤ちゃんって不思議ですね。ついさっきまで他人同士だったのに…」

山城
「まあ、世の中そんなものさ」

福本・紅蓮崎
「「…………（ジローーー）」」

天地銀河
「…何をしている？　紅蓮崎？」

紅蓮崎
「……別に」

新米士官
「まあ、とにかく皆さん、ここは楽しく遊びましょう！」

全員
「「「「「「「「「「「「「「「「は～～い！！」」」」」」」」」」」」」」」」

1時間後……

佐野
「あの～、作者～…」

新米士官・天地銀河
「「ん？」」

佐野
「いや、うちの…あ～、どっちも来て下さい！」

雑談していた作者2人の手を引っ張り、海に向かう佐野。
そして…連れて来られた現場では……

佐野
「あれだと、『楽しく』では無理なんですけど？」

福本・紅蓮崎
「「……（ジーー）」」

未だに睨み合い続ける両主人公……周りはどうも、気が気で無い。

新米士官
「…何してんだ、おまえ達は？」

福本・紅蓮崎
「「なあ、作者、微妙にキャラが一緒じゃないか？」」

新米士官・天地銀河
「「それは先生（俺）が『第七艦隊』を手本の1つにしているから

だ！」」

福本・紅蓮崎
「「なるほど…」」

……納得した筈なのに続く不気味な睨み合い。

福本
「……一勝負するか？」

紅蓮崎
「奇遇だな、俺もそう思っていたところだ」

佐野
「……大丈夫なんですか、これ？」

新米士官
『…と言う訳で！　始まりました、『第一回主人公・ヒロインビーチバレー対決』！　司会は私、新米士官。解説は山城大佐と天地銀河先生。ゲストに葉山少尉と備前さんを迎えてお送りいたします！』

山城
『…なぜ、俺が解説？』

新米士官
『先輩だから』

葉山
『…僕達がゲストでいいんでしょうか？』

備前
『フェイナちゃんも預かってますが…』

天地銀河
『２人共…気にしたら負けだ』

新米士官
『さ、さて、既に最初は紅蓮崎・姫崎チームの先攻となります』

紅蓮崎
「真剣勝負だからな。最初から本気でいくぞ！」

バン！

いきなりの弾丸サーブ！

福本
「させるか！！」

バイン！

弾丸サーブをブロックし、跳ね返ったボールはセルベリアの方向に
……

セルベリア
「くらえ！　レールカノンサーブ！！」

スパン！

ビュン！

ズザザザザ！！

姫崎
「……へぇ！？？」

セルベリアによって打ち返されたボールは姫崎の顔を掠め、砂煙を上げて『着弾』した。

備前
『…な、何がおきたんです！？』

新米士官
『いや、ただ打ち返しただけだから』

葉山
『……威力が有りすぎですよ！』

山城
『なにせ、1人は前作主人公・ヒロインの孫、1人は宇宙生まれの皇族だからな…つまり、普通じゃあない。葉山少尉は人を殴った事があるかい？』

葉山
『え…まあ、無い事は有りませんが…数の方は…』

山城

『なら、間違っても福本には喧嘩を売らない事……あいつは1人一秒で戦闘不能に出来るから』

葉山・備前
『『……』』

姫崎
「へぇ～、やるじゃない…私も本気を出すわよ！」

アイリス・セイバー
「「刹那！　玲奈！　頑張れー！！」」

その頃……

山本長官
「…やらせといていいの？」

シルヴィア
「放っておけ、反対に周りを気にせずに済む」

山本長官とシルヴィアの2人はビーチパラソルの下で話していた。

山本長官
「さて、相談の事だけど…どうやったら彼を落とせるかしら…？」

シルヴィア
「ふむ……あま、私とマサトもある意味似た様なものだが……うーむ…」

少しの間だけ頭を抱え……何か閃いた。

シルヴィア
「うむ…落とせるかどうかは解らないが…こんなのはどうだ？」

山本長官
「なに！？」

シルヴィア
「耳を貸せ…（半舷上陸があるな？　その時に長官権限を使い、1日だけ、その彼を長官付きにする）」

山本長官
「（え、つまり彼だけ半舷上陸を取り消すの？）」

シルヴィア
「（違う違う、長官も上陸するから、そのお付きにしろと言う事だ。その後は…本人が行きたい所に行けばいいし、無ければそこら辺を回ればよい…そうやって好感度を上げれば良い。一気に落ちるなど…惚れ薬でも無い限りは無理だがな）」

山本長官
「（あぁ、なるほど…外堀を埋めていけって話ね…）」

……どうやら、ある程度の案件は纏まった様だ。

その頃……

酒匂
「……大丈夫なんですか？　あれで？」

山城（艦魂）
「果たし合いをするならともかく、球技では死ぬ事はまずあるまい」

愛宕
「それに、周りを気にしなくていいしね～」

……こちらは泳ぎながらのご相談中。

酒匂
「はぁ…利根さんって競争率が高いから落とせるかどうか…」

愛宕
「そんなにファンが多いのか？」

酒匂
「えぇ、かなり人気が有りますから…」

愛宕
「…似た子が後輩に居なかったけ？」

山城（艦魂）
「河内の事だな。まあ、あの子は別の意味で人気があったが……さてな…」

3人
「「「う～ん……」」」

……やっぱり、悩みますよね…。

愛宕
「…情報が足りないから何とも言えないけど…とりあえず、外堀を埋めて行くしかないね」

山城
「あるいはアタックするか…まあ、決めるのは君だが…」

酒匂
「…はい」

その頃……

葉山
『……うわ～』

備前
『……凄い』

……最初の1点から双方共に攻守を代えながらも激しい打ち合いを展開した。
また、激しい防御合戦を繰り広げた。

新米士官
『え～と…8対8ですね…ルールでは先に10点を入れたら勝利ですが…いや～、凄い打ち合いだ』

山城
『…大丈夫か？　あれで？』

天地銀河
『大丈夫、大丈夫。次で出るから』

山城
『…出る？』

紅蓮崎
「…玲奈、『あれ』をやるぞ」

姫崎
「『あれ』？　わかった」

新米士官
『さて、ボールは紅蓮崎・姫崎チームですが……ん？』

空中に放り投げられたボール……すると紅蓮崎と姫崎の２人が同時にジャンプした。

紅蓮崎・姫崎
「「いけ！　必殺！　爆裂ゴットフィンガーＩＩ！！」」

バン！

ギュイイイイイイ！！

ドガーン！！

葉山・備前
『『…えぇぇぇ！！！？』』

新米士官
『チートで有名なGガンダムネタかよ！！』

山城
『そこかよ！？』

天地銀河
『あ～、やっぱり出したな…必殺技』

さて、砂煙が晴れるとそこにいたのは、無事な福本とセルベリア。

福本
「向こうが必殺技を出したんなら…」

セルベリア
「こっちも使っていいのよね」

そう言うとボールを拾い、空中に放る。
そして……

福本・セルベリア
「「くらえ！　出力増強機付きハイメガ波動砲サーブ！！」」

パン！　バン！

ヒュイイイイイン！！

ドゴーン！！！

セルベリアが打ち、勇気が更に打って加速したボール……見事に入った。

葉山・備前
『『……どっちも人間じゃあ無い！！』』

天地銀河
『…ヤマトネタですか？』

山城
『うちの作者はヤマトも好きですから』

新米士官
『しかし…これで双方９対９の同点に…あぁ！？』

福本・セルベリア・紅蓮崎・姫崎
「「「「どうした！？」」」」

新米士官
『え～と…ついさき程、試合時間３０分が経過いたしました！　つまり、タイムアップです！』

山城
『試合終了、同点で引き分け…って事だ。それとも、まだ続けるか？』

福本
「いえ、久しぶりにいい汗を流せましたし」

紅蓮崎
「ここまでやれば充分だ」

セルベリア
「玲奈さんと刹那さんって仲がいいですね～」

姫崎
「あら、そっちも仲がいいじゃないの？」

……こうして、第1回主人公・ヒロインビーチバレー対決は本人達が満足したので終了した。

おまけ……夕暮れ

新米士官
「そろそろ、帰る時間ですね」

葉山
「今日はありがとうございました」

山城
「あぁ、別にいいよ。とね先生によろしく」

備前
「はい」

山本長官・酒匂
（（よし、帰ったら早速…））

長門
「…そんな御二人に朗報」

山本長官・酒匂
「「ひゃわ!?」」

いつの間にやら後ろにいた長門、そして、声を掛けられて驚く2人。

長門
「…それぞれの想いの人の写真…要る?」

山本長官・酒匂
「「い、要る!」」

長門
「…なら、取り引き成立…純度１００％の写真５０枚」

山本長官
「……ところでこれ、どこから入手したの?」

長門
「…企業秘密」

ただそれだけを言うと長門はどっかに行ってしまった。

天地銀河
「では、また今度」

新米士官
「はい、活動報告か何処かで」

紅蓮崎
「じゃあ、またな」

福本
「お気をつけて」

姫崎
「またね～」

セルベリア
「今度はヘリで帰って下さいね」

アイリス・セイバー
（（なんかな～…玲奈だけ得した様な気が…））

長門
「…そんな方々に朗報」

アイリス・セイバー
「「ひゃわ！？」」

またもや驚かれた長門……つーか、何故背中に回るのが得意なんだ？

長門

「…紅蓮崎大将の幼少から高校時代までの純度１００％の厳選写真１００枚、中・高校生時代の制服の夏・冬服…要る？」

アイリス・セイバー
「「要る！　欲しい！！」」

長門
「…取り引き成立…写真はこれ、制服は後で宅急便で送る」

アイリス・セイバー
「「あ、ありがとう…」」

長門
「…じゃあ」

新米士官
「……長門、何をしていたんだ？」

長門
「企業秘密」

ＥＮＤ

50S　夏です！　海です！（後書き）

天地銀河先生・重巡とね先生…キャラはこれで大丈夫でしょうか？
ご意見ご感想をお待ちしております。

51　激突！　日中艦隊！　6

薩摩艦橋

『こちらソナー室！　発射管注水音確認…魚雷発射！　6本！』

福本
「対魚雷戦！　デコイ発射用意！　対潜ミサイル、発射！」

遠地
「対潜ミサイル発射！」

バシュウ！

VLSから発射された『潜龍』対潜ミサイルが尾を引きながら敵キロ型潜水艦に向かう。

セルベリア
「どっちが早いの？」

長門
「……ミサイルが潜水艦に当たるのが早い。魚雷到達はその後になる」

大谷
「この魚雷が本艦を狙っているかによるけどね」

遠地

「……もうそろそろ、ミサイルが命中するな」

『こちらソナー室。ミサイル着弾…圧壊音確認…魚雷接近！』

福本
「各艦に警戒警報を通知。デコイ発射」

ポン！ポン！ポン！ポン！ポン！ポン！

デコイが敵魚雷を掠める様に発射され、魚雷を有らぬ方向へ導いて行く。

福本
「魚雷はどうだ？」

オペレーター
「…全弾デコイによって回避出来ました」

遠地
「ふう…そう言えば、第二次攻撃隊は？」

大谷
「……先程、全機発艦したそうだ。第一次攻撃隊も間もなく帰還するそうだ」

福本
「取り敢えずは大丈夫だな……しかし、妙なほど敵艦隊が静かだな」

セルベリア

「そうね…こう、敵が来そうな気配が無いわね」

遠地
「…なんでだろうな」

何故なのか……それを勇気達、いや、同じ疑問を持つ天城の山城ら艦隊幹部達が知るのは第二次攻撃隊が敵中国機動艦隊に近付くまで待たねばならなかった。

天城艦橋

佐野
「…なに!?　敵中国機動艦隊が攻撃を受けてるだと!?」

無線
『はい！　我々が到着した時には敵艦隊は別部隊と交戦中です！』

佐野は無線越しに第二次攻撃隊の電子戦用雷雲のパイロットと話していた。

佐野
「…艦長…どうゆう事でしょうか?」

山城
「決まっているだろう…あの雷雲が見付けた機動艦隊だ」

佐野
「…あ…なるほど、そうゆう事ですか！」

山城
「佐野、雷雲のパイロットに攻撃中の機種を見ておく様に言ってくれ…整備部品の都合が付くかどうかを調べにゃならん」

佐野
「はい！　わかりました！」

直ぐに無線機に飛び付き、パイロットへ指示を伝える佐野。

シルヴィア
「…まだ話もしておらん相手の使う航空機整備部品調達の準備か？」

山城
「まあ、多少の時間は掛かるよ…でも、向こうは結局何処かに身を寄せないと…最終的には『絶望』の二文字しか無いよ」

小澤中将
「それは君自信の経験からの結論かね？　主席参謀」

山城
「そう思って頂いて構いません」

……実際そうだったから。

中国機動艦隊近辺の上空

パイロット
「…機種を見とけってさ」

雷雲のパイロットが後ろの機器操作員に話掛けた。

機器操作員
「難しいですね…写真機材を使います？」

パイロット
「…そうだな。どうせ戦果確認の為に使う事になるからな」

『全機、攻撃を開始せよ！』

対艦ミサイルを抱えた雷風隊が降下を開始した。

薩摩艦橋

福本
「ふむ…戦果はフリゲート４、駆逐艦４を撃沈。空母２、フリゲート２、駆逐艦３が大破。空母１中破か…４２隻の機動艦隊は驚異半減だな」

セルベリア
「潜水艦を使っても、こっちは無傷よね？」

遠地

「仕方ないさ。中共軍は数で攻めるのが得意だからな。それに海上戦経験なんぞ皆無だ」

大谷
「……勇気、山城先輩からだ」

福本
「先輩から？　なんて？」

大谷
「『天城から薩摩・土佐へ。前路警戒の任を解き、先行、敵艦隊を攻撃せよ』…以上だ」

福本
「ふーん……よし、土佐に連絡。本艦はこれより先行し敵艦隊を攻撃する…以上」

大谷
「わかった」

福本
「全艦全速。敵艦隊に接近し、これを撃退する」

次号へ

51　激突！　日中艦隊！　6（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

52　激突！　日中艦隊！　7（前書き）

次号で海上戦闘は終結します。
次は陸上戦闘ですね。

52　激突！　日中艦隊！　7

数時間後……薩摩艦橋

オペレーター
「敵艦隊の通信を傍受…どうやら、交戦中の模様」

遠地
「あの『謎の日本艦隊』の攻撃隊とか？」

大谷
「第零艦隊から第四次攻撃隊は発進していない。となると、彼らしかいないな」

第零艦隊より先行し、３６ノットの高速で中国機動艦隊へと接近した。
そして……ここにいる。

福本
「間違って攻撃され無い事を祈るよ…さて、対艦戦闘の準備はいいか？」

遠地
「主砲、副砲、対艦ミサイルの準備完了。いつでもいけるさ」

セルベリア
「島津君から連絡、こっちも良いって」

福本
「よし…距離は？」

大谷
「敵艦隊まで４万５０００ｍ…もう午後４時か」

長門
「……攻撃中だった航空隊が引き返す…向こうは私達に気付いているから、こちらに目がいくのも時間の問題」

福本
「…頃合いだな…これより敵艦隊を攻撃する。ミサイル及び主砲を使用…攻撃始め！」

遠地
「了解！　１・３番４連装ミサイル発射管は連続発射、てぇー！！」

バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！

右舷の『桜花』対艦ミサイル発射管から次々にミサイルが飛び出していった。

遠地
「主砲塔旋回。照準敵艦隊」

４３ｃｍ６０口径連装主砲を納めた主砲塔が旋回し、敵の中国艦隊に向ける。

『照準完了。砲戦よし！』

遠地

「…撃て！！」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！

薩摩の砲撃に間髪入れずに土佐の主砲が吼えた。

重量１，２ｔの砲弾が音速を越えて飛んでいった。

中国艦隊旗艦　空母鎮遠

司令官

「くそ…我が艦隊がこれ一方的に程叩かれるとは…」

空母３隻を始め４２隻の陣容を誇っていた中国機動艦隊は数度の空襲で戦闘可能艦艇は１０隻程に激減していた。

あとは……撃沈、沈没寸前、行動不能…などである。

参謀

「司令官、空襲前より接近していた大型艦２隻ですが…どうしましょう？」

司令官

「決まっているだろう！　いくら負けているとはいえ、２隻程度に

負けはせん！　残存艦艇で…」

オペレーター
「敵艦よりミサイル１６発接近！　それと……さらに２０発の高速ミサイル！？」

司令官・参謀
「「な、なんだと！？」」

……既にお分かりだと思うが、この『高速ミサイル』は４３ｃｍ砲弾である。
しかし、中国艦隊からすればミサイルの撃ち合いが戦闘であって、大口径砲による砲撃戦など彼らに知識も経験も無い…過去の遺物の様な物だ。

司令官
「早く迎撃せんか！」

オペレーター
「りょ、了解！！」

蘭州を中心とした残存艦艇が慌て対空ミサイルを発射し、電子妨害を開始した。
しかし……どれも空振りに終わった。
それもその筈…砲弾とミサイルでは速さが違う…しかも、鉄と火薬の塊である砲弾に電子妨害など何の役にも立たない。
そして……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！
ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

司令官
「な、なんだと！！？」

立ち上がる２０本の水柱……しかも、艦橋よりも更に高い水柱……

オペレーター
「残存艦艇より連絡！　先程の攻撃により、一部の艦で浸水発生！」

参謀
「司令官！　これは大口径砲による攻撃です！」

司令官
「バカな…」

オペレーター
「あぁ！　敵ミサイル１６発接近！？」

司令官
「な、早く迎撃…」

オペレーター
「ダメです！　既に至近距離……命中します！！」

司令官
「う、うわぁぁぁぁぁ！！！！」

ガガーン！！！

鎮遠の艦橋に『桜花』対艦ミサイルが突き刺さった。

次号へ

52　激突！　日中艦隊！　7（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

53　激突！　日中艦隊！　最終話（前書き）

やっと『癌』が辞めたよ。

山城
「『菅』の間違いだろう？」

福本（勇気）
「まあ『癌』と言うのも間違っていませんが…」

ようやくあの顔を首相として見なくなるよ……出来れば今までの失政を苦にして腹切ってくれればもっとマシだったんだが……期待するのが間違っているな。

山城
「会見の方も…何の反省も無かったそうで」

取り合えず……あの顔はもう見たく無い。

53　激突！　日中艦隊！　最終話

薩摩艦橋

長門
「……命中確認。ミサイル全弾命中」

遠地
「43cm主砲の攻撃に目がいったな…まあ、当たり前か」

大谷
「レーダー妨害もしていらから、それもあるだろう。それで、どうなんだ？」

長門
「……空母らしき艦艇に8発づつ命中…どれだけ頑丈でも、8発なら戦闘は不可能」

セルベリア
「次いでに言うと、旗艦機能も失ったわね…どうするの？」

福本
「敵残存艦艇に砲撃を続ける。多分、向こうは撃ち返してくるぞ」

オペレーター
「敵艦よりミサイル！　10発接近！」

福本
「砲戦を続行しつつ迎撃する！　速射砲及び対空迎撃火器用意！

電磁砲（レールガン）もスタンバイ！」

遠地
「了解！　迎撃用意！　レールガンもスタンバイ！」

５０キロを切る距離でのミサイル攻撃の為、対空ミサイル迎撃を取り止め、対空火器での迎撃を選択した。

オペレーター
「ミサイルが二手に分かれます！　５発は本艦、５発は土佐です！」

長門
「…速射砲迎撃距離内」

遠地
「速射砲迎撃始め！　レールガンは撃ち方用意！」

ドンドンドンドン！
ドンドンドンドン！
ドンドンドンドン！
ドンドンドンドン！

側舷に設置された１５，５ｃｍ連装速射砲が飛来する対艦ミサイル対して砲門を開いた。

ドオン！　バウン！　グオン！

長門
「…３発迎撃成功。更に残りが２発接近」

遠地
「レールガン、撃ち方始め！！」

ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！

４門の５７ｍｍ５０口径電磁砲（レールガン）が独特の発射音を響かせて迎撃を開始した。

ドオン！　ボワン！

長門
「…全弾迎撃成功。脅威対象無し」

福本
「遠地、電磁砲に異常は無いか？」

遠地
「大丈夫、異常無し。主砲第二斉射、撃て！！」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！

再び巨砲が火を吹いた。

…その後、薩摩・土佐は４０分間にわたって砲戦を展開した。
最後まで奮闘した代理旗艦の『チャイナ・イージス』蘭州であったが、最後は４３ｃｍ主砲弾が直撃・真っ二つに割れて轟沈してしまった。

……1時間後（砲戦終了から２０分後）

福本
「それで、付近の艦艇はどうだった？」

残存艦艇を撃沈し、『元』中国艦隊に接近した薩摩・土佐。
未だに浮いている艦艇の検索と生存者の捜索にあたっていた。

大谷
「まあ、山城先輩から聞いた通り……生存者は居なかった」

セルベリア
「つまり、消えた？」

大谷
「あぁ、完全にいない」

福本
「そうか…で、艦艇の方は？」

大谷
「残念ながら、大半が手遅れだ…船体設計が脆すぎた様だ…あの３隻は曳航に耐えられるそうだ」

その３隻とは……空母と駆逐艦２隻……空母ワリヤーグとソブレメンヌイ型駆逐艦２隻である。

福本
「……よし、空母は薩摩、土佐はソブレメンヌイ型2隻を曳航してくれ」

大谷
「わかった、そう伝えよう」

遠地
「おいおい、駆逐艦とは言え、2隻も大丈夫か？」

長門
「……大丈夫。この薩摩型の機関なら、駆逐艦を2隻ぐらいなら朝飯前」

遠地
「そうですか」

セルベリア
「……勇気、山城先輩から通信。例の『謎の日本機動艦隊』に接触したって連絡よ」

福本
「そうか…まったく、あの人も行動が早いよ」

そう呟きながら笑っていた。

その頃……日本　国会議事堂内

さて、本日の議事堂内では社民党の福島党首が福本次官と『論争』を繰り広げていた。

福島党首
「ですから！　何故軍の出動が必要なのですか！？」

福本（伊吹）
「だから…何度も言ったでしょう？　中国共産党軍が隣国をブッ壊したから、当事者の要請もあって軍を出すの。わかりました？」

福島党首
「放っておけはいいでしょう！　そんなに心配なら、軍では無くて交渉団を行かせなさいよ！」

福本（伊）
「あのね……もう少し歴史を見て下さいよ？　中国共産党がどれだけ厄介事を起こしてきたか解るでしょう？　去年の尖閣諸島、古くは盧溝橋事件や張作霖爆殺事件…中国では無いが尼港事件！　これらを踏まえても未だに外交交渉でどうにかなる…と考えられる相手ではない！」

福島党首
「それなら……警察を…」

福本（伊吹）
「呆れて物が言えなくなりそうです……暴徒が暴れているのと訳が違うんですよ？　相手は重火器を持った軍人の集団！　どうせ『非暴力』のあなたですから、『銃器使用禁止』なんて注文を付けて、向こうで殉職者の山を築くおつもりでしょうが…それは私の目が黒

い内には絶対にさせませんからね！」

福島党首
「な、なんですっ…」

福島党首が言い返そうとした時、福本次官に次官付きの少尉がボソボソと何かを報告した。

福本（伊）
「先程、シリルティア王国経由で報告が届きました。派遣艦隊は敵機動艦隊を撃滅、３隻を鹵獲したとの事です。なお、派遣部隊からはシナノ平原近辺に約１個大隊程度の敵兵力集結を確認いたしました」

次号へ

53　激突！　日中艦隊！　最終話（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

54　シナノ平原の戦い　1

3月10日（シリルティア王国3月17日）　シナノ平原

シナノ平原近辺に展開していた中国共産党軍は昨日の時点で1個大隊余であったが、朝日が昇る頃には2個師団以上…しかも、多数の戦車・装甲車両を引き連れていた。
対し、シナノ平原を守るシリルティア王国軍はユリアヌス中将率いる1個師団と日本帝国陸軍からの応援1個大隊余＋αだった。

ゴゴゴゴゴゴ！

地面を震わせ、後ろから歩兵を連れて進行してくる中国共産党軍の96・99式戦車。
対しシリルティア王国軍・日本帝国陸軍は有刺鉄線の後ろにある塹壕で沈黙していた。
本来なら、帝国陸軍が戦車を持ち込んでいても良かったのだが、飛行場の滑走路がジェット輸送機に耐えられるか解らないと言うことで、派遣は見送られた。
しかし、携帯式対戦車装備だけ多量に持ち込まれていた。

兵士
「李中佐、敵が『例』の距離に接近して来ます！」

「うむ…いいか、我々は越えて来た戦車や歩兵だけを狙え…ただし、

対空戦車や自走対空ミサイルに注意しろ」

兵士達

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

大隊指揮官で台湾生まれ日本育ちの李・高雄（り・たかお）中佐が指示を出した。

ゴゴゴゴゴゴゴ！

……何も知らずに近付いて来る中国共産党軍。

そして……遂に『罠』へ填まった。

ドゴーン！！

突如、１輌の９９式戦車が爆発した。

これを発端に次々と中共軍戦車が被弾・爆発する。

ようやく中共軍は気付いた……空にヘリの大群がいたからだ。

上空に待機していたのは対戦車ヘリ飛鷹（コブラ）と戦闘ヘリ隼鷹（アパッチ）だった。

そう……日本帝国陸軍は戦車を持って来れないのなら、攻撃ヘリで中共軍に対抗したのだ。

無論、自走対空ミサイルや対空戦車を意識して事前にレーダー妨害も行っている。

今回、中共軍は歩兵の火力支援目的で９５式２５ｍｍ自走機関砲（対空戦車。地対空ミサイル装備）を随伴させていた……だが、全く機能していなかった。

何故なら……悪魔が舞い降りたからだ…。

『おい！　なんでヘリがこんなに有るんだよ！？』

『知るか！　それより、対空戦車はどうした？　歩兵と一緒にいる筈だろう！』

『て、敵のヘリに狙われている！　早くなんと…（ドガーン！！）プツン……』

『くそ！　対空戦車はどうなってる！？』

『…こちら、歩兵隊…対空戦車は来れない…繰り返す…対空戦車は撃破されて来れない！』

『なに！？　誰に殺られた！？』

ヒュゴウーーン！！

ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！

エンジン音と爆弾の爆発音を響かせた物の正体……それはＡ１０サンダーボルト…ルーデル大佐機だった。

ルーデル
「あらあら…ソ連製兵器のコピーと聞いていたけど、大したことは無いわね！」

ルーデルの乗る雷龍が通り過ぎる度に戦車や装甲車両を残骸とスコアに変えていく。
飛鷹・隼鷹のヘリ部隊も航空優勢を生かして中共軍を叩いていた。

兵士
「敵兵接近！」

ユリアヌス
「撃て！！」

航空攻撃を切り抜けて来た中共軍歩兵隊に対し、シリルティア王国軍・日本帝国陸軍の火器が一斉に攻撃を開始した。

中国兵１
「て、敵の攻撃だ！」

中国兵２
「くそ！　今度の敵は機関銃を持ってやがる！」

中国兵３
「これでは近付けない…戦車は未だか！？」

有刺鉄線の前で足止めされた中国兵が愚痴る。

中国兵４
「おい、見ろ！　戦車だ！」

何とか無事だった９９式戦車が近付いて来た。
そして、有刺鉄線を踏み越えようとした時……

シュポーン！

シュルルルル……

ドガーン！！

……その９９式戦車が爆発した。

中国軍隊長
「バカな！　戦車が殺られるとは……撤退！　撤退しろ！」

…こうして、中共軍の攻撃は失敗した。

次号へ

５４　シナノ平原の戦い　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

55　シナノ平原の戦い　2

3月21日（シリルティア王国3月28日）　シナノ平原

昨日の攻撃に失敗し、退却した中国共産党軍…しかし、これで終わった訳では無かった。
既に朝も早くから攻撃の準備を始めていた……だが……

ブウウウウ……

ヒャウウウウ……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

中国兵1
「な、なんだ！？」

中国兵2
「敵だ！　敵の襲撃だ！」

中国兵3
「敵兵の姿は見えないぞ！？」

中国兵4
「違う！　空からだ！」

ブウウウウン！

ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！

小型爆弾を投下し、悠然と飛んでいる複葉機の編隊。

中共軍は突然の攻撃に右往左往するだけで適切な対応がとれていなった。

この夜明け前の空襲はシリルティア王国陸軍第一航空団（戦闘機・爆撃機・偵察機などを運用する混成航空隊）である。

一式シリーズ（『雷天』・『剣雷』・『鴎』の陸上版）を運用し、ある程度まで明るくなる夜明け前攻撃を実施したのである。

中国共産党軍陣地

司令官

「くそ……この国の軍隊は何故こんなに手強いんだ！？」

参謀１

「やはり、我が方に制空権が無い事が原因かと…」

参謀２

「くっ…自走機関砲や対空ミサイルがあればあんなオンボロにも好き勝手させないものを…」

参謀３

「しかし…あの米帝のヘリや対地攻撃機はいったい…」

参謀４
「とにかく！　我々は敵防衛線を突破し…」

通信兵
「大変です！　補給及び増援隊が敵ヘリ隊の攻撃を受け壊滅！」

参謀２
「なに！？　くっ、奴等め、卑怯だぞ！！」

…補給路を叩くのは軍略上において常識なのだが……。

シナノ平原　シリルティア王国・日本帝国陸軍司令部

通信兵
「ヘリ部隊より通信。敵補給部隊を襲撃し、壊滅させた模様」

李中佐
「うむ…こうやって補給路や補給部隊を叩くのは近代軍において効果があります」

ユリアヌス
「ふむ…だが、中共軍の補給は時として略奪になる場合がある、と中佐は言っていた気がするが？」

李中佐
「えぇ、ですが、何も無い草原では略奪する物などありません」

ユリアヌス
「なるほど…だから、ここで防衛戦をやった訳ですか」

李中佐
「えぇ…さて、これからは心理線ですよ。こちらが参るか、向こうが参るか…どちらか１つです」

その頃……ラバナスター

薩摩艦橋

セルベリア
「シナノ平原の方も私達の有利だそうよ」

福本
「だろうな。中共軍はこの世界の軍隊とは戦った事は有るだろうけど、日本帝国軍が支援した軍隊となると苦戦もするだろう」

大谷
「しかも、中共軍は補給線維持力は弱いでしょうから余計かもしれませんね」

セルベリア
「なんで？」

長門
「…今まで中共軍は自分の領域でしか戦った事が無い。そして、弱

者に強い…だから、弱者が牙を向いけた時の怖さを知らない」

大谷
「それに最近ならイザ知らず、中国軍は治安維持が下手ですから」

遠地
「だが、長期戦となるとこっちもキツくなるぞ？」

福本
「だから、数日中に…」

セイバー
「と言う事で来た。久し振りね、みんな」

セルベリア
「セイバー！？」

大谷
「お、我らが陸戦隊隊長がお着きだ」

セイバー
「今日から正式に第七艦隊の1人。よろしく」

福本
「あぁ、陸戦は基本的に任せるよ。まあ、俺も参加する事もあるけど」

遠地
「ん…と言う事は…」

福本
「そう言う事だ」

次号へ

55　シナノ平原の戦い　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

５４　シナノ平原の戦い　３

３月２４日（シリルティア王国　３月３１日）　夜明け前　シナノ平原近辺

ヒュルルルルル……

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

中国兵１
「今朝もかよ！？」

中国兵２
「これで４日目だ～！！」

中国兵３
「空襲！　空襲だー！！　退避しろ～！！」

ヒュルルルルル……

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

爆撃により明るくなった空に４隻の飛行船が浮かび上がる。
シリルティア王国陸軍第一航空団の『クジラ君一号』型飛行船の爆撃だった。
何せシリルティア王国軍の中でも１４トンの最大積載量を誇る『ク

ジラ君一号』型飛行船は爆撃機としてうってつけであり、こういった作戦では一番使いどころがあったからだ。

ヒュルルルルル……

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！……

中国兵１
「くそ！　毎朝毎朝来るんじゃあねー！！」

中国兵２
「お陰で寝不足だ！！」

中国兵３
「なんでこんなに好き勝手させられるんだ！！」

早朝に空襲、昼は敵防衛線を攻撃（失敗して退却）、夜は漸く休める筈なのに空襲で飛び起き避難……こんな状況だ。
……そりゃ、文句も言いたくなるわね…。

……そんな空襲の中、１０数人の人間が隠れる様にして動いていた。
中国兵の服装だが、感じの違う男達……実は潜入した日本帝国陸軍兵士達だ。
李中佐から命令を受けた彼らは密かに中共軍陣地に潜入し、空襲の騒ぎに紛れて『ある場所』に向かっていた。

日本兵１

「さすが、有る所には有りますね」

日本軍曹長
「中共軍はソ連軍のコピー物らしいからな…操り方はソ連軍の応用ですむ」

日本兵2
「それで…どれを狙います？」

日本軍曹長
「先頭の3輌だ。あとは邪魔になるだろう、リモコン爆弾を仕掛けろ」

日本兵達
「「「「「「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」」」」」」

誰も居ない戦車置き場に近付き、次々にリモコン爆弾を取り付けていく。

日本軍曹長
「よし、大体付け終わったな…全員乗れ！　脱出するぞ！」

隊員達が慌て戦車に乗り込み始めた。

日本軍曹長
「よし、全員乗れたか？」

日本兵1
「曹長、この戦車に全員はキツいですよ？」

日本軍曹長
「いいんだ。残りは戦車の車体で我慢しろ！」

日本兵２
「うわ…おれらタンクデサントですか？」

日本軍曹長
「つべこべ言うな、いったい何の為のベルトだ？　行け！　最大速で突っ走れ！！」

日本兵３
「え、敵陣を突っ切るんですか？」

日本軍曹長
「おう、そうだ！　お前らその機銃で周囲を掃射しろ。行け！！」

日本兵２
「…大丈夫ですかね…先輩？」

日本兵１
「…多分な」

……その後、奪った３輌の戦車で暴れた後、全員無事に日本軍陣地に戦車と共に帰還した。

数時間後……

司令官
「…被害は？」

参謀１
「…戦車３輌を奪取され、残りは全車破損…砲身や足回りを破壊された物もあり、修理は困難かと…」

寝不足で目を充血させた司令官が参謀から報告を受けていた。

司令官
「くそ……ここまでするとは…」

通信兵
「た、大変です！」

参謀２
「バカ者！　もう既に大変だ！」

通信兵
「それ以上です！　敵が海から現れました！」

司令官
「な、なんだと！？」

次号へ

５４　シナノ平原の戦い　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

57　裏口攻め

その頃……アッデュラー王国唯一の港街　スワロン

つい1週間前まで威圧感たっぷりの中国機動艦隊が存在していた港街スワロン。
しかし、肝心の中国艦隊は一隻も帰らず、駐屯する中共軍はピリピリし始めていた。
だが……久し振りに姿を現したのは中共軍の天敵であった。

戦艦薩摩艦橋

福本
「さて…中共軍には現実に目覚めてもらいましょうかね。遠地、一発目覚めの一撃を叩き込んでやれ」

遠地
「了解。1番砲塔、撃て」

ドーン!!

ヒュルルルルル……

ズドーン!!

狙いを定めていた砂浜に爆発音と煙が上がる。

福本
「上出来だ。天城から連絡は？」

大谷
「大隅・竹島からエアクッション艇の展開を開始。同時に神州丸などから上陸用舟艇の展開も確認…上陸開始だ」

福本
「よしよし…あとは中共軍が悪い事を考えていないかだが…どうだろうかな？」

遠地
「この艦隊を見たら大抵の奴等は抵抗を諦めるよ。さもないと、巨砲を喰らってお陀仏だ」

セルベリア
「あるいは航空隊に見付かって、さようなら…まあ、どっちにしても普通に考えたら悪い事なんてしないけど」

長門
「……それでも、何が起きるか解らないのが戦場」

福本
「確かにな…さて、様子見としますか」

……まあ、姿を現した第零艦隊に腰を抜かしたか、４３ｃｍ砲の着弾で思考停止に陥ったのか……あるいはその両方かは解らないが

上陸は何の抵抗も受ける事無く順調に進んだ。
そして……先鋒隊は先に進んでいた。

今井
「……どうなってんだ、こりゃあ？」

聞いている話だとスワロンはそれなりに栄えている街だと今井は聞いていた。
しかし、車長ハッチから見る限りではまるでゴールドラッシュで寂れた街の様に……不気味な静寂に包まれた無人の街であった。

自衛隊員１
「…中国兵が荒らしたんでしょうか？」

今井
「だからって無人にはならいだろう」

自衛隊員２
「では、皆殺しに…」

今井
「死体はどうする？　中国兵が綺麗に片付ける事なんて不可能だな」

自衛隊員１
「はあ…」

今井
「とにかく、街の検索を続けろ…中国兵が居るかも知れんから気を

付けろ」

自衛隊員達

「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」

今井

「……いったいどうなっているだ？」

街を見ながら今井大尉は密かに呟いた。

戦艦天城艦橋

山城

「……街に誰も居ない？」

佐野

「はい…今井大尉は念の為に街を検索させているそうですが…不気味だと言っています」

シルヴィア

「まさか…皆殺しにあったとは…」

山城

「それは無い。多分、近辺の山や森に隠れたんだろう…問題は中国軍だ。そっちは？」佐野

「現在、先鋒隊が検索中です。艦隊からも偵察機を出しておくべきかと」

山城
「そうだな。攻撃隊の準備もしておいてくれ」

佐野
「わかりました」

山城
「さて…バカな事を考えていなければいいが…様子見だな」

その頃……帝都　国防省海軍次官室

福本（伊吹）
「あと数日でここともおさらばか」

士官
「その割にはあんまり権限が変わった様子が無いんですけどね」

福本（伊）
「それを言うな。福島の馬鹿が聴いてかもしれん」

そう言いながら普段通りに書類を片付けていく福本次官。

福本（伊）
「えーと、次は…お、待ちに待ったぞ！」

士官「…何の報告ですか？」

福本（伊）
「人事課の報告だ。昨日調べる様に言ったがな」

士官
「…待ちに待っては無いですね」

福本（伊）
「いいの、いいの。さて、人事課だ」

そう言うと電話を内線で掛ける。

福本（伊）
「私だ。報告書は読んだ。異動は可能だな？　よし、異動辞令Ｂだ。もちろん、全員にだぞ」

次号へ

57　裏口攻め（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

58　パンチ力

スワロン

１０式戦車を中心に陣を張った先鋒隊は検索隊の連絡を待っていた。
今井大尉は１０式から降りて、ペットボトルのポカリを飲んでいた。
いくら戦車があっても、敵がいなければ只の鉄の塊に過ぎない……
１０式はハイテクの塊だが…。

今井
「……暇だな～」

……今のところ、これぐらいしか言うことがなかった。

戦艦天城艦橋

佐野
「見つけました！　アッデュラス王国に繋がる道にいました！」

シルヴィア
「どこだ？」

佐野
「ここです」

今までの偵察で撮りまくって出来上がったスワロン周辺の写真地図の北側、森の中にうっすらと見える筋を叩いた。

山城
「街の住民…と言う事は？」

佐野
「対熱感知機には戦車のエンジン熱が確認されたそうです」

山城
「そうか…『紺碧の艦隊』のロンメル元帥なら遮断ネットで熱を遮断したがな」

佐野
「あ、艦長も読んでましたね？」

山城
「はっはっは、あれは面白いからな。何故、陸海空軍士官学校に置いてあるか知ってるか？　福本次官が入れさせたそうだ」

佐野
「なるほど、そうですか」

シルヴィア
「2人にしか解らん話は置いといて、中共軍はどうするのだ？」

山城
「佐野、偵察機に周囲を張り付けて周囲を調べろ。それと飛龍に連絡して攻撃隊を発進させろ。始めに小型爆弾で威嚇し、撃ってきたら叩け」

佐野
「わかりました」

返事をすると直ぐに無線機へ飛び付いた。

山城
「しかし…どうもいま1つパンチに欠けるな」

シルヴィア
「欠けるか…航空攻撃だけで充分だと思うが？」

山城
「内陸に行く程、艦隊の脅威は低くなる。いくら戦艦でも射程があるからな…そう言った意味では飛距離で航空機には敵わない」

シルヴィア
「だが、当たれば一発と言う意味では艦砲だな？」

山城
「あぁ……一度艦砲射撃を試みてみるか」

シルヴィア
「ほう、戦艦6隻の艦砲を…敵は否応なしに逃げるな」

山城
「それも狙いの1つだ。戦艦は我に続け…艦砲射撃だ」

戦艦薩摩艦橋

福本
「ほう…戦艦は全艦我に続けだそうだ」

遠地
「お、艦砲射撃だな。中共軍が森にいると解ったから何かやるだろうとは思っていたが…やっぱりやるか」

福本
「まるで予想出来ていた様な言い方だな…まあ、いいけど」

遠地
「あ、こちら砲術長だ。これより対地攻撃を行うから、弾薬を確認したい……よし、わかった」

大谷
「既にやる気満々だな」

セルベリア
「まあ、彼はそれも取り柄よ」

長門
「…なら、今度は着弾観測で忙しくなる」

福本
「よく言うよ。さっきまで暇そうだったのに」

長門

「むう…否定出来ないところが悔しい」

天城艦橋

佐野
「攻撃隊、帰還します」

山城
「砲戦だ。距離は？」

佐野
「距離５万５０００ｍ。４１ｃｍ砲ではギリの一歩手前ですね」

山城
「あぁ…さて、砲戦１０分。撃ち方始め！」

佐野
「てぇー！」

ズドドドドドドドドドドドドドン！！

天城を先頭に駿河・常陸・磐城・薩摩・土佐の艦砲が火を吹いた。
１６・１７・１８インチ…４１・４３・４６ｃｍ砲がちょうど２隻づつで砲撃を行う。

ヒュルルルル……

スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！
スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！
スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！……

次号へ

58　パンチ力（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

59　10分間の戦果（前書き）

福本（勇気）
「あれ？　作者は？」

セルベリア
「その事で書き置きがあったわ。何々『本日、我れレポートに宣戦布告せり。ついては更新遅延せり』…以上」

福本（勇）
「……あぁ、作者、日本史の近現代専攻だったな。で、レポートは？」

セルベリア
「何でも、前期に発表した物の肉付けみたいよ。史料と文献を漁り捲らないといけないらしいから」

福本（勇）
「なるほど…で、テーマは？」

セルベリア
「『日米開戦』…一応、通商航海条約破棄からの主に外交中心らしい」

福本（勇）
「……作者らしいけど…御疲れさん」

59　10分間の戦果

スワロン北部の森の中

偵察の雷雲が撤退する中共軍を見付けた時点で中共軍も雷雲を見付けていた。
しかし、司令官はあえて手を出すなと命令した。
森の中だから見付かり難いと考えたからだ……無論、対熱感知機で見付かっていたが。
だが、直ぐに飛来した攻撃隊の内、一個小隊（４機）が威嚇爆撃をした為、中共軍兵達は司令官の命令を無視し、雷風に向けて発砲してしまった。
この発砲を見た攻撃隊は抱えていた爆弾とロケット弾を森の中の中共軍に叩き込み始めた。

司令官
「くそ…おい、無事か!?」

副官
「は、はい！　なんとか…しかし、損害の方はなんとも…」

司令官
「伝令でも何でもいい！　動ける部隊から全速で撤退しろ！　敵に捕捉されているぞ！」

だが……それは遅すぎる判断だった。

ズドドドドドドドドドドドドドドドン！！

ヒューーーーウ………

司令官
「なんだ、あれは！？」

副官
「…海上艦艇からの艦砲射撃です！！」

司令官
「退避！！　急げ！！！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガン！！！！

４１ｃｍ砲弾１９発、４３ｃｍ砲弾２０発、４６ｃｍ砲弾１７発…
計５６発の砲弾が中共軍に降り注いだ。

戦艦薩摩艦橋

長門
「…着弾を確認。データ転送」

遠地
「次弾装填完了。仰角修正中」

薩摩の艦橋では着弾観測で送られて来たデータ転送役の長門と修正

報告を行っている遠地が主に動いていた。

セルベリア
「1回で56発、1分間で3回、それを10分だから…」

大谷
「56×3×10＝1680発。つまり、我々はそれだけの砲弾を撃ち込む事になる」

福本
「薩摩は総計300発。1門では30発だな」

セルベリア
「また派手に撃つわね」

大谷
「これでも少ない方ですよ。1隻で1000発を撃ち込むなら派手ですが」

福本
「おいおい…まあ、今回は中共軍が逆襲してこない様にするだけだからな。充分な量だよ」

遠地
「修正完了。第2斉射、てぇー！！」

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

ヒュルルル……

スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！
スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！スズーン！
スズーン！スズーン！スズーン！……

司令官
「く…敵の艦砲は何処まで届くんだ！？」

副官
「と、とにかく退避しましょう！」

着弾の揺れと轟音を感じながら中共軍は退避していた。
しかし、戦艦の主砲による攻撃の為、いくら逃げても追ってくる様に着弾が付いてくる。
この為、中共軍は重装備を棄てて退避していた。
戦車、対空戦車などの装甲車両だけであったが……兵士の中には自分の装備まで棄てる兵士もいた。
とにかく身を軽くし、一歩でも多く逃げようとする中共軍兵達。
そこに写るのは崩壊し、敗走する軍隊の姿だった。

天城艦橋

山城
「…１０分だ。砲撃止め」

佐野
「了解、撃ち方止め」

予定通りの時間と弾数を撃ち込んだ天城が射撃を止めると他の5隻も砲撃を止めた。

シルヴィア
「さすがの敵もこれ程撃てば戦意も削がれただろうな」

山城
「あぁ、かなりの重装備を破壊、もしくは放棄しただろう。逆襲は出来まい…念のため、偵察を出しておこう」

佐野
「わかりました」

次号へ

59　10分間の戦果（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

60　治安維持

3月25日（シリルティア王国4月1日）　スワロン市内

10分間に約1700発を叩き込み、中共軍を追い出した日本軍はシリルティア王国軍と共に市内警備に移行していた。
また、近隣の山や森に逃げていた住民達がポツポツと帰って来た為、日本・シリルティア軍から工兵隊が大工道具片手に出動、家や店舗の修理を行っていた。
その為……何故か街中からトンカントンカンと金槌の音が響き渡っていた。
そんなスワロンの街を目立つ一団が視察していた。

福本
「早くも治安回復が出来ましたね」

山城
「中共軍が全員出て行ってくれたからな」

シルヴィア
「ついでに言えば、ここを荒らさなかったらなお良かったのだがな」
セルベリア
「シルヴィアさん…中共軍にそれを期待するのはどうかと…」

シルヴィア
「言ってみただけだ」

日本海軍の服装（1名を除く）に軍刀…余りにも目を惹きそうな格好で歩くのは第零・第七艦隊司令部の面々だった。

佐野
「ですが、悪くはありませんよ。民生協力と言う事で報道出来ますし」

福本
「まあ、福島のバカが変な宣伝をしない様にちゃんと報道をするしか無いよな」

また「日本兵が略奪を行った」とか、「住民を虐殺した」とか…誤報とデマは止めていただきたい。

山城
「しかし…今回はまたテレビや新聞やカメラマンが来たな」

昨日、広報課の人間から渡された取材陣の簡易リストを見ながら呟いた。

福本
「ほうほう…読売・産経・朝日・毎日新聞に地方新聞社、ニューヨークタイムズまで来てる…テレビは読売・朝日・毎日その他テレビ……あ、勝谷さんや宮嶋さんも居る」

佐野
「有名人が来ましたね」

山城

「今が取材の絶好のチャンスだからな」

セルベリア
「そう言えば取材規制が出てるよね？」

福本
「あぁ、海上の薩摩・土佐・磐城がその対象。あとは住民に配慮する様にってね」

……いくら『知る権利』が有るとは言え、それを大義名分に他人へ迷惑を掛けていい事には成らない。
禍根を残しては治安維持が難しくなる事は軍人なら誰でも解る。福本
「まあ、大丈夫だと思うけどね」

その頃……国防省大臣室

福本（伊吹）
「失礼します」

石破防相
「お、海軍次官か。待っていたよ」

大臣室に入ると、執務机で書類を見る石破防衛大臣がいた。
まあ、視点を少し左下に向けると……限定版の戦艦『天城』（第零艦隊旗艦仕様）のプラモデルがあるが…。

福本（伊）

「現地から治安状況の報告がありました。少し報告させていただきます」

そこから暫くの間、手短で要領の良い報告が行われた。

石破防相
「では、現地の治安は回復しつつあるんだね？」

福本（伊）
「はい。中共軍がさっさと逃げてくれたのと、こちらの警備体勢が早く整ったので治安が早期回復しました。既に工兵隊による家屋・店舗修理や衛生部隊による診察・治療等の民生支援も始まっております」

石破防相
「そうか…首都奪還部隊は何時出る？」

福本（伊）
「明日にでも。実際、現地部隊はそのつもりの様です」

石破防相
「ならば、今更現場へ言うことは無いな…問題は…」

福本（伊）
「福島党首の婆ですね…まったく、軍務妨害で訴えていいですか？」

石破防相
「…本当に君は彼女が嫌いだね」

福本（伊）

「うちの上さんの方があのバカより比べ物にならないほどマシです」

石破防相
「あはは…君たちは軍人だからね」

福本（伊）
「とにかく、現場活動を妨害されない様に我々が動くしかありませんよ」

石破防相
「そうだな…そう言えば、人事課の知り合いから聞いたが、特定の何人かを『旅順司令部付き』にしたそうだな」

福本（伊）
「おやおや、伝わるのが早いですね。差し支え無ければそのお知り合いとは？」

石破防相
「なに、プラモ仲間さ」

福本（伊）
「なるほど、プラモ仲間ですか。（＾〇＾）　えぇ、司令部付きにしましたよ。まあ、大臣はお分かりだと思いますが」

石破防相
「わかってるよ。まあ、福島にはバレない様にな」

福本（伊）
「はい…それで大臣、次は何を造るご予定で？」

石破防相
「そうだな…空母富士でも造るかな？　もうキットは買ってあるし」

福本（伊）
「買ってあるんですね」

次号へ

６０　治安維持（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

61　首都奪還部隊

3月26日（シリルティア王国4月2日）　スワロン近郊の森

ゴゴゴゴゴゴ……

10式戦車・90式戦車の陸自戦車を中心に放棄されていた中共軍の2輌の99式戦車、3輌の96式戦車を加えた首都奪還部隊が出発した。
派遣軍自らが持ち込んでいた車両に中共軍が放棄した車両を回収・修理し、分乗した日本軍は首都に向かい進撃を開始した。

指揮車車中

山城
「今朝飛んだ雷雲からの写真だ」

揺れる車中で福本・セルベリア・セイバーの3人に10枚程度の写真を見せる。

セイバー
「ふむ…中共軍の姿が街中にありますね」

福本
「都市に立て籠られると厄介ですね。中共軍は一般民間人を必ず巻

き込みますよ」

山城

「だろうな。基本的に中国軍は虐殺や国際法違反は得意な連中だからな。市民を躊躇い無く盾にするだろう」

セルベリア

「ですが、それは阻止しなければならない…ですね？」

山城

「あぁ、中共軍が相手とは言え、無関係の市民を巻き込みたくは無いからな」

セイバー

「ならば、首都郊外に誘い出して決戦の方が最良です」

シルヴィア

「確かにそうだ。しかし、どうやって誘い出したものかな？」

5人

「「「「「う～～ん……」」」」」

……指揮車の中で誰もが唸りながら頭を捻っていた。

その頃……10式戦車車上

今井

「しかし、佐野大尉。山城大佐に付いていなくていいのかい？」

佐野

「あぁ、その点は心配無い。今は中共軍とどう戦うかで頭を使ってる筈だから」

大西
「今は居ませんけど、山県大尉も加わるそうですから、魚釣島メンバーの大集合ですね」

佐野
「帝国陸軍からの派遣ですがね。まあ、事が始まって直ぐに父親の山県陸軍次官に直訴してそうですけど」

今井
「さて、中国軍をどうやって叩くんだろうね、あの人は？」

佐野
「まあ、現地に行かないと解らない事も有りますから、今は気軽に行きましょう」

その頃……指揮車車中

福本
「……そう言えば、中共軍の大将は誰なんですかね？」

山城
「そりゃあ、中共軍…中国人民解放軍の司令官だろう？」

福本

「まあ、そうでしょうが…あの我が身主義の中国兵達を纏めるとなると相当の人物で無いと無理ですよ？」

セルベリア
「そうですよね…そうで無いと中共軍は今頃崩壊していますから」

セイバー
「中共軍はソ連軍同様、督戦隊がいないと容易に崩れる軍です。それが容易に崩れないと言う事は…」

シルヴィア
「…嫌な予感がしてきたな」

山城
「ある意味でその嫌な予感が当たっていない事を祈るよ」

そう言って苦笑する山城だった。

その頃……元アッデュラー王国首都『カサラバード』（現　延安（えんあん））

「……それは本当か？」

肥満体の……失敬、恰幅の良い男が報告に来た士官に訊いた。

士官
「はい、敵は間違い無く日帝軍の援助を受けています、毛沢東同志」

恰幅の良い男の正体……中国共産党書記長の毛沢東だった。

毛沢東
「敵の装備は我々より劣っている筈だったが…いや、それ以前になぜ日帝がいる？」

士官
「本官に訊かれましても…」

毛沢東
「まあいい。陸上戦なら我が方の勝ちに決まっている」

自信有りげに笑っていた。

次号へ

61　首都奪還部隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

62　野営地（前書き）

しかし…まさか星座なんて扱う事になろうとは…。
しかも、微妙に甘いし…。

62　野営地

3月27日（シリルティア王国　4月3日）　夕刻　野営地

福本
「いや～、久々に陸上の夕日が沈む姿を見たよね～」

セルベリア
「そうね～、久しぶりにゆっくりと見るわね」

山城
「おまえら～、そんな所で暇そうに見てないで手伝え～」

宿営の野営地を決めた部隊はせっせと野営の準備をしていた。

シルヴィア
「えーと、あそこにエウロス座、あっちにシェペロイ座が出て……
そして、あそこには…」

山城
「…シルヴィア、君も何をしているのかな？」

シルヴィア
「あ…ちょっと星座の出る位置の確認を…」

山城
「はぁ…まあ、いいけどさ…早くしてね」

佐野
「参謀長、今日は金曜カレーですよ！」

大西
「パック飯ですけどね」

苦笑しながら準備する大西が言った。

安井
「えーと…お米は秋田産ですね。缶詰だけど」

山城
「缶詰だが、味は保証するよ。海軍の野戦演習でお世話に成ってるからね」

セイバー
「確かに。なぜか日本の缶詰は美味しいです」

福本
「まあ、取り敢えずは夕食にしましょうよ」

山城
「まったく、調子のいい奴だ」

夕食後……

福本
「……今更ですけど、ここって中国では無いんですよね？」

山城
「本当に今更な質問だな、それ…そして、当たり前だな」

夕食を終え、夜空を寝転びながら見上げて話す山城と福本。

福本
「なら、現実の中国とでは出来ない点が2つありますよね？」

山城
「……そうか、補給と撤退か」

福本
「はい。ずっと気になっていたんです。中共軍の燃料・弾薬の補給はどうしているのか。そして、中共軍は中国の様に撤退して奥地に引っ込む事が出来ない」

山城
「そうだな。撤退の方は置いておくとして、補給については不思議だな…こっちみたいに神戸からゲートで補給路が繋がっている訳じゃあ、無いしな」

スッと起き上がると山城は何処かに歩き出した。

福本
「どちらへ？」

山城
「無線機の所、偵察ルートの変更を言いに言ってくる」

そう言うと行ってしまった。

福本
「お気を付けて～」

寝転びながら勇気が手を振った。

セルベリア
「お暇ですか～？」

福本
「う～ん、手は空いてるよ」

セルベリア
「じゃあ、隣に失礼しま～す」

……気の抜けたと言おうか、のんびりと言おうか…そんな声でセルベリアが勇気の隣に寝転んだ。

セルベリア
「夜空を寝転んで見るのも久しぶりね」

福本
「あぁ…三十生の雪原演習以来…だと思う」

セルベリア
「あの時もこうして夜空を見たよね～」

福本
「めちゃくちゃ注目されてたよ…しかも、羨ましさより妬ましさ視

線が多かった様な気がする」

何せ周囲には7組以外の人間が随分居たものですから…。

セルベリア
「さっきシルヴィアさんから聞いたんだけど…あの赤色の星を基点にしたのが、セパル・ソミュエル座なんだって」

福本
「セパル・ソミュエル座？　なんか言い難いな…なんで？」

セルベリア
「この星座の別名は…『恋人座』よ」

そう言うとセルベリアは気恥ずかしそうに勇気の口付けをした。

佐野
「…大佐、あれは何かの当て付けですか？」

シルヴィア
「う～ん？…あれはただのバカップルだ。気にするな」

佐野
「はあ…」

セイバー
「確かにあれはバカップルですね」

見馴れたセイバーが呟いた。
何せ左右後方からは見えない場所ではあったが…いかせん、佐野達の居る正面からは丸見えだった。

シルヴィア
「ところでセイバー、あなた好きな人は居ないの？」

セイバー
「…なんですか、突然」

シルヴィア
「いや～、作者の設定だと1人1人相手がいる筈だからね～」

セイバー
「…いない事はありません」

シルヴィア
「つまり、いるのだな。お互い大変だな～」

そう言いながら背中を軽く叩く。

山城
「なにしているんだ、シルヴィア？」

シルヴィア
「女同士のお話よ」

山城
「…そうかい。おい、佐野。手はあ空いてるな？　少し手伝ってくれ」

佐野

「はい」

次号へ

62　野営地（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

63　主導権（前書き）

まあ、遅きながらですが、漸く武器輸出緩和されそうですね。

山城・福本
「「大日本帝国は普通にやってるけどね～（但し、最新兵器は出さないけど）」」

まあ、『日本の武器が世界の子供達を殺す』なんてバカな女親分は……最近消えたよね？

福本
「テレビからはきえましたね」

63　主導権

翌日……3月28日（シリルティア王国　4月4日）

佐野
「あ、偵察のオフロードバイクが戻って来ました」

10式戦車の砲塔で周囲警戒をしていた佐野が叫んだ。
確かに二台のバイクに乗った偵察兵がこっちに向かって来る。

山城
「どうだった？」

偵察兵
「はい、ここから数キロ先に哨戒所と思われる場所を発見しました」

福本
「やはり、敵も我々が来ることを予測していたみたいですね」

山城
「だな、で、哨戒所はどうだった？」

偵察兵
「簡単な造りの小屋と周囲に鉄条網を張っただけです。また、敵は荷造り中でした」

セイバー
「荷造りだと？」

偵察兵
「どうやら、哨戒部隊が交代する様です」

山城
「そうか…よし、哨戒所を襲撃しよう」

セルベリア
「え、襲撃ですか？」

山城
「迂回したって結局は見付かってしまう。逆に哨戒所を利用させてもらう」

福本
「先輩、何か思い付きましたね」

山城
「当たり前だろう？　数的優勢な敵は主導権を握ってしまえば脆い物だよ」

1時間後……カサラバード　中国軍通信室

通信兵1
「暇だな～」

通信兵2

「おい、ちゃんとしてないと、上官にどやされるぞ！」

通信兵１
「大丈夫、大丈夫。通信なんて…」

無線
『ザー…こ、こちら、第１２哨戒所！　敵小部隊に襲撃された！　に、日本…うわ～～！　ドドドドドドン！！』

通信兵１
「お、おい！　どうした！？」

無線
『ザー……』

通信兵２
「た、確か第１２哨戒所は今日、交代の分隊が行った筈…こ、これは大変だ！！」

通信兵１
「おい、聞こえているなら何か言え…おい！」

通信兵２
「お前はそのまま続けるんだ！　俺は上官に報告して来る！」

通信兵１
「お、おう！」

慌ただしくなった中国軍だった。

佐野
「…これで敵は騙せましたかね？」

山城
「大丈夫だ。明らかに今しがた襲われた様に聞こえたぞ」

哨戒所の無線を使い、中国軍を騙した山城。
そう、既に哨戒所は襲撃された後だった。

福本
「なるほど、これが『主導権を握る』ですか」

山城
「あぁ、こうしておけば、敵は慌てこっちに遣って来るだろう…罠が有るとも知らずにな」

セルベリア
「その罠をセイバー達に仕掛けさせてますけど…本当に引っ掛かるでしょうか？」

山城
「引っ掛かるんじゃあないよ。引っ掛けるんだよ」

山城はそう言うとニヤリと笑った。

その頃……帝都東京　国防省

コンコン

渡瀬
「福本次官～、来ましたでぇ～」

福本（伊吹）
「お、忙しいところにすまんな」

渡瀬
「ええんよ、ええんよ。わても用事もあったし…で、用件は？」

福本（伊）
「うむ、まあ、大まかに訊きたいのが大波型駆逐艦の建造状況と空母のカタパルトとかなんだが…どうだ？」

渡瀬
「大波型は建造順調やで～、ただ、四番艦が順調過ぎやけど」

福本（伊）
「そうか…歴史は繰り返されるか…カタパルトは？」

渡瀬
「基礎と母体はあるから、こっちも順調やで～。順調過ぎて怖いけどな～」

……おいおい。

福本（伊）

「はっはっは、そうか…ところで、そっちの用件は？」

渡瀬
「実はな…、技術者を1人加えてほしいんや…いや、正確には1人と1機…いや、やっぱり2人か…」

福本（伊）
「まあ、多人数過ぎるのは困るが…それは技術開発陣の方か？」

渡瀬
「ちゃうねや、艦隊人事の方や」

福本（伊）
「…事情を話してくれないか？」

渡瀬
「実はな……」

次号へ

63　主導権（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

６４　待ち伏せ（前書き）

随分お久しぶりの更新です。
次は首都奪還戦の予定です。

６４　待ち伏せ

数時間後……

指揮官
「なに？　先遣隊と連絡が取れないだと？」

兵士
「はい…先程より無線は途絶しております」

日本軍部隊による哨戒所襲撃に先遣隊一個小隊、本隊二個中隊の編成で送り込んだ。
しかも、先遣隊には９７式歩兵戦闘車、本隊は歩兵戦闘車に９６・９９式戦車を加えた強力な部隊だ。
だが……そんな先遣隊と連絡が取れないと言う事は……

指揮官
「警戒を強めろ。敵は何かしら仕掛けてくるぞ」

兵士
「はい」

暫くして哨戒所の近くまで来ると、撃破された９７式歩兵戦闘車が哨戒所付近に無残な姿をさらしていた。

指揮官

「くそ！　周囲を…」

ドガーーン！！

突如、先鋒の９６式戦車が爆発した。

指揮官
「な、なんだ！？」

兵士
「地雷です！　地雷が敷設されております！」

指揮官
「く、工兵隊！　地雷を除去せよ！　い…」

パパパン！パパパン！

メキメキメキメキ…ドサドサドサ！！

兵士
「部隊後方の樹木が倒されました！」

指揮官
「な…退路絶つつもりか？　後ろの戦車で樹木を退けろ！」

兵士
「はい！」

指揮官
「工兵隊！　地雷はどうだ！？」

工兵
「は、付近にはありません！」

指揮官
「なに？　無いだと？」

こういった場合は広域に地雷を敷設するのが普通だ……しかし、何故一個しか無いんだ？

指揮官
「…まあ、いい。戦車隊！　撃破された戦車の脇を通って前に出ろ！」

漸く停滞していた戦車隊が動き出した。
これにより、部隊も動いた……しかし、それも長くは続かなかった。

ドン…

ドガーン！

指揮官
「今度はなんだ！？」

兵士
「敵の戦車です！」

今井

「よし！　９０式戦車の第二分隊、９９式戦車の第三分隊は反対側より攻撃！　９６式戦車の第四分隊は俺に続け！　掛かれ！！」

森の入り口で待ってましたと言わんばかりに現れた日本軍戦車隊。
今井大尉の１０式戦車が先手を取って発砲し、９９式戦車が爆発した。
敵に気付いた中共軍戦車隊が撃破された戦車を避けて左右に散開する。
だが、森から出てくる中共軍戦車隊は頭を抑えられ、思った通りの機動が出来なかった。

兵士
「敵戦車隊の攻撃で戦車隊は苦戦中です！」

指揮官
「く…退路の倒木はどうした！？」

兵士
「えっと……はい！　だいたい除去…」

ドガーン！！

今度は後方から爆発音が響いた。

兵士
「……あ、敵の対戦車ミサイルで倒木除去中の戦車が撃破されました！」

指揮官
「な…後退は不可能なのか!?」

兵士
「車両の後退は困難ですが…歩兵はなんとか!」

指揮官
「周囲の森を検索しろ!　敵兵を掃討するんだ!　そうすればなんとかなる!」

ダダダダダダダ!
ダダダダダダダダ!
ダダダダダダダ!
ダダダダダダダダ!

道の両脇の森から銃声が響いた。

山城
「ふむ…案外あっさりと罠に嵌まったな」

福本
「…これで主導権を握れましたかね?」

山城
「まあ、敵の出方次第かな?」

苦笑しながら山城・福本は森の中から中共軍を見ていた。

佐野
「敵戦車隊戦力半減！」

山城
「よし、そのまま加減しつつ、敵戦車隊を撃破せよ」

佐野
「了解」

福本
「最果て、このまま殲滅しますか？」

山城
「いや、撤退するなら追撃はしない。それにやり過ぎると…窮鼠猫を噛むだ」

福本
「ですね」

指揮官
「くそ……撤退！　撤退だ！！」

兵士
「な、指揮官！？」

指揮官
「ここで死にたいなら、勝手にしろ！　重装備は放棄、撤退だ！」

兵士

「了解！」

その後、中共軍がボロボロに成って撤退したのは言うまでもない。

次号へ

６４　待ち伏せ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

65　首都奪還戦　1（前書き）

昨日から大学が始まりました。
いや～…早く連日更新を再開したい…。

65　首都奪還戦　1

3月30日（シリルティア王国4月6日）　カサラバード

29日を休息・偵察に費やした日本軍は30日午前0時を過ぎると直ぐにカサラバードへと歩みを進めた。
そして、カサラバードに入った日本軍だったが……

ダダダダダダダ！
ダダダダダダダ！
ダダダダダダダ！

カンカンカン！
チューン！

山城
「ち、予想はしていたが、まるでブラックホークダウンじゃあないか！」

佐野
「まあ、市街戦である事は間違いありませんけどね！」

……カサラバードに到着した日本軍はカサラバードの無防備都市化、あるいは中共軍の降伏を拡声器を使い呼び掛けたが、返答は無く、仕方無く進入した日本軍を出迎えたのは中共軍の銃撃だった。
いくら時代差が有るとはいえ、街道の両脇には家があり、中共軍は家の屋根や二階に陣取り日本軍に攻撃を加える。

対し日本軍は戦車の陰に隠れつつ応戦していた。

シルヴィア
「！前の家に携帯ロケット砲だ！」

山城
「大西、狙撃で対応！」

大西
「はい！」

直ぐに構えていたチェイタック狙撃銃で狙いを定め、引き金を引いた。

ターン！

大西
「成功です」

佐野
「参謀長、福本司令より連絡です」

山城
「あぁ、すまん。なんだ、勇気…うむ……ちっ、やっぱり、中共軍に国際ルールなんて通用しないか」

吐き捨てる様に山城は呟いた。

その頃……福本・セルベリア達は山城達本隊と離れ、家屋を大雑把に調べていた。
率いるのはセイバー率いる陸戦隊から借りた一個分隊程。
路地裏を通り、家屋の裏口や窓から様子を探り、敵兵の有無を探る。
そして、丁度表通りに有る家屋に人の気配がする事から、裏口から静かに侵入した。
一階を素早く検索し、二階へと上がった。
二階の少しドアの開いた部屋を覗くと１０人ばかりの中共兵と４人の女性がいた。但し、中共兵はイヤらしい笑い浮かべている。
直ぐに勇気は左手の指を１つ立てる、次に４つ。
頷くセルベリアと２名の陸戦兵を確認すると、勇気はドアを蹴り開けた。
驚いたのは中共兵だった…だが、勇気は容赦無しに６４式小銃の引き金を引いた。

ダダダダダダダダ！！
ダダダダダダダダ！！

ダダダダダダダ！！
ダダダダダダダダ！！

一拍遅れてセルベリアの６４式小銃も火を吹いた。
不意を突かれた中共兵が倒れる。

福本
「クリア！」

敵兵の制圧を確認した福本が叫ぶ。
陸戦兵が飛び込み、セルベリアが女性を安心させる。

福本
「……見えた…無線貸して！」

陸戦兵
「どうぞ！」

無線を受け取った勇気は直ぐに話した。

福本
「あ、先輩。先輩がよく見える家屋を掃討しましたよ。女性４名を保護…レイプしようとした模様。やはり、中共兵は民間人を巻き込んでいます」

山城の聞いた無線報告がこれだった。

その頃……カサラバード　王城

毛沢東
「どうだ、日本軍は？」

士官
「は、民間人を同行したゲリラ戦術により苦戦中です」

毛沢東
「ふむ、そうか…我々は民間人を盾にしているからな…日本軍はバカの様に国際法を守って強硬手段には出ないだろう」

…元の世界で日本軍がお人好しであり、国際法を守る事を知っている毛沢東。
ちなみに中共軍は平気で民間人を巻き込む……中国の戦史では人民が巻き込まれるのは当たり前であり、痛くも痒くも無い。

毛沢東
「だが……そうだ、民間人を集めろ」

士官
「はあ…如何様に？」

毛沢東
「なに、日本軍を更に撃てなくするだけだ」

次号へ

65　首都奪還戦　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

66　首都奪還戦　2

カサラバードに突入してから4時間後……日本軍はニジリニジリと抵抗を排除（＋民間人の保護）しつつ前進していた。
何せ、家屋に民間人がいるとなれば、イスラエルの様に家屋を戦車砲で吹っ飛ばす…イスラエル軍は吹っ飛ばすかもしれないが…と言う訳にはいかない。
とにかく家屋を一軒一軒調べ、中共兵を掃討すると言う気の遠くなりそうな事をやるしか無かった。

佐野
「どれぐらい進みました？」

山城
「そうだな…城まで残り半分はあるな」

佐野
「う～そ～だ～！！」

シルヴィア
「本当だ。愚痴ってないで前進しろ」

シルヴィアに否定され、、肩を落とす佐野。
本来ならそれほど時間が掛からない筈の城への道を敵兵を排除しながらだから余計に時間が掛かっている。
だから、愚痴りたくなるのは解る……しかし、相手がいるのだから、仕方ないのだ。

その頃……城内

士官
「日本軍は徐々に接近して来ます！」

毛沢東
「ふむ……では次の手を出す。用意しろ」

士官
「わかりました、同志！」

返事をすると士官は退室した。

毛沢東
「ふっふっふ…これには日本軍も撃てんだろう」

不気味な笑いを浮かべる毛沢東であった。

今井
「ん…大佐、あれを！」

山城
「なんだ……ちっ、ルール無視もここまでくると腹が立つな！」

ジリジリと進んでいた山城達の前に民間人の一団が……いや、中共兵が『盾』にしている民間人の一団が現れた。

数は…下を見ても２００人以上はいる。

大西
「くっ、天安門事件みたい出来ないからって…民間人を盾にするなんて！」

佐野
「これでは前進も攻撃も出来ません！」

シルヴィア
「奴らめ…ルール無視も程があるぞ！」

今井
「どうします！？」

山城
「……」

さすがの山城も民間人を盾にされては黙るしか無かった。

山城
「ちっ、吉本じゃあ無いが、首謀者の頭をかち割って脳味噌の中身を見てみたいね」

セルベリア
「…私は四肢を撃ち抜いていいよね？」

……なんとも物騒な言動だが、路地裏から盾にされた民間人達を路

地裏から見ながら呟いた。

セルベリア
「けど、どうするの？　城まで行けても、一個分隊でやれる事は限られてるけど？」

福本
「わかってる…だからと言ってこのまま居ても仕方ないし…下手にあの集団に手を出すと民間人が危険に晒されるだろう……とにかく動こう」

冷静に努めながら、勇気は城に向かうべく動き出した。

その頃……城内

毛沢東
「はっはっはっはっは！！　日本軍め、これで前進も攻撃も出来まい！！」

城から日本軍の困惑ぶりを正に高見の見物で見ている毛沢東。
しかし、彼はそれだけで終わらせる馬鹿では無かった。

毛沢東
「よし、城内待機の兵を出して日本軍を左右後方へ回り込み攻撃しろ」

士官
「しかし…それだと城の守りが…」

毛沢東
「心配無い。日本軍は一隊しかいないのだ。敵がこの城に来る可能性など万に一つとして無い」

士官
「……わかりました」

…この時、この士官は何かを忘れている様な気がしていた。
しかし、偉大な中国建国者に言う事に納得し、部屋を出て行った。

次号へ

66　首都奪還戦　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

67　首都奪還戦　3（前書き）

漸くレポートが終わりましたので本日より連日更新を再開します。

67　首都奪還戦　3

『……後に『カサラバード解放戦』と名付けられるこの戦いにおける山城正人海軍大佐の忍耐強さが目を惹く。何故なら、民間人を盾されても一歩も退かなかったからだ。後退もせず、攻撃もしない……これが中共軍の目を惹き、反撃への起点となった』

２０１５年発売　『シリルティア王国駐留軍戦記　第二巻』　著者　鈴崎綾音

カサラバード　城への道の１つ

佐野
「参謀長！　ここは一度後退を！」

山城
「……いや、現状待機」

副官佐野の意見具申を山城は拒否した。
無論、誰もが驚いた。

大西
「で、ですが！　このままだと前進も攻撃も出来ません！」

今井
「それに、このままだと左右の家屋や後ろに回られて、袋の鼠です

よ！？」

シルヴィア
「黙れ！！！！」

シーン……

シルヴィアの一喝に全員が沈黙。

シルヴィア
「現状待機と言ったのだから、現状待機だ！」

山城
「シルヴィア、言い過ぎ言い過ぎ」

苦笑しながら抑える山城。

シルヴィア
「それに、山城がここで現状待機と言ったのは何か考えがあるのだろう？」

この言葉に誰もが山城に視線を向けた。

山城
「……時を待つ、それだけだ」

佐野
「…それだけですか？」

山城

「それだけ」

……ある意味予想と違う言葉に誰もが唖然とするが、現状待機が命令で有るため、仕方無く配置に戻る。

シルヴィア
「……まさか、その言葉が出るとはな」

山城
「済まないね、期待を外して…それより、セイバー、君は何も言わなかったが、なんでだ？」

そう言って後ろに居たセイバーに訊いた。

セイバー
「私の任務は山城先輩の支援です。艦隊司令より先輩の命令に従う事になっておりますので」

山城
「おいおい…少し縛り過ぎやしないか？」

セイバー
「いえ、それが命令ですので」

少し固い…と思いながら山城は頬をポリポリと掻く。

シルヴィア
「まあ、それだけ信頼されていると言う事だ」

山城
「…されるのはいいけど、少し期待し過ぎだよ」

苦笑しながら呟いた。

その頃……福本隊

福本
「さて…城の前まで近付いたが…まさか、敵が出て来るところに鉢合わせか…」

家屋の陰に隠れながら、出撃の為に開かれた城門から出て来る中共軍部隊を見ながら呟いた。

セルベリア
「あの規模だと、私達の分隊規模で制圧は難しいわよ？」

福本
「わかってる。だが、このまま放置しておくのもな…」

確認出来る限り既に一個小隊４０人、堀に架かる橋の向こうの城門からも更に出て来るだろう。
つまり、正面切って突っ込めば文字通りの『玉砕』である。

パタパタパタパタ……

福本
「……あれは…ヘリ？」

セルベリア

「え？」

何処からともなく聞こえてきたヘリのブレードが風を切る音。
そして、福本達の前に現れたのは日の丸か書かれた『隼鷹』ことアパッチ戦闘ヘリだった。
隼鷹は搭載していた対地ロケット弾を集まっていた中共軍部隊に向けて発射し、掃討し始めた。

福本
「隼鷹が…いつの間に！？」

セルベリア
「あ、勇気！　上！　城門！」

福本
「…あれは黒鷹輸送ヘリだ…まさか、山県さんの部隊が到着したのか！」

『黒鷹』ことブラックホーク輸送ヘリが城門にホバリングして部隊を降ろしていた。

福本
「よし！　この期を逃す事は無い！　総員、行進射撃で敵を突破する！　続け！」

家屋の陰から真っ先に福本が飛び出した。

次号へ

67　首都奪還戦　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

68　首都奪還戦　4

カサラバード　城の上空

山県
「降下！　敵を早期に制圧し、味方を援護せよ！」

天守閣の塔でホバリングする黒鷹から完全武装の山県大尉が檄を飛ばした。
既に山城率いる首都奪還部隊が中共軍の罠により、行動しにくい状況で有ることを知っているだけに、山県大尉は直接殴り込む事にした。
そして、同じ様に黒鷹でローエン少佐は城内広場、ユリア隊長は城門の確保にあたっている。
更に支援の為、隼鷹戦闘ヘリがそれぞれ一機づつ付けている。

山県
「さて…敵の中共軍には色々と借りを返してあげないとね！」

慌て出て来た中共兵を見ながら６４式小銃を構えて叫んだ。

その頃……城門

ユリア
「やあ！！」

ズシュウ！

中共兵
「グハッ！？」

ユリア隊長のサーベルで喉を突き刺された中共兵が倒れた。
既に彼女の周りには同じ様な目にあい、骸となった中共兵が散乱している。

ユリア
「第一関門突破！　この勢いで城門を確保するわ！」

親衛兵
「「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」」

ユリア隊長を先頭に城門を奪取すべく親衛隊は階段を駆け降りた。

その頃……城内広場

ローエン
「周囲の確保を急げ！　味方の到着を援護する！」

こちらも同じ様に黒鷹で強硬着陸し、周囲の中共兵を掃討していく。
なにせ、城内広場とは言え、平時は練兵場やイベント事の会場として、有事では首都の国民の避難場、あるいは大型投石機を作って攻城軍に反撃しようとする為に作った為、かなり広い。
故に山県大尉達はこの広場に目を付けた訳だが…。

ローエン
「さて、こんな殴り込みは始めてですが…上手くいきますかね」

その頃……

福本
「うおおお！！！」

ズダダダダダダダ！！

城門前の中共兵に６４式小銃を乱射しながら城門に向かって走って行く。
その後ろからセルベリアと一個分隊が同じ様に乱射しながら付いて来る。
無論、当てるよりも、威嚇と牽制が主な目的だが。

セルベリア
「勇気！　抜けたわ！」

福本
「脱落者は！？」

セルベリア
「１人もいない！」

福本
「よし、このまま城門の中までまで突っ切れ！」

親衛兵
「隊長！　城門に近付く部隊が！」

ユリア
「なに…敵か！？」

親衛兵
「…いえ、あれは日本軍です！」

ユリア
「むう…山城大佐達は敵の罠で動けぬ筈…誰かは解らないの？」

親衛兵
「えーと……先頭は日本刀、二番目はサーベル、階級は2人とも中佐です！」

この報告に少し頭を捻ったユリアは直ぐに微笑んだ。

ユリア
「さすが山城大佐だ。別動隊が出ていた様だ…城門の制圧は？」

親衛兵
「はい、大方完了しました」

ユリア
「あの一団が入ったら急いで閉めろ。いいな？」

親衛兵

「はい！」

その頃……

兵士
「少佐、周辺の確保、終了しました！」

ローエン
「よし、打ち合わせ通り、信号弾の赤２つだ」

兵士
「了解！」

兵士が合図すると城壁に設置された花火の発射筒の様な筒から二発の信号弾が打ち上がった。

山県
「一丁上がり！」

ズダダダダ！

……お前は女かと問いたくなる様な言動で一室を制圧した山県大尉。

日本兵
「大尉、粗方この階は制圧しました！」

山県
「うむ、予定通りだ。このまま増援と共に城内を制圧する」

日本兵
「はい」

次号へ

68　首都奪還戦　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

６９　首都奪還戦　５（前書き）

今回は日本軍ヘリのオンパレードです。
チヌークは元々出す予定でしたが、ＯＨ－１はひろたろうさんの意見具申を採り入れました。

69　首都奪還戦　5

城内一室

毛沢東
「ええい！　何をやっている！　敵は僅かな兵力だろう！？」

士官
「は…ですが、敵兵は訓練を受けた強襲部隊でして…」

毛沢東
「ならば、兵力をぶつけろ！　城の守備兵をかき集めて対応しろ！」

士官
「ですが…その守備兵は既に大半が城の外に…」

毛沢東
「ぬぐぐぐ！　くそ、日本鬼の奴等め、騙したな！！」

士官
「（だから、城の守備が心配だったのに…）如何様に？」

毛沢東
「抗戦だ！　抗戦しろ！　城の外に出た兵も呼び戻せ！！」

士官
「…わかりました」

後ろから侮蔑を込めたのしし る叫び声を聞きながら士官は出ていった。

福本
「久しぶりに走りながら乱射したよ…」

セルベリア
「本当に…久々にスリル満点だった」

滑り込むかの様に城門へと突っ走って入った福本達は戦場であるのにも関わらずまるで演習後の後かの様に小休止していた。

ユリア
「いやいや、上から見させてもらいましたが、さすが山城大佐の後輩でございますね」

福本
「あ、ユリアさん…と言う事は城門確保班は親衛隊ですね」

ユリア
「えぇ、ローエンは広場、山県大尉は天守閣を直接乗り込んでいるわ」

セルベリア
「うふふ、山県さんらしいわね」

福本
「あぁ…さて、山県さんと合流しよう」

そう言うと立ち上がり、直ぐに天守閣に向かって駆け出した。

兵士
「……来ました！　白鷹（チヌーク）です！」

二機の隼鷹戦闘ヘリの護衛を受けながら、三機の内、一機の白鷹が無事に城の広場へと着陸した。
そして、開かれた後部扉から山県大尉指揮下の完全武装三個分隊３０名が出てきた。（残り一個分隊は山県大尉が率いている）
広場とは言え、城壁などの建造物を考えてチヌークは一機づつの着陸である。

ローエン
「いやはや…こんな風に城を攻められては、難攻不落の城塞なんて幻想に過ぎないとつくづく解りますね」

自分達の部隊を乗せたチヌークが着陸するのを見ながら呟いた。

その頃……カサラバード上空

ブーーーーン……

シリルティア王国方面からやって来た５つの影があった。
それはシリルティア王国軍が誇る飛行船の『クジラ君一号』。

今回は空爆ではなく、シリルティア王国軍では最初の試みを行うべくここへやって来たのである。

指揮官
「風向き、よし。速度、よし……今だ！　空挺開始！！」

待ってましたとばかりに次々と飛行船の外へ飛び出すシリルティア王国軍『第一特別（空挺）中隊』。
クジラ君一号には乗員２０名の他に４０名の人員が搭乗可能な為、シリルティア王国唯一の航空輸送方法だった。
ゆっくり進む飛行船に、これまたゆっくり降下する空挺隊。
戦場には似合わない光景……だが、それはシリルティア王国軍が踏み出した大きな一歩であった。

……そんな空挺隊を見守る者がいた……無論、日本軍だ。
７０式観測ヘリ…自衛隊のＯＨ－１…『忍者』だ。
ただ、この『忍者』は日本陸軍が派生開発した…俗に言う『武装強化型』で、機首下部に固定・限定旋回の２５ｍｍ機関砲、対空ミサイルラックには７０ｍｍ１２連装ロケット弾ポッド×２の対地攻撃・支援バージョンである。
まあ、今回も実戦で飛ばせればよし、戦えれば更によし…なんて言う状況だったが……。

その頃……城内（天守閣）

ズダダダ！

福本

「関門突破！」

天守閣の入り口で中共兵と撃ち合っていた福本達が突入していた。

次号へ

69　首都奪還戦　5（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

70　首都奪還戦　6

その頃……山城達は……

佐野
「参謀長！　山県大尉が黒鷹に天守閣へ降下、現在戦闘中！　更にローエン少佐、ユリア隊長は城内広場及び城門の確保を完了したとの事です！」

司令部用無線にかじり付いていた佐野が報告した。
その報告に山城が苦笑した。

山城
「まさか、整備に時間が掛かってしまった事が、中共軍に隙を作ってしまう事になるとはな」

そう、本来なら、首都奪還部隊が首都内で戦闘を始めたと同時に山県大尉率いるヘリ強襲部隊が城を強襲する筈だった。
しかし、肝心のヘリの調子がおかしく、もう一度整備していた為、首都奪還部隊とは時間的にズレてしまったのだ。

山城
「大西、前方に変化は？」

大西
「残念ながらありません」

双眼鏡で様子を見ていた大西が悔しそうに返答した。

山城
「…まあ、焦らずに待つか」
命令に変更の無い事を示しつつ、時を待つ山城だった。

その頃……城内

福本
「山県さん！　何処ですか!?」

何回目かの６４式小銃の弾倉を換えながら、勇気は山県大尉を探していた。
最初に地下……当然、地下は倉庫か地下牢……に向かい、倉庫を検索してから地下牢に向かった。
そして、地下牢にいた一個分隊を１０秒で片付け、閉じ込められていた民間人の牢を片っ端から開け放ち、民間人の保護をローエン少佐とユリア隊長に頼み、そこから続けて二階、三階を制圧しつつ山県大尉を探し、遂に四階に辿り着いた。

セルベリア
「…なんか、私達の制圧速度早く無い？」

福本
「…多分、敵兵が少ないからだろう」
同じ様に四階を検索する勇気とセルベリア（＋分隊）。

ガサッ！

福本
「！誰だ！？」

僅かな物音に福本、セルベリアを含めて全員が６４式小銃を向けると、その先にいたのは中共兵と……人質にされた女性だった。

中共兵
「おら、退け！　この女の頭が吹っ飛ぶぞ！」

セルベリア
「それはこちらのセリフよ。今すぐ、銃を捨て、女性を離さないと、あなたの頭が吹き飛ぶわ！」

実際、まさかこんな刑事ドラマのワンシーンをやる事に成るとは思わなかったが……つーか、こんなのによく巻き込まれている様な気がする。
しかし……どうやら女性は気絶しているのかピクリとも動かない。
いくらなんでも、目が覚めたら天国……なんて事にはしたくない。

中共兵
「くそ！　早く退…」

タンタンタン！！！

福本達には聞き慣れた６４式小銃の単発射撃が終わった直後、中共兵は前のめりに倒れる。
その前にセルベリアが人質となっていた女性を保護していた。

山県
「今度は後ろにも注意しておきなさい」

福本
「山県さん！　探しましたよ」

山県
「やっぱり、福本少佐だったのね。声が異様に響いてたわ」

福本
「ありゃりゃ…城と言う空間故に響き過ぎましたかね？」

笑って応える勇気。

山県
「うふふ…ところで、そっちはお山の大将らしき人間は見付けた？」

セルベリア
「いいえ、この階以外には部屋を隈無く見てみましたが、そう言った人間は1人も…」

山県
「そう…となると、あとはこの階だけね」

福本
「なら、手分けして検索しましょう。どうせ、敵はどうするか迷っているでしょうし」

山県
「そうね。そっちが手早いわね」

次号へ

70　首都奪還戦　6（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

71　首都奪還戦　7

天守閣内　元国王私室

ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！

陽当たりの良い場所に造られた国王の私室……今は毛沢東の私室……まで銃撃戦の音が聞こえる様になった。
しかも、時間が経つにつれ、激しく、大きくなっていく。
つまり、防御側が押されていると言うことだ。

中共兵
「敵は二個分隊規模ですが、敵に勢いがあり、我々のみでは抑えきれません！」

毛沢東
「くそ…城外に出した守備兵はどうした！？」

士官
「ダメです。城門が敵部隊に占拠され、門が閉じられてしまいました！　更に敵は大型ヘリのピストン輸送で兵力を増しており、これ以上は…」

実際、出現時には大兵力だった中共軍もシナノ平原に手を出した為、兵力及び重火器を取られ、カサラバードの守備兵力はかなり落ち込んでいた。

更にこの少ない兵力を活かす為、少人数のチームによる市街戦により、敵に出血を強いる予定だったが、城に乗り込まれた為、僅かな守備兵力、しかも、城内に分散配置していたから、各個撃破されると言う笑えないオチでズタズタにされていた。
更に言うなら、まさか飛行船で空挺部隊が空挺降下し、市内の制圧に乗り出していたと知れば、いったいどんな議論展開になっていただろうか？

毛沢東
「…さすがに潮時か…脱出する。時間を稼げ」

士官
「わかりました」

敬礼すると士官が出ていった。

毛沢東
「…大丈夫だ。この世界は王国が多い…共産主義は広めやすいだろう」

その頃……福本達は……

ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！

福本

「ここまで抵抗すると言うことは、この奥に大将が居る事は確実ですね」

山県
「そうね…まあ、さっきから徐々に撃ち減らされているから、もう少しだと思うけど…」

セルベリア
「窮鼠猫噛むの諺もありますしね」

中共兵と撃ち合いながら一歩一歩と前進する福本達。
実際、撃ち倒された中共兵の死体が廊下のそこかしこにある。

山県
「…それにしても、中共兵がここまでするんだから、余程の大物ね」

福本
「ですね。もしかしたら、彼らの歴史の教科書に名前の載る人物かもしれません」

だとすれば……いったいどれ程、こちらの知識が活用出来るか微妙になってくるが…。

セルベリア
「あ、敵兵が…あのドアに向かって後退する！」

福本
「山県さん！」

山県
「うん、総員撃て！」

ダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダダ！

山県の指示の下、一斉に６４式小銃が放たれる。
だが、何人かを撃ち倒したが、扉を閉めるのは阻止出来なかった。

山県
「ちっ、一歩遅かったわね」

セルベリア
「それより…この扉、妙に頑丈よ？」

福本
「多分、逃げる時間を稼ぐ為にわざわざ頑丈に作ったんだよ」

扉を軽くノックし、音から頑丈さを推測しながら勇気が呟く。

セルベリア
「まあ、昔はこれで精一杯でしょうね」

山県
「じゃあ、派手に吹っ飛ばす？」

福本
「吹っ飛ばしちゃいましょう。どうせ、邪魔ですから」

その頃……

佐野
「あ…参謀長！」

シルヴィア
「なんだ、どうした？」

佐野の鋭い叫びに誰もが前を向くと、いつの間にか盾にされていた民間人達がこちらに背中を向けていた。
そして……

「「「「「ギャアアア！！」」」」」

……断末魔の様な叫びが響き渡った。

大西
「……いったい…なにが…」

今井
「あの叫びから察するに……見張りの中共兵がなぶり殺しにあったな…」

山城
「……」

首都奪還部隊の間には何とも微妙な空気が流れる。

シルヴィア

「む…市民達が…道を開けたぞ！」

見ると、確かに民間人達が左右に寄って道を開けている。

佐野
「どうします、参謀長？」

山城
「…迷っている暇は無い。あの中を突っ切れ！」

次号へ

71　首都奪還戦　7（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

72　首都奪還戦　8（前書き）

漸く『アッデュラー王国戦役』の終了です。
次は『謎の日本艦隊』、その次は第七艦隊増強編です。（予定）

72　首都奪還戦　8

城内　毛沢東私室

毛沢東
「あの扉は大丈夫なのか？」

士官
「はい。鉄の扉で破るのでさえ、かなりの時間を掛ける代物です」

毛沢東
「そうか…うむ、時間が無い。脱出するぞ」

ドガーーン！！！

いきなり頑丈な筈の鉄の扉が吹き飛んだ。

その時……福本達は……

山県
「さ～て、景気良く吹っ飛ばすわよ！！」

威勢の良い声を上げる山県大尉。
４０式携帯歩兵砲ことＭ７２ＬＡＷを構えた山県隊の兵士が鉄の扉に照準を合わせている。

福本
「本当に山県さん……全然変わりませんね」

山県
「あらあら、私からしても、あなたは変わらないわ……訂正、許嫁兼恋人がいる事以外はね」

福本
「…山県大尉…」

セルベリア
「…どうしたの？」

山県
「別に～♪♪」

福本
「…さっさと瓦礫か屑鉄にして下さい。あの扉をね」

微妙に呆れか恥ずかしさを交えた声で呟いた。

山県
「よし、撃て！！」

シュポーン！

シュルルルルル……

ドガーーン！！

さすがは元対戦車携帯ロケット砲……鉄の扉を易々とぶち抜いて、鉄の扉を破壊した。

山県
「よし、グレネード用意！　行くわよ！」

毛沢東
「くそ……日帝軍め…」

爆発の衝撃で吹き飛ばされた毛沢東は壁に叩きつけられていた。いくら戦車より広い部屋の中とは言え、頑丈に造られた国王の部屋の為、爆風が中に籠ってしまっていた。無論、一部はガラスが割れた窓から外に出たが、殆どが部屋の中で暴れた為、まるで竜巻にあったかの様な荒れようだ。

ドタドタドタドタ！！

部屋に踏み込んで来た団体を見て毛沢東は驚いた。
何故なら、彼が知っている日本軍ではなかったからだ。
日本軍と言えばカーキ色の軍服、軍帽の上に鉄兜だが、入って来た日本兵達は鉄兜以外はまるっきり違う……あえて言うなら中共軍と似た様な格好だった。

毛沢東
「くっ…日帝軍か？」

福本
「あれは……毛沢東！？」

吹き飛ばした扉から踏み込んだ福本達の視線の先には戦史や日本史の授業で見た事のある毛沢東の姿があった。

セルベリア
「じゃあ、今回の騒動の親玉は…」

福本
「あぁ、間違い無いだろう」

山県
「まあ、解らないでもないわ。毛沢東なら、中共軍にとってここまでして守る価値はあるわね」

中国共産党が勝った歴史だからこそあり得る話だろうが…。

山県
「さて、えーと…毛沢東、今すぐ武器を棄てて投降しなさい。さもないと本気で…」

ピシッ！

福本
「ん……しまった！　危ない！！」

慌て山県大尉の襟を掴み、後ろに引き倒すかの様に後ろに引っ張った。

すると……

ガッシャーーーン！！

…上に吊り下げられていた照明用大型円形燭台が落ちてきた。

セルベリア
「……あの位置だと、今頃、山県大尉は良くても重傷を負っていますね」

山県
「…さらりと怖い事を言ったわね…あ、毛沢東のデブは！？」

福本
「（確かに太いけど）……どうやら、秘密の通路から逃げた様ですね」

視線の先にある装飾された壁に開いた扉を見ながらた勇気が言った。

山県
「螺旋階段？」

セルベリア
「いえ、普通の階段です」

扉の中を覗いたセルベリアが答えた。

山県
「…（ピン・ピン・ピン）死ね！！！」

一気に3つの手榴弾のピンを抜いて、階段の下へと次々に放り込む。

福本
「あ、あの…山県さん？」

山県
「死に掛けたから…制裁！！」

セルベリア
「…微妙に関係無い様な…」

ドーン！ドーン！ドーン！

数時間後……

山城
「……まあ、大体わかった。で、毛沢東は？」

城内に入って来た首都奪還部隊と合流し、山城に今までの報告をしていた勇気。

福本
「いや…実は……」

シルヴィア
「なんだ？　逃げたか？」

セルベリア

「……後頭部に大量の手榴弾の破片が刺さっていました」

山城

「……わかった。ありがとう」

……こうして、アッデュラー王国首都カサラバード奪還作戦は終了した。

次号へ

72　首都奪還戦　8（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

73　機動艦隊の正体

4月10日（シリルティア王国4月17日）

アッデュラー王国戦役の終了後、第零・七艦隊及びその指揮下の部隊はＰＫＯとして派遣されて来た日本帝国軍に受け継ぎ、ラバナスターへと帰還していた。
そして……事務処理を終わらせた山城に届いたのは……

ラバナスター

タンタンタンタンタン……

天城から一艘の内火艇が港内に停泊する空母に向かっていた。
カッターには山城、シルヴィア、福本、セルベリアのメンバーだ。
そして、向かう先は一隻の空母……船体に『鳳翔』と書かれた空母。
タラップを昇り、艦橋までやって来た山城達を迎えたのは……

「あら、その様子だと、私達の身の振り方が決まったみたいね」

艦橋で出迎えたのはこの転移してきた『日本国防軍第三機動艦隊』艦隊司令の君塚梓中将（きみづかあずさ）…名前の通りの女性だ。

山城

「国防省及び連合艦隊司令部からです。旗艦鳳翔以下『第三機動艦隊』の１２隻は第零艦隊の指揮下に編入する…以上です」

淡々と述べる山城。
言い終わると口を開いたのは君塚司令だった。

君塚
「まあ、今まで通りにやっちゃっていいのね？」

山城
「えぇ、まあ…貴重な戦力ですので」

苦笑しながら肯定した。
実際、予備機２０機を含め８５機搭載の８万５０００トン通常動力空母『鳳翔』を筆頭に、改鞍馬型巡洋艦『羽黒』、イージス巡洋艦『大淀』高波型駆逐艦６隻、秋月型駆逐艦２隻、補給艦１隻の艦隊編成である。

山城
「それと、新たに艦艇を配備するかもしれないので、悪しからず」

君塚
「はいはい。じゃあ、みんな、無礼講で宴会よ！！」

乗員
「「「「「「「「「「おおう！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

山城
「さて…素早く退散するか」

そう呟くと山城達は気付かれない様に艦橋から出て行った。
ちなみに……君塚司令はかなりの酒好きである。

山城
「……なんとか逃れられたな」

天城に帰った山城は一息吐いて呟いた。

福本
「お疲れ様です。確か一度、君塚司令と飲まれた事が有るとか」

山城
「ペースを合わせるのが大変だよ、あの人は……お前もその内に解る様になるさ」

福本
「ですね」

ちなみに……君塚司令達の世界はどちらかと言えば自衛隊と似た様な歴史を歩んでいた。
ただ……ソ連が最初の約束を破り、ヨーロッパ方面でベルリン以南へ攻め込んだ事、アジア方面で朝鮮半島に侵攻し、中国へ過度の軍事介入をした事で大日本帝国は降伏はしたが直ぐに陸海軍の空母葛城を含めた残存艦艇や残存兵力での国軍保有を認められた。
無論、紆余曲折があったものの、日本は軍隊を持ちながら存続、ソ連崩壊後は共産党国家となった中国と睨みあっていたそうだ。
そして、中国空母機動部隊を撃滅する為に出撃したら……嵐にあって転移したとの事だ。

山城
「そう言えば、そっちも帰還命令が出てたよな？」

福本
「えぇ、旅順軍港に…当分、あっちこっちを走り回される様な気がします」

山城
「そうか……なら、今日は早めに抜けるか？」

福本
「どうしましょうかね……先輩と後輩なら付き合いますよ」

山城
「艦隊総参謀と艦隊司令だと、ダメか？」

福本
「いいですね。では、後で」

山城
「あぁ、後で」

数時間後……日本人街

福本
「では、乾杯」

山城
「あぁ、乾杯」

日本人が経営する居酒屋でお互い日本酒で乾杯する。

福本
「こんなお店をご存知とは…先輩、趣味でも変わりました？」

山城
「違う違う、親父と小澤長官が見付けて連れて来られた事が有るんだ」

福本
「あぁ～、なるほど」

笑いながら勇気は納得した。

山城
「それより～、お前、約束を忘れて無いだろうきな？」

福本
「『結婚式の件』でしょう？　覚えてますよ。ちゃんとね」

山城
「なら、何時にする気だ？」

福本
「今は忙しいですから、そんな直ぐには…」

山城
「だ～あ、お前はヤマトの古代か?」

福本
「なんでそうなっちゃうんですか～」

次号へ

73　機動艦隊の正体（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

７４　復活の変態　コンビの艦長

４月１４日　旅順軍港

薩摩・土佐をドックに入渠させ、その足で内火艇に乗り込んだ福本達。
しかし……

福本
「……気が重いな」

セルベリア
「そうね…重いわ」

遠地
「…なんでだろうな？」

セイバー
「……これから向かう所が原因ね」

島津
「あはは…確かに」

大谷
「しかし…任務だからね」

長門
「……」

……さて、なぜ第七艦隊のメンバーが重い空気なのかと言うと、これから行く所に問題があった。
港内に停泊している一隻の空母……第七艦隊に編入される空母なのだが……全員が昨日届いた通知を読んだ瞬間、苦笑しか浮かんでいなかった。
そう…なんと言う因縁で有ろうか……二重の意味で……

空母艦橋

重くなりそうな足を動かしながら7人は艦橋へと上がった。
そして、艦橋に入った瞬間……

「久し振り～！！　元気だった～！？」

ギュゥゥゥゥゥ……

…少佐の階級章を付けた豊乳女性将校が福本に抱き付いた。

「ん、お～い、福本くん？　何か答えてよ～」

福本
「……離せ…死ぬから……」

「え……あぁ、ごめんごめん！」

まるで絞り出すかの様な声に漸く解ったらしく、その女性将校は福本を離した。

福本

「ぷはあ！！　水城！！　その内、お前を上官殺害未遂で訴えてやるからな！！」

「いや、本当にごめんなさい！」

……この水城美妃（みずきみき）少佐（２０歳）はＦカップの豊乳女性将校。

７組の福本達とは同期生（水城は６組）で、在学中に神戸士官学校の宣伝に色々とやったもんだから、付いたあだ名が『神戸のゲッペルス』（ネタ元は大帝国のゲッペルス宣伝相）。

なお、本人の神戸士官学校への入学理由は「マネージャーは護身術ぐらい出来ないとね♪」……と言う訳の解らん理由。

但し、独自の戦略眼（あるいは経営眼？）を持っており、福本もそれは認めている。

ただ……趣味に欠点が……

「パンパカパーン！！　海龍の復活だよ～！！」

……そして、もう１つの理由である……この空母の名前が『海龍』である事……。

福本

「…ある意味、これが夢であってほしかったよ」

遠地
「あぁ、悪夢であってほしかった」

島津
「だが…これが現実なんだな」

セルベリア
「しかも水城の趣味がコスプレ…作って着るのもオッケーだけど、女の子に着せるのも好きなんて…」

セイバー
「海龍が伊東先生の大和なら…水城は零戦先生の翡翠…」

大谷
「『新米士官の大和と翡翠』のコンビ結成とは…」

6人
「「「「「「「はぁ～～～～……」」」」」」」

……もうお分かりだろうが、これが足取りの重かった最大原因である。

海龍
「お～い、みんなノリ悪いよ？　せっかく、私が復活したのに～」

福本
「出来ればもう一度封印したいよ」

水城

「えー！　それはダメ！　絶対ダメ！」

海龍
「そうだ！　そうだ！　人権守れ～！」

遠地
「なら、おまえら共通のコスプレを抑えてくれと言って出来るか？」

海龍・水城
「「う…（ー＿ー；）」」

福本
「…まあ、その話は後だ。それより、例の『あれ』は大丈夫なのか？」

水城
「あぁ、やっぱり気になる？　あれが？」

大谷
「今回、海龍に来た理由の８５％はそれだからな」

水城
「わかったわ。こっちも試そうと思ってたしね」

しばらくして……飛行甲板に一機の雷風が出され、カタパルトに載せられた。

パチパチパチ……

パシャァァァァン！！

静電気の様な音が聞こえた後、勢いよく雷風が空へと飛び立った。

福本
「…あれがリアルカタパルト…か？」

水城
「えぇ、我が海軍が世界で始めて実用化したリアルカタパルトがこの海龍に載ってるんだから！」

海龍
「見たか！　これが私の実力だ～！」

長門
「……どちらかと言うと、渡瀬さんの努力の賜物」

遠地
「確かに、作ったのは渡瀬だからな」

島津
「お前は載っけてるだけだろう、海龍」

福本
「…まあ、とにかく、海龍と水城は大人しくしておけよ」

水城・海龍
「「は～～い」」

セルベリア
「……大丈夫かしら」

次号へ

７４　復活の変態　コンビの艦長（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

75　最古参と義妹（前書き）

海龍
「アーハッハッハッハ！　この前書きは我々『新米士官の大和と翡翠』が乗っ取ってやったわ！」

水城
「どうせ、書くことあんまり無いしね～♪　では、その第一段！　どうぞ！」

2人の後ろにあった幕が上がり、出て来たのはメイド服に猫耳・猫尻尾のセルベリア。

セルベリア
「ちょ、ちょっと、本当に大丈夫なんでしょうね！？」

水城
「大丈夫、大丈夫！　これなら、勇気も…」

バン！！

福本
「おい！　海龍に水城！　前書きを乗っ取って何を……セルベリア？」

水城
「はい、セリフ！！」

セルベリア

「え、あ、ご、ご奉公しますニャ～♪」

福本
「……ブウゥゥゥ！！！」

海龍
「…鼻血を吹く…効果満点ね！」

水城
「こんな風にお送りいたしま～す」

セルベリア
「そんな事はどうでもいいから、勇気を助けなさいよ！　勇気～！」

福本
「……（気絶中）」

75　最古参と義妹

4月16日　旅順軍港

福本
「予定通りに来たな」

セルベリア
「余程2人が嬉しかったのかもね」

双眼鏡で眺める2人の視線の先には三連装4基の主砲を備えた二隻の大型艦が旅順軍港に入港していた。

セルベリア
「さて、早く行かないと、後で怒られるわよ」

福本
「確かにね」

そう言うと福本とセルベリアは乗って来たマウンテンバイクに跨がった。

……さて、微妙に横道に逸れるが、第七艦隊に日本海軍の『最古参』とも言うべき3人の艦魂がいたのを憶えておられるだろうか？
内2人は室蘭にいる『春日』・『日進』である。
そして、最後の1人……未だに日本海軍に所属し、一番艦の『義妹』

と共に歩みを続けた『世界最強の重巡洋艦』……それが『義妹』を伴い旅順軍港へと遣って来たのだ。

港内

「義姉さーん」

「ん…六甲か」

重巡洋艦畝傍の元防空指揮所で艦魂の畝傍と義妹の六甲が居た。

六甲
「久しぶりの旅順だね♪　やっと帰って来れたね～♪」

畝傍
「……そうね。久し振りに第七艦隊に帰って来たわ」

六甲
「……へっ？　あれ？　私と義姉さんが受けた命令は旅順への帰還で…」

畝傍
「六甲、長い間、戦隊旗艦の職にいなかったからって、気が緩み過ぎよ。帰還任務の為だけに、最低定数だった乗組員を定数にして、上は艦長から下は機関員まで２０代の若手に変えたりしないわ」

六甲
「……あ、確かに…乗組員の年数が低くなってた…」

畝傍
「うふふ…７０年前の事を思い出すわ…あの時と一緒ね」

あの頃の事を思い出し、思い出に浸る畝傍。

「では、差し詰め私は祖父の役柄ですか？　私には適役かは解りませんけど」

その声に振り向いた畝傍と六甲が見たのは、セルベリアを連れて上がって来た勇気だった。

六甲
「……あ、え、えーと…福本元帥…？…じゃあないよね…」

福本
「…ありゃ、祖父みたいに格好をつけた気は無いんですが…」

半分パニックの六甲、六甲の反応に困惑する勇気。
だが……『最古参』の畝傍は冷静だった。

畝傍
「お噂はよく聞いています。福本勇気中佐」

福本
「う～ん…出来れば福本か勇気でお願いします」

畝傍
「そんなところも福本元帥と一緒ですね」

福本
「おやおや、これでは私の行動は全て読まれてしまいますね」

苦笑しながら勇気は呟いた。

薩摩艦内艦長室

福本
「どうぞ」

畝傍
「うふふ、ありがとうございます」

六甲
「ありがとう」

福本
「いえいえ、あ、セルベリア。君の分」

セルベリア
「ありがとう…う～ん、美味しい～♪」

……薩摩の艦長室で紅茶を飲む４人。

畝傍

「…こうしていると、福本元帥を思い出しますね……そう言えばこれは…」

福本
「気付きました？　イギリスの同級生が送って来てくれるインド産の紅茶の茶葉なんですよ」

畝傍
「あら…やはり本場は違いますね」

福本
「あはは、そうですか。紅茶入れるぐらい、艦隊編成も上手くいけばな…」

六甲
「……何かありました？」

福本
「いえ、別にそんな…」

その時……

海龍
「福本長官！　今日こそは……し、失礼しまし…」

ガシッ

畝傍
「あら、海龍、久し振りね。元気…よね？」

海龍
「あはは…はは……」

畝傍を見て艦長室から出て行こうとした海龍を畝傍が捕まえた。

畝傍
「その様子だと、セルベリア中佐にコスプレさせようとしているわね……けつバット決定ね」

海龍
「にゃにゃあ!?　そ、それだけは…」

畝傍
「では、福本長官。少し自分は行ってきます」

福本
「え、えぇ、どうぞ」

海龍
「や、やめ…」

次の瞬間、畝傍は海龍を抱えて転移した。

セルベリア
「……これで当分は大丈夫そうね」

福本
「まったくだ。お陰で縛られずに済む」

六甲

「あれ、何処かに行っちゃうんですか？」

福本
「えぇ、人材集めにね」

次号へ

75　最古参と義妹（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

76　飛び級少女とアンドロイド　上（前書き）

さて……アンドロイドを出したが果たして大丈夫だろうか？
微妙に不安（読者の反応が）。

……いや～、本編と関係無いけど、日本人ってもう少し利口だと思ってた……うん…。

山城
「…どうしたんだ？　作者は？」

福本（勇気）
「えーと…花火に続き、今度は大阪での橋の工事が、福島県の業者が関わってるからって、放射能の心配とか言う奴らの声で休止中と言う件で……」

山城
「…はあ？　橋？　食品ならイザ知らず…そこまできたら病気だぞ」

福本
「ですよね。まったく…」

76　飛び級少女とアンドロイド　上

4月18日　帝都
国防省職員宿舎

福本
「親父と言い、井上さんと言い、なんでこんな事は得意なのかね？」

セルベリア
「まあ、何時もの事じゃあない」

4月の昇進・人事異動で連合艦隊司令長官に転任した福本伊吹大将の後任として神戸鎮守府司令だった井上政美中将が就任、国防省海軍次官室の井上中将に挨拶へ行った福本・セルベリアに井上中将は福本長官からの預り物と言って受け取ったのが、ある『手配書』だった。
そして……その『手配書』を基にこの職員宿舎に来た訳だが……

福本
「しかし……うちの親父は何をさせようとしているんだろうな？」

セルベリア
「その手配書の事？」

何せ手配書には『下記の者と接触し、可能ならば身柄を預かる様に取り計らえ』…と書かれていたからだ。
果たして、これを手配書と言うのかどうか…。

セルベリア
「そもそも、国防省職員って、軍属扱いじゃあないの？」

福本
「あぁ、故に公務員であり、人事も国防省人事課の範囲だけど……
この手配書はそんな風には読めないし…」

どちらかと言えば軍事機密を知られたから、どうにかしろ……なん
てみたいに言っている様なものだ。
そもそも、なんで職員宿舎に居るんだ？

セルベリア
「まあ、とにかく、行って接触すせばいいんでしょう？」

福本
「まあ…そうだけどね」

職員宿舎内　ある一室の前

コンコン

福本
「すみませ～ん。日本海軍の者ですが、居りますか？」

セルベリア
「…何があったかは知らないけど、用心深いのかしら？」

福本
「うーん…留守…な訳ないよな…」

まあ、一般民間人が国防省職員宿舎に匿われる（？）ぐらいだから、どっかに出掛けて……なんてのは無い筈だ。

「日本海軍の福本勇気中佐とセルベリア中佐ですね？」

ドアの前で困惑する勇気達に声を掛けたのは１８歳程の少女だった。ただ、気になるところは両耳のところに円盤形の機器と短いアンテナらしき物がある事。

福本
「ん、あぁ、そうだけど」

「歩美より事の次第は聞いています。付いて来て下さい」

セルベリア
「歩美…と言うことは…」

福本
「付いて行くしか無いね」

ガラガラガラガラ…

「歩美、お連れしました」

ガレージを開けると1人の白衣を羽織った少女が机に向かって何かを書いていた。

福本
「綾崎歩美（あやさきあゆみ）さんですね？　連合艦隊司令長官福本伊吹大将の息子で中佐の福本勇気です」

セルベリア
「同じく中佐のセルベリアです」

すると少女は書くのを止め、椅子を回した。

「お待ちしていました。私が綾崎歩美です…えーと…私の話はどこまでされていますか？」

福本
「いえ、まったく…ですが、その白衣から見て理系の人間だと思いますが…違いますか？」

綾崎
「はい、私はある理系大学で飛び級ながらロボット工学を学んでいたんです。そこでお世話になっていた教授からあるプロジェクトの一員に加えてもらいました」

セルベリア
「失礼かもしれないけど何歳？」

綾崎
「4月4日生まれですから、18歳です。大学に入ったのが2年前

ですね」

……正に飛び級だ。

福本
「待てよ……ふむ、確かアッデュラー戦役前にアンドロイドプロジェクトのデータがハニートラップに引っ掛かってデータが流出した事で騒いだけど…この件だね？」

綾崎
「えぇ…ですが、このプロジェクトに関わっていた福本次官が私と初号機のレイナを匿ってくれて…」

セルベリア
「レイナって…あのが子！？」

何故か壁に引っ付いている案内してくれた少女を見た。

次号へ

76　飛び級少女とアンドロイド　上（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

77　飛び級少女とアンドロイド　下（前書き）

海龍
「前号の前書きは作者の勢いに負けたけど、第二弾！！」

水城
「早速いっちゃいましょう！　どうぞ！！」

合図と共に開いた幕に居たのはゴスロリ衣装のシルヴィア。

シルヴィア
「おい！　こんなのを着せて何を」

バン！

山城
「海龍！！　水城！！　前書き占拠の上、福本を……シルヴィア？」

シルヴィア
「正人！　あいつらを何とかして！」

ガバッ！

抱き付いたもんだから……

山城
「……（プツン）…バタン！！」

佐野
「うわ！　艦長！？」

海龍・水城
「「威力は抜群ね」」

77　飛び級少女とアンドロイド　下

福本
「まあ、耳の部分が気になっていたが…本当に開発したんだな」

アンドロイドの『レイナ』を見ながら勇気が呟いた。
なにせ、耳の部分の円盤形機器と短いアンテナを除けば完全に人間の女の子である。

綾崎
「大きいのはアーヴからのロボット技術が入ってきた事です。後は日本のロボット技術とフィギュア技術などを加えて改良したのがレイナです」

つまり、アーヴ技術が開発を前進させた原因……なのだが、セルベリアの顔は少し複雑だ。
事情を知る勇気はあえて何も言わないが、アーヴのロボット技術は元々戦闘用自律ロボット開発の為に進んだ（実戦使用前に母星が滅んだ為、実戦使用はしていない。）成れの果てだ。
しかし、そこに日本人が『鉄腕アトム』や『ドラえもん』で自然と持った『友達意識』を梃子にロボット開発を進め、最終的にアンドロイドにアーヴ技術が転用されるとはある種の皮肉である。

福本
「う～ん……見れば見るほど、耳以外は人間そっくりだよね…」

レイナ
「……あの…」

福本
「ん、なに？」

レイナ
「そうジロジロ見られますと……恥ずかしいのですが…」

福本
「あ、ごめんごめん！　やり過ぎました」

セルベリア
「あ…まさか、感情も有るわけ！？」

綾崎
「はい。１年程掛けて少しづつ…特にこの数ヵ月は顕著に現れています」

あっさりと言いのけたが、セルベリアなんか唖然としている。

福本
「うーむ…ここまで作ってしまうとは…改めて日本の技術者の凄さを感じるな」

まったくだ。

綾崎
「それで…私達はどうなるんですか？」

福本
「どうなるって…弱ったな…」

実際、研究員のハニートラップ騒動により、アンドロイド開発プロジェクトは休止状態であり、開発関係者は軍の保護状態である。
だが……初号機であるレイナと綾崎の場合は微妙に状況が異なり、彼女達は計画の中心であり、誰かが手を回して、親父（福本長官）に保護させたのだろう。
無論、『身柄をどうにかしろ』と書かれていた為、多少の事ならどうにかするつもりだったが……

綾崎
「何か…問題でも?」

福本
「問題と言うか…先程言いました通り私達は海軍です。そして、私は小さいながらも艦隊を預かっています。あなた方の事情は解りましたが、軍艦に乗る以上は覚悟はして欲しい……これが言いたいだけです」

いくら昔よりも快適になったとは言え、軍艦である。
果たして、ちゃんとした訓練を受けて無い人間が乗れるかどうかは保証は出来ないのだ。
それを事前に伝えずに乗って本人達が不快な思いをするよりはマシである。
それに、この2人なら友人伝を使い、陸上勤務も可能であろうし……。

綾崎
「……構いません、乗ります」

レイナ
「私も…歩美が乗るのなら」

セルベリア
「…こう言ってるけど、どうする？」

福本
「…嵐がきても知りませんよ。さて、そうなるとレイナさんの点検機器などを運ぶ必要が有りますが…全て大学の方に？」

綾崎
「はい。ここにあるのは簡易用なので」

セルベリア
「なら、これも運ばないとね」

……なんだが、引っ越しとかと言うレベルで済むかも怪しいレベルの輸送だ。

福本
「…まあ、搬入は綾崎さんの指示が必要かも知れませんが、後は専門家に任せちゃいましょうか」

次号へ

77　飛び級少女とアンドロイド　下（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

78　沖縄へ（前書き）

海龍
「第3弾！！」

水城
「今度はこれよ！！」

開いた幕から現れたのは……今回はルーデル。
しかも、巫女服コスで。

ルーデル
「…これでいいの」

海龍
「いいのいいの！」

水城
「これでよし！」

バンッ！

佐野
「2人共！　セルベリアさん・シルヴィアさんに続いてルーデルですか！！」

水城
「ルーデル、はい、セリフ」

ルーデル
「え、えーと…ソ連（悪霊）は射つ！」

シュッ！

パス！

佐野
「のわ！？」

海龍
「さすがルーデル…弓も上手いわね」

78　沖縄へ

4月20日　沖縄・那覇基地

民間の那覇空港と日本海空軍の那覇軍用飛行場が隣接する那覇基地。
故に軍の警備が厳しい那覇基地に福本・セルベリアが居た。

セルベリア
「まだ4月だから良いけど、これが夏なら更に暑いでしょうね」

福本
「夏なら、いっそのこと海に飛び込んだ方が楽だよ」

セルベリア
「なら、今度は皆で来ようね」

福本
「そうだね……誰かが写真を撮って翡翠に渡しそうだけどね」

そんな会話を続けながら基地の建物まで歩く2人。
既に格納庫ではスクランブル待機している機体の整備を行っている。
また、新型哨戒機の征海（自衛隊のP1固定翼哨戒機）も並んでいる。
石垣島に並ぶ日本本土南方方面の要所である沖縄本島であるだけに、その重要度は高い。
故に日本陸海空軍の守りも固く、更にパイロットを鍛える事に適している事から、熟練部隊やルーキー部隊が派遣される事が多い。
そんな沖縄に2人が来た理由……もちろん、人材探しだ。

基地司令官室

基地司令
「ほう…実験部隊ですか？」

福本
「えぇ、シリルティア王国と言う絶好の試験場が有りますので…日本本土だと解ってしまっても異世界なら実験は出来ますからね」

基地司令
「なるほどなるほど…その人材探しですか…福本長官と井上次官の委任状には敵いませんな。どうぞ、元帥のお孫さんの眼鏡に叶う人間が居るかは解りませんが、ごゆっくりと見て下さい」

福本
「ありがとうございます。それでは、さっそく」

基地司令
「えぇ、お気よつけて」

基地司令に挨拶をした福本・セルベリアは敬礼をして基地司令官室から退出した。

セルベリア
「さすが、井上さんとお父様ね」

福本
「まあ、あの2人と喧嘩しようなんて物好きは少ないからね」

実際、喧嘩しているのは福島みずほと言うバカな弁護士議員兼社民党党首しかいない。
しかも、連敗記録を更新中である。

セルベリア
「さて…眼鏡に叶う人材はいるのかしらね？」

福本
「それは実際見てみるしか無いよ。まあ、犬も歩けば棒に当たるって諺もあるしね」

セルベリア
「じゃあ、飛行機に当たらない様に探しましましょう」

福本
「おいおい…それは無いだろう」

つーか…それはヤバくないか？

ヒュイィィィィ……

ヒュゴォォォォォ！！

ジェットエンジンに点火し、一気に飛び上がる雷風。
そんな、光景を眺めつつ、福本・セルベリアは歩いていた。

福本

「……ん」

セルベリア
「どうしたの？」

福本
「いや、ほら、あの雷風のエンブレムが気になってさ」

ルーキー訓練部隊である第２７７航空隊（部隊番号制の為、２が機種番号、７が所管、７が常設飛行隊を示す。大東亜戦争時より改変している）の『２７７』の数字を方向舵に書いた雷風が並ぶ中、一機だけコックピットの斜め右下に沖縄の守り神『シーザー』のエンブレムが描かれている。

福本
「ルーキーがエンブレムを持っている事がうちじゃあ珍しいからな」

「沖縄生まれの自分としては、守り神を描かせてもらっただけなんですけどね」

後ろからの声に振り向くとパイロットスーツの青年が居た。

「どうも、その雷風のパイロットの福地旭士官候補生です。よろしく」

福本
「よろしく…福地候補生は地元出身？」

福地
「旭で結構です。はい、父は九州の生まれですが、母が沖縄です。名字の『福地』は北部の川の名前に付いています」

セルベリア
「へえ…ところで…旭さん、これから飛ぶの？」

福地
「おっと、訓練に飛ぶところでした。では、また後で」

そう言うと、後から来た整備員達と共に雷風に向かって行った。

福本
「……もしかしたら、見付かったかも」

セルベリア
「かもね」

次号へ

78　沖縄へ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

79　その頃…北海道にて（前書き）

中国のアホは置いといて、台湾は本日軍事パレードをする様で。

福本（勇気）
「で、日本は？」

……何もしないね。
まあ、あの『素人』防衛大臣は何もしないだろうね。

山城
「ロシアがヤバいから日英同盟結んだのに……中国がヤバいから日台同盟はないのか？」

親中派が民主党を占拠してるの。

79　その頃…北海道にて

同じ頃……北海道　日本陸軍演習場

福本・セルベリアが沖縄でそんな事をやっていた頃、反対側の北海道にはセイバーと遠地が北海道の日本陸軍演習場にいた。
本来なら陸戦隊に関する業務はセイバーに預けているが、今回は護衛兼務で遠地を同行させている。
いくら軍人でも女性を単独行動で行かせて行方不明になりました……なんてのは無しだ。
更に言えば、セイバーはダリア・エステロール連合王国の（元とは言え）王族……つまり、ただの女性で済まないと言う事情がある。
まあ、セイバーがそう簡単に連れ去られるなんて事は無いと思うが……。

遠地
「で、なんでわざわざ北方方面の要所、北海道の陸軍演習場に来ているんだ？」

セイバー
「神戸士官学校の戦車部の部員を覚えているか？」

遠地
「……あぁ、戦車を動かしたら、パットン将軍並みに暴れて、勇気が「こいつらだったら、アメリカ西海岸に上陸しても、１ヶ月以内にワシントンＤＣに日の丸の旗が立つな」って言った戦車部の連中な…」

富士での野戦演習の時、福本が率いて暴れさせた時の戦車部は……
陸軍士官学校の教官・生徒も唖然・絶句して見ていたのは良い思い出である。

セイバー
「その戦車部は全員、福本伊吹長官が一部隊に集めて富士や北海道、アメリカ、ドイツなどで戦車戦を鍛えさせていた。今はこの北海道の演習場で訓練中だ。新型戦車の試験も担当している」

遠地
「なるほどな」

そのまま2人は演習場を歩く。
つーか……その部隊が何処に居るのか解っているのか？

キュラキュラキュラキュラ……

遠地
「……ん？」

何故か戦車が猛スピードで接近する音が聞こえる。

セイバー
「…ふむ、まさか…」

冷静なセイバーの視線の先には猛スピードで接近して来る戦車が一輌。

遠地
「お、おいおいおい！！」

セイバー
「……」
真っ直ぐに向かって来る戦車に慌てる遠地、沈黙のセイバー。
遠地
「ちょっ…ストーーップ！！！！」
キキィィィイ！！
……まるで遠地の声に応えるが如くタイミングで戦車は止まった。
遠地
「あ、あ、あ、危ねえじゃあねえか！！　いったい誰だ！？」
「あ～、やっぱり、その声は和馬だ」
戦車のハッチから顔を出した人物に遠地が叫ぶ。
遠地
「げぇ！　島田かのん！？　と、と言う事は…」
「むつみ～、砲術の和馬がなんでここに居るの？」
「さあ…と言うか、本人に訊いて、マリコ」

遠地
「……やっぱり…竹内マリコに野口むつみ…このメンバーかよ…」

神戸士官学校の戦車部創立メンバーであり、戦車を触らせれば、これ程頼りになるメンバーは居ない…と勇気も称賛していた3人。
だが……

遠地
「竹内!!　俺とセイバーを牽き殺す気か!!?」

竹内
「死んで無いからいいじゃあない。小さい事を…」

遠地
「んな問題か!!　それと小さい事じゃあねぇぞ!!」

野口
「マリコ…だから止めようって言ったのに…」

操縦士の竹内マリコと口喧嘩を始める遠地、それを控え目に止める野口むつみ……そんな3人を他所にセイバーは慣れた様に砲塔へと上がる。

島田
「ヤッホ〜、久しぶり〜、セイバー」

セイバー
「久しぶりね、かのん」

島田

「それで、こんな北の大地にどんな用？」

セイバー
「勇気から伝言だ。『戦友よ、再び暴れようではないか』だ」

島田
「ふ～ん…味な伝言だね」

セイバー
「もう１つ、水城から『もう一度宣伝させろ』…だって」

島田
「あはは…」

島田は苦笑していた。

次号へ

79　その頃…北海道にて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

８０　大谷作戦参謀の物思い

その頃……旅順軍港

戦艦薩摩艦内　大谷（作戦参謀）私室

作戦参謀として第七艦隊に在籍している大谷は私室で書き物をしていた。
ただ、雑務処理などでは無く（そう言った物は福本が出掛ける前に全て終わらせて行った）、毎日欠かさず書いている日記を書いていた。
まだ日も高いが、軍人と言う職業上、何時なにが発生してもおかしく無い為、時間のある時に書いている。
ちなみに、後々この日記が『大谷（作戦参謀）日記』として新第七艦隊に関する史料となる……今は全然、関係無いが。

パタン

今朝から今までの事を日記に記載し終えた大谷は日記帳を閉じると手近に置いていた湯飲みを取り、一口飲む。

大谷
「ふぅ……さて、どうしましょうかね？」

……参謀だから、書類仕事を押し付けられるのは覚悟の上だったが、付いて行った人（つまり、勇気）はどちらかと言うと仲間にそう言う事を押し付け無い派の人間なので、回ってきた書類処理も１０分で出来てしまう。

だから、楽と言えば楽だが、時間が出来てしまうのが難点……と言っても、全然しないで押し付ける人よりは大分マシ…と大谷は考えている…である。

大谷
「まあ、彼はそんな人間だと解って付いて来た訳ですが…」

1人で物思いに耽る大谷。
海軍軍人の祖父である大谷良治中将（最終階級）から福本大介元帥からの恩義（と言うよりは昔話）を聞いて育った日向は祖父の道を歩むべく母校である神戸士官学校に入学した訳だが、その入学式で自分が福本元帥の孫である、勇気とクラスメイトとなる事を知った。更に同じ寮だと知ると直ぐに挨拶に行った…無論、寮長室まで。
そこで自分の意思を語った……イザと成れば我が身を盾にする覚悟だと。

大谷
「…彼の不機嫌な顔を見たのはあれ以来ありませんね…」

馬鹿らしい……意思を伝えた後の彼が放った第一声はこの言葉だった。
俺の様な人間の盾に成るより、陛下と国民の盾に成るのが筋と言うものだ……と言うのが只の格好で無い事はその後、様々と見せつけられている。

大谷
「英雄の孫と裏切り者の孫……ふっ、彼にとってはそんな事は関係無い…真の戦友ですね」

そこまで呟いた時、少し苦笑してからまた呟く。

大谷
「まだ１０年も経っていない事を思い出すとは……自分もまだまだ、修行が足りていませんね」

だが、それもまた良いのかも知れない……そう思う大谷であった。

コンコン

島津
「おう、大谷！　１人で日記モードか？」

入って来た土佐艦長の島津はそう言って背中を叩く。

大谷
「ぐふっ、ぐほっ……はぁ…なんですか、いきなり？　用事でも出来ましたか？」

苦笑しながら訊く大谷に島津はマイペースで続ける。

島津
「いや、俺は無い」

ズルッ…

そんな答えに思わず滑る大谷……これが島津のマイペースです。

島津

「いや、俺に用事はないんだが、あちらの婦女方がな…」

そう言って後ろを指差す島津……その先には逆さ吊りにされた海龍……いやいや、関係無かった…逆さ吊りにした薩摩・土佐・六甲・畝傍の４人が居た。

島津

「…福本との思い出話を聞きたいんだってさ」

大谷

「なるほど……まあ、私の話せる範囲で良ければね」

次号へ

８０　大谷作戦参謀の物思い（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

81　親子共々苦労は同じ（前書き）

さて……長門と陸奥をどうするか……書いてる内に気付いて困ってます。
現状維持か…復活させるか…？？

81　親子共々苦労は同じ

4月22日　旅順軍港

薩摩艦橋

福本
「ただいま～」

大谷
「お帰りなさい。どうでした？」

セルベリア
「楽しかったわ。2人でデート」

福本
「いや、仕事だよ。その前にデートなんて日数じゃあ無いから」

セルベリア
「気分よ、気分。なら、小旅行ね」

大谷
「楽しんできたと言う事ですね？」

セルベリア
「そう言うこと～♪」

福本
「やれやれ…で、遠地とセイバーは？」

大谷
「2人共、昨日…」

遠地
「昨日、帰って来た。セイバーと一緒にな」

そう言いながら遠地とセイバーが艦橋に姿を現した。

福本
「で、戦車隊は大丈夫そうか？」

セイバー
「大丈夫。みんな、元気でやっていた。竹内と和馬は喧嘩してたしな」

遠地
「仕方ないだろ！　絶対、竹内の奴は俺達を轢き殺そうとしていた！　間違い無い！」

福本
「……まあ、それは追々解決しようじゃあないか。後は艦艇だな…人材は捜すとして……まあ、結局は大変だな」

大谷
「まるで福本元帥ですね。あっちこっちに人材捜しに出掛けられましたから」

福本
「あはは…本当だな…まあ、世の中そんなもんさ」

まあ、『第七独立機動艦隊』と言うのは艦隊司令長官に行動が一任される為、艦隊司令長官が戦隊司令や艦長を掌握しなければならない。
故に艦隊司令長官の責任は重い……権利有れば義務が有り…自由有れば責任有り……これが第七艦隊である。

セルベリア
「うふふふ……やっぱり、この艦隊は勇気が居ないとね」

福本
「おいおい…過度の期待はやめてくれよ」

大谷
「過度ではありません。普通です」

遠地
「そうだな。使いこなしてくれなきゃな」

セイバー
「承知の上なら尚更な」

島津
「じいちゃんが使えたんだ、孫が使えなくてどうするんだよ」

長門
「…私のパソコン技術を使わないなんてもったいない」

福本
「……まったく、忙しくなるな」

そう呟きながら苦笑した。

その頃……横須賀　連合艦隊司令部ビル　連合艦隊司令長官室

福本（伊吹）
「は～あ…書類仕事は飽きるな～」

そんな事を呟きながら福本伊吹は書類仕事を続けていた。
実際、書類仕事なんてのは海軍次官に成るまでに慣れてはいるが、
これ程紙の無駄だと考えた事は無い。

福本（伊吹）
（だいたい、書類なんて面倒な物より、今はEメールの様な便利な物が有るに関わらず、こんな事を……まあ、解らんでもないよ…でも無駄だろう、これ？）

……内心でかなりの不満を呟きつつ、書類を処理していく福本伊吹司令長官。
そこに……

コンコン

福本（伊吹）
「どうぞ～、開いてるから勝手に入っていいよ～」

書類に目を通しながら、ドアの向こうに言う福本司令長官。
そのドアから現れたのは……

「書類仕事も大変ですな」

福本（伊吹）
「…土方中将か。久々の現場はどうかな？」

土方
「まずまずですな」

現れたのは前神戸海軍士官学校校長にして、現第一艦隊司令官の土方劉中将だった。

福本（伊吹）
「差し詰、猛訓練の日々かな？　『鬼の大和に地獄の武蔵、いっそ信濃で首吊ろか』が、若手で囁かれていたけどな」

土方
「…実はそれに関する事について、あなたに訊きたい事があありましてね」

福本（伊吹）
「答えられる範囲で答えるよ。なんだ？」

土方
「では…最近、我が海軍は今まで保有していた大和・武蔵・信濃に加え、扶桑・山城・金剛・霧島・榛名・比叡を保有、神戸・長崎で航空戦艦伊勢・日向を建造中です」

福本（伊吹）
「あぁ、そうだね。長門・陸奥は博物館と練習艦だしね」

長門は呉で博物館、陸奥は今も神戸で練習艦だ。

土方
「更に第七艦隊の『１０戦艦』を復活させ、第零艦隊の４戦艦…横須賀で改天城型戦艦２隻を建造中との噂……戦艦だけでも、余りに建造しすぎな様な気がしますが？」

福本（伊吹）
「まあ、シリルティア王国との関係もあるし…空母・巡洋艦、駆逐艦も増産しているのも認めるけど…それが？」

土方
「まさかと思いますが……何か仕掛けるのではないか…と」

福本（伊吹）
「……」

土方
「……」

……

沈黙が流れる。

福本（伊吹）
「……そんな無駄な事はしないよ。只の戦力強化、それだけだ」

土方
「…まあ、一介の艦隊司令官が口を出す事ではありませんな…では、失礼しました」

そう言うと土方中将は退室した。

福本（伊吹）
「はあ…まあ、色々とあるもんさ…」

次号へ

81　親子共々苦労は同じ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

82　いきなり飛んで2ヶ月後

6月24日　旅順軍港

いきなり時系列を一気に2ヶ月程すっ飛んだが、この間にも勇気はセルベリアを伴って日本各地の鎮守府や基地などを周り、人材捜しに専念していた。
そして、一段落し、旅順軍港で待機中に連合艦隊司令部から第七艦隊司令部に命令書が送られてきた。

戦艦薩摩艦橋

福本
「……第七艦隊をソマリアに派遣？」

「はい、元帥」

命令書の内容を伝えたのは福本勇気達の後輩で、福田一輝（元帥）大将（最終階級）の孫、福田征一（ふくだせいいち）少佐（19）。
ちなみに『元帥』とは勇気の事で、「正式な階級（呼称）では無い」と再三忠告したが本人は相変わらず『元帥』と呼んでいる。（まあ、良くて『（福本）先輩』であるが。）

セルベリア

「ソマリアと言えば…やっぱり、海賊対策の関係？」

大谷
「でしょうね。わざわざ第七艦隊を出すと言うことは護衛部隊の交代か、特別な護衛が必要になったか…ですね」

遠地
「まあ、いいんじゃないの？　このままここでじっとしておくより、海賊の小舟相手でもいいから現場に出した方がいいぜ」

セイバー
「確かに、艦艇も増え、空母との連携を極める上でも一度は出る必要もある。我ら陸戦隊も何時かはシージャクに対処しなければならなくなるし…」

ちなみに第七艦隊は薩摩・土佐・海龍・六甲・畝傍の主力大型艦の他に第七艦隊専用の大波型駆逐艦大波・小波・津波・神波の４隻が編入されていた。
駆逐艦が配備された為、第七艦隊も漸く艦隊らしくなった。

福本
「まあ、命令だから行くしかないんだよな…長門、済まないが…」

長門
「わかってる。情報収集は任せて…裏情報も収集するから」

福本
「いや…やり過ぎないでくれよ…」

セルベリア

「まあ、情報収集は専門家に任せるとしましょう…勇気」

福本
「あはは……全艦に命ず、明日早朝、我が第七艦隊はソマリアに向け出港する！」

全員
「「「「「「「了解！！」」」」」」」

空母海龍艦橋

水城
「ソマリアね…かなり遠いわ…ってスエズ運河じゃない！」

命令を受け取った水城は1人でツッコミを入れていた。

「水城艦長、スエズ運河でも地中海でも、命令がきたんですから、行きますよ」

そう言ったのは同じ少佐の階級章ながらも腕の『航空司令』の腕章を付けた女性士官。
福田と同じく福本達の後輩で、富嶽爆撃機隊隊長沖田優里（空軍）大将（最終階級）の孫、沖田真優（おきたまゆ）少佐（１９）……空母航空隊司令だ。

水城

「そんなんじゃあ、ないわよ！　どうせなら、スエズ運河を越えてイタリアに行きたいの！！」

沖田
「イタリア……なんでです？」

水城
「決まってるでしょう！　イタリアのコスプレ衣装を買い込むのよ！！」

沖田
「…あっそうですか」

呆れながら返事をした沖田……本当にこのままで大丈夫だろうか？…と思っていた。

セルベリア
「明日出港はいいけど…ルートはどうするの？」

福本
「2回ぐらいどこかに寄港しようと思う。先ずシンガポールに寄港して、次にインド以西の何処かの港に寄港してからソマリアに到着したい」

福田
「やはり、情報収集ですか？」

福本

「それも兼ねてね」

遠地
「何時まで居るか解んないからな～…遊ばすのか？」

福本
「…そこまでは未定だ」

大谷
「では、直行コースを採らず、寄り道コースで現地に向かうと言うことで」

福本
「あぁ、上にはそう言っといてくれ」

次号へ

82　いきなり飛んで2ヶ月後（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

83　フィリピン近海（前書き）

読者にアンケートを取ります！！

福本
「やはり、長門級の事ですか？」

はい、長門級二隻は復活させるか、現状維持か…読者に訊きます！

海龍・水城
「「お礼は登場女性陣のメイドコスプレ写真アルバム！！」」

福本
「おまえら、無茶な事を言うな」

確かに無茶だ。

83　フィリピン近海

6月28日　フィリピン近海

25日に旅順を出港した第七艦隊は18ノットの巡航速で一路シンガポールに向けて南下していた。

ちなみに陣形は輪形陣、配置は……

薩
大　摩　小
波　波

六　海　畝
甲　龍　傍

津　神
波　土　波
佐

この配置を維持しつつ、第七艦隊は航行を続けていた。

戦艦薩摩艦橋

レイナ

「……1つお訊きしたいのですが…いいでしょうか？」

オペレーター席に座っていたアンドロイドのレイナが言った。

福本
「いいよ、なんだい？」

レイナ
「はい…私達がソマリアに向かう理由は海賊退治の一環ですよね？」

セルベリア
「えぇ、そうよ。それで？」

レイナ
「その……馬鹿げた質問ですが…海賊と言うのは未だに存在するんですか？」

……多分、何も知らない一般人もレイナと同様の疑問を持つだろう。

福本
「うーん…福田、説明してやりなさい」

福田
「え、あ、はい…えーと、レイナの海賊像は…ピーターパンの海賊かな？」

レイナ
「はい、歩美から何度もおとぎ話は聞きましたので…違うのですか？」

福田
「現代の…ソマリアの海賊は表現が悪くなりますが、食い詰めた漁民などが武装した物です」

レイナ
「つまり…系統が違うと？」

大谷
「まあ、どっちも似たり寄ったりですけどね」

福田
「大谷先輩、自分が説明しているんですが…」

大谷
「ごめんごめん」

福田
「さて…ソマリアの海賊は小型漁船が一般的ですが、ロシア製銃器・携帯重火器を持って武装しています。まあ、民間船舶にとっては銃1つでも脅威ですが」

福本
「では、ここで問題です。なぜ世界各国がソマリアの海賊を気にするのか？　解りますか？」

レイナ
「……解析完了、スエズ運河を通った船舶がソマリア近海を通過します…昨日教えて頂いたシーレーンの観点ですね？」

福本
「ご名答。国際海上通行路であるスエズ運河だけにヨーロッパにしろ、アジアにしろ、国益や資源輸出入、観光などに影響しますからね」

レイナ
「つまり、世界は繋がっていると言う事ですね？」

福本
「そう言う事です。福田、お前に教官役を任せたのは正解だったな」

福田
「なんですか、それ～…まあ、誉められたのは嬉しいですけど」

嬉しい様な、恥ずかしい様な微笑んみを福田は浮かべていた。

綾崎
「レイナ…この艦隊に来てから変わった気がします」

長門
「…勇気はお人好しだから」

上記のやり取りを艦橋の隅で聞いていた綾崎と長門が話していた。

綾崎
「お人好しと変わった事と関係がありますか？」

長門
「…勇気は人間臭いから…士官学校時代から何も変わってない」

士官学校から腐れ縁状態で一緒に居た長門。
最近は綾崎と共にレイナの点検にも関わったりとしている。

まあ、完全に業務範疇外だが……。

長門
「まあ、人を育てるのに一番適した人間だから」

綾崎
「…どう言う事です？」

長門
「…見ていれば解る」

…そんな答えを出すだけだった。

空母海龍艦橋

士官
「リニアカタパルトよう～い……射出！」

シュパーーーン！

リニアカタパルトで射出された雷風が空を舞う。
更に続いて雷風がリニアカタパルトで射出される。

沖田
「さすがに加速性は半端無いわね、リニアカタパルトは」

水城

「うふふ、空母の甲板を1日解放して水着ギャルを置きたいな～♪♪」

沖田
「……水城艦長、仕事して下さい」

後輩の航空司令が呆れてしまうこの艦長……沖田自身、果たして大丈夫かと思ってしまう。

沖田
（…それより…リニアカタパルト搭載の空母を平気で見せていいのかな？）

航空司令で有るためにそこが気になる沖田。
国際海上通行路であるスエズ運河の近く、更に海賊対策で派遣された各国海軍艦艇が多数居る中でリニアカタパルト搭載空母を派遣すると言うのだから……

沖田
（まさか…福本司令長官と井上次官はリニアカタパルトを世界に売る気なのかな？）

…ふとそう思った。

次号へ

83　フィリピン近海（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

84　シンガポールにて

6月30日　シンガポール

イギリス統治時代には『東洋のジブラルタル』と言われたシンガポール。
現在はシンガポール共和国の首都である。
そのシンガポールに巨体を並べて寄港したのは日章旗を掲げた第七艦隊の艦艇群だった。

薩摩艦橋

福田
「さすがシンガポール。栄えてますね」

福本
「イギリスがアジアで香港に並ぶ植民地拠点としていた場所だからな。通商航路上にあり、インドから太平洋に向かう出入口…栄える理由は上げたらキリがないな」

艦橋からシンガポールの発展振りを見る先輩と後輩。
それも自分の祖父も先輩と後輩だっただけに、この組み合わせは伝統的と言おうか、血の繋がりと言おうか……

福本

「じゃあ、ちょっと行って来るわ」

福田
「はい、お気をつけて」

そう言って下に降りて行く勇気を福田が見送った。

レイナ
「福田さん、福本長官はどちらに？」

福田
「ん、ちょっと情報収集にね」

レイナ
「理解できません、情報収集なら長門さんがしているのに、情報収集ですか？」

福田
「う～ん、まあ、元帥は生の情報は人が握ってるって教えられた人だからな…」

レイナ
「…生？　情報も野菜や魚と一緒なんですか？」

福田
「う～～～ん…説明が難しい…」

大谷
「つまり、真新しい情報…特に最近ソマリア近海を通った人達が見聞きした情報は長門さんの集めた情報と擦り合わせ、どれだけ正確

かを判断する材料になります。だから、福本長官は情報収集に行ったんですよ」

レイナ
「なるほど…正確かを判断する為に…」

福田
「フォローありがとうございます、大谷先輩」

大谷
「いいんですよ。さて、せっかくのシンガポールです、綾崎さんやレイナさんも異国の街を歩いて来てはどうですか？」

綾崎
「え、私もですか？」

遠地
「まあ、寄港中だから、基本的に用事の無い人間は自由行動だしね」

セイバー
「なら、我々も上陸しても差し支え無い。セルベリアは勇気と一緒に行くみたいだしね」

遠地
「なら、善は急げだ。大谷と福田は残るんだろう？」

大谷
「イザと言う時に備えてね」

福田

「自分は大谷先輩の手伝いで」

長門
「…私は情報収集を続ける」

遠地
「よ～し！　街に繰り出すぞ～！」

セイバー・レイナ
「「おぉ！！」」

綾崎
「お…おぉ…」

ノリノリのセイバー・レイナ、微妙にノれていない綾崎……それでも異国の街と言う事で綾崎も興味はあった。

空母海龍艦橋

水城
「むぅ～！！　せっかくのシンガポールなのに、空母で待機なんて、最悪だ～～！！！」

……空母の艦橋で不満をぶつける水城。
それをため息を吐きながら見る航空司令の沖田。

沖田

「水城先輩、イザと言う時に備え艦長か副長が常駐する必要があるんですよ」

水城
「だから！！　なんであなたの権限で私が残る事になったのよ！！？」

沖田
「だって…目を離したら、何を仕出かすかわかりませんので」

水城
「むぅ……いいもん！　海龍とコスプレでも考えるもん！」

……子供の様に頬を膨らませ、そっぽを向く水城。

沖田
（そう言えば…海龍は大丈夫なのかしら？）

艦魂の海龍は人間以上に質が悪いだけに、そちらが……

海龍
「聞いてよ、水城！！　せっかく港の女の子達を漁ろと思ったのに転移出来ないんだよ！？」

水城
「ふえ～～ん、そっちも？　こっちも外出出来ないよ～」

沖田
（転移出来ない…？　まさか…福本長官が何かした？）

海龍の言葉に沖田はそんな考えを抱いていた。

その頃……駆逐艦神波艦橋

寄港上陸の為、当直の人間しか居なくなった艦橋に艦長であり、神童神子中将（最終階級）の孫である神童宮子（しんどうみやこ）少佐（１８）がいた。何処からどう見ても大和撫子な風貌（長い髪にほっそりとした体、着物を着せたら似合う）に艦隊内部では人気があった。

「宮子さん、福本長官に頼まれていたお札ら貼っておきました」

神童
「ありがとう、神波。お婆様のお札なら、海龍さんも悪さは出来ないでしょう」

神波
「ですね」

次号へ

８４　シンガポールにて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

８５　番外編　山県大尉の１日（前書き）

次は日本帝国陸海空軍上層部の動きです。

８５　番外編　山県大尉の１日

７月１日　兵庫県
日本帝国陸軍伊丹駐屯地

０５００時

起床ラッパが駐屯地内に響く。
これを聞けば宿舎の中では上は司令官から下は新人の一兵卒まで全員が寝床から飛び起き、軍服を着て直ぐに宿舎から飛び出る。
そして、国旗掲揚、国歌斉唱、司令官訓辞などが行われた後、朝食となる。

……え？　なんでシンガポールからいきなり日本の伊丹かって？
それは……題名通りですよ？
この伊丹駐屯地に山県大尉が居るんですから。

０６００時　食堂

朝食を摂る将兵達。
その中にもちろん、山県大尉も居た。
今は新聞（読売新聞）を読んでいます。

士官
「山県大尉～、なに読んでるですか？」

山県
「ん、ちょっと海軍関係の記事をね」

同僚の士官（女性）に訊かれた山県は答えた。
実際、山県大尉が開いているのは一面、総合面、国際面、社会面の４つだ。

士官
「あぁ、ソマリアの海賊対策で派遣されていた艦隊の交代の記事ですね」

山県
「えぇ、ちょっと気になって読んでたの」

士官
「へえ…あれ？　大尉に海軍の知り合いっていましたっけ？」

山県
「あのね…私の父親が何してたか知ってるでしょう？」

士官
「あ…そうでしたね。三軍の三羽鴉の１人でしたね」

『空の田母神、陸の山県、海の福本。三軍の三人で三羽鴉』…これが日本帝国軍の代表格将校であると言われている。その末娘で文系な兄とは反対に軍に入ったのが山県大尉である。

士官
「それの何が気になるんですか？」

山県
「別に、大した事では無いわ」

……記事には井上次官が護衛艦隊の交代を発表した事が書かれている。
しかし、交代の部隊の数や編成などはどの面にも書いていない。
他の新聞も読んでその事には触れていなかった。

山県
「まさか……まあ、関係無いし、いいか」

そう言って新聞を元に戻した。

０７００時　練兵場

ザッザッザッザッ……

今は山県中隊の新兵訓練中。
日本帝国陸軍と言えば行軍！……と言わんぐらいに行軍に関しては伝説は多い。（実際、そうだし）
この為、新兵は先ず行軍練習から……

下士官
「こら！　そこの新兵！　歩調を乱すな！　学校で何を学んできたんだ！！」

新兵
「す、すみません！！」

下士官
「まったく、私が大尉殿なら隊から叩き出してやりますな」

山県
「まあまあ…私達も最初は一緒だったんだし」

……行軍練習他、各種野外訓練を行った。

１２００時　食堂で昼食

１３００時　屋内射撃場

タンタンタン！

６４式小銃の発射音が鳴り響く。
新兵による射撃訓練中だ。

山県
「う～ん……成績はまずまずかしら？」

下士官
「サバゲー経験者の２人を除けばまずまずですな。まあ、単発だからいいですが、連発だと更に落ちるでしょうが」

山県
「よね…手本を見せるわ。よく見てなさい」
持っていた６４を構え、レバーを『レ』にすると発射した。
ダダダ！　ダダダ！　ダダダ！
３つの標的に続けて一連射…しかも、三発に一発は正確に心臓に当てた。
無論、新兵達からはどよめきがおこる。
山県
「まあ、実戦を経験すればこれぐらい出来る様になるわ。あとは日々の練習ね」
……この後、小銃の分解・点検、新兵講習を行われた
１８３０時　食堂で夕食
１９３０～２０３０時　自由時間・明日の打ち合わせ
２０３０～２１００時　入浴
２１００～２３００時　書類整理・勉強・読書
２３００時～　就寝

以上、山県大尉の1日でした。

次号へ

８５　番外編　山県大尉の１日（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

86　秘密の打ち合わせ（前書き）

各軍司令長官になった『三軍の三羽鴉』と、三軍の次官となった『三軍の三人乙女』、石破大臣の密談会。
長門型復活アンケートの結果も作中にて。

86　秘密の打ち合わせ

7月2日　帝都

国防省内　ある倉庫

福本（伊吹）
「いや～、またこの倉庫に来る事になるとはな」

井上
「当分『また』が続くわよ」

一番先に来ていた福本伊吹長官と井上政美次官が話していた。

ガチャン

石破大臣
「お、海軍が先か」

さも当然かの様に石破茂国防大臣が入って来た。
続いて田母神俊雄大将兼空軍司令長官と市丸千穂（いちまるちほ）中将兼空軍次官（女性）、山県定義陸軍司令長官と阿南彩香（あなみあやか）中将兼陸軍次官（女性）……と現日本帝国陸海空軍の現場と後方（政治）で指揮を執る人間（＋国防大臣）が入って来た。

石破大臣
「さて…『三軍の三羽鴉』と『三軍の三人乙女』からの要請で来たんだが…」

福本（伊吹）
「要請で来たって…電話で連絡したら嬉しそうだったじゃあないですか」

石破大臣
「あっはっはっは…それで、どこから言うかね？」

田母神
「では、今回は空軍から。市丸次官」

市丸
「はい。我が空軍の最新戦闘機…今は実験機の名前ですが『心神』です」

机の上に拡げられた設計図集まっていた陸海軍の人間が覗き込む。

田母神
「ステルス実験機として研究していますが、雷風やタイフーンなどのデータと今までの航空機設計を反映させて開発しました。今は局地戦闘機ですが、戦闘爆撃機案、偵察機案、素案ですが艦上戦闘機案もあります」

福本（伊吹）
「ふむ、それは心強い」

井上
「ステルス性は？」

市丸

「日本技術のみでの実験結果はアメリカのＦ２２ラプターの２割増しです。ですが、アーヴ技術を加えれば更に高まるかと」

石破大臣
「日本技術のみでラプターの２割増しか…それは面白いな」

田母神
「まあ、アメリカが泣いてステルス部品を売ってくれと泣き付きましたからね」

福本（伊吹）
「では、次は陸軍で」

山県
「うむ、機甲科が日本の戦車技術を結集して開発した新型戦車と機動戦闘車です。先ずは機動戦闘車の設計図を」

そう言って『神心』の設計図を退けた机の上に拡げた。

阿南
「陸軍の５６式装輪装甲車（陸自の９６式装輪装甲車）の改良型です。主砲は３４式戦車（陸自の７４式戦車）初期型の１０５ｍｍ砲を新設計の砲塔に搭載…もちろん、１０５ｍｍ砲も強化されています」

井上
「装甲は？　聞いた話だと２５ｍｍ機銃に漸く耐える程度だと…」

阿南
「はい。アーヴからの技術により、軽量防弾装甲が開発され、２５

ｍｍから１００ｍｍ砲まで耐用可能になりました。これも海軍との装甲開発によるものです」

福本（伊吹）
「いやはや…日本の技術が恐ろしくなってきたよ」

阿南
「ですが、お陰で耐弾性が上がりましたので、実戦での使用がしやすくなりました」

井上
「なるほど…それで、戦車の方は？」

山県
「それはこっちだ。主砲は海軍の１２７ｍｍ速射砲を改造した４４口径１２７ｍｍ滑腔砲、モジュラー装甲、新型ＩＴシステムを搭載した新世代戦車だ」

福本（伊吹）
「ほう、新世代の…主砲は互換性を？」

山県
「あぁ、出来る限りコストを抑える為にな。榴弾ぐらいは使えるよ」

田母神
「ほう、陸軍も最新装備ですな」

阿南
「陸軍はこの２輌です…海軍は？」

福本（伊吹）
「まあ、建造予定艦艇は全て通りましたのでね…と言いたいところでしたが、最後に出てきました」

井上
「それがこれです」

片付けられた戦車と機動戦闘車の設計図の次に海軍の設計図が拡げられる。

石破大臣
「ん…これは長門型戦艦？」

田母神
「ほう…『長門型復活・改装計画』…あの２隻が復活するのか」

井上
「海軍内部と作者が行ったアンケートの結果は満場一致の復活賛成でした」

大和の次に強い（薩摩型は置いておく）長門型戦艦……設計図に新たな姿が書かれていた。

福本（伊吹）
「長門は博物艦から、陸奥は練習艦籍から削除し、改装を行います。主砲は特注の６０口径４１ｃｍ三連装砲４基１２門を始めとした標準装備を装備します」

石破大臣
「あ～、陸奥はいいが長門はどうする？　特に艦内の展示品は？」

福本（伊吹）
「それはご心配なく。呉に海軍ミュージアムを建設し、展示品をそこに移します」

阿南
「…と、まあ、三軍の要求はこんなところですが？」

石破
「ふむ……まあ、多少難しいかもしれんが、各模型1つづつで手を打とう」

田母神
「大臣らしい承認の仕方ですね」

次号へ

８６　秘密の打ち合わせ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

87　インド洋にて

7月3日　インド洋海上

旗艦薩摩艦橋

遠地
「いま思えば、俺達って爺ちゃん達が通ったヨーロッパからの帰還コースを辿って行ってるんだよな？」

長門
「…うん、ほぼルートは一緒、途中で寄港する以外は」

福田
「あ、やっぱり」

……薩摩を始めとした第七艦隊艦艇は何事も無くインド洋を航行していた。
まあ、戦艦2隻に空母がいる小艦隊に喧嘩を吹っ掛け様などと考える輩はいないだろうが。

福本
「第七艦隊が任務を終えてアレキサンドリアからシンガポールに向かうまでが20日、しかし、今回はシンガポールからインド洋まで3日程…まあ、あの時は輸送船や客船を加えていたから船足が違うけど」

大谷

「船足も違えば規模も違うよ。あの時の第七艦隊は６０隻を越える所属艦艇にダサヴィア大陸連合軍の艦艇と陸軍輸送船団を抱えてもいたからね。近現代で希に見る大派遣艦隊だったしね」

福田
「しかも、第七艦隊は世界を一周した事でギネスブックに載りましたしね」

セイバー
「まあ、第七艦隊が福本・マリーダ元帥によって率いられた時点で、戦争の行方は決まったと言う事ね」

セルベリア
「そんな元帥の孫と私は許嫁だけどね～♪♪」

福本
「おいおい…」

そう言いながら勇気にすり寄るセルベリア…困惑顔で呟く勇気。

福田
「…本当に元帥とセルベリア先輩は甘々ですね」

遠地
「あれをバカップルって言うんだよ」

呆れながら言う和馬。

薩摩
「…福本元帥とマリーダ元帥のイチャイチャの再現ですね」

畝傍
「散々あの2人のラブラブぶりは見て来たが、よもや孫と許嫁のラブラブぶりを見る事に成るとはな」

艦隊司令と古参将校の艦魂2人が何時の間にか会話に加わっていた。

大谷
「おや、お二方…いつの間に？」

薩摩
「和馬砲術参謀が「いま思えば…」って言ったところから」

遠地
「最初からじゃん！」

畝傍
「それより、お前を始めとした3人に嫁候補はいるの？」

遠地
「う…」

福田
「それは…」

大谷
「今は結婚については考えていません」

薩摩
「……はっきり言っちゃったね、大谷君」

畝傍
「ここまではっきり言われては…称賛するしかあるまい」

遠地
「…大谷、お前、本当に結婚は考えてないのか？」

大谷
「今のところはしないつもりだ」

福田
「ある意味、大谷先輩が羨ましいですよ」

……何故か羨ましがられた大谷だった。

その頃……空母海龍艦長室

水城は指揮を副長に任せ（押し付け）て、艦長室に籠っていた。
と言っても1人では無く、コンビの海龍と一緒にだが……。

水城
「で～、海龍。コスプレ案は決まった？」

海龍
「待って！　何か…何かが閃きそうなの！！」

……コスプレ案で悩んでいた。
実際、海龍の愛読書『月刊　兵器乙女のコスプレ☆』と水城の愛読

書『ＭＣ☆〇く〇ず』と『ミ〇タ〇ー・クラ〇ック〇』（笑）などの書籍が散乱・山積みにされている。

海龍
「う～ん、やっぱり艦船は武装・部品付属が主流かな？　それとも、軍服？」

……なんとも贅沢と言うか、迷惑なと言うか…そんな悩みである。

海龍艦橋

沖田
「じゃあ、福本長官達はインドのコーチンに入港するのね？」

士官
「はい。今日中にはスリランカを抜けてベンガル湾からアラビア海に入る予定です」

沖田
「３０ノットで一気に行けたら楽なのに…って言うのは今回は禁止だしね」

士官
「福本連合艦隊司令長官からの命令ですので」

沖田
「えぇ…コーチンには何時？」

士官
「同じく今日中に到着かと…まあ、遅くとも明日には」

沖田
「そう、ありがとう…さて、水城先輩をどうしようか…」

次号へ

87　インド洋にて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

88　ジブチ到着

7月7日　ジブチ共和国

ジブチ

コーチンに一度寄港し、一泊したあと、一路ジブチに向かった第七艦隊。
ジブチに到着した第七艦隊は港内に入港したのだが……

遠地

「まあ…世界の軍艦の大半が集まってるって話は本当だな」

ジブチに入港しているのは日本海軍艦艇だけで無く、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・イタリア……と言った国々の艦艇が見える。

福田

「主に駆逐艦・フリゲートが護衛任務に適任な艦艇ですからね。今回の海賊対策で各国が派遣された駆逐艦・フリゲートがこの付近に存在していますね」

大谷

「現代海軍の編成は駆逐艦、フリゲート、コルベットが主体ですからね。余裕のある国は巡洋艦を加えていますがね」

レイナ

「更に余裕のある国が少数ながら戦艦や空母を保有している…と、

福田少佐から教えてもらいました」

セイバー
「えぇ、その通りよ。戦艦と空母は維持にお金が掛かるしね」

遠地
「ただし、例外として我が日本帝国海軍はすっとんきょうにも、世界相手に戦争が出来るんじゃないかと思うぐらいに、戦艦と空母を多数保有・建造しているけどな」

福本
「それは海軍上層部…引いては日本帝国政府に裁量権があるんだ。現場の俺達が言うことじゃあ無いよ」

少し呆れた様に言いながら勇気とセルベリアが艦橋に入って来た。

遠地
「なんだ、何処かにお出掛けか？」

セルベリア
「ジブチの合同対策本部に到着の挨拶をしに行くのよ」

福本
「大谷、済まないが一緒に来てくれないか？」

大谷
「了解、司令長官」

セルベリア
「と言うことで、和馬とセイバーはお留守番は宜しくね～」

セイバー
「わかった」

遠地
「お留守番って…まあ、表現上間違って無いからいいけどさ…」

福田
「なんか…これからデートって感じですよね」

長門
「…ほんと、バカップルの典型的な姿」

セイバー
「同じ王族としては羨ましい限りだ」

余りに軽い物言いに苦笑しながら送り出す遠地達であった。

その頃……空母海龍艦橋

海龍・水城
「「居る居る居る！！　色とりどりの可愛い女の子ちゃん達がハーレムの様に居る～！！！（ジュルリ♪）（＾ｑ＾）」」

……艦橋から双眼鏡を使って港を眺め回す水城と海龍。
それは獲物を前にしたライオンの如く、いつの間にやら涎を垂らしている……。
つーか……本当にこの２人って軍人？

沖田
「…空母航空隊司令権限であの人を拘束出来れば何れだけ楽になるでしょうか？」

士官
「…司令、それはかなり難しい質問です」

沖田の呟きに隣に居る女性士官が苦笑と苦悶を兼ねた顔で答える。
ちなみに海龍は艦長の水城を始め、パイロットから機関要員まで女性のみで運用されている空母である。
あとは同じ艦隊の巡洋艦畝傍が女性運用艦だ。
他にも駆逐艦やフリゲートクラスでも女性運用艦は少なくは無い。
まあ、第七艦隊発足から７０余年…陸海空軍で女性将兵の採用なんて数の増減はあっても、全く無しなんて年は無い。
故に「男社会」の軍隊も時代に合わせて変化しているのだ。

沖田
「はぁ…早く福本長官が護衛任務を持って帰って来てくれないかしら？」

沖田はこの２人を抑えられるであろう方法を呟いた。

次号へ

88　ジブチ到着（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

89　護衛中…（前書き）

次号からは第零艦隊編が続く…かな？

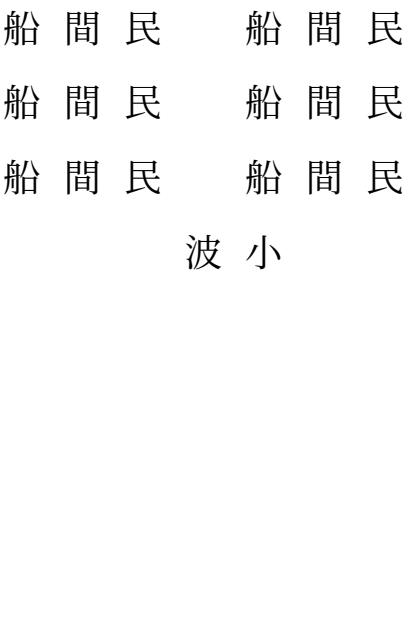
89　護衛中…

7月10日　アデン湾

福田
「噂の広まりって早いですね～」

艦橋でなんとも暢気な事を言う福田。
しかし、そう言うのも頷くしか無い。
実際、第七艦隊旗艦薩摩の後ろには横三列、縦二列の民間船が海龍を挟んで2つあるからだ。
そして、後ろを土佐、周りを六甲と畝傍、駆逐艦の大波、小波、津波、神波が固めている。
また、対潜ヘリが護衛艦艇間の隙間ん埋めるべく飛び回っている。

形成図



六海畝
甲龍傍
民民民
間間間
船船船
津神
波民民民波
間間間
船船船
土佐

とまあ、一度に4隻程の護衛だった筈が第七艦隊は輸送船団方式になり、護衛数も三倍に増えた（＋速度性能が違うから合わせなければならない）為、こんな配置になっている。

遠地
「なんか…薩摩、土佐、海龍を連れて来たもんだから、護衛を押し付けられた様な気がするが…」

大谷
「まあ、漁船主体の海賊が戦艦に喧嘩を吹っ掛ける事自体がないからね。逆に戦艦の巨体と見易い武装が海賊に対して威圧感があると考えたんだろうさ」

確かにそうだ。

見ただけでも巨体な船体に巨砲が装備された連装砲塔5基の軍艦なんかに漁船相手に挑もうなんて考えないし、その姿を見せるだけでも充分威嚇・威圧出来る。
砲艦外交ならぬ、戦艦威圧で海賊を怖じ気させる…と言う意図の様だ。
反対に商船である客船やタンカー、貨物船にとっては潜水艦に襲われるのと訳が違い、漁船の様な海賊に対してどう頑張っても対抗不可能な重武装の戦艦に護衛されている事で、ある種の安心感を持てる…と言う考えだ。
まあ、大和型とこんごう型護衛艦を持ち出すまでも無く、陽炎型駆逐艦とこんごう型護衛艦の写真を見せて「どっちが強そう？」と訊けば、大半が陽炎型駆逐艦を指差すのと一緒の事だ。

福本
「まあ、物は言い様だからな」

セルベリア
「それにしても、異常無しなのは私達の事が広まってる証拠かしら？」

長門
「…かもしれない。実際、インターネット上では『ソマリアの日本戦艦』って題名が付いた動画が再生されてるから」

セイバー
「完全に有名ね。まあ、日本本土でこれを見て騒ぐバカが居ない事を祈るわ」

レイナ
「なぜですか？　日本海軍の艦艇がソマリアで活動しているのは海

賊対策なのに？」

遠地
「違う違う、戦艦を持ち出したら何でもかんでも『日本は侵略戦争を始めるのか！？』ってバカのひとつ覚えみたいに言う議員が少数派でいるの」

綾崎
「あ～…確か、アンドロイド開発を非難してた人がいましたね…女の人で」

……本当にあの女社民党党首は嫌われていますな。

福田
「あの人は日本の病原菌ですからね」

福本
「下手な事は言うなよ」

空母海龍艦橋

沖田
「そろそろね。交代の対潜ヘリ、それとホークアイを発艦させて」

士官
「わかりました」

待機していた対潜ヘリとホークアイが発艦する。
ちなみにリニアカタパルトは出力は低めにしてある。

水城
「うふふ…よみどりみどりってこの事ね～♪♪（＾ｑ＾）」

海龍
「そうだね～、どの子から手を出そうかな～？♪♪（＾ｑ＾）」

……真面目に仕事する上司と部下を尻目に双眼鏡でどの子（艦魂）に手を出そうかと話す艦長と艦魂。

士官
「……あの2人は大丈夫でしょうか？」

沖田
「イザとなったら司令部に突き出すわ」

……あの2人は本当に大丈夫だろうか？

次号へ

89　護衛中…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

９０　天変地異　１（前書き）

再び……と言うのはどうかは解りませんが、異世界編です。

９０　天変地異　１

７月１１日（シリルティア王国７月１８日）　ラバナスター

その『変化』の始まりはちょっとした夜の出来事からの始まりだった。
いや、ちょっとと言う言葉では収まらないだろう。
何故なら、今まで地震がおきた事が無いシリルティア王国で地震（と言っても震度２～３程度）がおきたからだ。
特にラバナスターが揺れ、一時的に混乱する事態となった。
しかし、地震国生まれの日本人が住む日本人街及び日本帝国派遣軍では直ぐ事態を把握し、冷静沈着な対処を行った。
また、この地を納めるボニファス卿も直ぐに飛び起き、事態の収拾にあたっていた。
ちなみに山城・シルヴィア夫妻は珍しく派遣軍司令部で書類処理中に地震にあっていた。まあ……だからこそ、対処が早かった訳だが。

朝……派遣軍司令部

佐野
「失礼します」

市内を見回って来た佐野が司令部に入って来た。

山城

「お、ご苦労様」

シルヴィア
「市内の方はどうであった？」

佐野
「はい、倒壊や崩壊と言った目立つ被害は有りませんでした。詳細は調査中ですが、大規模な被害はないと思われます」

滝口中将
「そうか…それは良かった」

元自衛隊で災害派遣経験のある滝口中将が安心したかのそう呟いた。

横井
「まあ、急患の受け入れだけは準備しておくわ」

山城
「お願いします」

山城の返事を聞くと手を振りながら横井は司令部から出て行った。

小澤大将
「さて…この唐突な地震はなんだろうな、参謀長？」

山城
「残念ながら、私は地震学者でも地質学者でも有りませんので解りません」

ただ……これがただ単なる地震で無い事だけは言える…確証はない

が。

山城
「…ところで、航空偵察の方はどうですか？」

風華
「飛び立って３０分が経ちましたが今のところは変わりありません」

山城
「そうですか」

付近の海図を見ながら、山城は未だに引っ掛かる物を探していた。

その頃……国防省海軍次官室

井上
「ラバナスターで地震…また、珍しいわね」

士官
「はい…被害については未だ確認中ですが、死者はいないだろうと…」

井上
「ふーん…まあ、派遣軍が動いているなら、多分大丈夫ね。何かあったら報せて頂戴」

士官
「わかりました」

敬礼すると報告に来た士官は出て行った。

井上
「な～んか、一騒動おきそうな予感ね…」

……何故か山城と同じ事を考えていた…当然かも知れないが。

その頃……

ヒューーン……

空母征龍搭載の雷雲が一路南下しながら偵察にあたっていた。
無論、このまま何もおきなければ引き上げて良かったのだが……

レーダー員
「……ん、レーダーに反応？」

パイロット
「どうした？」

レーダー員
「いや、レーダーが何か反応した様だ。このまま南下してくれ」

パイロット
「わかった」

相棒のレーダー員からの指示に続けて南下する雷雲……だが、彼らの見た物は……

レーダー員
「な！？」

パイロット
「か、艦隊！？」

彼らが見た物……それは単縦陣の戦艦４隻と空母２隻を中心とした艦隊の姿だった。
しかも、その周りを固める艦艇も２０隻以上いるような、本格的な艦隊であった。

パイロット
「……ヤバくないか？」

レーダー員
「ヤバイに決まってるだろう！　早く報告だ！」

次号へ

９０　天変地異　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

91　天変地異　2

１０分後……日本帝国派遣軍司令部

山城
「妙に何か引っ掛かっていると思ってはいましたが……まさかこれでしたか」

雷雲からの報告により、派遣軍『災害』対策本部が派遣軍『正体不明艦隊』対策本部に様変わりしてしまった派遣軍司令部で山城がポツリと呟いた。
実際、ラバナスターの市内から回ってくる報告により「大丈夫」と思ってホッとしていた対策本部の空気が、正体不明艦隊発見の報でピリピリとした空気になっていた。

シルヴィア
「『一難去って、また一難』の言葉通りだな」

佐野
「本当ですね」

山城
「…佐野、お前も慣れたな」

佐野
「お陰様で慣れてしまいました」

まあ、何時なにがおきてもおかしくない世界に居るだけに、正体不

明艦隊が出て来た…なんてのは常識の範疇だからなんとでもなる。
例えばゴジラの様な大怪獣が現れたって、『あり得ない』なんて言えないから。
あ、ちなみにゴジラの様な大怪獣が現れた場合、日本帝国軍は「日本国民に何らかの危害が及ぶ場合は『危険動物』として対処する」と回答しています。（国防省回答）

山城
「…なんか話が横道に逸れてるな」

シルヴィア
「そうだな」

佐野
「ちなみに、先程の回答はゴジラを映画公開したら問い合わせが殺到したから制定されたと言うのが実話です」

山城
「佐野、お前を話を横道に逸らすな」

小澤大将
「漫才は終わったかね？」

……緊張感の無いボケとツッコミに苦笑しながら訊く小澤大将。

山城
「すみません…まず、この中で正体不明艦隊に先制攻撃を仕掛けようなんて考えている人はいませんね？」

……

集まっていた司令官達は誰も答えない…と言うより、そんな強硬論者は同じ転移者なのでいない。

山城
「わかりました。まずは情報収集に専念しましょう。佐野、偵察機の追加と帰還機の燃料補給、艦艇の出撃準備を整えてくれ」

佐野
「わかりました」

敬礼すると直ぐに会議室を出て行った。

山城
「今回は慎重に行動したいと思います。ですので、皆さんは休んでいて下さい。夜の地震でお疲れかもしれませんし」

この言葉に誰もが小澤大将を見た。
小澤大将も微笑むと言葉を続けた。

小澤大将
「まあ、首席参謀の言う事も一理ある。皆、少し休んで来なさい」

小澤大将の言葉に納得したのか、敬礼すると退室した。

小澤大将
「…さて、君の考えはどうなんだ?」

山城
「前に言いましたけど、自分は地質学者でも地震学者でも、科学者

でもありません。ですから、ＳＦやファンタジー小説を読んでいた経験を踏まえた仮定の話ですが…」

シルヴィア
「わかった、そして、前置きが長い」

くどくど長い前置きを聞いてうんざりしたシルヴィアがツッコミを入れた。

山城
「すみません…もしかしたら、艦隊と一緒に彼らの本国も転移している可能性もあるかと」

小澤大将
「今度は土地も一緒に転移したと言う事か…？」

山城
「はい…憶測では有りますが…ただ、今までと違い地震の後に転移がおきていますので、可能性は大きいかと…」

シルヴィア
「まあ、未だに判断材料が足りんのだし、決断を急ぐ必要もあるまい」

小澤大将
「確かにな。先ずは情報収集が最優先だ」

ノートパソコンやプロジェクターなどの機材を配置し、多数の配線を付けたりして司令部設立が始まって騒がしくなった会議室で３人は話していた。

次号へ

91　天変地異　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

92　天変地異　3（前書き）

次号で一時異世界編は終了です。
次はソマリアの話に戻ります。

92　天変地異　3

30分後……正体不明艦隊存在海域

……その上空

出来る限り燃料消費を抑える為に雷雲は巡航ギリギリの速度で正体不明艦隊の周囲を旋回しながら見張っていた。

レーダー員
「…ん…お、おい！」

パイロット
「どうした……ん、艦隊が…反転した!?」

つい先程まで北上を続けていた正体不明の艦隊は一転、反転し、来た道を戻り始めた。

レーダー員
「いったい…何があったんだ?」

パイロット
「知るか。それより司令部に報告だ」

レーダー員
「あ、あぁ」

レーダー員は慌て無線を取った。

その頃……帝都　国防省海軍次官室

井上次官
「まさか、地震騒ぎの次は謎の艦隊が現れて大騒ぎとはね…それで、現地の方はどうなの？」

士官
「は、既に震災対策本部から紛争対策本部へと移行し、現在情報収集中との事です」

井上次官
「さすがに早いわね…まあ、国交樹立４年目に突入して既に６度も戦争や紛争に巻き込まれてたら慣れちゃうわね」

そんな所に放り込まれたら嫌でも慣れてしまうだろう。

井上次官
（さて…ソマリアは勇気君達がちゃんとしてるし…まあ、あのラブラブコンビと癖の有るメンバーだからミスや変な事はしないでしょう……なら、長引いても当分はこっちに集中出来るわね）

…そんな根拠で大丈夫か？…とツッコミたくなりそうだが、そんな事より、目前の問題。

井上次官

「それで、連合艦隊にもこの事は伝わってるの？」

士官
「はい。地震の事も伝わっていると思いますから…それに福本長官が情報収集を怠る事はないでしょうし」

井上次官
「それもそうね。じゃあ…」

バン！！

通信兵
「次官！　大変です！」

井上次官
「どうしたの？　ソマリアで撃ち合い？　異世界で遭遇戦？」

通信兵
「いえ…異世界ではありますが、例の謎の艦隊が反転、引き返し始めたとの事です！」

井上次官
「反転した？　また、推理に困る話が出たわね」

……そう呟いただけだった。

その頃……ラバナスター　紛争対策本部

山城
「艦隊が反転した？　本当か？」

佐野
「はい、実際の映像もあります」

そう言うとノートパソコンのマウスをクリックし、動画を再生した。
どうやら、雷雲のカメラとを回線で繋いだ様だ。

佐野
「…てな感じです」

山城
「反転が綺麗だったな」

シルヴィア
「…そこなのか？」

佐野
「まあ…確かに綺麗な反転ですね。相当訓練しないとこうはなりませんよ」

シルヴィア
「おいおい…」

呆れた様な口振りに山城は話を戻した。

山城
「本国と通信が繋がって反転したか…あるいは繋がらないから反転

したか…どっちかだろうな」

佐野
「参謀長としてはどちらに？」

山城
「前者だな…昼飯を奢ってもいいぞ」

シルヴィア
「なぜそうなる？」

佐野
「まあ、それはいいとして…どうします？」

山城
「雷雲の残留燃料は？」

佐野
「…帰還ギリギリですかね。追尾は無理かと」

山城
「そうか…なら、征海を使おう」

佐野
「征海ですか…わかりました。小澤長官」

小澤大将
「あぁ、構わんよ」

山城

「では、征海を発進させろ」

シルヴィア
「…征海？」

佐野
「我が国の対潜哨戒機です。アメリカのＰ－３Ｃ『オライオン』を日本でライセンス生産した物です」

シルヴィア
「ふ～ん…航続距離は長いのか？」

佐野
「約９０００キロです。潜水艦を叩く為には、長時間飛べないといけませんので」

シルヴィア
「ふむ…なら、長駆の追跡が出来るな」

次号へ

92　天変地異　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

93　天変地異　4（前書き）

……今年は何かの厄年か？

福本（勇気）
「今度はトルコで地震ですか…」

政府はなにをしている？
早く国際救難部隊か自衛隊を早く送れ！
いま3月の恩を返さないで、何時恩を返す！！

セルベリア
「そして、作者はハイテンション」

なお、本日は直ぐに大帝国の二次作を更新します。

93　天変地異　4

３５式対潜哨戒機『征海』……１９７５年採用のＰ－３Ｃ『オライオン』を日本でライセンス生産した物だ。
長きに渡り使用していた『征海』も機材更新により新たに日本海軍が開発し、今年正式採用された６９式対潜哨戒機『泰海（たいかい）』（自衛隊のＰ１固定翼哨戒機）に更新されつつあるが、そんな簡単に総入れ換えは出来ない為、対潜哨戒機隊の数的主力は未だに征海だ。
そして、この異世界にも征海を中心とする対潜哨戒機隊１２機（＋予備３機）が配備されていた。
（ちなみに、この世界ではロッキード事件はおきていない）

整備員
「発進準備完了！」

整備長
「よし、発進ＯＫの合図だ」

整備員
「はい！」

整備員がコックピットにいるパイロット達に合図を送ると、整備長と共に退避する。

パラパラパラ……

ブイィィィィン……

ブォォォォン！！

ジェット機程では無いが、それなりに音を出して征海は発進した。
まあ、こんなのは飛行場だから仕方ないのだが……。

日本帝国派遣軍　紛争対策本部

佐野
「征海、ただいま発進しました」

山城
「そうか…まあ、多少時間は掛かるが、仕方ないな」

ジェット（ターボファン式）機である６９式対潜哨戒機『泰海』と違い、プロペラ（ターボプロップ式）機である３５式対潜哨戒機『征海』では速度で大分違いがある。
この為、どうしても到着時に正体不明艦隊と接触出来るかが心配となってしまう。

佐野
「大丈夫ですよ、参謀長。確かに雷雲は引き上げましたけど、対潜哨戒で実績のある哨戒機隊がヘマなんてしませんって」

山城
「…だな。まあ、気長に待たせてもらおう」

そう言うと近くにあった椅子を引き寄せて座った。

その頃……横須賀　連合艦隊司令部ビル

福本（伊吹）
「地震、謎の艦隊、そして反転……ふむ、異世界の珍事はとんでもない事の前触れ…なのかな？」

士官
「さあ…何せ、なにがあってもおかしくありませんので」

まあ、今さら始まった事では無いので、福本司令長官もこの答えでも気にしない。

福本（伊吹）
「さて…うちの若手はどう判断した？」

士官
「はい、最初に接触した雷雲の燃料がギリギリの為、代わりに征海を出して艦隊を追跡するとの事です」

福本（伊吹）
「征海か…まあ、長時間の哨戒や追跡に慣れている機種だからな。ベストな選択だ」

士官
「しかし、艦隊を追跡してどうするんでしょうか？」

福本（伊吹）

「そりゃあ、その艦隊の正体を掴むんだろう。ある意味、基礎中の基礎だ」

士官
「はぁ…しかし、追跡するだけで正体が掴めるかどうかは…」

福本（伊吹）
「今までだったら、霧、雷、嵐…この後に艦船が転移して来た例はあった。しかし、今回は地震の後……現地の首席参謀長はどうやら、土地ごと転移したんじゃあないかと判断したんだろう」

士官
「…あり得るんですか？　そんな事が？」

福本（伊吹）
「君もさっき言ったじゃないか…あの世界はなにがおきても不思議ではないのだよ」

……ちなみに、征海が南下中の正体不明艦隊と接触し、遂に正体と本拠地を確認したのは翌日になってからだった。
無論、この報告は国防省より外務省を大騒ぎにさせる事だった訳なのだが……。

次号へ

93　天変地異　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

９４　偶然の接触（前書き）

再びソマリアの第七艦隊です。
さて、何の前触れでしょうか……。

微妙な関連ニュースで、ソマリアの海賊対策で武装した海保・海自の隊員数名を民間船舶に乗せる『武装ガード』を検討しているそうです。
まあ、それも色々と難しい様ですが。

94　偶然の接触

7月12日　アデン湾内

バタバタバタ……

一機の小型ヘリが旗艦薩摩の周囲を旋回していた。
しかも、小型ヘリは本当に小さく、人の乗るスペースは無いような小ささだ。
更に言えば、操縦は船体後部の後部艦橋に居る飛行科の腕章を着けた人間がラジコンを操る様に操縦していた。

福田
「無人偵察ヘリを海上で使うなんて、初の試みでは？」

薩摩の艦橋でその光景を眺めていた福田が艦橋に居る先輩達に訊いた。

遠地
「まあ、陸軍の様に至近距離や危険地域の偵察なんて余り海軍ではしないからな」

セイバー
「よくて、私達陸戦隊が戦場で使う事が多いだけど、海上の艦艇から使う事は余り無いわね」

後輩の問いに砲術の先輩と陸戦隊の先輩が答える。

実際、無人機云々は戦場での偵察だけでなく、砲術家にとっては着弾観測などでお世話になる事もあるので、戦闘科砲術班の人間も無関係では無いし、士官学校でもこう言った機材の事も教えられている。

福本
「まあ、今回は小型漁船に乗った海賊のＲＰＧや携帯対空ミサイルに撃墜されてヘリ共々パイロットと搭乗員を失うリスクに比べれば、無人偵察ヘリなら機材だけ…って言うリスク問題があるからね」

つまり、舐めて掛かって犠牲が出るより、機材１つが失われるだけの方がマシだと言う事だ。

セルベリア
「それでこうやって出してきた訳ね」

福本
「これから上陸戦闘援護をするであろう事になるこの艦隊に対する予行練習…ってとこかな」

福田
「あぁ、なるほど」

納得した様に頷いた福田。

長門
「…長官、そろそろ時間」

福本
「ん…あぁ、そんな時間か…レイナ、すまないが、無線で時間だと

言ってくれないか」

レイナ
「はい」

後部艦橋で無人偵察ヘリ…６４式無人偵察ヘリ（陸自衛隊のＦＦＯＳ）を『操縦』している隊員に「練習終了」の無線連絡を入れる。
もうそろそろ日が暮れる…いくら無人機とは言え、国民の税金で製造した物、そう簡単に事故って失う訳にはいかないのだ。

暫くして……午後８時頃……

福田
「そう言えば、ラバナスターでは地震に続いて、謎の艦隊と新たな島国が現れたそうですね？」

綾崎
「私は専門外ですが、そんなに様々な事がおきるんですか？」

福本
「おきるんですよ。私が信頼する先輩が向こうで首席参謀で事にあたっている筈ですから…今度、会わせてあげますよ」

微笑みながら勇気が言った。

福田
「あはは…ん……前方より船舶接近」

セルベリア
「こんな時間に？　種類は？」

福田
「多分、民間船舶と思われますが…レーダーではどうも…」

福本
「ふむ…長門、解析を頼む。接触する、速度２０ノット」

長門
「…わかった」

福田
「了解」

そして、１時間程して……

福田
「派手に照明を点灯させてますね」

セルベリア
「海賊がいるのに船上パーティーなんて暢気よね」

第七艦隊と反対方向に進む民間船舶を少々呆れつつ眺める。

長門
「……解析完了。船名は『アラビアンナイト』。アラブのある石油王の６０００トン級クルーザー」

綾崎

「……クルーザーって小さい船ばっかりだと思ってました」

福本
「アラブなどの中東方面は石油や金融、最近はＩＴ関連で儲けている人がいますから…福田、念のために警告の打電をしておきなさい」

福田
「わかりました」

……この時は何気無しにお互いに通り過ぎただけだった……事がおきたのは僅か３０分後だった。

次号へ

９４　偶然の接触（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

95　シージャック　1（前書き）

まあ、題名通りですね。
次からいよいよ本格的になります。

95　シージャック　1

『アラビアンナイト』のブリッジ

船長
「日本海軍が海賊対策に戦艦を派遣していたと言うのは本当だったのか」

一等航海士
「まあ、世界屈指の海軍ですから、戦艦を出すぐらい簡単でしょう」

ブリッジで船長と一等航海士が薩摩から受け取った警告を見ながら話していた。

船長
「さて…レーダーに反応は?」

一等航海士
「今のところは…こんな夜中に海賊は来ますかね?」

船長
「さあな…まあ、何事も無ければいいが…」

……この呟きは見事に潰された。

一等航海士
「ん…レーダーに反応、ヘリらしき物が2機、本船に接近中」

船長
「ヘリ？　何処かの国の対潜ヘリかなんかが上を…」
チャキ
「動くな」
その声に船長と一等航海士が振り向くと拳銃を構えた男が３人居た。
「おっと、それ以上動いたら撃つぞ」
一等航海士
「な、なんだ君達は！？」
「そんな事は後で教えてやるよ。それより、いまヘリが来ているな？　上にあるヘリポートの着陸誘導灯と誘導電波を出せ」
船長
「な、何をするつもりだ？」
「後で解る。早くしろ」
さすがに銃を突き付けられては分が悪い。
船長と一等航海士は直ぐにヘリポートの着陸誘導灯と誘導電波を出した。

『アラビアンナイト』のヘリポート

着陸誘導灯と誘導電波によりヘリポートに着陸したのはＵＨ－１イロコイ。

そこから何とも怪しい一団を放出する。

そして、もう1機からも同様の一団を放出すると2機は再び飛び上がった。

……それを『人成らざる者』が見ていたのは……誰にも解らなかった。

その頃……薩摩艦橋

福本

「…レーダーに微弱な反応があった?」

福田

「はい、アラビアンナイトに向かったのは確認出来たんですが…」

福本

「ふむ…長門、レーダー…」

長門

「わかってる。いま、レーダーのデータから物体の種類を探り出してる」

ノートパソコンを動かしながら答える長門。

セルベリア
「…もし、この何かが航空機の類だったら…」

福本
「まだ断定は出来ない…が、念の為に…」

遠地
「なあ、勇気…頭に何か居ないか？」

そう言って入って来たのは和馬だった。
確かに……頭に何か居る。

遠地
「いや～、なんだかよく解んないけど、いつの間にか頭に乗ってんだよ……で、なんだ？」

福本
「そうだな……経験上から言えば艦魂だな」

遠地
「そうか……おい！　誰だか知らないが降りろ！」

……余程頭に居るのが邪魔の様だ。

「仕方ないでしょう～～、緊急事態なんだから～～！！」

和馬の頭に乗っている艦魂は振り落とされまいと必死にしがみ付く。

福本
「緊急事態……和馬、やめろ」

遠地
「やめるよ…退いてくれたらな」

セルベリア
「と言う訳で退いてくれない？」

「わかりましたよ……あれ？　私の事、見えてます？」

福田
「見えてるも何も、上から下までしっかりくっきり見えてますよ」

「……やったー！！　初めて見える人に会えたー！！」

福田
「…どうやら、先程接触した『アラビアンナイト』の艦魂…いえ、船魂みたいですね」

福本
「だな。レイナさん、使ってすみませんが、セイバーを呼んで来て下さい」

レイナ
「わかりました」

次号へ

95　シージャック　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

96　シージャック　2

１０分後……薩摩艦橋

福本
「…とまあ、これが『アラビアンナイト』から聞いた話の全てだ」

セイバーを加えた薩摩乗り組みの艦隊幹部と海龍の沖田航空司令・水城艦長他各艦艦長をテレビ通信で繋いだ薩摩の艦橋で隣にいるアラビアンナイトからの話を全て話した。

福田
「完全にシージャックですね。間違いありません」

長門
「レーダーのデータから出たのはＵＨ－１イロコイだった…ヘリで乗り込んだのも間違い無い」

遠地
「しかも、乗り込んだ船はアラブの金持ちとくれば話は合うぞ」

大谷
「だが…いくら旧式軍用とは言え、ヘリを使うなんて…果たして、海賊だろうか？」

セイバー
「確かに…それはおかしいわね」

島津
『そもそも、海賊は船だろう？　空から来たら、空賊に名前変更だろう』

沖田
『紅の豚ですね』

水城
『あぁ、これからは海賊も空から…』

全員
「「「「「『『それは絶対に違うな』』」」」」」

水城
『うわ～ん、みんなからツッコミ入れられた～～』

島津
『…放っておこうぜ』

沖田
『ですね。それが正論です』

神童
『そもそも、旧式とは言えヘリなんて海賊が買えるでしょうか？』

大谷
「経済的面から言えば、それは不可能に近い。海賊の要因のほとんどが経済的貧困。いくら何でも矛盾が有りすぎる」

福田

「…元帥、どう思います？」

福田の言葉に全員の視線が勇気に集まる。

福本
「…まあ、これは俺の考えだが、もしかしたら、新興テロ組織かもしれない」

遠地
「テロ組織だと？」

福本
「どこの何系かは知らないよ。ただ、この治安不安定地域は巧い隠れ蓑だ。それに金なら、海賊紛いの事をやれば簡単に稼げると践んだんだろう」

大谷
「なるほど…状況的にあり得ない考えでは無いね」

セルベリア
「まあ、海賊しろテロリストにしろ、目と鼻の先で行われている事を見過ごせないわね」

福本
「うん。全艦１８０度回頭！　これより、本艦隊はシージャックされたアラビアンナイトを追跡する！」

全員
「「「「「「『『『了解！！』』』」」」」」」

返事と共に各配置に就いたり、指示を出したりし始める。

福本
「福田、連合艦隊司令部に一文を打ってくれ」

福田
「わかりました」

あっという間に緊張感に包まれた艦橋だった。

その頃……アラビアンナイト船内

……本来ならパーティーで騒がしい筈の会場は異常な静けさに包まれていた。
それもその筈、２０名程の銃を持った人間が自分達を取り囲んでいたら、誰だって静かになる。

「皆さん、こんばんは。あ、下手な行動はお止め下さい。怪我をしたくないでしょう？」

スーツを着たリーダー格の男が人質達に話していた。

「我々をどうする気だ！？」
人質の１人が声を張り上げて訊いた。

リーダー
「別に、ただ、あなた方のお国からそれ相応の物を貰うだけですよ」

「な…」

絶句する人質にリーダーは話を続けた。

リーダー
「まあ、取り敢えず何もしなければ危害を加えません。我々が欲しいのは金だけですから」

薄笑いを浮かべながらリーダーが言った。

再び薩摩艦橋

福本
「さて…大谷、もし君なら何を要求する?」

大谷
「先ずは身代金だね。まあ、アラブの金持ちのクルーザーならヨーロッパの名士が集まっていそうだから、かなりの額を要求するだろう…後は思い付かない」

福本
「そうだな……だが、もしかしたら、こんな要求も出すかもしれない」

大谷
「こんな要求？　どんな？」

福本
「『各国が捕まえた海賊を釈放しろ』…とか」

大谷
「おいおい、それは……待てよ、そうか、テロ組織の可能性もあるなら、可能性はあるな」

セルベリア
「まあ、まだ何にも解ってないんだから、詮索は後にしたら」

福本
「…そうするよ」

セイバー
「勇気、陸戦隊は強襲準備が整った」

福本
「わかった…さて、親父は何時、連絡してくるかな？」

大谷
「気長に待とう。福本長官なら絶対に黙ってないからさ」

次号へ

96　シージャック　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

97　シージャック　3（前書き）

あ～…そう言えばあと3話で１００話だな。

福本（勇気）
「…予定はあるのか？」

……鍋でもやるか。

セルベリア
「夕飯の相談じゃあないんだから…」

海龍・水城
「「じゃあ、コ（バン！バン！）…」」

……ダメだぞ。

97　シージャック　3

7月13日　午前3時（日本時間）　日本本土　横須賀　連合艦隊司令部ビル

この時、福本伊吹連合艦隊司令長官は仮眠用ベッドで眠っていた。
異世界での転移騒動やなんやで司令部ビルに泊まりっきりであったからだ。
だから……

ドンドンドン！！

士官
「司令長官！　福本司令長官！！」

福本（伊吹）
「……開いているぞ。入って来い」

士官
「は……はい、失礼します！」

福本（伊吹）
「ふぁ～～あ…で、なんだ？」

飛び込まんばかりに入って来た士官に、伊吹は欠伸をしながら訊いた。

士官

「は！　第七艦隊より緊急秘密通信で打電あり！」

福本（伊吹）
「……そんな大声で騒がなくていいから、ちゃんと話せ」

士官
「は…失礼しました…第七艦隊からの緊急通信には『アデン湾内でアラブの石油王所有のクルーザー『アラビアンナイト』がシージャックされた模様。事実確認を急がれたし』以上です」

福本（伊吹）
「……シージャック……通信には海賊とかは入ってなかったのか？」

士官
「はい、海賊と言う事は一言も…」

福本（伊吹）
「よし、井上海軍次官と石破防相に連絡しろ。緊急事態だ！　参謀以下幕僚達を緊急召集しろ！」

士官
「は、はい！　わかりました！」

緊張感を孕んだ語気に士官が大慌てで部屋を出て言った。

福本（伊吹）
「さて…息子は父と同じ出来事を経験するのかな？」

そう呟くと伊吹も部屋から出て行った。

その頃……薩摩艦橋

福本
「さて…下手に近付くと人質の命が危ない…がどうにかしないとな…」

全艦戦闘配置に就いた薩摩の艦橋で山城が呟いた。
昔ならどうにかなったが、今は普通の商船にもレーダーが載っている時代に不用意な接近は今の時点で不味い。
それこそ、人質に死者が出てしまえば大事である。

長門
「…ここで私の出番」

福本
「長門？」

ノートパソコンを操りながら、長門が自慢気に胸を張る……胸は無いが。

長門
「アラビアンナイトの船内コンピューターに接続して、船内監視カメラの確保とレーダーを弄るぐらいなら簡単」

福本
「…長門、お前は本当に怖い奴だな」

長門
「で、どうする。やる？」

福本
「…準備はしておいてくれ。今は動きを見る」

長門
「…わかった」

取り敢えずは待機だ……日本から通信がこないと動きが読み難い。

その頃……日本では……

石破大臣
「いやはや…こんな時間に叩き起こされるとは思わなかったな～」

井上次官
「異世界でのゴタゴタよりマシです。それにこれは覚悟の上でしょう？」

軍人と国防省職員が忙しく動き回る中、石破防相と井上海軍次官が会議室に入った。
既に陸空軍の次官達も会議室に来ていた。

石破防相
「中川外相も叩き起こされたかな？」

市丸次官
「石破防相、中川外相も安倍首相も起こされています」

阿南次官
「それに防衛省関係者の殆どがここにいます」

石破防相
「やれやれ…わかってるよ。３人乙女の声は眠気覚ましにはいいな」

……おいおい。

井上次官
「防相…福本司令長官も既に連合艦隊司令部ビルで待機していますが？」

石破防相
「そうか。では、通信を繋いでくれ。連合艦隊司令部と第七艦隊にね」

再び連合艦隊司令部ビル　会議室

福本（伊吹）
「朝も…と言っても夜は明けてないが、早くからすまないな」

参謀や幕僚、土方第一艦隊司令などが集まった会議室の第一声であった。
この第一声に笑い漏れる。

福本（伊吹）
「さて、既に聞いていると思うがアデン湾でシージャックが発生、第七艦隊が距離を取って追跡中だ」

全員が頷いた。
それを確認すると話を続ける。

福本（伊吹）
「現在解っているのはシージャックした相手は海賊では無い、部隊移動にヘリを使った…など相当準備されていたと思われる…多分テロ組織だろう」

苦虫を噛み潰した様な顔になる福本伊吹司令長官。
治安不安定地域にテロ組織などが逃げ込む事は予想していたが、この様な積極策に出てくる事は予想出来なかったからだ。

土方
「第七艦隊は奪還戦を挑む気ですかな？」

土方中将から質問がきた。

福本（伊吹）
「準備はしたが、今は待機中だ」

土方中将の質問に幾分か表情を戻す。

土方
「ならば、後ろの我々が口出しする事はありませんな」

士官
「長官、国防省と通信が繋がりました」

福本（伊吹）
「わかった…さて、どっちに賽は転ぶかな?」

次号へ

97　シージャック　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

98　シージャック　4

12日午後9時時45分（日本時間13日3時45分）　アデン湾内
戦艦薩摩艦橋

福田
「元帥、国防省会議室及び連合艦隊司令部ビル会議室との通信接続完了しました」

福本
「よし、スクリーンオープン」

今まで真っ黒で何も映っていなかった2つの画面にそれぞれ映像が映った。
座って作業していた者も立ち上がり、艦橋に居た全員が敬礼した。

福本（伊吹）
『直れ、作業を続けよ…さて、状況はどうだ、息子よ』

福本
「父さん、今は職務中ですよ…今のところは目立った動きはありません」

石破防相
『やはり、シージャック犯はテロリストかね?』

福本

「それは何とも…我々は敢えて刺激しない為に船とは距離をとってレーダー探知内ギリギリから追跡しておりますので…国防省の方に新たな情報は入ってきていませんか？」

井上次官

『いいえ。今のところはあなたの情報のみで動いている様なものね』

ちなみにこの言葉は「もし間違いだったらどうする！？」と言った保身的な物言いでは無い。

いや、例えばレーダーサイトから「ミサイルと思われる飛翔体が接近！」と警告が出て、これが誤報であっても『三軍の三羽烏』や『三軍の３人乙女』は笑いながら「我が国のレーダーサイト要員は優秀だ」と言って余り問題にしないだろう。

しかし、逆に何かあったのに「何も無かった」と報告すれば大事になる。

日本帝国軍にしてみれば前者より後者のミスを重視する。（事例によっては前者が問題になる時もあるが）

何せ、ミサイル誤報で何もなければ文句は覚悟の上だが、本当にミサイルが飛んで来て、迎撃も出来ずに死傷者が出れば、それこそ天皇陛下にも国民にも顔を合わせられないからだ。

……完全に話が横道に逸れた。

福本

「未だですか…う～ん、手詰まりだな」

シージャック犯がどの様な要求をするか……相手の正体と心理、目的を知り、何をどうするかを決める気だったが……どうも手詰まりだ。

阿南次官

『ところで、奪還は第七陸戦隊が行うのか？』

セルベリア
「はい。セイバーの指揮は信用出来ます。更にシージャック対応の為の訓練も本艦を使いやってきましたから問題ありません」

福本（伊吹）
『まあ、現場に居るのはお前ら（第七艦隊）だから任せるよ』

…つーか、任せるしか無い。

『ふむ、緊急事態と聞いて国防省に来てみれば、第七艦隊が現場に居たのか』

この言葉に誰もが国防省会議室を見た。
そこにはスーツ姿の安倍首相の姿があった。

石破防相
『安倍首相…なぜこちらに？』

安倍首相
『なに、緊急事態と聞いて国防省に駆け付けて来たんだ』

どうやら、情報伝達などにタイムラグがある首相官邸より、素早く克つ必要な情報が集まる国防省会議室で腰を据える気だ。

安倍首相
『一報を聞いた時、異世界で何かおきたのかと思ったが、アデン湾と聞いて目が覚めたね。最近は低調だったから』

そう言いと安倍首相は第七艦隊の画面に目を向けた。

安倍首相
『今や官邸でも有名だよ。「軍関連の騒動では、山城か福本、どちらかが渦中にいる」とな』

……要らん事で有名になった物だ…と福本も苦笑しながら思った。
多分、山城も居たら一緒に苦笑していただろうが……。

士官
『失礼します！！』

いきなり会議室に通信課の士官が入って来た。

士官
『ヨーロッパ主要各国及びアラブ大使館駐在武官らより伝達！　アデン湾にてアラビアンナイト号にてシージャック発生。多額の身代金を要求。なお、アラビアンナイトはＧＰＳを切り所在地不明！』

一気に両会議室がざわめいた。
そして、福本（伊吹）・井上次官・石破防相・安倍首相は一発で日本の優位を自覚した。

士官
『ちなみに身代金の総合計は６億ドルです』

福本（伊吹）
『えらく大量に吹っ掛けたな…まあ、と言うわけで勘は見事に当たったな』

福本
「父さん…」
少々呆れながら勇気は呟いた。
次号へ

98　シージャック　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

99　シージャック　5（前書き）

次号は『特別会』です。
今回は簡単済む……予定……。

99　シージャック　5

午前４時　国防省会議室

安倍首相
「石破防相、中川外相に連絡し、各国大使を通じ現状を説明する様に通知してくれ」

石破防相
「わかりました」

安倍首相
「さて、要請は未だだが、こうなっては一刻を争う、第七艦隊に対し、シージャック事件解決を依頼したいが、福本司令長官、問題はないかね？」

福本（伊吹）
『安倍首相、第七艦隊が何故アデン湾に派遣されたかご存知ですよね？』

安倍首相
「…はっはっは、もう既に問題とかではないな…と言う事だ、福本勇気司令」

…これは完全なる指示に等しい。
勇気は再び苦笑した。

その頃……薩摩艦橋

福本
「わかりました…全艦に告ぐ。連合艦隊司令長官、石破防相、安倍首相の認可が降りた。これより、シージャック犯を制圧する。作戦開始！」

全員
「「「「「「「了解！！」」」」」」」

艦橋に居た全員が作戦開始を聞いて返事と共に動き始めた。

福本
「長門、アラビアンナイトのコンピューター侵入は…」

長門
「もう侵入を開始した。あと３０秒あれば侵入完了」

福本
「早っ…セイバー、そっちは？」

セイバー
「私がヘリに乗ったら何時でも発進オッケー。と言う事で行ってくる！」

サーベルと６４式小銃を持って艦橋から出て行った。

セルベリア

「ちなみに強襲班は２０人。海鷹対潜ヘリ（海自のＳＨ－６０Ｋ哨戒ヘリ）２機に搭乗するそうよ」

福本
「ふむ…よし、無人機操作班も出撃用意。強襲班搭乗ヘリの進路警戒にあたってもらう」

遠地
「完全に囮に使う気だな」

福本
「パイロットと強襲班を失う方が痛いよ」

出来れば使いたく無い手だが……。

島津
『なら、レーダー妨害でもするか？　やるなら土佐でやるぞ』

福本
「大丈夫か？」

島津
『対空レーダーなら対空屋の俺に任せろ。対空戦闘におけるレーダー攻守は俺の縄張りだ』

福本
「わかった、外からのジャミングは島津と土佐に任せる。神波の方は？」

福田

「既に接舷準備は終わっています。シージャック犯の制圧が完了すれば何時でもいけますよ」

福本
「周囲の警戒を厳重にしろ。もしかしたら何処かに伏兵が潜んでいるかもしれない」

こんな事をする敵である…何をしてきてもおかしく無い。

午前４時１５分　国防省会議室

士官
「首相、イギリス駐在武官より連絡。イギリス政府が正式にシージャック事件解決を依頼してきました」

井上次官
「さすがイギリス政府、決断が早いわね」

安倍首相
「そうか…フランスやイタリア、アラブも要請してくるだろう」

石破防相
「まあ、イギリスが要請した時点で条件はクリアーです。ここは第七艦隊に任せましょう」

てか、全面委任しか無いけどね。

福本（伊吹）

『まあ、同い年で俺は浅間山荘に突っ込んだけどな～』

井上次官
「あなたはあの時、陸戦隊の一小隊長、息子は一艦隊司令兼戦艦艦長…艦長は艦から離れられないのよ」

福本（伊吹）
『わかってるって、あっはっはっは』

安倍首相
「彼の豪快さは変わっていないな」

石破防相
「司令長官になってから増大した様に思います」

井上次官
「ですが…歴史は繰り返すの言葉通りです」

父と子がお互いを信頼し、事を任せている……浅間山荘の時とほぼ一緒だった。

次号へ

99　シージャック　5（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１００　特別会（前書き）

すみません、随分時間が掛かってしまいました。
今回は割りと小規模にいきます。

１００　特別会

作者の家

新米士官
「さ～て、鍋、鍋、鍋♪♪」

シルヴィア
「本当に作者は鍋が好きだな」

山城（戦艦）
「と言うより、作者殿はうどんを入れれば何でもいいそうですよ」

福本
「山城さん、それ以上は……」

新米士官
「はいはい、そうです。私はうどんも好きですよ」

そう言いながら自分で具を切って鍋に放り込む作者。

山城
「まあ、豪華な飯を望んでる訳じゃあないし、いいんじゃないの」

セルベリア
「実際、冬の鍋は日本の名物です」

愛宕
「作者さ～ん、ご飯が炊けましたよ～」

作者
「あぁ、力一杯かき混ぜて～」

山城（戦艦）
「ふむ、私も手伝うか」

そう言うと立ち上がり、愛宕の居る炊飯器に向かった。

……さて、今回の『特別会』と称した本編参加メンバー（仮）は福本勇気・セルベリア、山城・シルヴィア、山城（戦艦）・愛宕の３組である。

福本
「…なあ、作者」

新米士官
「なんだ？」

福本
「涼宮ハルヒは知っているが、なぜ『長門有希ちゃんの消失』の漫画がある？」

シルヴィア
「まさか…作者…」

作者
「グキャッ！！　偶々だ、偶々！」

山城
「お前ら～、作者にツッコミをいれるなよ」

セルベリア
「うちの長門とは反対ですね」

山城（戦艦）
「作者殿、ご飯はやはりおにぎりにした方が良いかと…」

新米士官
「それは山城さんに…って、うお!?」

何時の間にか出来ていた三角おにぎりの山に驚く。

山城（戦艦）
「いや…ついつい調子にのってしまってな…」

新米士官
「……まあ、いいですけど…お米全部は使わない様に」

愛宕
「あはは…了解です」

新米士官
「で、そっちは？」

セルベリア
「数は7つで足りますよね？」

新米士官
「あ、すまん、あと2つ追加！」

シルヴィア
「…誰か呼んだの？」

新米士官
「あぁ、何時もお世話に成ってると言うか、成らされてると言うか…」

福本
「わかったわかった。とにかく来るんだな」

山城
「波乱に成らない事を祈ろう」

そう言いながら食器を出すのを手伝う男性陣。

キンコーン

福本
「噂をすれば…か？」

新米士官
「出て来る。山城、鍋を見ててくれ」

山城
「了解」

新米士官

「は～い、どちら様？」

ポコ

「「「「お菓子をくれないと悪戯するぞ～」」」」

新米士官
「…杖でポコリとやっといてよく言えたな」

福本
「……1人を除いて聞いた事のある声が聞こえたと思ったら…お前等か！？」

そこに居たのは海龍、水城、長門、レイナが居た。

レイナ
「すみません…ハロウィンだからと誘われました…」

福本
「…海龍、水城、レイナは何の仮装なんだ？」

海龍・水城
「「猫又！！」」

長門
「…ついでに私は魔女」

ちなみに、海龍はドラキュラ、水城はお化け。

山城
「そう言えば…今日はハロウィンだったな」

シルヴィア
「それは良い……超危険人物が居るぞ！！」

「フッハッハッハ！！　招待されて来てみれば、丁度ハロウィンと言う絶好期！！　コスプレを着せる者の血が騒ぐ！！！」

福本
「翡翠だ…」

山城
「遂に恐れていた事態が…」

シルヴィア
「こ、ここは塩を蒔いて…」

セルベリア
「…遅いと思います」

山城（戦艦）
「なに！　翡翠だと！？」

愛宕
「うわ～ん…今日は厄日です～」

新米士官

「……将斗さんはどこだ？」

「や、やっと見付けた…次いでに新米士官も見付けたか」

椎名さんも現れた。

福本
「……取り敢えず、中に入れましょうか」

山城
「だな……では、どうぞ…」

新米士官
「お久し振りです、椎名元帥」

椎名
「『元帥』はなしや。こっちやと始めてやな、みんな」

セルベリア
「本編では始めてですね」

山城
「感想とかでよく会いますけど」

シルヴィア
「翡翠とは頻繁に会うがな…（ー＿ー；）」

福本
「祖父母がお世話になりました」

椎名
「本当やな…で、あのレイナって子は…ほんまにアンドロイドなんか？」

そう言って山城（戦艦）・愛宕と共にフェイナをあやすレイナを見る。

福本
「はい、本当です」

セルベリア
「我がアーヴ技術と日本のロボット関連技術の結晶です」

椎名
「ふーん…なんか、うちの嫁とそっちの危険人物達が『弄りたい』と言いそうな目でこっちを見てるが、大丈夫なんか？」

福本・山城
「「イザと成ったら、山城さんと共に抑えるしかありません」」

さすが先輩・後輩…息は合っていた。

海龍
「ところで…悪戯の事なんだけど…」

福本
「作者に杖でポコリじゃあなかったのか？」

水城
「そんな訳、無い無い♪♪」

翡翠
「悪戯は…これで～す！」

ボーン！

新米士官
「のわっ！？」

山城
「え、煙幕？」

山城（戦艦）
「窓を開けろ！」

椎名
「その窓はどこや！？」

ドタバタドタバタ……

僅か数秒間の混乱の後、窓から煙幕を外に追い出す。

翡翠
「アッハッハッハ！！　ヒロインは全員頂いたわ！」

水城
「次いでに愛宕も頂いていくわ」

海龍
「さ～て、なにを着せようかな～？　メイド？　スク水？　いっそ、裸！？」

意気揚々と勝利宣言を放つ翡翠・水城に、余韻に浸る海龍。

福本
「完全に不利ですね」

山城
「しかも、気絶してるし…何か薬を嗅がされたか」

椎名
「あの阿呆が…」

煙幕が晴れた後の一変した状況に苦笑しながら呟く。

山城（戦艦）
「愛宕を離せ！！」

軍刀を抜いて急襲する山城（戦艦）。
しかし……

海龍
「対山城さん用護符ならぬ、対山城さん用愛宕生裸写真！！」

バチン！

山城（戦艦）
「…（プツン）…ブウゥゥゥ！！」

顔に貼り付いた写真を見た山城（戦艦）は耐えられず鼻血を出して倒れてしまう。

福本
「やると思った…」

山城
「山城さん！　無事ですが！？」

山城（戦艦）
「……（気絶中）……」

翡翠
「オーホッホッホ！！　『地獄の山城』もこれじゃあ形無し…」

新米士官
「じゃかしんじゃあボケ！！！！」

いつの間にか木刀（太刀＆小太刀）を持ち出して来た作者が鬼の形相で立っていた。

椎名
「…なんで木刀なんて持ってるんや？　しかも、二本差し？」

福本
「作者は元剣道部なのはご存知ですよね？　作者は剣道二段で小太

刀も持ってるんです」

新米士官
「おまえら！　ハロウィンで騒ぎたいのは解るが、ちいとは静かにせい！！　飯食わさんぞ！！」

翡翠
「な、なんだか良く解んないけど…自由が効かなくない？」

水城
「そ、そう言えば…」

海龍
「た、多分、作者がキレたから行動制限が掛かったみたい！」

長門
「……これの解除はさすがに私でも無理」

福本
「よし、レイナ！　海龍と水城だ！」

レイナ
「はい！」

水城
「へ？　わあ！？」

海龍
「わにゃ！？」

あっという間に引っくり返されている水城と海龍。

福本
「やっぱり、レイナに柔道を護身術代わりに教えといて良かった」

山城
「ほんとに…あ、山城さん、大丈夫ですか？」

山城（戦艦）
「う～ん……なにか破廉恥な物を見た様な…」

翡翠
「ちょ、ちょっと！　こっちは無視！？」

椎名
「翡翠、もう止めた方がええで。新米士官のキレ様は尋常ちゃう」

翡翠
「わ、わかったわよ！　はいはい、２人は返しますよ！」

福本
「いったい何を嗅がせたんですか……お～い、セルベリア、起きろ」

セルベリア
「ふみゃ？　ご飯の時間？」

福本
「あはは…そうだよ…山城先輩、そっちは？」

山城
「こっちも大丈夫だ。おい、シルヴィアに愛宕、フェイナの世話は

どうする？」

シルヴィア・愛宕
「「そうだ！　忘れてた！！」」

新米士官
「…さて、飯にするか。鍋だから材料はあるけど、これ以上騒ぐとご飯抜きですからね」

翡翠・海龍・水城
「「「りょ、了解」」」

長門
「…私も食べたい」

福本
「長門…まあ、いいか」

椎名
「じゃあ、よばれるで」

新米士官
「どうぞどうぞ」

……その後、無事に鍋の中身が全員が食べたのは別の話である。

次号へ

１００　特別会（後書き）

零戦先生…これで大丈夫ですよね？
ご意見ご感想をお待ちしております。

１０１　シージャック　６

午後１０時２５分　薩摩艦橋

福田
「土佐の島津艦長より連絡、レーダー妨害完了」

長門
「……こっちも船内コンピューターは抑えた。準備完了」

レイナ
「無人ヘリ、先行します。今のところ、異常無し」

福本
「よし…強襲隊、発艦せよ」

レイナ
「了解。強襲隊、発艦許可出ました。発艦どうぞ」

薩摩船体後部ヘリ甲板

コ・パイロット
「発艦許可が出ました！　発艦します！」

ローターの回転音とエンジン音で騒がしい海鷹の機体内でコ・パイ

ロットが叫んだ。
それを聞いたセイバーは親指を立てて準備完了の合図を送る。
コ・パイロットは合図を読み取るとパイロットにそれを伝えた。
次の瞬間、海鷹はゆっくりと空へ飛び立った。
続いて2番機も後を追うかの様に飛び立った。

午前4時26分　国防省会議室

オペレーター
「薩摩より、強襲隊が発艦しました」

石破防相
「いよいよか…運命を彼らに託すしかないな」

安倍首相
「石破防相、君には珍しく気弱だね？」

石破防相
「いや、もちろん第七艦隊は信じてますよ。ただ、人質が居るもんですから、心配になるんです」

安倍首相
「そうだな…だが、彼らは絶対に我々の期待に応えてくれるさ」

井上次官
「…わかりました。首相、イギリスに続き、フランス、ドイツ、イタリア、アラブからも人質救出の要請があったと外務省から報告がありました」

安倍首相
「そうか…既に救出隊は出たと伝えてくれ」

井上次官
「わかりました」

福本（伊吹）
『あ、ちょっと待ってくれ』

連合艦隊司令部会議室のスクリーンから伊吹の声が飛んだ。

市丸次官
「どうしたの、福本司令長官？」

福本（伊吹）
『いやな、いま、どこの国が犯人と交渉中なんだ？』

井上次官
「今は…確かアラブの筈よ。それが？」

福本（伊吹）
『なら、アラビアンナイトの船籍はアラブでいいんだよな？』

阿南次官
「えぇ、そうよ…それがいったいどうしたの？　なにかあったの？」

福本（伊吹）
『首相、アラブ政府に要請して、ブリッジの船長達と話す様に言って下さい。船長達が無事かどうか確認するとかなんとか言って』

井上次官
「なにそれ？　今回の事と関係あるの？」

福本（伊吹）
『ブリッジに居るであろう見張りの気を逸らすの』

安倍首相
「なるほど…うむ、中川外相を通して要請してみよう」

福本（伊吹）
『ありがとうございます』

その頃……

バタバタバタバタ……

海鷹2機がゆっくりと目標の『アラビアンナイト』に接近していた。
その前方には無人ヘリが先行している。

セイバー
（う……まさか、ヘリに乗ってこれ程不安になるとは…）

実際、出来る事なら甲板でもいいから足をつけたい……と強襲隊員の誰もが思っていた。
ただし、さすがにセイバーは陸戦隊指揮官の為、顔には出さない。

コ・パイロット

「セイバー隊長！　アラビアンナイトのヘリ甲板です！」

セイバー
「よし！　みんな、これよりアラビアンナイトに乗り込むぞ！　私に続け！」

そう言うと先陣をきってヘリ甲板にロープ降下するセイバーだった。

その頃……薩摩艦橋

福本
「シージャック犯の配置が解った？　どうやって？」

長門
「解ったと言っても、船内監視カメラを見てたら大体解っただけ。今の配置は…」

そう言いながら自分のノートパソコンにアラビアンナイトの簡略図を出して説明する。

長門
「多分、パーティーをやってたホールに人質を集めたんだと思う。だから、シージャック犯も集中してる。後は機関室４人とブリッジ３人、船室甲板に４人いる」

セルベリア
「へぇ…セイバー達に教えられないの？」

長門
「１０秒だけ時間が欲しい」

福本
「１０秒で済むならやってくれ」

長門
「わかった」

次号へ

１０１　シージャック　６（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０２　シージャック　７（前書き）

すみません…まさかのサーバーの混雑で更新が遅れてしまいました…。

１０２　シージャック　７

アラビアンナイト　ヘリ甲板

セイバー以下１０人を降ろした海鷹１番機は２番機にバトンタッチし、２番機が残りの強襲隊をロープ降下させていた。
そして、先にロープ降下したセイバー達は周囲を警戒していた。

隊員
「隊長、長門情報参謀より転送データです」

セイバー
「転送データ…何の？」

隊員
「…どうやら、シージャック犯の配置ですね。この下の甲板及び付近にシージャック犯は居ません」

部隊に配備された携帯端末を見ながら隊員が言った。

セイバー
「ふむ…さすが長門と言ったところね。それでも要注意ね」

いくらシージャック犯の配置が解っても、ここが敵地で有るため、それが『全て』では無い可能性もある。

隊員
「隊長、強襲隊全員降下完了しました」

セイバー
「うむ、わかった。まずはブリッジからだ…行くぞ」
素早く移動し、ブリッジへと向かう強襲隊だった。

午前４時４７分　国防省会議室

士官
「大変です、井上次官」

井上次官
「どうしたの？　国防省前で誰か暴れてるの？」

士官
「いえ、そうではなく、玄関前で記者達が集まって来た様です」

石破防相
「む…国防省が騒がしいから記者達が来たか？」

福本（伊吹）
『あるいはどっかからシージャックの件を嗅ぎ付けたか…まあ、どちらにしろ、何時かは取材陣が押し掛けて来るとは思ってたけどな』

阿南次官
「記者会見の準備をしておきましょうか？」

安倍首相
「いや、もう少し焦らしても罰は当たらんだろう」

市丸次官
「どうせ、この時間では朝刊に載せるのは難しいでしょう。よくてテレビやインターネット、新聞は号外になりますし」

阿南次官
「では、外のマスコミにはもう少し我慢してもらいましょう」

……なんか普通にマスコミ対応が決まりました……記者達も大変ですね……。

その頃……薩摩艦橋

福本
「うぅ…やっぱり、俺も行けば良かったかな？」

大谷
「勇気、解ってると思うが、現段階で艦長は艦を離れてはいけないんだよ」

福本
「わかってるよ…くそ、何も出来ないからソワソワしちゃう…」

……そんな勇気を眺める人達は……

レイナ
「……福本長官はもっと冷静沈着な人だと思ってましたが…」

遠地
「仕方ないさ。今回は艦長で行けなかったが、本来なら真っ先に乗り込むのがあいつの性分だからな」

セルベリア
「だから、余計に動きたくてウズウズしているのよ」

綾崎
「…それで艦隊司令が務まるんですか？」

福田
「元帥は現場派だから、後ろで指揮を執るのは嫌なんですよ」

長門
「けど、私はやり易い…あ、長官、動きあり」

福本
「ん、どこからだ？」

長門
「ブリッジ。３人の内、１人がブリッジを出た…多分、トイレ」

福本
「む…セイバー達と接触しそうか？」

長門
「大丈夫…と言うより、セイバー達が何とかしそう」

福本
「……なら、大丈夫だな」

アラビアンナイト船内

シージャック犯
「う～、トイレ、トイレっ…」

バキッ！！

……トイレに向かおうと廊下の角を曲がった瞬間、セイバーの６４式小銃の銃床で顔面を強打された男がひっくり返った。

セイバー
「本当に長門はこう言う時に頼りになるわ」

隊員
「隊長、こいつはどうします？」

セイバー
「手足縛って猿轡噛ませて、トイレに放り込んでおきなさい。後でどうこうするから。それよりもブリッジの確保よ」

次号へ

１０２　シージャック　７（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０３　シージャック　８

午後１０時５０分　アラビアンナイトのブリッジ

シージャック犯１
「…おい、あいつ、遅くないか？」

シージャック犯２
「かなり我慢していた様だからな。長く掛かっているんだろう」

……拳銃を構えながらなんとも気が抜ける会話を交わすシージャック犯の２人。その前にはアラブ政府からの通信に答える船長と一等航海士……もちろん、シージャック犯の数や状況なんて言わない様に脅されている。

船長
「…通信は終わったぞ」

シージャック犯２
「よし、元の場所に戻れ。しかし、こんな風に見張る必要はあるのか？」

シージャック犯１
「さあな。まあ、下に比べれば楽なもんだぜ」

まあ、確かに比べれば楽であろう……次の瞬間までは。

パス！パス！パス！パス！

シージャック犯1・2
「「ギャア！！？」」

右肩・右足を撃ち抜かれたシージャック犯が悲鳴を上げた。
そして…その後ろには消音器を装着した零式拳銃を各々の姿勢で構える日本海軍第七陸戦隊兵の姿があった。

隊員
「日本海軍です！　皆さん無事ですか！？」

船長
「あ、あぁ…しかし、いったいいつの間に…」

セイバー
「隊長のセイバーです。この船のレーダーは船内外共に我が日本海軍が抑えました。ブリッジ要員はこれで全員ですね？」

一等航海士
「あぁ…だが、いつの間に日本海軍が？」

セイバー
「あなた方とは数時間前に警告を行った筈ですが…」

船長
「…まさか、あの擦れ違った艦隊が引き返していたのかね！？」

セイバー
「はい。艦の鋭い艦隊司令と理解のある上層部のお陰です」

そう言うと後ろの隊員に訊いた。

セイバー
「そっちはどう？」

隊員
「応急措置をして、両手足を縛り猿轡を噛ませてあります」

セイバー
「わかった…すみませんが、我々はこれよりホールのシージャック犯達を鎮圧して来ます。その間、ここであのシージャック犯を見張っていて下さい」

船長
「わかった。それぐらいならお安いご用だ。船客達を頼む」

セイバー
「わかりました。行くわよ」

そう言うと廊下を強襲隊を率いて一目散に走り始めた。

その頃……薩摩艦橋

長門
「…強襲隊、ブリッジを制圧完了」

遠地
「よし！」

福田
「やりましたね！」

ブリッジ制圧完了の報告に緊張が解けた幕僚・艦橋要員達。

福本
「待て、問題はこれからだ。ホールに居る人質を無事に救出出来なければ、任務は完了じゃあないぞ」

勇気の言葉に誰もが再び緊張感を持った顔になった。

セルベリア
「どうする？　上に報告する？」

福本
「いや、長門のデータは既に届いている筈だ。こちらから報告するのはシージャック犯達の制圧と人質全員無事の報告だけだよ…今のところはね」

そう言うと軽く被っていた制帽を深く被り直した。

国防省会議室

オペレーター
「薩摩よりデータ転送…ブリッジの制圧完了」

井上次官
「ブリッジか…次はホールね。まあ、そっちが大変だけど」

阿南次官
「ホールに約２０名…このデータに誤差があっても、どっちにしろ面倒ね」

市丸次官
「ですが、ここを抑えてしまえばシージャック犯の戦力は瓦解。残るのは僅か８人、しかも配置はバラバラの烏合の衆です」

井上次官
「まあ、こちらより現場の方がよく解っているだろうから、あえて何も言わないけど…さて、どうなるか」

次号へ

１０３　シージャック　８（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０４　シージャック　９（前書き）

シージャック編はこれにて終了、次号は後始末の予定です。

１０４　シージャック　９

午後１１時１分　アラビアンナイト　船内ホール入口前

セイバー
「……さて、問題はここよね」

手鏡でホールの中を探っていたセイバーが呟いた。
向こうは２０人＋リーダー、こちらはセイバーをあわせて２０人…
戦力はほぼ拮抗している。
しかし、向こうは人質がいると言うアドバンテージがある。その気になれば人質を傷付けたって構わない。
対しこちらは人質の全員無事が前提条件である。つまり、人質を盾にされれば撃つことは難しい。

セイバー
（それに…この後、シージャック犯達がどんな行動をとるか解らないし…時間を掛ける事も無理ね）

となれば討って出て、人質を盾にされない様に電撃的に短時間でシージャック犯達を制圧するしか無い。
となると方法はただ１つしかなかった。

その頃……薩摩艦橋

福本

「…と言うセイバーの作戦だが…出来るか？」

通信を介してセイバーの作戦を説明した勇気。
すると、作戦成功の鍵を握るであろうパソコン担当者は考える素振りも見せず、事無げに言った。

長門
「そんなの朝飯前。必要ならもっと派手にやってもいい」

セルベリア
「いや、派手にやったらダメでしょう」

遠地
「それはまた別の機会にしてくれ…」

長門
「残念…でも、やることは簡単。ただし、タイミングが重要。どちらかが合わなかったら人質と隊員に被害が出る可能性が高くなる」

福本
「それはセイバーもわかってるよ。それにタイム合わせはこっちでやるよ」

長門
「…わかった。1分後には絶対準備を終わらせる。待機しておいて」

福本
「伝えておくよ」

その頃……アラビアンナイト　船内ホール

リーダー
「…わかりました。貴国を始めとした国々の決断に感謝します…ご機嫌よう」

そう言うとリーダーは電話をきった。

リーダー
「イギリスをはじめとした国々は我々の要求を完全のんだ。我々に6億ドルを手に入れたぞ！」

シージャック犯達
「「「「「「「「おおう！！」」」」」」」」

シージャック犯達から喜びの声が響いた。

リーダー
「さて、人質の皆様方にはもう暫しお待ち下さい。入金を確認しましたら、我々も出て行きますので」

バッ

その言葉を待っていたかの様にホールの照明が一斉に消えた。

リーダー
「だ、誰が消した！　早く点けろ！」

突然の事に人質がざわめく中、リーダーが叫んだ。

その頃……ホール入口前

セイバー
「5、4、3、2、1、0」

セイバーがカウントを終えるとホール内の照明が消えた。
無論、長門がホール内の照明を全て切ったからだ。
そして、間髪入れずにセイバーは音響閃光弾を3つを転げ入れた。

セイバー
「対閃光・音響防御！」

チカッ！

キーーーン！！

カメラのフラッシュの様な閃光と耳鳴りの様な音響がホール内に拡がる。

セイバー
「今だ！　第一目的は人質の安全！　一気に制圧せよ！　突っ込め！！！」

強襲隊
「「「「「「おう！！！」」」」」」

セイバーを先頭に強襲隊はホールに突撃した。
そんなホールの中は音響閃光弾により視覚・聴覚を麻痺させられたシージャック犯達がのたうち回っていた。
無論、何人かは必死に立ち上がったが、強襲隊の正確射撃により撃ち倒され、拘束された。
リーダーの方はもっと無様で……よろよろと立ち上がったところにセイバーの蹴りを顎にくらい、ひっくり返って気絶したところを拘束されたのであった……。

次号へ

１０４　シージャック　９（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０５　解決後（前書き）

次号ではまた時系列がぶっ飛びます…そしないと話が進まない…。

１０５　解決後

人質の安全を確保した強襲隊は既に接近していた神波の増援隊と共に船室甲板と機関室の残党を制圧、１１時４７分（日本時間５時４７分）に制圧完了を国防省に報告した。
この報告を受けた国防省は直ぐに外務省を通じて関係各国に人質全員無事とシージャック事件解決を通知した。
こうして、第七艦隊としては初の人質事件は無事に幕を降ろした。
ちなみにその後の日本軍などの調査で彼らは新興テロ組織であり、かなり前から計画して実行に移した事がわかった……第七艦隊が邪魔しなければうまくいっていたであろうが…。
それと……その日の午後の衆議院で社民党の福島党首がまったくもって現実からかけ離れた理想論と批判を繰り広げ、総スカンを受けたのは別の話である。

１３日（シリルティア王国　２０日）午後６時半　ボニファス伯爵邸

山城
「…また派手に大きく掲載されたな…」

読売新聞の夕刊を見ながら山城は呟いた。
それもその筈…薄い夕刊の一面は勿論、政治面、国際面、テレビ欄の裏側の総合面など…新聞の３分の１以上を使って早朝におきていた『シージャック事件』と『第七艦隊の活躍』をデカイ写真を堂々と載せて報道していた。

シルヴィア
「写真も二面、三面まで使っているな…だが、ここまで大胆に写真を使えると言う事は…今回は検閲をしなかったのか？」

同じく見ていたシルヴィアが疑問を口にする。

山城
「あくまで勘だけど…今回は第七艦隊が活躍したし、列強各国にも今更隠しても無駄だから大盤振る舞いしたんだと思うよ」

シルヴィア
「大盤振る舞いね…まあ、何時までも隠せる代物ではないからな、戦艦は」

山城
「だね…まあ、もう１つ狙いが有るなら別かもしれないけど」

シルヴィア
「もう１つの狙い？」

山城
「『第七艦隊』の名前が持つ意味だよ。『第七艦隊』は福本元帥が指揮を執っていたから米ソ戦で勝ったし、それに第七艦隊の戦艦は在籍したままで姿は消していたから、その一角が再び姿を現したら、各国にとっては衝撃なのさ」

シルヴィア
「あぁ、なるほどな…核兵器を表向き持てないなら、戦艦を複数持った艦隊は抑止力としてベストだからな」

山城
「維持費は掛かるけどね。まあ、軍隊自体が維持費が掛かる物だけど…」

しかし、実際の外交は後ろに軍事力を忍ばせつつ行うものだから、国も大金叩いて整備するのだが……それを怠るとどうなるかは歴史が実証済みだ。

山城
（しかし…なぜこんな中途半端な戦力の時に見せ付けたんだ？）

……それが不思議な山城だった。

その頃……連合艦隊司令部ビル

福本（伊吹）
「少し派手に報道しているが…まあ、いいか」

産経新聞の夕刊を見ながら呟く親父の福本伊吹司令長官。
そして、視線を机の報告書に目を移す……そこには『第七艦隊配備艦艇整備・建造状況報告書』と書かれた。

福本（伊吹）
「今年の１０月に伊豆型４隻、来年１月に播磨型４隻…空母は８月に２番艦神龍と戦鷹型２隻…その他所属艦も順次完成・配備予定か…ふむ、悪くは無い」

そう言って窓の外を眺める福本伊吹司令長官。
さいはて…第七艦隊はどうなる事やら…。

次号へ

１０５　解決後（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０６　任務終了

それから４ヶ月後……

１１月１３日　アデン湾内
薩摩艦橋

福田
「いや～、こう何度も往復していると景色も飽きますね～」

遠地
「福田～、それは言うな～」

シージャックの一件以来、有名になってしまった第七艦隊に対する護衛依頼が急増し、第七艦隊は西へ東へと往復する日々を送っていた。
故に……第七艦隊の乗員も飽きと疲労が積もっていた。

福本
「『飽き』はダメだろう」

セルベリア
「それに私達は任務中だしね」

福田
「まあ～、そ～ですけど～…もうそろそろ日本に帰りたいな～…と思いまして…」

長門
「…そんな事言ったら、福本元帥にマリーダ元帥、あなたのお祖父様の福田元帥は約2年間、欧州に居たけど？」

福田
「あれは…大戦中の話ですよ？　それに移動してた訳だし…」

セイバー
「我々は物見遊山で来た訳ではないからな」

福田
「わかってますよ…そう言えば、そろそろ交代の時期では？」

福本
「どうだろうな…ここまで有名になったら、第七艦隊との交代が出来るかどうか…わからんな」

福田
「えぇ～～…そうな～～…」

セルベリア
「まあ、大人しく命令がくるまで仕事をしてた方が利口よ」

福田
「は～～い…」

その頃……

バタバタバタバタ……

哨戒飛行中の海鷹対潜ヘリが飛んでいた。

コ・パイロット
「ん…あれは漁船ですかね？」

海上を見張っていたコ・パイロットが機長に訊いた。

機長
「わからない。漁船と思わせた海賊かもしれない」

周囲を旋回し、それを確認しようとした……しかし、答えは向こうが出してくれた。

ガンナー
「あ！　ＲＰＧ７！！　こちらを向いています！！」

機長
「な！　離脱だ！　急げ！！」

パイロット
「は、はい！！」

必死に操縦桿を動かして降下する。

機長
「ＲＰＧはどうだ！？」

ガンナー
「は、なんとか避けました！！」

機長
「急いで艦隊に連絡だー！！」

コ・パイロット
「こ、こちら、海龍３番機！　海賊と思われる漁船よりＲＰＧ攻撃を受けた！　場所は……」

海龍艦橋

水城
「まさか、対潜ヘリに喧嘩売るバカが居るとは思わなかったわ」

報告を聞いて呆れる水城艦長。

沖田
「それで、水城艦長はどうします？」

水城
「…搭載している隼鷹を出しましょう。どうやらキツイお仕置きがいるみたいですし」

沖田
「……大丈夫かな」

……ちなみに、沖田は念の為に福本に訊いたところ「やり過ぎ注意。味方艦艇には連絡済み」と言う返事が返ってきたので実行に移した。

再び薩摩艦橋

福田
「味方艦艇から連絡です。例の漁船を捕まえたそうです」

福本
「そうか…ふむ…」

レイナ
「…どうしました？　長官？」

福本
「いや…そろそろ、一度くらい休みを入れてやらないとな～…と思って…」

福田
「ん…元帥、国防省と連合艦隊司令部から電文です」

福本
「ありがとう……ふむ…見てごらん、セルベリア」

セルベリア
「…あらあらあら、凄いタイミングね」

福本
「だな…福田、全艦に通信オープン」

福田
「了解…どうぞ」

福本
「全艦任務ご苦労。つい先程、国防省及び連合艦隊司令部から電文があった。本日をもって第七艦隊は海賊対策の任を解かれ、交代部隊に委譲する。日本に帰れるぞ」

艦橋員
「「「「「「「「「おお！！」」」」」」」」」

歓声が上がる。
まあ、当然かもしれないけど…。

福本
「それと…途中で艦隊はアラブのドバイに寄港する事になった。以上だ」

歓声の続く中、マイクを福田に返す。

福田
「ドバイ…ですか？」

福本
「あぁ、上からの許可は勝手に降りてる。まあ、どうせ、一度降ろさないと大変な事になりそうだしな」

次号へ

１０６　任務終了（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０７　ドバイにて　上（前書き）

一話で済ます筈が二話構成になりました……。

１０７　ドバイにて　上

１１月２０日　アラブ首長国連邦　ドバイ

福田
「…うわ～～…」

セイバー
「発展振りは聞いていたけど…見ると聞くでは大違いね」

長門
「…『砂漠のオアシス』みたい」

遠地
「そうか？　砂漠から見たら、砂漠にビルが生えてる様にしか見えないがな」

レイナ
「日本と同じぐらい発展してますね」

ドバイの港に降り立った第七艦隊の面々は思い思いの事を口にしていた。

福本
「和馬、頼むから下手な事を言わないでくれよ。アラブは名前の通り連邦国なんだからな」

遠地

「はいはい、わかってますよ」

大谷
「それでは今日と明日の2日間、両舷上陸ですね。但し、羽目を外さない事…で、よろしいですね、司令？」

福本
「あぁ…しかし、いいのか大谷？　お前、上陸しなくて？」

大谷
「まあ、少し街中を歩く程度なら夜にでも出来ますし…それに司令と副司令のデートを邪魔する訳にはいきませんし」

セルベリア
「…だってさ」

福本
「…わかったよ。で、他の面々はどうするんだ？」

女性陣
「「「「「「「「「買い物！！」」」」」」」」」

遠地
「そこら辺ぶらぶら」

福田
「とにかくぶらぶら」

島津
「仲間内で食事」

福本
「…まあ、さっき大谷が言った様に羽目を外さない様に…以上、解散」

福本
「ふう…」

セルベリア
「で、私達はどうするの？」

福本
「遊園地って言うものな～」

セルベリア
「それは…夜ね」

ドバイの街中を私服の普段着で歩く2人。
何せ、女性陣の様に買い物に行く必要が無い為、とにかくぶらぶら…である。

福本
「……ん？」

ふと気付いた……なんだかよく解らないが付けられている……しかも、かなりの経験のある人間だ。

セルベリア

「……どうしたの？」

福本
「いや…どうやら、付けられてる」

セルベリア
「あら……こんな2人を付けても意味無いと思うけど…」

福本
「それは相手次第だよ……さて…」

普通に歩く……かと思えば路地裏に入った。
適当に幾つかの角を曲がり行き先を混乱させてみた。

セルベリア
「…巻けたかしら？」

福本
「…どうだろう、向こうがプロなら…」

ジャリ

異様な砂を踏む音に2人は素早く懐の大型モーゼル拳銃と零式拳銃を抜き、セルベリアは勇気の背後に素早く周り、背中合わせになって後ろを固める。
すると、両側から男達が現れた。

福本
「誰だ？　言っておくが、イザと成れば容赦はしない」

男
「日本海軍の福本中佐とセルベリア中佐ですね。あるお方にお連れする様に頼まれております」

福本
「あるお方…親父の飲み友達か何か？」

男
「私も詳しくわ…ですが、かなりの顔見知りだと思います」

福本
「なるほど…わかりました」

そう言うと勇気はモーゼルを懐になおした。
それを見てセルベリアも零式拳銃を懐になおした。

男
「それではこちらへ…本来なら正式にお呼びすればよかったのですが、シージャックの一件で色々と慎重になりまして…」

福本
「まあ…仕方ないですね」

苦笑しながら勇気も同意した。
それよりも……

福本
（さて…中東方面で親父の飲み友達と言えば……ダメだ、普通に考えて、親父の飲み友達は１００人を優に越すのに俺が解るわけないじゃん）

ともかく……福本伊吹大将が要らん事をやって無い事を勇気なりに祈るのであった。

次号へ

１０７　ドバイにて　上（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０８　ドバイにて　下（前書き）

結局……こうなりました。

１０８　ドバイにて　下

３０分後……

ドバイ港近く　アラブ海軍基地

何故か三菱のランサー（６代）に乗って勇気とセルベリアはアラブ海軍の基地に正門から入っていた。
私服の人間が海軍基地に入ると言うのは大臣や大使など、お偉方の婦女子が多い（あとは基地のイベントや解放日ぐらい）のだが、まさかその私服姿で他国の海軍基地に入る事になるとはさすがに２人も思わなかったが……。
そんな２人は男に先導され、ある一室に入った。

男
「では、そのお方にお連れした事をお伝えしますので、この応接室でお待ち下さい」

そう言うと一礼してから男は出て言った。

セルベリア
「…さて、これは完全に軍人ね」

福本
「あぁ…アラブ海軍の基地の中と言うことはそれなりに地位がある人間だが……さて、親父の飲み友達にいるかどうか…」

多分、本人は直ぐに解るであろうが、息子は検討が付かない……１

００人以上いれば本人で無いので解る訳がない。

セルベリア
「まあ…待っとけば解るから寛いでおきましょう」

福本
「…そうだな」

１０分後……

ガチャ

「いや、済まない。飲み友達であり、親友の息子と許嫁を手荒な真似をしてしまったな」

福本
「…思い出しました。アラブ海軍に『ライオン』の名を持つ海軍将校が居ると親父から聞いていましたね」

「話していたか…そうだ、アサド・アダーバ、アラブ海軍中将だ。君の父上とは大使館の駐在武官時代に知り合ってからの仲だ」

福本
「ええ、聞いています。最終的に海軍御用達の酒屋を１６件も飲み友達２０人で梯子した伝説は未だに破られてませんから」

セルベリア
「…そんな事があったの？」

アサド
「あ～…そんな事もあったな…次の日に散々怒られたけっな～」

福本
「コホン…それで、わざわざ手荒ぽっい真似をして我々を連れて来たのは何の用事ですか？」

アサド
「あぁ、そうだった。１６年前、君の父上がアラブに来た話は聞いているかね？」

福本
「えぇ、確かアラブ海軍へのフリゲートの売り込みとかで…あれ、確かあの時、少女を拾ったとかの話を聞いた様な気が…」

アサド
「あぁ、その通りだ。その少女は私が預かって妻と共に育てた。まあ、既に２人づつ子供を育てていたから苦にならなかったがね」

セルベリア
「多産ですね」

アサド
「そうかね？　私の姉は８人生んで育てたが？」

福本
「あの…話が逸れている様な気がするのですが？」

アサド
「すまない…その子が日本に行って海軍へ志願したいと言ってな…
…」

福本
「なるほど…話が読めてきました。その義理の娘さんの事ですね」

アサド
「あぁ…まあ、娘には幼い時に事情は話していたし、本人も自覚はあるし…それを父上に言ったら「息子に会わせてみてくれ」と」

セルベリア
「あらあら…どうするの？」

福本
「あぁ…そうだな…」

1時間後……薩摩艦橋

大谷
「で、結局、連れて来ちゃったんですね」

福本
「し、仕方ないだろう…こうなったら…」

右隣にセルベリア、左隣に中東系女の子を連れて戻って来た勇気か

ら大谷は今までの顛末を聞いていた。

大谷
「それで…あなたのお名前は？」

「コルマ・アダーバです。お義兄様同様、よろしくお願いします」

大谷
「はい……お義兄様？」

そう言って大谷は勇気の方を向くと本人は顔真っ赤。

セルベリア
「うふふ、私はお義姉様だって」

大谷
「あぁ、なるほど…良かったですね、司令。妹が出来て」

福本
「大谷…お前までからかうのか…」

大谷
「ですが…翡翠や海龍、水城が喜んできますね」

福本
「平気な顔で余計頭を痛める事を言うな…」

次号へ

１０８　ドバイにて　下（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０９　旅順軍港にて　１（前書き）

時系列がまた飛びます。
まあ、そうでもしないと話が進まない……。

１０９　旅順軍港にて　１

更に時系列は飛びまして……２ヶ月後……

２０１０（平成２２）年１月２０日

旅順軍港

年が明け、旗艦を薩摩から改装が完了した播磨型戦艦一番艦にして『真の第七艦隊旗艦』の播磨に移した第七艦隊。

更に大幅に艦艇数を増やし、本当の意味での『艦隊』に姿を変えた……のだが……

播磨艦内　長官公室

福田

「元帥～…失礼しま～す…」

福本

「なんだ？　新しい書類ならそこに置いてくれ」

……何故か『必見瞬殺』と書かれた鉢巻きを巻いて、うず高く積まれた書類の山と戦っている勇気がいた。

福田

「…いえ……大丈夫でしょうか？」

福本
「あぁ、大丈夫だ。槍が降ろうが、矢が降ろうが、とにかく終わらせるから」

福田
「は…はぁ……」

その隣で同じく書類を片付ける播磨を見ても、明らかに量が違う。
見えるだけでも書類のビルが5つある勇気に比べ、播磨の量はそのビルの半分しか無い量が1つだけ。
播磨は余りにも場違いの雰囲気に処理速度はやや遅い。

河内
「…勇気様の異常な量はなんですか？」

第七艦隊の参謀長（艦魂）の河内が福田に訊いた。

福田
「う～ん…ぶっちゃけた原因を言えば、戦隊司令・幕僚の人事が進んでいないのが原因だね」

そう、福本がこれ程の量の書類を整理している原因は第七艦隊の人事異動が進んでいない事だ。
艦船の人事についてはどうにかなった…しかし、それを纏めるべき戦隊司令などの人事は異動する人間が決まっていても、その大半は艦艇勤務者であり、実情は航海・演習・任務等で当分は異動出来ない人間達である。
また、陸上勤務者でも職務途中などで業務引き継ぎが終わっておらず異動が難しかった。
ただ、艦魂達からしてみれば、「あなたが戦隊司令です」と上司（

第七艦隊の場合は播磨や河内）が言ってしまえば、その日からでも職務は可能だ。
と言ってもこれは第七艦隊だからの事情であって、これが連合艦隊となると人間達同様、航海等の途中の自分の知らない所で人事異動の検討が行われている訳だが。
そして、未だに揃わない中間管理職役の不足を補うべく、福本が１人こうして書類を片付けていた。
無論、セルベリアや大谷の『副司令と参謀長』もこの書類整理を行っていたが、その量は播磨と同じか少し多い程度だ。
大谷は書類整理中の福本の元にやって来て「無理せず、半分ぐらい回していいよ」と言ったが、勇気は微笑みながら断った…理由は「やっぱり、仲間の事を知りたいから」であった。
こう言われては長年の付き合いである大谷参謀長も溜め息１つで了承するしかなかった。
更に書類を片付けた福本は少将の階級章を着けた上着を羽織り、セルベリア少将や福田中佐、時には大谷大佐を連れだって第七艦隊各艦艇を１週間程掛けて巡回した。しかも、艦長・副長・砲術長のトップだけでなく、下士官兵に至るまで、わざわざ機関室に降りて行ってコミュニケーションを取ると言う徹底ぶりだった。
これが終わると再び書類整理と言う名の『戦い』に入る。
まあ、これも戦隊司令・幕僚などが揃ってくると自然に解消されていった。
なお、戦隊幹部が揃った時に勇気は「諸君は出来る限り乗艦と戦隊所属艦の乗組員達とコミュニケーションを取ること」と彼らに訓辞している。

次号へ

１０９　旅順軍港にて　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１０　旅順軍港にて　２

１月２３日　旅順軍港付近の海域

その日は上空が騒がしかった。
何故なら、上空で俗に言う『軍艦旗』の国籍表示をした雷風と普通の日の丸国籍表示の雷風が模擬空戦をやっていたからだ。
ちなみに、『軍艦旗』の国籍表示をするのは日本海軍では「第七艦隊所属の航空機だけの特権」と言われている。
また、エースパイロットのエンブレムを描く様になったのも日本海軍では第七艦隊のパイロット達が始めた事だ。

水城
「あのさ…私は飛行機に関してはドが付くほど素人だけど、あれで大丈夫なの？」

沖田
「大丈夫ですよ。いくら何でも、精鋭の呼び声高い第一・第二航空戦隊の赤城・加賀・飛龍・蒼龍の戦闘機パイロットが相手なんですから」

水城
「いや…そうじゃあ無くて…う～ん……」

…どうも、微妙に質問の意図と違う答えを出しているので話の繋ぎに悩む。

沖田

「はぁ～…私も飛びたいですよ～」

水城
「あ～、そう言えば真優司令はパイロットライセンス持ってましたね」

沖田
「う～～～～ん……我慢出来ない…私も行ってくる！！！！」

水城
「ああ！！　ダメよ、真優ちゃん！！　まだ航空幕僚達が整ってないのよ！！」

……普段なら反対なのだが、航空司令の衝動を艦長が抑えると言う逆転現象が見られるのであった。

ヒューーン……

神龍の飛行甲板に次々と模擬空戦を終えた雷風が着艦する。
しかし……殆どの雷風は被弾を示すペイント弾が何処かにあった。
これを搭乗パイロットだけでなく整備兵や仲間のパイロット達と一緒に確認して色々と意見交換をしていた。
そこに最後の2機が着艦した……だが、他の機体と違い、ペイント弾の着弾は何処を見ても無かった。
最後には懐中電灯を持って来て機体の下を隅から隅まで見てみたが、結局一緒だった。
そして、2機の内、片方はコックピット下に沖縄の守り神のシーサのエンブレム、もう片方は同じくコックピット下にアラブの国旗が

描かれていた。
更にその2機から降りてきたのは今や第七艦隊でも有名な2人だった。
それは福地旭少尉とコルマ・アダーバ少尉の2人だ。
福地は沖縄から神龍航空隊に配属され、士官候補生から少尉に昇進・任官した。
勇気の義妹（おいおい）であるコルマは本人の希望により空母航空隊に配備され、操縦桿を握っていた。
まあ、コルマはパイロット素質があり、それを見抜いた義父アサド中将が空軍の友人・知人に頼んで、歴戦のベテランパイロット達に指導させた為か、かなりスキルは高かった。
まあ、その本人も着艦に関しては慣れが必要だったが。

パイロット1
「やっぱり、あの2人か」

パイロット2
「仲良いからな～」

パイロット3
「それ、嫉妬？」

パイロット2
「違うよ」

パイロット4
「はいはい、それより、あの2人の意見も聞きましょう」

そう言って同僚パイロット達が2人に向かって駆けて行った。

再び海龍艦橋

沖田
「はぁ……飛びたい……」

水城
「我慢して下さい……人の事は言えませんけど…」

何時もと反対の状況になってしまった海龍艦橋。
水城は必死になって話を変えようと頭を絞った。

水城
「あ…そう言えば、海軍も空軍の新型機を採用するとか…」

沖田
「えぇ…元々、空軍も共同使用を目指してたそうですから」

水城
「どんな機体なんですかね～？」

沖田
「噂ですが…Ｆ２２を簡単に叩き潰せる性能…と言われています」

水城
「へぇ…早く見てみたいわ～」

沖田

「どうせ、痛機にするでしょうから、遅れて配備される事を祈ります」

水城
「あはは……」

次号へ

１１０　旅順軍港にて　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１１　旅順軍港にて　３（前書き）

あ～…実は……

福本
「また「大学の課題で当分更新を中断いたします」でしょう？」

……よく解ったな。

セルベリア
「半年も一緒にいたら解るわ」

あはは……と言う事で来週水曜日まで更新を一時停止します。
いや…本当に大学生も大変なんですよ…。

１１１　旅順軍港にて　３

１月２４日　旅順軍港付近の海域

ズズーン！ズズーン！ズズーン！ズズーン！ズズーン！
ズズーン！ズズーン！……

ヒュルルルル……

ズザザザザザザザザザザザザザザン！！！！

播磨型戦艦４隻から放たれた４６センチ主砲弾４０発が水柱を上げた。
いや……水柱の集合体…水のカーテンを構成した。
しかし……播磨の艦橋でこの光景を双眼鏡を通して見ていた和馬は難しい顔をしていた。

遠地
「う～ん……長門、どうだ？」

長門
「……結果だけ言うと命中率５％…標的に対する集弾率１０％…どれも平均値以下」

遠地
「うぉ…鬼方の親父（土方中将）が見てたら、俺だけじゃぁ無くて主砲砲術班全員が拳骨を喰らう数字だな」

そんな光景を士官学校時代に散々見てきた和馬にとっては懐かしくもあり、反対に絶対受けたくない事でもあった。
まあ、鬼方こと土方中将が居ても居なくても和馬にとっては問題のある数字であった。
そして、レイナに指示を出して、播磨・河内・和泉・近江の砲術班に無線を繋いでこう言った。

遠地
「こら、砲術班。主砲には癖が有るのは解っているだろう？　早くその癖を掴め。実戦でちんたらしていたら、こっちが沈むぞ」

敢えて声を張り上げ無いのはそんな事をしても無駄だからだ。
まだ受け取ってから1ヶ月も経っていない状況下ではまだ主砲の癖を掴めていないのだ。
まあ、多分、土方中将も今回は仕方ないと拳骨は力加減をしてくれるかもしれないが…。（つまり拳骨は最終的に喰らうのだ）

播磨艦内　長官公室

ビリビリビリ……

福本
「……派手にやってるな～」

……減ったかどうか怪しい書類の山を片付けていた勇気が艦の揺れに気付いて呟いた。
本来ならこの砲術訓練を見たいのだが、未だに減らない書類を必死

に片付けていた。
まあ、まだ幹部が揃っていないからだが……。

福本
「まあ、砲術は和馬に任せておくのが一番だな」

そう呟いて再び書類を片付け始めた。

再び……播磨艦橋

遠地
「むう……後で４隻の砲術長と各砲塔長達に集合をかけないといけないな」

長門から渡されたデータを見た和馬はそう呟くと頭を掻きながら艦橋から出て行った。

セルベリア
「和馬も大変ね」

大谷
「でしょうね。この艦隊の『真打ち』である旗艦戦隊こと第一戦隊ですから…早く主砲に慣れないと、それこそ真打ちの名が泣きますからね」

福田
「まあ、実戦経験のある薩摩・土佐、訓練期間が長かった伊豆・伊

賀・春日・日進…『打撃』の第二戦隊に負けてられませんし」

セルベリア
「でも……問題は戦隊人事が進んでない事」

3人
「「「はぁーー……」」」

何故かため息しか出ない現状。
まあ、流石に第七艦隊の人事異動の為に任務中の艦艇に帰還命令を出す訳にはいかない。
つまり、今は第七艦隊内で遣り繰りするしかないのだ。

福田
「こんな時に第七艦隊が出て行かなければならない紛争がおきない事を祈ります」

セルベリア
「不吉な事を言わないの」

ビシッ

軽くでこにチョップを入れた。

福田
「痛っ…すみません」

大谷
「だが……今回だけはそれがない事を願うな」

次号へ

１１１　旅順軍港にて　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１２　旅順軍港にて　４（前書き）

と言うことで本日より更新再開です。

福本
「次はレポートだな」

ウィ……。

１１２　旅順軍港にて　４

１月２７日　旅順要塞跡

下士官
「こらー！　そんな所でへこたれてる場合か！　日露戦役だとマキシム機銃に撃たれながら先人達は登ったんだぞ！！」

新兵達
「「「「「「「「「「は、はい！！」」」」」」」」」」

……この日、第七艦隊特別海軍陸戦隊は日露戦争の激戦地の旅順要塞跡で新兵訓練を行っていた。
場所は旅順軍港北東に位置する東鶏冠山（ひがしけいかんざん）・松樹山（しょうじゅさん）・二龍山（にりゅうざん）の三堡塁…第三軍の第９・１１師団が攻略を担当した場所である。
そして、セイバー達司令部は最も高所の望台に居た。

セイバー
「…後々、大丈夫かしら？」

望台の上から訓練の様子を眺めていたセイバーが呟いた。
先程吼えていたのは年の近い若手の下士官、任された分隊の先頭を歩いていた。

セイバー
（それにしても、急な傾斜が数多いわ……よく日本兵は諦めなかったわね）

ダリア・エステロール王家時代から士官学校時代まで何度も日露戦争（特に日本海海戦と旅順要塞攻略戦）の話題に触れてきたセイバーにとっても、望台から見える一帯は『難攻』を思わせる地形だ。これを攻めろと言われたら……

セイバー
（…多分、攻略法を考えるだけで1週間は過ぎるわね）

まあ、今なら航空機とバンカーバスターのお陰で攻略は可能であろうが、当時の状況を考えるとやり方は乃木大将の採った方法しかない。
しかも、兵数対等・早期攻略となるとなおさらだ。

「何を考えているんですか、司令？　あ、先人達の事ですか？」

物思い耽っていた理由まで当てたのは福本達の2期後輩で石田幸村中将（最終階級）の孫である石田幸人少尉（１８）。

セイバー
「よく解ったわね。さすが『元帥親衛隊』の第六中隊長の孫ね」

石田
「それは祖父の話です。自分なんか、福本先輩とは士官学校を除けば一度二度しか話した事ないのに…」

セイバー
「それでも充分だ。それより、預けた小隊は？」

石田
「漸く上がってきました。今は身体中から湯気がたってますよ」

実際そうだ。1月の旅順は未だ寒い冬だ。
吐けば息は白い、そんな季節の中で急傾斜をハイペースで登って来れば発汗作用で汗をかく。
防寒着を着ていたら、尚更だ。

石田
「まあ、自分達なんかマシですよ。マキシム重機関銃に撃たれないし、地雷や機雷、転がって来る魚雷、鉄条網とかなんてないんですから。へこたれてたら先人達に怒られちゃいますよ」

セイバー
「そうね……さて、艦隊司令部に要請して、焼き芋の準備をお願いしておきましょう」

石田
「お、それはいいですね。みんなが喜びますよ」

ニコニコと笑いながら石田は答えた。

士官
「あ、あの…その事について艦隊司令部…正確にはセルベリア副司令から入電が…」

セイバー
「艦隊司令部の…セルベリアから？　なんて？」

士官

「は…『いま、艦隊で焼き芋焼いてるから、訓練終わったら食べようね～。待ってるよ～♪　（もちろん、陸戦隊全員分あるからご心配なく）』…以上です」

思わず気が抜けそうな電文に士官も困った様子。
しかし、セイバーと石田はお互いを見るとクスクスと笑い始めた。

石田
「お互いに考えてる事は一緒みたいですね」

セイバー
「あらあら、勇気ほどでは無いけど、何年の付き合いだと思ってるの？」

石田
「そうでしたね」

次号へ

１１２　旅順軍港にて　４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１３　艦船紹介　１（前書き）

と言う事で今回は艦船紹介です。
主に第七艦隊初期編成艦の紹介ですが…。

福本
「で、次は？」

人物紹介です。多分、水城あたりからかと…。

１１３　艦船紹介　１

日本海軍（第七艦隊専用）海龍型空母

基準排水量　６万１６００トン
最大排水量　７万２８００トン
船体長　３１８ｍ
船体幅　７３ｍ
速度　３３，５ノット
後続距離　１８ノットで２万海里
機関　改良型通常動力機関

武装
『征空』乙型（艦防空用）八連装対空ミサイル装甲ボックスランチャー×２基
５７ｍｍ５０口径単装速射砲×４基
４０ｍｍ六銃身単装自動稼動機関銃×４基
２５ｍｍ六銃身単装自動稼動機関銃×６基

搭載機　７６機（航空機×５６機・ヘリ８機＋予備機１０機・予備ヘリ２機）

装備　リニアカタパルト

姉妹艦　海龍・神龍

第七艦隊の通常動力機関空母にして、世界初のリニアカタパルト搭載空母。Ｓ７ＦＺ計画によって設計・建造された空母で、当初から

リニアカタパルト搭載を計画していたが、アーヴ技術により原子力機関から改良型通常動力機関に変更、疑問視されていた通常動力機関空母のリニアカタパルト搭載化採用の決断を促した。
なお、海龍は言わずもながらの問題児である。

日本海軍重巡洋艦（第七艦隊専用）六甲型重巡洋艦

基準排水量　３万６８００トン
最大排水量　４万２３００トン
船体長　２２０ｍ
船体幅　２５，１ｍ
速度　３７，５ノット
航続距離　１８ノットで２万１０００海里
機関　改良型通常動力機関

武装
２５，４ｃｍ６０口径三連装砲×４基
１２，７ｃｍ７５口径連装速射砲×８基
『桜花』四連装対艦ミサイル発射筒×４基
『征空』甲ＩＩ型（艦隊防空・弾頭ミサイル迎撃可能）対空ミサイルＶＬＳ×１２基
『潜龍』対潜ミサイルＶＬＳ×４基
６１ｃｍ三連装（三角形式）小型魚雷発射管×２基
４０ｍｍ六銃身単装自動稼動機関銃×６基
２５ｍｍ六銃身単装自動稼動機関銃×１０基

搭載機　対潜ヘリ２機（予備１機）

装備　イージスシステム

姉妹艦　六甲・畝傍

第七艦隊で唯一表舞台で活躍していた重巡洋艦。
主砲は砲身長の長い物に装換、近代化装備を数度の改装で搭載している。
なお、イージス巡洋艦として改装された時は世界中が騒いだとか……。

日本海軍駆逐艦（第七艦隊専用）大波型駆逐艦

基準排水量　４８９０トン
最大排水量　６４４０トン
船体長　１５２ｍ
船体幅　１７，６ｍ
速度　３８，５ノット
航続距離　１８ノットで１万２０００海里
機関　改良型通常動力機関

武装
１２，７ｃｍ７５口径単装速射砲×１基
『桜花』四連装対艦ミサイル発射管×２基
『征空』甲型（艦隊防空）対空ＶＬＳ×８基
『潜龍』対潜ＶＬＳ×４基
６１ｃｍ三連装（三角形式）小型魚雷発射管×２基
４０ｍｍ六銃身単装自動稼動機関銃×２基
２５ｍｍ六銃身単装自動稼動機関銃×４基

搭載機　対潜ヘリ1機

姉妹艦　大波・小波・津波・神波など16隻

第七艦隊専用の艦隊凡庸駆逐艦。
兵装はバランスを考えて搭載、走攻守に優れ、駆逐艦特有の『足の速さ』も維持している。

次号へ

１１３　艦船紹介　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１４　人物紹介　１（前書き）

今回は艦隊総結集前までの人物紹介です。

１１４　人物紹介　１

水城美妃（みずきみき）２０歳　女性　情報科通信班　少佐→中佐

勇気達の同期生でクラス違いの元６組生徒。現空母海龍艦長。
元々は芸能人のマネージャー志望だったが、護身術習得目的で入学した神戸海軍士官学校で海軍とその宣伝に嵌まり込んだ為、そのまま海軍士官になった。
ただ、マネージャー志望時の影響か、イベント・行事などで宣伝・衣装（コスプレなど）の手腕は天下一品、密かに第七艦隊や海軍のホームページを作ったりして、自由奔放に（艦長職を兼ねながら）活動中。

綾崎歩美（あやさきあゆみ）　１８歳　女性　民間より転属　少尉→中尉

某有名理系大学に飛び級入学し、ロボット工学を学んでいたが、その素質を買われ軍関与のアンドロイド開発計画に加わる。
しかし、関係者のハニートラップによるデータ流出事件で開発計画は休止、関係者は軍の保護下にあったが、綾崎とレイナは福本伊吹次官と後任の井上次官が預かっていた。
現在は司令部専属技術中尉。
なお、大抵は軍服（あるいは私服）の上に白衣を着ている。

レイナ　１歳（外見上１８歳）　女性　民間より転属　上等兵曹→兵曹長

アンドロイド開発計画によって開発されたアンドロイド。
正式には『試作零号アンドロイド』と成っていたが、参入した綾崎が『レイナ』と名付けた。
殆ど人間の姿だが、耳の円盤形機器とアンテナが彼女をアンドロイドと言う証拠である。
現在は艦隊司令部専属のオペレーター。

福地　旭（ふくじあきら）　１８歳　男性　航空科　士官候補生→少尉

沖縄出身の海軍パイロット。
シーサのエンブレムが特徴のパイロットで現第七艦隊期待のルーキー。
現在は空母神龍に乗艦。

福田征一（ふくだせいいち）　１９歳　男性　一般将校科　少佐→中佐

勇気達の一期後輩で、福田一輝元帥とミーアの孫。
やんちゃっぽさは抜けていないが、やるときにはやる後輩。
勇気を『元帥』と呼んでおり、幾度も言っても変えない所は彼のプライドか、はたまた頑固なのか…。
現在は司令部付き将校。

沖田真優（おきたまゆ）　１９歳　女性　航空科　少佐→中佐

福田同様勇気の一期後輩で、富嶽爆撃機隊司令沖田優里大将の孫。

祖母の跡を追い、空を飛ぶ為に神戸海軍士官学校に入学、パイロットライセンスを取得している。
現在は第七艦隊空母航空隊司令、水城艦長と海龍に苦労している１人。

コルマ・アダーバ　１８歳　女性　航空科　アラブより転属

アラブ海軍アサド・アダーバ中将の義娘で勇気の『義妹』。
福本伊吹が昔、アラブのスラムで拾った少女で、アサドが引き取り育てられた。
パイロット素質があり、アサド中将が空軍の友人達に頼み込んで教育させた。
現在は福地同様第七艦隊期待のルーキー。

次号へ

１１４　人物紹介　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１５　第七艦隊の一時

２月２０日　旅順軍港

２月も半場過ぎた頃、漸く第七艦隊の戦隊人事も明確化してきていた。
３月の初旬から中旬には異動の大半が完了…と言う見込みが第七艦隊内で付いていた。
無論、『予定』であって確実な約束は出来ないのだが……。
そんな第七艦隊では……

播磨艦内　長官室

福本
「スー…スー…スー…」

長官私室のベッドで完璧な爆睡状態である福本。
無論、こんな事が出来るのは世界中を捜しても僅か一握りの人間だ。
つまり……

セルベリア
「うふふ、さすが母国製の睡眠薬ね」

何かの薬品が入っていると思われる小瓶を眺めながら呟く。

福田
「…ある意味怖いですね、副司令は」

大谷
「口より手を動かしなさい」

播磨
「けど…本当に怖いね…マリーダ元帥と同じ意味で」

河内
「はい…マリーダ様に似た執念の強さです」

…長官公室の勇気の執務机にあった書類の山を処理するセルベリア・福田・大谷・播磨・河内の５人。
まあ、既にお分かりの通りで、気付け代わりに飲ませたお茶へ密かにセルベリアが睡眠薬を入れて飲ませ、勇気を爆睡させたのだ。

セルベリア
「だって、あのまま放って置いたらそれこそ何時かはミイラ化した死体を見そうなんだもん」

福田
「まあ…元帥は書類処理については執念ぽいと言うか…やり過ぎの感はありますが…それは無いかと…」

大谷
「それより…４・５滴垂らせば象を眠らせる事の出来る睡眠薬と言うのが凄いと思うよ」

播磨
「さすがアーヴ製ですね」

河内
「その技術で私達も改装された訳ですが」

セルベリア
「はい！　このお話はお仕舞い。ちゃっちゃっと片付けるわよ」

4人
「「「了解」」」

一致団結する5人だった。

その頃……播磨艦内
砲術参謀室

遠地
「……よし、ここだ！」

パチン

将棋盤に一手を打った遠地。
相手は日進…ちなみに見物人はセイバー・春日・畝傍の3人。

日進
「ふ～ん、そう来たか…けど、高野に比べたら未だ未だ青いわね」

パチ

遠地
「……ぐぎゃーーーあ！！！！　王将がぁぁぁぁ！！」

セイバー
「さすが…王手飛車取り」

春日
「高野に鍛えられたからね、日進は」

畝傍
「脇の詰めが甘かったな」

遠地
「くそ～…前を固めりゃあ、横かよ…くぅ～」
頭を掻きながら自分で反省中の遠地。
どうやら色々と考えている様だ。

春日
「…ところで、何で将棋をしているの？」

日進
「うふふ…秘密です」

その頃……海龍艦橋

水城
「う～～～ん……ダメ、やっぱりここは…」

ガシッ

沖田
「ダメですよ、水城艦長。完全に職務を逸脱しています」

水城は何をしようとしたのか……実は飛行甲板に置かれている雷風の塗装デザインを決めようと論議中だった。
ちなみに……機体は沖田の物だ。

水城
「えぇ～！　こう言った事は元マネージャー志望の私が…」

沖田
「…消しますよ。重爆で」

水城
「…は、はい…」

冷たい汗を背中に感じながら、水城は返事をした。
まあ……沖田が止める理由は解るが……。

その頃……播磨艦橋

長門
「……上手い」

レイナ

「ありがとうございます」

綾崎
「うわ…私なんて機体設定と3Dぐらいでしかパソコン使わないのに…」

……長門を教官にレイナがパソコンを教えていた…基礎では無く、中級程度だが。

長門
「ふむ……その内、色々と教えてあげる」

微笑みながら長門が言った。

次号へ

１１５　第七艦隊の一時（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１６　コンビと戦隊司令（前書き）

先に言います……デッドエンドは嫌いだと。

福本

「……だから？」

１１６　コンビと戦隊司令

３月２０日　旅順軍港

３月から４月は特に海軍は忙しい時期であった。
艦艇が母港に帰還し、艦艇はドックで整備や修理、人は停滞していた人事異動を行うからだ。
この為、４月の終わりにはかなり顔触れが変わるのが海軍の人事異動の特徴である。
その海軍において特異なのが……第七艦隊であった。

播磨長官公室

島津
「よう、待たせたな！」

福本
「…あぁ、そうだな……でどうだ？」

島津
「もちろん、ばっちりだ。爺ちゃんが動かした軍艦だ、相性は抜群だよ」

セルベリア
「まあ、その事もあって任せたけど……その様子だと大丈夫みたいね」

島津
「まあ…戦隊編成艦が出来て無いのが不満かな…」

福本
「なるほど……初めまして、福本大介の孫、福本勇気です。よろしくお願いします、アーカンソーさん」

いつの間にか島津の隣に転移していたアーカンソー…日本艦名は出雲…に自己紹介と敬礼をする勇気。

出雲（アーカンソー）
「司令の事は島津艦長から随分聞いた。元帥とそっくりだ」

福本
「自分も祖父から聞いています…腰のサーベルは相変わらずですね」

出雲（アーカンソー）
「…よろしくお願いします。福本長官」

福本
「祖父の様にはいかないでしょうが…よろしく」

島津
「…あ～、挨拶が終わった直後ですまないが、俺とアーカンソーはどうなるんだ？」

何せ所属戦隊が実質上無いのでは島津も出雲（アーカンソー）もどうしようも無い。

福本
「その事なら大丈夫だ……問題はあるが」

島津
「…ヤバそうな問題か？」

セルベリア
「まあ…人事問題なんだけど…戦隊司令の話よ」

島津
「…いや、それはヤバいだろう…で、なんだ？　多重人格？　野望家？　根が暗い？　まさか…猪突猛進！？」

性格的にヤバそうな事を上げてみたが、勇気は首を振った。

福本
「違う違う…名前を聞けば解るさ…戦隊司令は近衛百合奈（このえゆりあな）だ」

島津
「近衛か…華族の筆頭だからな……ん、ちょっと待て！　いま『百合奈』って言わなかったか！？」

セルベリア
「えぇ、言ったわ。はっきりとね」

島津
「あいつか…まあ、確かに統率力とかの能力は認めるが……大丈夫なのか？」

福本
「親父の推薦でもあるからな…まあ、大丈夫だと思う」

島津
「そうか…じゃあ、修羅場に巻き込まれない内に逃げるわ」

福本
「あぁ、あとで」

……暫くして……

「近衛百合奈、ただいま第七艦隊に着任しました」

長官公室に入って来たFカップの女性士官……近衛百合奈大佐（20）。（ネタ元は『戦場のヴァルキュリア2』のユリアナ・エーベルハルト）

福本
「着任を確認した……3年ぶりかな？」

近衛
「4年だ。あの机上演習で負けてからな」

そう言うとFカップの胸前で腕を組む…微妙に睨みながら。

セルベリア
「まさか、未だ根に持ってるの？　呆れた」

近衛
「ある意味では持っている。これしか言えんな」

……この尊大な態度は性格なのか、家柄なのか……並みの上官なら部下にしたくないタイプだ。
しかし、勇気は小さく溜め息を吐くだけ。

福本
「まあ…とにかく問題だけはおこさないでくれよ。特に大谷に関しては」

近衛
「わかっている。こちらも願い下げだ」

そう言うとそのまま長官公室から出て行った。

セルベリア
「…大丈夫かしら。本当に」

福本
「さあ…それは解らない」

苦笑するしかない勇気だった。

１１６　コンビと戦隊司令（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１７　新型試作機（前書き）

さて……そろそろ、平和の時は終わり…かも知れない。

１１７　新型試作機

４月２日　旅順軍港

航空戦艦出雲　飛行甲板

福本
「で、これが噂の新型機？」

沖田
「…の試作機と聞いています」

島津
「それをウチにね～」

福本・島津・沖田の他にセルベリア・大谷・福田の３人を加えた艦隊幹部が眺めていた。
仮にも第七艦隊は『特別機動艦隊』、火急の時には「いざ鎌倉！」と言わんぐらいに現場に駆け付けるので、最新装備が試験も兼ねて投入される。
更に……

セルベリア
「この艦隊、政府には『試験艦隊』って事で予算回してもらってるしね」

福田

「宮仕えも楽じゃあないですね」

大谷
「予算が出ているだけでもマシですね」

福本
「で、近衛は？」

島津
「艦橋で見てるって……見えんのかって話だけど」

セルベリア
「どこの意地っ張りなんだか」

福田
「まあまあ…」

苦笑しながら宥める福田。
そんな会話が交わされる彼らの視線の向こうに新型試作機…『心神』である。
無論、本格的な採用と成れば名称も変更されるが、試験機の為、試験模型からの名称を引き継いでいる。

福本
「ウェポンベイは少量ながら爆弾を搭載可能、全長の長いミサイルもよし…さすが次期海空軍主力戦闘機だな」

沖田
「これを基にした戦爆機と偵察機を開発中です。先ずは戦闘機と言う事ですね」

大谷
「で、それを載せるのが出雲ですか」

飛行甲板に置かれた『心神』を見る。
実際、編成に余裕があったのは配属されたばかりで配備部隊の無い出雲のみ。
あとの海龍・神龍・戦鷹・勇鷹の４空母に編成的余裕は無い。
故に『心神』の配備は出雲に集中された。
まあ、こういった場合は一極集中が効率的だ。
ただ……整備経験者が一隻に集中するが。

福本
「それで、この隊のパイロットは…」

「報告します」

脱いだヘルメットを小脇に抱え、勇気達に向かって叫ぶパイロット。

「北海道室蘭基地所属の特務飛行隊（ひやまひえい）隊長檜山比叡少尉です！　ただいま到着しました！」

福本
「任務ご苦労、檜山少尉。短い期間…なのかは解らないが、よろしく」

檜山
「あ、え、えっと……連合艦隊司令部及び国防省からの通知です」

そう言って胸ポケットから通知を出した。

福本
「なになに……う～～ん……はい」

一読したあと、勇気は通知をセルベリアに渡した。
受け取ったセルベリアと大谷・島津・福田・沖田が通知を覗き込む。

セルベリア
「えーと…『特務飛行隊は現地到着後、第七艦隊航空隊に転属を命ずる』…う～ん…なるほどね～」

セルベリアの言葉に他の４人も頷いた。

福田
「これ…仕掛けたのって長官でしょうか？　それとも、井上次官でしょうか？」

大谷
「多分、両方だな」

誰もが納得する答えだった。

福本
「まあ…事情はよくわかった。これからよろしく頼む、檜山少尉」

檜山
「は、こちらこそ、よろしくお願いします」

その頃……出雲艦橋

微妙に飛行甲板が見える所から福本達を見る近衛大佐。
尊大な態度を崩さずに顔は無表情……但し、目の方は睨み目だ。

士官
「どうしたんですか、戦隊司令？」

艦橋の当直士官が近衛に声を掛けた。

近衛
「別に、何でもない」

プイッとその場所から離れるとそのまま艦橋から出て行ってしまった。

次号へ

１１７　新型試作機（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１８　派遣命令（前書き）

遂に第七艦隊が本格始動致します。
まあ、第七艦隊と戦う敵は哀れですね…。

１１８　派遣命令

４月１０日　横須賀　連合艦隊司令部ビル　長官公室

福本（伊吹）
「よう、旅順の艦隊は整ってきたか？」

福本
「空母航空隊以外は揃ってますよ、父さん。で、何の用事？」

セルベリア
「しかも、嫁の私も呼んで」

福本（伊吹）
「まったく、察しのいい息子と嫁だな…お陰でこっちも楽だが」

福本
「司令長官、世間話なら余所でやってくれませんか？」

福本（伊吹）
「わかったわかった…突然で悪いがあっちに行ってくれ」

福本
「あっち？　シリルティア王国方面ですか？　なぜです？」

福本（伊吹）
「…よく『あっち』で解ったな。従兵に訊いたら「どこです？」って聞き返されたぞ」

セルベリア
「長官が『あっち』って言ったら大抵はシリルティア王国ですから」

福本（伊吹）
「良く出来た息子と嫁だよ…そうだ、シリルティア王国方面だ」

福本
「今まで現地の第零艦隊で物事の大半を処理していた方面に第七艦隊の増援……世界大戦でも始まるかの様な話ですね」

福本（伊吹）
「そうだ」

半分冗談で勇気は言ったのだが、父親は頷きながら肯定した。

セルベリア
「…長官、勇気は冗談ですよ？」

福本（伊吹）
「いや、シリルティア王国では本当だ。今は総動員令が掛かり、戦争準備の真っ最中だ」

この言葉に勇気とセルベリアはお互いの顔を見た。

福本（伊吹）
「まあ、旅順でゴタゴタを片付けていたから知らないだろう…何処まで知っている？」

福本

「えーと…大分前になるけどが、新たに国土ごと転移したブリテニア王国と国交及び通商条約を結んだまでは」

福本（伊吹）
「そこまで解ってるならいい…実はな、その後にシリルティア王国へちょっかいを出してきた馬鹿がいたんだよ」

セルベリア
「また無謀な…いったい何処ですか？」

福本（伊吹）
「聞いたら呆れるぞ…シグドー教圏国連合だ」

福本・セルベリア
「「あぁ～、例の排他的宗教ね」」

（シグドー教の事は『士官候補生異世界奮闘記』を読んでくれれば解ります。ｂｙ作者）

福本（伊吹）
「まあ、そうだな…事の始まりはここ１０年で勢力を延ばした『シグドー教圏国連合』の盟主国ゼベルスト教皇国がシリルティア王国に対し、数年前に起きたアズラエル公殺害の犯人の引き渡しと賠償を求めてきたんだ」

福本
「アズラエル公の事はアンデュラス王国との問題ですよ？　第３者が口を出す事では無いでしょう？」

福本（伊吹）

「確かにな。キリスト教でも知ってる限りで、キリスト教徒が殺されたからってバチカン市国やローマ教皇が出て来たなんて話は知らないな。十字軍の例を除いてな」

セルベリア
「あれは極端な話だと思いますよ。それに目的はエルサレムの奪還ですし」

福本（伊吹）
「その通りだ。故に今回はやり過ぎだ……二度目の交渉で核地雷を踏んだがな」

福本
「まさか…今度は領土を寄越せと言ったんじゃあ…」

福本（伊吹）
「…行政・軍事・外交の三権を譲渡し、シグドー教の布教を認め、教圏に入れ…だとさ」

セルベリア
「あ～あ、国をタダで渡せって言ってるようなもんじゃない」

福本
「交渉は決裂…いえ、ブッ飛んだ様ですね」

福本（伊吹）
「で最後が肝心な所だ。『我が国を含めた教圏国連合６１ヶ国が貴国を蹂躙するだろう』だとさ」

福本

「なるほど、派遣の理由はそれですね」

福本（伊吹）

「そう言う事、これが資料だ。じゃあ、頑張ってくれ」

かなり分厚い資料を渡された勇気とセルベリアは苦笑していた。

次号へ

１１８　派遣命令（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１９　出撃準備

４時間後……旅順軍港

旗艦播磨艦内大会議室

福本
「…と言う事だ」

大会議室に集まった各戦隊司令及び参謀の前で第七艦隊のシリルティア王国方面派遣の事情を話した。
既にプロジェクターは降ろされ、長門の手により資料が映されている。

遠地
「敵が６１ヶ国ってチートだろう」

和馬が苦笑しながら言った。

大谷
「宗教熱に浮かされた愚か者の外交交渉だね。歴史の遺訓しないととんでも無いことになるよ」

日向は真面目克つ冷静な顔で外交交渉の内容と状況を分析・批判していた。

福田
「ですが…まあ、福本長官が『大戦』って言うのも納得出来ますね」

沖田
「いきなり６１ヶ国と戦う事になったんだから当然ね」

……と微妙に関係あるかどうかの話題が大会議室の中で話される。
つーか、ある意味緩い会議だ…。

近衛
「…１つ質問だが」

尊大なオーラはそのままに質問する百合奈。

福本
「なんだ、近衛？」

近衛
「いや…この第七艦隊が出ずとも、連合艦隊の戦力を幾らか抽出して派遣すれば良いのではないか？」

この発言に大会議室の人間は何故だか肩を竦めたり、苦笑したり、溜め息を吐いたり…と呆れた反応を見せる。

大谷
「正面戦力たる連合艦隊から戦力を抽出しては国防に穴が空きます。福本長官はそれを考えて第七艦隊の派遣を決定したんでしょう」

近衛
「う、うるさい！　大谷に言われる筋合いはない！」

そう言うとプイッとそっぽを向く。

この光景に誰もがまた苦笑する。

福本
「じゃあ、各員派遣命令を指揮下の戦隊所属艦に伝達。出来れば2～3日以内に出撃したい…準備に掛かれ」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」

40分後………

第2戦隊旗艦　薩摩艦橋

「…と言うことだ。全艦急いで準備を完了せよ。以上」

士官
「「「「「「「了解！」」」」」」」

第2戦隊司令で勇気達とは同級生の松永赤城（まつながあかぎ）大佐（20）（イメージは『大帝国』の山下里古利長官）は戦隊に指令を出すと指揮官席に座った。

士官
「どうしました、戦隊司令？」

松永

「ん…別に…ただ、予想より早く実戦の場に出ると思っただけだ」

士官
「あぁ、そうですね」

しかも相手は６１ヶ国……ど偉い戦いである。

士官
「ですが、福本長官に山城参謀長の２人が居れば負ける訳ありませんよ」

松永
「…そうだな……いや、福本が「油断するな！」と言ってきそうたから、警戒は怠るな」

士官
「はい！」

同じ頃……第３戦隊旗艦　六甲艦橋

「…と言う訳だ。各員至急準備に掛かれ」

士官
「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」

これまた勇気と同級生の第３戦隊司令西園寺忠志大佐（２０）が同

様に出撃準備を命じていた。

西園寺
「やれやれ…早速実戦とは…腕が鳴るな」

大会議室で渡された資料を見ながら呟いた西園寺。
これでも戦隊指揮を採らせれば勇気が『一番上手い』と言わせた程である。
ただ、本人は快速艦艇志望だったので第3戦隊司令になったのだが。

西園寺
「ふむ……これは確かに増援がいるな…だが…」

次号へ

１１９　出撃準備（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２０　出撃

４月１２日　午前３時　旅順軍港

旗艦播磨艦橋

「福本長官、旗艦播磨出港準備完了しました」

勇気達の一期後輩で、福田達と同級生の旗艦播磨艦長ソフィヤ中佐（１９）が勇気に報告した。

福田

「元帥、第七艦隊全艦出港準備完了。何時でも出港可能です」

全艦に確認を取っていた福田が言った。

福本

「ふむ……よし、全艦出港」

福田・ソフィヤ

「「了解！」」

威勢のいい返事と共に艦橋の中は慌ただしくなった。

何せまだ午前３時……多少明るくなったとは言え、まだ真夜中の時間帯である。

操艦を誤れば直ぐに僚艦と衝突したりしてしまう為、神経がいる。

更に僅かな微灯を除けば探照灯も点灯させずに出港させていた。
故に各艦の見張りは目を皿にして周辺の僚艦に衝突しないよう見張るから神経が更に必要なのだ。
無論、そんな無理をさせてでも夜に出港するメリットはあるのだが…。

福田
「しかし、これでは夜が明けたら見張りは全員バタンキュ～～…ですよ？」

福本
「それは考慮の上だ。夜が明けたら見張りは全員休息させる。それにこれなら出港を悟られずにすむ」

福田
「まあ、確かに…でも、隠す必要なんてあったんですかね？」

セルベリア
「第七艦隊の行動が簡単にバレたら大変でしょう。異世界に向かうにしてもね」

大谷
「確かにそれは正論だ」

こんな会話が交わされる中、一番前を行く播磨はゆっくりと動き始めた。

1時間後……

福田
「全艦出港完了しました」

セルベリア
「全艦異常は無いわね？」

福田
「はい。全艦無事に出港しました」

福本
「よし…神戸に向かう。全艦２０ノット」

福田
「わかりました」

返事をすると通信機に飛び付く。

福本
「多分大丈夫だと思うが……出来れば早く着きたいな」

然り気無く勇気は呟いた。
何せ双方が総動員令を出したと言う事は何時なにが起きても不思議では無い。
まあ、急ぐと言っても艦船である以上、限界はあるが。

福田
「……あ、元帥。神戸から入電です」

大谷
「神戸から？　また珍しいね」

福本
「それで…誰からだ？」

福田
「えーと…セイバー大佐からです。陸戦隊と第七航空戦隊の準備が終わったと…」

福本
「第七航空戦隊……あ、『強襲戦隊』か。それは良かった」

福田
「強襲戦隊？　そんな戦隊有りましたっけ？」

大谷
「『夜の勉強会』参加者なら幾度か聞いた筈だよ？」

福田
「え、え～と……」

ソフィヤ
「第二次大戦時に第七艦隊へ配備されていた軽空母に新たな用途を加えた戦隊ですね。夜の勉強会で福本長官が話されていた覚えがあります」

福田
「う……いま思い出しました…」

ばつの悪そうな顔で福田が言った。

セルベリア
「まあまあ……で、他にニュースは？」

福本
「うん、島田機甲隊も新型戦車と新型装輪装甲車を受領したそうだ。それと特務艦『未来』も出撃可能だって」

遠地
「陸戦機甲隊に海上野戦工廠か…まったく、神戸は今頃大騒ぎだな」

福本
「あぁ…（もしかしたら親父の奴、また色々と小細工をしたな…特に機甲隊は事前通知が行っていたか…やれやれ）」

心中で溜め息を吐くと、再び連絡内容に目を通した。

次号へ

１２０　出撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

121　到着

４月１７日（シリルティア王国　４月２４日）　ラバナスター

１６日に神戸に到着した第七艦隊は第七航空戦隊・特務艦未来・第七陸戦隊と合流し、翌日早朝にゲートを抜けてシリルティア王国のラバナスターへと入港した。

天城艦橋

福本
「お久し振りです。山城先輩」

山城
「はっはっは、またお前と組んで戦えるとはな…まあ、臨時編成の艦隊よりは心強いな」

そう言うと気軽に手を勇気の肩に置いた。

セルベリア
「あの…シルヴィアさんは？」

山城
「あぁ、シルヴィアはだな…」

シルヴィア
「２人共～、久しぶり～」

福本
「あ、シルヴィアさん、おひさ…」

艦橋に入って来たシルヴィアに何気なく振り向いた勇気とセルベリアの目には左手をフェイナちゃんと手を結びながら、右手で赤ん坊を抱いたシルヴィアが居た。

福本・セルベリア
「「……」」

シルヴィア
「ん、どうした？　なぜ黙る？」

セルベリア
「あ、あの、シルヴィアさん…そっちの赤ちゃんは…」

シルヴィア
「ん、あぁ、私と正人の第二児の翼だ。あ、言っておくが男だぞ」

福本・セルベリア
「「だ、第二児…」」

そう呟きながら2人は山城を見た……本人は制帽を深く被り直して顔を隠すが、完璧に顔が真っ赤だ。

佐野
「今年生まれたばかりですよ、翼君は」

風華
「あの日は予定日よりも早い陣痛でしたから、大騒ぎでしたよ」

小澤長官
「普段なら冷静沈着な首席参謀が右往左往する姿を君達にも見せてやりたかったよ」

山城
「よ、余計な事を言わないで下さい！」

いつの間にか艦橋に入って来て、会話にも参加していた小澤長官に山城は慌ててツッコミを入れた。

福本
「あは、あはは……」

勇気は苦笑するしかなかった。

セルベリア
「フェイナちゃんは二歳ですか？」

シルヴィア
「えぇ、二歳でお姉ちゃんよ」

セルベリアはシルヴィアとの話に花を咲かせていた。

福本
「あ…そう言えば、なんで御二人のお子さんが天城に？」

シルヴィア
「育児休暇日だから」

佐野
「いや、違いますって…お子さん達が天城に遊びに来る日です」

福本
「……どっちも一緒だ」

呆れながら勇気は呟いた。

横井
「まあまあ、うちにはいい息抜きよ」

そう言いながら横井が艦橋に入ってきた。

福本
「まあ、いいんですけど……うちの連中が聞いたら、また驚きますよ」

そう言いながらポケットからケータイを取り出すと撮影モードを選択し、ピントを合わせて……

カシャッ

福本
「さて…播磨の送り先は長門のノートパソコン…後は…」

数分後……出雲艦橋

ピピピ…ピピピ

島津
「ん…メール？　しかも、福本から？」

近衛
「おい、職務中は電源を切っておけ」

艦橋で職務中の島津のケータイに着信音が鳴り響く。
それを不機嫌そうな近衛が注意する。

島津
「ん…あ～～…マジか！？」

近衛
「…島津、貴様、私に喧嘩を…」

島津
「おい、百合奈！　これを見ろ！」

そう言って突き出されたケータイ画面にはセルベリアと話す女性と連れている幼女、抱いている赤ん坊の写真があった。

近衛
「……これがどうした？」

島津
「なに！？　お前解らないのか？　シルヴィアさんだぞ！？　しかも、子供が2人だぞ！？」

近衛
「いや、たか…」
艦橋員
「「「「「「「「「「「「「本当ですか!?」」」」」」」」」」」」」
訳が解らない近衛を押し退けるかの如く、艦橋員達が島津のケータイに殺到した。
たちまち、「きゃ～♪」とか「可愛い～」とかの歓声が響く。
近衛
「……何故、こんなに熱狂出来るのだ?」
この呟きに答える者は居なかった。

その頃……天城艦橋

山城
「あ、勇気。今夜は第七艦隊歓迎って事で宴会な」
福本
「え、マジッすか?」
山城
「うん、マジ。何せ色々とうちにも事情が有るんだよ」

苦笑しながら山城は呟いた。

福本
「…うちには厄介な奴が3人いますよ?」

山城
「うちにも厄介な人間はいるぞ?」

……つまり、お互い一緒だ。

福本
「……わかりましたよ」

山城
「解ってくれてよかった」

次号へ

１２１　到着（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２２　歌え騒げのどんちゃん騒ぎ　１（前書き）

書いてて長くなると気付き、急遽一話だったのを三話に変更します。

山城
「で、またやったんだな『あれ』を」

ほとぼりは覚めたと思うから……。

１２２　歌え騒げのどんちゃん騒ぎ　１

その日の夕刻　天城艦内

天城会議室

山城
「では、これより第七艦隊歓迎宴会を始めます。無礼講と言って、酒に呑まれない様に。以上」

非常に単純克つ短い開会宣言を終わらせ、マイクから離れると後は半分何でも有りの宴会である。
後は自然に収まるのを待つしか無いのが、第七・第零艦隊の宴会だが。

和泉・飛騨（ワシントン）
「「酒が飲める、酒が飲める、酒が飲めるぞ～♪♪」」

互いに肩を組んで、片手に酒瓶を持ちながら陽気に歌う和泉と飛騨（ワシントン）。

天城
「…なんだ、あの完璧に出来上がった２人の酔っ払いは？」

福本
「えーと…我が第七艦隊の酒バカコンビ…和泉とワシントンこと飛騨です」

第零艦隊旗艦天城の艦魂天城と勇気が遠巻きに２人を見ていた。

山城
「『あの2人から酒を取ったら何も残らないだろう…と私は思った』…福本元帥の言葉通りだな」

山城が笑いながら天城・勇気の会話に入ってきた。

福本
「えぇ、だから、何時も手を焼かされてますよ」

天城
「はっはっは、それは大変だな、福本少将」

そう言いながら最初から空っぽの勇気のコップに日本酒を注ぎ込む。

福本
「福本でいいですよ。まあ、それは先輩や天城さんも一緒かもしれませんが」

山城
「まあ、そうだな」

天城
「だな、日本以外にアメリカ、ロシア、韓国、イギリス…出身も違えば価値観も違うからな」

福本
「ですよね。まあ、ガーラント少将とハルトマン大佐は上手くやっているのは見習いたいですね」

山城・天城
「「え？」」

何故か疑問符付きの応えだった。

福本
「え、な、何か間違った事を言いました？」

天城
「いや…実は2人増えたんだ」

福本
「へぇ？……聞いてませんよ、そんな話？」

山城
「いや、多分、海賊退治の期間中か何かで伝わらなかったんだろう。それで…」

コルマ
「あ、義兄さん！」

沖田
「福本先輩、ここに居ましたか」

義妹のコルマと沖田が勇気の方へ遣って来た。

福本
「やあ、コルマに沖田。あ、山城先輩、こっちは…」

山城
「知ってるよ。君の義妹のコルマちゃんだろう？　福本長官から聞

いた」

福本
「まったく、親父はそう言う事は早いな…で、なんだい、コルマ？」

コルマ
「はい、お義兄さん、征龍航空隊のルッキーニ大尉にマルセイユ大尉です」

そう言って沖田と一緒に来ていた女性を紹介した。

「ハンス・ヨアヒム・マルセイユよ。よろしく」

宝塚歌劇団に行けば会えそうな、俗に言うイケメンの『男装の麗人』であるマルセイユ。

「フランコ・ルッキーニだよ。よろしく～♪」

某『空飛ぶ魔法少女』かい！？…と思わずツッコミたくなるユルキャラのルッキーニ。

福本
「よろしく。（なるほど、また女体化ですか）」

その頃……播磨会議室

水城・海龍
「「え～、これより…」」

ゴーン！！

遠地
「勇気とセルベリアが居ないからって勝手な真似をするな！」

始まって早々、水城・海龍コンビがまた何かやらす前に2人の頭に拳骨を喰らわして止めた和馬。

水城
「いつつ……」

海龍
「卑怯だ～、自由権侵害だ～」

大谷
「海龍が言うと、何故か具体性や根拠に欠ける気のせいでしょうかね？」

遠地
「本当だな…さて、お前ら2人は退場だ」

ズリズリと引き摺られながら、退場させられた海龍と水城。

春日
「やれやれ…まったくあの2人は…」

日進
「まあまあ、私達も昔はああでしたから」

畝傍
「福本元帥時代から変わって無い様な気もするけどね」

出雲（アーカンソー）
「それを感じる程、時代は進んだと言う事かもね」

…車座になり、そんな宴会を眺める古参グループであった。

次号へ

１２２　歌え騒げのどんちゃん騒ぎ　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

123　飲めや歌えやどんちゃん騒ぎ　2

再び……天城会議室

「義姉さん」

マルセイユ・ルッキーニとの挨拶を終え、再び天城・山城と話をしていた勇気に聞き慣れない声が聞こえた。

山城
「あぁ、みんなか。こっちに来てもいいよ。勇気、紹介しておく。うちの日本娘3人とイギリス娘だ」

福本
「日本娘3人とイギリス娘……あぁ、戦艦の事ですね」

転移してきた常陸、中共軍との戦い前に配備された磐城、その後に配備された2隻……これに天城・駿河を加えた6隻が現第零艦隊保有戦艦である。
そして、日本娘は磐城とその2隻、イギリス娘は常陸の事だ。

山城
「漸く姿を見せる様になってきたんだよ。まあ、お陰でこっちもやり易くなったけどな」

何せ、姿を見せるまで各艦の乗組員から「お化けがいる！」とか「物が浮いてる！」とか「誰も居ない所から声が聞こえる！」などの

報告が寄せられ、山城は正体を知りながらも、確認していないから「艦魂ですのでご安心下さい」と安全宣言が出せなかった。

天城
「さあ、2人共。福本少将にご挨拶だ」

「改天城型戦艦二番艦の水戸です」

「同じく改天城型戦艦三番艦の姫路です」

リボンにポニーテールの水戸、ショートカットに斜め被りの制帽の姫路。

福本
「よろしく…命名基準が変わりました？」

山城
「いや、親父さんが『巡洋戦艦と重巡洋艦の命名基準が一緒なのは不便じゃねえ？』って言って、水戸と姫路になった」

福本
「…なんですか、それ？」

山城
「いや、本当なんだって。実際、命名した時は『水戸』『姫路』って本人が書いたそうだし」

福本

「はあ…」

…もう…あの親父は……

水戸
「それでこちらが…」

「改大和型戦艦四番艦磐城です。お父様には我が身を鍛えられ、更に命を助けられました」

福本
「あぁ、その件は聞いてるよ。よろしく」

スラリとした体型……なのだが、胸の膨らみが目立つ…サイズはGか？

福本
（さすが、大和型戦艦…って変態か、俺は…）

心中で自分自身に呆れる勇気。

姫路
「それで、こちらが…」

「元イギリス海軍戦艦ライオン…今は常陸です」

髪型は縦ロール金髪、顔にメガネ、下はスカート（日本海軍はズボン）、胸はFサイズ……のライオンこと常陸。

山城
「ちなみに眼鏡は伊達だ」

福本
「…陸奥さんのノリですか…まあ、よろしく」

その頃……天城艦内廊下

近衛
「はぁ……我が近衛家の者があの様な無粋な宴会など…」

なら、なんで勇気やセルベリアと一緒に来たんだよ…とツッコミたいが、意味が無いので止めておく。
そして……適当に艦内を歩き回っている内に……

近衛
「…ん？」

『医務室』とプレートが貼り付けてある室内から声が聞こえてきた。
近衛は何気無しに扉を開ける。
すると……そこにはベッドで眠る幼女と赤ちゃんがいた。
近衛
「この2人は…あぁ、山城大佐とシルヴィア大佐の…」

島津のケータイで見た姉のフェイナと弟の翼だ。
2人とも爆睡している。

ふと時計を見ると時間は２２時２５分だった。

近衛
「…子供は寝る時間か…」

２人の寝顔を見ながら呟く近衛。
あの時は興味無さげに言ったが、実際こう見ると心が和むのはやっぱり女性だからか？

シルヴィア
「おや、珍しいお客さんだな」

そこに入って来たのは母親であるシルヴィア。

近衛
「あ、こ、これは、その…」

シルヴィア
「別によい、近衛百合奈大佐」

近衛
「な、名前をご存知で！？」

まだ直接挨拶すら交わした事の無い年長者が名前を知っているのだ。

シルヴィア
「既に第七艦隊の主要人物は頭に入っている。特に近衛大佐の家柄については興味を持ったからな」

近衛

「む…」

何時もの尊大な態度や表情は何処へやら…困惑な表情が広がる。

シルヴィア

「やはりか…近衛家と言えば日本貴族の筆頭…だが、近衛文麿元首相の政治家的低評価は今も続くと聞くが…」

近衛

「…だから、私は海軍に来たんです」

次号へ

１２３　飲めや歌えやどんちゃん騒ぎ　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２４　飲めや歌えやどんちゃん騒ぎ　３

一度宴会となると好きな所で好きな様に騒いで飲む。
ある者は所属分隊で、ある者は親しい上官や年長者と、ある者はあちこち回って楽しむ……などなど、日本艦隊は宴会を楽しむ。
そんな中……

天城艦内　医務室

シルヴィア
「ほら」

近衛
「ありがとうございます」

シルヴィアから紙コップを受け取った近衛は中身を見てギョッとした。

近衛
「…まさか…中身は…」

シルヴィア
「赤ワインだ」

そう言うと一気に飲み干すシルヴィア……ワイン好き（と言うより酒好き？）は変わってない。

シルヴィア
「まあ、話はわかった。曾祖父の近衛文麿首相から付いた近衛家の

汚名返上な…」

近衛
「故に私は宴会などする気は無い」

シルヴィア
「…バカらしい、アホらしい、邪魔物揃いだな」

近衛
「なあ！？」

…同じ貴族で似た様な立場のシルヴィアからの言葉に激昂する。

シルヴィア
「私が普段から持つのは愛国心と貴族の義務と正人と家族への愛のみ。家のプライドや銘柄に興味も何も無い。故人の汚名だの何だのは埒外だ」

近衛
「……」

ある意味、超極論の為、近衛は口を開けたまま沈黙。

シルヴィア
「そもそも、それを解った上でお主を同じ艦隊に入れ、克つ戦艦を含めた戦隊を任せたと言うことは……ふむ、なかなか狸…と言ったところか？」

近衛
「……はい？」

訳が解らないとばかりの近衛を差し置き、１人思考の海に泳ぐシルヴィアだった。

その頃……天城会議室

セルベリア
「あ～あ…完璧に出来上がったわね」

福本
「あぁ…多分、各艦も同じだろうな」

山城
「まったく…残って片付ける身にもなれよ…」

天城
「腹八分とゆう事を知らんのか？」

完璧に酔い潰れた人間や艦魂達が散乱する天城会議室で、４人は思い思いに呟いた。

山城
「まったく…まあ、漸く話が出来る」

福本
「はぁ…それで、話とは？」

山城
「資料は読んだな？　俺達が相手にするのはシグドー教圏国連合の海軍国１２ヵ国に盟主国ゼベルスト教皇国の海軍…１３ヵ国艦隊だ」

セルベリア
「普通に聞けば勝利の可能性なんてありませんね」

福本
「だな、１２ヵ国は戦艦を４隻づつ保有し、ゼベルスト教皇国は１２隻を保有している…戦艦だけで６０隻、その他の艦種の数は更に豊富……確かに勝利の可能性は低く見るしかないですね」

山城
「その様子だと、『勝利の方程式』は出来てるみたいだな」

福本
「先輩こそ、『勝利の魔方陣』は作成は出来てる様で」

お互いに微笑み合う勇気と山城……お前ら、怖いぜ……。

天城
「はっはっは…この２人が組むと背筋が寒くなるな」

セルベリア
「はい…何も知らない敵艦隊が哀れに思えてきます」

それはそうだろう……どちらも実際、挑んで無事にいた人間はいないのだから。
そんな人間が２人も居て、タッグを組めば……結果はおのずと見える。

山城
「対し、こちらはうちにシリルティア、ブリテニア、ネイラーンの4ヵ国…まったく、嬉しくて涙が出てくるよ」

福本
「まあ、本当に嬉しいどうかは置いといて…無論、勝てますよね？」

山城
「当たり前だ。誰が負けるやり方なんて考えるかよ…こう言う時こそ、知恵が物を言うのさ」

互いに語り合いながら夜は更けていく。

次号へ

１２４　飲めや歌えやどんちゃん騒ぎ　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２５　４ヵ国（前書き）

後半は文章中心。
ある意味つまんないかも知れませんが……。

125　4ヵ国

翌4月20日（シリルティア王国4月27日）　ラバナスター

第七艦隊の派遣により、俄に騒がしくなったラバナスターに自国シリルティア王国海軍及びネイラーン王国海軍、ブリテニア王国海軍の艦隊の来航により、更に騒がしくなった。

シリルティア王国海軍旗艦　戦艦セッツ（摂津）

小澤大将、山城、シルヴィアに続いて福本、セルベリアもカワチに来ていた。
無論……作戦会議兼打ち合わせだ。

福本
「新型戦艦ですか？」

シルヴィア
「あぁ、日本からの技術提供で完成した最新の戦艦だ。38cm連装砲5基、速度31，5ノット…シリルティア王国海軍の旗艦だ。ちなみに艦長は広瀬大佐だぞ」

福本
「広瀬大佐も随分有名になりましたね」

山城
「まあ、当然かもな。何せ、数少ない実戦経験者だし」

小澤大将
「ほら、着いたぞ」

小澤長官の言葉に視線を向けるとドアに『大会議室』のネームプレート。
小澤長官を先頭に次々と中に入って行く。
既に各国の海軍提督達が揃っていた。

ドレイク大将
「おぉ、頼もしい味方が現れたな」

山城
「ドレイク大将、頼もしき後輩の福本勇気です。現第七艦隊長官です」

福本
「お初にお目にかかります。第七艦隊司令長官福本勇気です」

ドレイク大将
「あぁ、祖父母殿と父上のお話は山城大佐より聞いておる。よろしく頼む」

福本
「はい、よろしくお願いします」

山城
「それで…あちらがネイラーン王国のスコット大将、向こうに居ら

れるがブリテニア王国海軍のウィリアム王子兼大将、その隣に居られるのは妹君（いもうときみ）のマリア姫。姫は海軍中将だ」

福本
「どうぞ、よろしく」

スコット大将
「前回の中共軍との戦闘での活躍は聞いているよ。期待している」

ウィリアム王子
「噂は聞いているよ。よろしく頼む」

マリア姫
「あら、彼の許嫁？　へぇー…お似合いね」

セルベリア
「いえいえ…そんな事を言ったら、兄のウィリアム王子とマリア姫も仲の良い事で」

……やっぱり、女の子は女の子同士で話が合うみたいだ。
更に言うならば……ここに集まっているのは主に艦隊首脳部だ。

普通の打ち合わせで問題になるのは主導権を誰が握るかだが、この問題は直ぐに解決した。
取り敢えず、ドレイク大将が総指揮を執る事になった。
そして、作戦の打ち合わせで出たのは敵戦力である。
何せ相手は海軍１３ヵ国……内シグドー教圏国連合下の１２ヵ国は戦艦を４隻、巡洋艦を重軽それぞれ８隻づつの保有限度が決められ

ているそうだ。
そして、盟主国ゼベルスト教皇国は戦艦１２隻、巡洋艦は重軽合わせて２０隻以上を保有しているとの事。
更に未確認ながら空母も複数保有しているそうだ。
つまり、戦艦６０隻をはじめとした大艦隊が相手である。
なお、山城の考えは戦艦及び空母は全力投入、巡洋艦以下諸艦艇は八割投入との結論を出した…流石に国内を空っぽにする訳にはいくまい…との考えだ。
対しこちらの投入戦力は日本艦隊の１９隻を除けば、シリルティア王国から2隻（セッツ型戦艦セッツ・タジマ）、ネイラーン王国から2隻（バーミンガム型戦艦バーミンガム・リバプール）ブリテニア王国から4隻（スパルタ型戦艦スパルタ・オリンポス型戦艦オリンポス、ミケーネ、オリンピア）の計8隻。
つまり敵の半数を割っている……無論、これはわかりきっていた話だ。
しかし……山城が言った通り、こう言う時こそ、知恵を働かせば意外に打開策はあったのだ。

次号へ

125　4ヵ国（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２６　出兵命令

４月２２日（シリルティア王国４月２９日）　王都ユニオン

総動員令が発令されてから王都と王城は不穏な空気に包まれていた。
何せシグドー教圏国連合と戦争一歩手前の状況である。
軍のジープが市内を行ったり来たりしていれば誰だって何かしらの察しはつく。
そして、王城内では……

王城内　アーネリア陛下執務室

普段通りに執務を行うアーネリア陛下……まあ、こんな非常時では自然と軍関連が多くなってしまうが。

グロワール宰相
「陛下、特別便が届きました」

入って来たグロワール宰相がそう言うと静かに懐から封筒を取り出した。
封筒には蝋の封と刻印が押されている。
それを受け取ったアーネリアは素早くペーパーナイフで封を切り、中に入っていた報告書を一読するとグロワールに渡した。

アーネリア
「遂に動いたそうよ…この報告は軍本部に届いてる？」

グロワール
「はい。今頃届いたかと」

アーネリア
「……内線をお願い。陸軍に出動命令、海軍に警戒待機命令よ」

グロワール宰相
「わかりました」

一礼するとグロワール宰相は出ていった。
アーネリアは……そのまま再び執務を再開した。

同じ頃……播磨艦橋

その頃……第七艦隊旗艦播磨では長門のノートパソコンに福本・セルベリア・遠地・セイバー・大谷・ソフィヤ・綾崎・レイナが注視していた。

長門
「…とまあ、下手な状況で応戦した場合のシミュレーションの結果がこれ」

福本
「ふむ…やっぱり、下手に纏めるより、各艦別個に対処させた方が現状下では有効か」

遠地

「だな。何せ山城先輩ならいざ知らず、シリルティア・ネイラーン・ブリテニア各王国と連結を取れって言ったって…難しいだろうな」

大谷
「後は山城主席参謀の読みが何処まで当たるかですね」

セルベリア
「この世界については山城先輩がよく解ってるから、油断もしてないでしょうけど…」

そう言った直後、艦橋のドアが開いた。
そして、入って来たのは通信室に居た征一だった。

福田
「た、大変です、元帥！」

福本
「大変はお前の慌て様を見てたらわかるよ。で、なんだ？」

福田
「は、はい、どうやらやっこさん達が動いた様です。ユニオンの軍本部から陸軍に出動命令、海軍に警戒待機命令が出ました」

セイバー
「なら、陸軍が動いた訳か…じゃあ、私達、第七艦隊陸戦隊の出番ね」

福本
「あぁ…多分、いや、確実に第零艦隊陸戦隊と駐留軍、日本陸軍からの増援も来るな。やれやれ、福島のバカがまた騒ぐな…」

余り思い出したく無い福島党首の顔を思い出して苦笑する勇気。

セイバー
「長官。いくら独自権限を与えられてるとは言え、ちゃんと命令を出してくれないと困るんだけど？」

福本
「おっと…第七艦隊陸戦隊に命ずる。陸戦隊は出動準備、完了後は別命あるまで待機」

セイバー
「了解！」

大袈裟だよ…と敬礼するセイバーに心中でツッコミながら勇気は返礼した。

……数日後、第七艦隊陸戦隊の司令部及び先遣部隊は第零陸戦隊・駐留軍・増援の陸軍派遣部隊の各先遣部隊と共に戦場に向けて鉄道移動で向かって行った。
その後、ピストン輸送で全部隊が送られて行った。
更に陸上兵力展開が完了した一週間後、海軍にもスパイ情報により、敵連合艦隊が動き始めた事が伝えられた。
これにより、海軍も慌ただしく出撃態勢に移行した。

次号へ

１２６　出兵命令（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２７　予算投入（前書き）

例の沖縄局長更迭の件だけどざ……やっぱりだった。

福本
「何がやっぱりだったんです？」

読売新聞の社説に書いてあった。
記事にしたのは琉球新報だってさ。

セルベリア
「……余計に疑心暗鬼になりそうね。沖縄地方紙の記事なんて」

あの地方紙は嘘が得意だからな……果たして、本当だったのか、どうか……。

127　予算投入

5月2日　帝都　国会議事堂

ラバナスターで待機中の日本艦隊に出撃態勢に入った頃、日本政府は臨時予算を組んでいた。
もちろん、部隊増援の費用だけでなく、後方支援の為の各種必需品生産・購入費用などが含まれているが。
なお、こういった戦争・紛争時での利益獲得を環視するのは、やっぱり経産省や内務省など政府の仕事であるのは当然なのだが。
とにもかくにも、日本政府は臨時予算を組み終わり、議会に出していた……何時もの『あの人』からの質問があったが……。

国会議事堂内　衆議院議会場

石破防相
「…と言う具合であり、現状下では一触即発です。日本陸海空軍はシリルティア王国との安保条約に従い派兵した事は既にメディアの報道でご存知であると思います」

石破防相は今回の臨時予算投入の説明をしていた。
既にこの件に関する事はかなり厳重な報道統制を行いながらも既に国民の知るところになっていた。
何せ、いくら直接の交渉相手では無いにしろ、シリルティア王国とは友好関係にあり、更に官民問わず交流は頻繁である。

また、ラバナスターなどの日本人街はシリルティア王国との信頼関係で成り立つ同胞達の居場所である。
その居場所を含めたシリルティア王国を差し出せと言われて黙っている程、日本人は甘く無い。
また、本来宗教関連に関してはナイーブな日本人も、相手が宗教を盾にして領土を寄越せと聞いたら心中穏やかでは無い。
更に２００６年に起きたアズラエル公によるエルフ弾圧事件（戦史ではエルフ事変）の記憶がまだ新しい日本にとって、その元凶の１つであり、他宗教や他民族に対し排斥や高圧的態度をとって一切認め様としない……などの行動にシグドー教の評価は『宗教に有らず』や『宗教の範囲を越えている』等の評価があちこちから聞かれた。
まあ、宗教に関しては論議はあるが、１ヵ国に対し６１ヵ国で攻め込もうとするシグドー教圏国連合に対する批判が大半を占めていた。

石破防相
「なお、幾度も申し上げてきましたが、我が国もシリルティア王国も、その他の参戦国も領土侵略の意図はなく、領土防衛に徹する構えです。但し、海軍と空軍は早期終結の為に敵地攻撃もあり得るとの見解がある事を事前に申し上げておきます」

念のために釘を刺しておく……質問者に対してだが。

議長
「では、質問時間に移ります。ご質問のある方はおりますか？」

議長の声に暫く沈黙が続く。
すると民主党席から手が上がった。

議長
「渡部恒三（わたなべこうぞう）くん」

なんと、質問するのは『民主党の黄門様』こと渡部恒三議員だった。

渡部議員
「年寄りの戯言だかね、長期の戦は負担が大きいんじゃあないかね？　短期戦の用意は出来てるんか？」

さすが経験豊富な『黄門様』の指摘は的を射ていた。

石破防相
「はい。既に国防省では短期戦案の策定及び各省庁との協議は終わっております。なお、先程申しました敵地攻撃の件も短期戦案の一手段であります」

渡部議員
「ほうほう…まあ、出来れば敵地攻撃なんてせんで終われればいいが…相手次第だね」

そう呟くと渡部議員は質問を終えた。

議長
「では、ほ…」

福島党首
「はい！」

議長
「……では、福島党首」

議長も議員も半場呆れ目で見られている事も気にせず、質問する福

島党首。

福島党首
「今からでも遅くはありません！　再び交渉すべきです！」

石破防相
「…もう、決裂しましたよ？」

福島党首
「まだ交渉の余地はあります！」

石破防相
「領土を寄越せと言った相手に交渉の余地があると？」

福島党首
「だから、シリルティア王国に頼んで譲歩…」

石破防相
「いや、無理だから。シリルティア王国に怒られますから」

考えてみれば直ぐに解る。

井上次官
「それなら、海軍からの提案ですが」

そう言って井上次官が発言した。

井上次官
「福島党首は元弁護士でいらっしゃるので、このシリルティア王国とシグドー教圏国連合との争いを調停してはいかがですか？」

この提案に議場内は一部を除き大賛成した……福島は大慌てで質問を終わらせ、逃げ出したが…。
なお、最終的に臨時予算投入は賛成で可決した事は言うまでも無い。

次号へ

１２７　予算投入（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２８　戦端開く

５月９日（シリルティア王国５月１６日）
シリルティア王国北東部の国境ライン

兵士
「来たー！！　敵連合軍接近！！」

機関銃座で見張りをしていたシリルティア王国兵が叫んだ。
この声を聞いた全員が慌て前を見る。
無論、見えたのは近付いて来るシグドー教圏国連合の軍勢だった。

ユリアヌス
「いよいよ来たか」

今回の防衛戦を指揮する事となったユリアヌス中将はそう呟くと双眼鏡を覗いた。

大西
「確か、先鋒は１５万でしたっけ？　よくかき集めて来たものですね」

ちなみに防御のシリルティア王国軍・日本軍は現段階で５万がこの防衛線に配置されている。
確かに『投入兵力の原則』で言えば攻撃側のシグドー教圏国連合軍はシリルティア王国・日本軍の三倍の兵力を投入している。

セイバー
「真っ正面からばか正直にぶつかったら、確かに数的優位な敵に押し潰されるな」

ユリアヌス
「だが、それは討って出た場合の話であって、この防衛線に籠って戦えば話は別だ」

実際、いま彼らが籠っている防衛線は日本帝国陸軍が今までの戦訓を検討して計画し、シリルティア王国工兵隊も加わって造り上げた塹壕防衛線だ。
この塹壕防衛線には日本特産のセメント（これは本当。実際、セメントは日本で多く造られている）と日本製土木工作機械、緻密な計画で造り上げた防衛線であるため、かなり強固な物に仕上がっていた。
しかも、防衛線は三重四重の複線だ。
更にこの後ろには野砲・野戦重砲・攻城砲などと言った重砲がこれまた強固な陣地に設置されていた。
また、通常の塹壕防衛線の後ろには山砲・歩兵砲・迫撃砲などの陣地変換が容易な歩兵支援火器の砲撃陣地が幾つも作られていた。
つまり、安易に塹壕防衛線に接近すれば大出血が出るのは近代戦を経験するか、戦史を学んできた者なら充分に解る事だ。

ユリアヌス
「全軍戦闘配置に就け！」

大西
「第零艦隊陸戦隊、戦闘配置に就け！」

セイバー

「第七艦隊陸戦隊、戦闘配置に就け！」

それぞれの指揮官達が指揮下の部隊に命令を告げた。

一方、進撃して来たシグドー教圏国連合軍は陣地の構築を始めた。

と言っても、テントを張ったり、土嚢ならぬ土を入れた籠の様な物を並べていた。

無論、長居するつもりは無いらしく、どうもテントを張ったりするのも微妙に真剣さが足りない。

その間に各国の部隊を率いる指揮官達がシリルティア王国軍防衛線を単眼鏡で偵察していた。

しかし、彼らには敵が塹壕に潜んでいる事は解るが、どれ程の兵力で、どれ程の備えがしてあるかまでは解らなかった。

何せ展開していた場所は平原で、小高い丘など1つも無い土地だった。故に詳しい偵察は出来ない、ただ、厄介な事である事は認識していた。

この為、その後の軍議では慎重意見大半を占めていた。

しかし、これに異議を唱えたのは盟主国ゼベルスト教皇国から派遣された従軍司教達……言っておくがこの『従軍司教』は近代の司教では無く、ソ連の政治将校の様な連中だった。

彼らの言い分は「異教徒に恐れおののくとはなんたること！　例え罠があっても我が神に敵は無い！」……と軍事知識も無く、神典しか読まない人間が言いそうな事をほざいていた。

だが、これにはゼベルスト教皇国の軍人も文句は言えない、何故ならこれは『聖戦』であり、司教達にこれを盾にされては反論も出来ない。

更に参加した60ヵ国もゼベルスト教皇国の『神命』に従って嫌々出兵しただけであって、これまたシリルティア王国軍とは気概が違

っていた。
実際、従軍司教達が嫌われていると同時に、シグドー教圏国連合の形成国はゼベルスト教皇国の圧倒的軍事力に膝を屈しただけで、その内部は交渉決裂時に交渉役が吐き捨てた言葉とは反対にどちらかと言えば脆弱だった。
更にこの『聖戦』もシグドー教教会とゼベルスト教皇国の教皇及び教組織が各国から吸い上げ・蓄財していた資産を増やしたいと言う欲望が原因であり、それに巻き込まれた形成国には堪った物ではなかった。
そんな内部事情を抱えながら、シグドー教圏国連合軍１５万は従軍司教達の圧力により渋々と攻撃を開始した。

次号へ

１２８　戦端開く（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２９　第一回攻撃失敗ス

シリルティア王国軍・日本軍塹壕防衛線

兵士
「敵連合軍来ます！！」

準備が整って一時間後、シグドー教圏国連合軍が防衛線に向かって来た。
しかも、一気に叩き潰す気なのか全軍で攻めて来た。

ユリアヌス
「ほう…全軍で攻撃する気か。しかし、そう簡単にいくかな？」

戦闘準備の整った塹壕の中から観察していたユリアヌスが呟いた。
今なら１０倍の兵力を相手にして撃退する自信があった。

ユリアヌス
「いいか、出来る限り引き付けから一斉に射撃開始だ」

既に射撃態勢に入った兵士達に釘を刺す。
今か今かと待つ兵士達にとってはジリジリと進んで来る敵兵に心中で「早く来い！」と毒づいていた。
しかし、早々自分達の思う通りに敵は動いてくれないのが世の常…
黙って敵兵が近付いて来るのを待つしかない。
そして、漸く……

ユリアヌス

「もう少し…もうちょっと……あと一歩……よし、今だ！　総員一斉射撃！！」

この号令に今まで沈黙していた９９式歩兵銃・９９式軽機関銃・９２式重機関銃などの銃器から後ろの山砲・歩兵砲・迫撃砲などの支援火器が満を持して火を吐いた。

更に第零・第七艦隊陸戦隊の６４式小銃・６４式軽機関銃も攻撃を開始。

その火線は進撃していたシグドー教圏国連合軍に襲い掛かった。

慎重に進んでいた連合軍も身構えた瞬間には火線に捕捉され、次々と兵士達が撃ち倒されていった。

僅か数秒で平原は硝煙に包まれた戦場と化した。

さて、教圏国連合軍の兵士達はまるで日露戦争時の旅順要塞相手に戦っていた日本第三軍の兵士達の様に攻めあぐねいていた。

何せ古参兵でも経験した事の無い銃器の波状攻撃に対抗する術がなかった。

本来なら射撃の切れ目で前に進み、敵陣に迫るのが最適だがその切れ目が無い。

これでは伏せておく事しか出来ず、何も進まない。

無論、これは後方の教圏国連合軍の陣地からも見えていた。

これに指揮官達は大砲を前面に展開させ、防御線を砲撃しようとした。

しかし、この動きはシリルティア王国軍の偵察機がちゃんと捉えていた。

故に無線を使い前線のユリアヌスに連絡され、ユリアヌスは直ぐに後方の砲兵陣地に砲撃命令を下した。

命令を受けた砲兵は野戦電話を使い各砲に目標を伝達し、各砲の砲

兵は素早く砲弾を装填すると一斉に砲撃を開始した。
そして、放たれた砲弾は戦場の上空を飛び越え、漸く展開の完了した教圏国連合軍の大砲の砲列に飛び込んでいった。

ヒュルルルル……

砲兵隊指揮官
「ん？　なん…」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドン！！！！！

連続して着弾する轟音。
それを聞きながらシリルティア王国砲兵は砲撃を繰り返す。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！
ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！……

ヒュルルルル……

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドン！！！！！

砲兵
「うわ～！！」

砲兵隊指揮官
「た、退避！！　砲を棄てて退避！！」

着弾で大砲が吹き飛ばされたり、宙を舞ったりするなか、砲兵達は逃げ惑う。
これを見た指揮官達は攻撃中の前線に撤収命令を下した。

結局……教圏国連合軍の攻撃は失敗終わったばかりか、泥沼の様相を呈する事になった。

次号へ

１２９　第一回攻撃失敗ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３０　狙撃

５月１６日（シリルティア王国５月２３日）

シグドー教圏国連合軍陣地

侵攻開始から早くも１週間が経過した。

そして、シグドー教圏国連合軍は一歩も前進すらしていなかった。

無論、その最大限の原因はシリルティア王国軍の強固な防御線だった。

この１週間、連日で攻撃を仕掛けたが、結局は敵からの攻撃で撃退させるのがオチだった。

更に死傷者は合計で５万を越え、６万に届こうかと言ったところまできていた。

１週間で戦力の約３０～４０％が失われた計算になる。

もちろん、指揮官達は色々な策を出して防御線を攻撃したが抜けなかった。

例えばある日の攻勢では大きめの盾で銃弾を防いで接近した。

しかし、ある部隊は落とし穴、ある部隊は曲射弾道の山砲・歩兵砲・迫撃砲の砲撃で、ある部隊は無反動砲に撃たれて……とにかく散々な目にあって失敗。

ある日の夜は夜襲を仕掛けようと接近したら……日本軍相手に夜襲は余計に危険なのに……今度はワイヤートラップに引っ掛かって存在が露呈、反撃されて襲撃失敗。

この他にも色々と試したが、何れも何の効果もなかった…反対に反撃されて被害だけを出す結果になってしまった。

この為、各国の指揮官達は軍議で「このままでは埒が明かないから、本隊到着を待つべきだ」との意見に全員が賛成であった。

これに対し、政治将校の様な従軍司教達は相変わらずの『神の前に

敵は無し』論を唱えていた。
この為、軍議が行われていたテントは一触即発の状況であった。
そこで1人の指揮官が休憩時間を入れる事にした。
この為、一時的にではあるがなんとか暴発は回避された。
そして、従軍司教達はテントから出て行った。

その頃、塹壕防御線の中では次の攻撃に備えて当直兵を除く兵士達は思い思いの事をしていた。
睡眠をとる者もいれば、自身の銃を整備・点検する者、音楽を聴く者、同僚達とお喋りする者など様々だ。
そんな中、当直兵と共に見張りをしていたセイバーがある事に気付き、ユリアヌスと大西を呼んだ。

ユリアヌス
「おやおや、あれはシグドー教で有名な従軍司教達ですね」

セイバーの指差す方を見たユリアヌスが苦笑しながら言った。

大西
「あぁ、政治将校並みに口を出す邪魔者」

……こちらでも従軍司教の評判は悪かった…当然かもしれないが…。

セイバー
「大西大尉、あの双方にとって邪魔者達を狙撃出来ないか?」

大西
「はあ…出来ない事は無いが…陸戦条約に抵触しませんかね?」

ユリアヌス
「いや、ああ言った従軍司教達は武器を持つ者が多い。まあ、僧兵に近いかな」

大西
「なら、大丈夫ですよ」

そう言うとチェイタックを構える。
減音器を装着した狙撃銃を真剣な様相で構え慎重に狙いを絞る。

その頃……シグドー教圏国連合軍陣地

従軍司教４人は忌々しそうに防御線を睨んでいた。
彼らの予定では今頃、『戦利品』を眺めながら勝利の美酒に酔っている……筈だった。

ブス！

バタ！

ブス！　ブス！

バタ！　バタ！

突然、従軍司教の１人が倒れた。
眉間に穴を開けて。

くぐもった命中音と共に続いて2人が倒れた。
1人は喉、1人は心臓に穴が空いていた。
これに残った1人は慌て逃げ出した。

次号へ

１３０　狙撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３１　待機中……

５月２５日（シリルティア王国６月１日）　ラバナスター

地上で両軍が睨み合っていた頃、第七艦隊は相変わらずラバナスターで待機中だった。
無論、第七艦隊の乗組員達は艦長から新兵まで早く実戦に出たいと言う気運がある。
しかし、敵艦隊が出て来なければ艦隊を出す意味は無い。
今のところは第零艦隊から潜水艦伊２９・黒潮が偵察に出ているのが、唯一の動きだった。

旗艦播磨艦橋

遠地
「……出番は未だか？」

大谷
「敵艦隊が出て来ないと出番はないよ」

将棋で対戦しながらつまらなそうにぼやく和馬に苦笑しながら大谷が応える。

遠地
「なあ、福田。本当に敵艦隊は出て来てないのか？」

福田

「現在のところ、潜水艦からも、シリルティア王国のスパイからも出撃の報告はありません」

遠地
「は～あ…なんか気が抜けるな～」

日進
「気を抜いてはダメよ。はい、王手」

パチ

遠地の相手をしていた日進はサラリと言って一手を打った。

遠地
「……ウギャァァァァァ！！！　いつの間に～！！？？」

……いきなりの展開に艦橋が和馬の絶叫に包まれる。

大谷
「おやおや…またやられましたね」

長門
「…何度もパソコンでやった方がいいって言ったのに」

遠地
「パソコンでの将棋対戦は真剣味が無い無いんだよ…う～ん」

将棋盤を眺め、頭を掻きながら唸る。

福田

「……そう言えば、元帥とセルベリア先輩は？」

大谷
「今は第零艦隊旗艦天城の艦長兼主席参謀室に居られる筈だ」

その頃……天城艦長（兼主席参謀）室

山城
「なあ、こんな事を訊くのはある意味気が引くが、第七艦隊の実力はどうだ？」

天城の艦長室で山城は勇気に訊いた

福本
「薩摩・土佐についてはいいと思いますが…その他の艦艇は未知数ですね」

山城
「やっぱりか…いや、予想は出来ていたが…仕方ないか」

福本
「大丈夫ですよ。訓練はみっちりしました。あとは実戦でどれだけ出せるか…ですよ」

山城
「まあ、お前さんとその仲間達の実力は知ってるから、あえて何も言わないけどさ」

福本
「イザとなったら私が出て言って尻を叩きますよ。まあ、そんな事にならない事を祈りますけど」

山城
「俺もだよ」

福本
「あはは……ところで先輩、シグドー教圏国連合の盟主国ゼベルスト教皇国の事ですが…」

山城
「お、やっぱり気付いたか？　この強気な態度と急激な勢力拡大が臭いか？」

福本
「やっぱり、先輩も解ってたんですね。だから親父を通じて第七艦隊を呼んだ…と」

山城
「あぁ、今までの経験上、近年になって勢力を拡大させた連中は転移兵器を使ってる場合が多い…どうも嫌な予感がしたからな」

福本
「そうですか…さて、どう出て来ますかね？」

山城
「どう出て来るだろうな？」

お互いに笑いながら言う。
本当にこの2人……恐ろしいぜ……。

その頃……調理場

シルヴィア
「ふ～ん…やはり、仕事で手一杯か」

セルベリア
「はい…まあ、漸く戦隊人事が整いましたから、比較的に時間が空くようになりましたけど」

……なぜか『お茶の準備』と言って調理場を（一時的に）占領している2人。

シルヴィア
「まあ、最初はそんなものだ」

セルベリア
「そんなものですよね～」

……こちらもこちらで陽気な雰囲気である。

次号へ

１３１　待機中……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３２　双方増援ス

６月１０日（シリルティア王国６月１７日）　シリルティア王国北東部国境（防衛）ライン

シグドー教圏国連合軍が北東部国境ラインを攻撃してから１ヶ月が経過した。
この間、最初の１週間を除けばほぼ睨み合いに終始していた。（小規模な衝突はあったが）
この間、お互いに後方の本部と連絡を取り、増援要請を行っていた。
シグドー教圏国連合は先鋒軍の停滞から、シリルティア王国はスパイ情報により敵増援の報を手にしていた（無論、増援が来る事は予想済み）から、増援を了承した。
しかし、ここで物を言ったのは輸送力と事前準備だった。
シグドー教圏国連合軍も流石に１５万程度の兵力投入で全土を占領出来るとは思っていなかったから、本隊の編成は出来ていた……しかし、その移動手段は徒歩か駄馬輸送が主な物だった。対し、シリルティア王国は鉄道輸送で素早く後方拠点に部隊・物資・重火器・機材を送り込み、前線まではトラックなどの自動車で輸送した為、シグドー教圏国連合軍との展開・移動速度は極端な開きがあった。
故に僅か数日で防衛ラインには初期展開の５万を合わせた３６万の兵力が投入されていた。
無論、数的主力はシリルティア王国軍２５万人だが、ネイラーン王国軍５万人、ブリテニア王国３万人、日本軍２万８０００人、アンデュラス王国２０００人（アンデュラス王国もシグドー教圏国連合と国境を接している為、少数派遣）、エルフ族から２５０人（義勇軍として日本海軍陸戦隊が預かっている）と言う具合だ。
この兵力を支えるのは後方拠点と鉄道輸送力が中心だが、飲食物の

輸送には日本軍輸送機と飛行船を持つ王国空軍の協力もあるため、兵站能力には比較的に余裕があった。
対し、シグドー教圏国連合は先鋒軍１５万（戦力は3分の2まで落ち込んでいたが）の上に更なる大兵力を出したが、その兵站能力はシリルティア王国よりも完璧に劣っていた。
また、この大兵力と共に送られて来たゼベルスト教皇国軍の『圧倒的・対抗不可能兵器』群を投入した為、余計に大変な事になった。
後に参加国からの報告書を纏めた結果、兵站に関しては『中世的な兵站維持方法だ』との評価が各国から出た。
結局、陸戦の大成を決めた要因の１つは兵站能力だった。
そして、兵站能力を越える兵力投入がどの様な末路を辿るかは後に戦史の教科書に掲載される事になる。

防衛ライン司令部

セイバー
「増援か…中々厄介な事態になったな」

シリルティア王国空軍の偵察機が撮影してきた写真を見ながらセイバーが呟いた。

大西
「しかも、かなりの大兵力ですね」

ユリアヌス
「情報によるとシグドー教圏国連合の増援は６１万以上…と報告がきている」

この言葉を聞いた司令部内は兵力の多さにざわついた。
何せ敵はこちらの約2倍の兵力となる計算だからだ。

セイバー
「だが、裏を返せば、ここで暴れられればシグドー教圏国連合軍は最後の手札を出すしか無い」

ユリアヌス
「最後の…手札？」

大西
「…そうか、シグドー教圏国連合の艦隊！」

大西の言葉に誰もがハッとした。

セイバー
「そうだ。海上戦闘はどちらが勝ったか解りやすい。無論、上層部の後始末次第だが、敵艦隊が壊滅すれば向こうに有効な手札は無くなる」

ユリアヌス
「なるほど…うむ、確かにそうだ」

この瞬間、方針は固まった。

次号へ

１３２　双方増援ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３３　空中戦（前書き）

人物某体が無いってキツいね。

福本

「まあ…文章ばかりの結果に陥ってしまったからな」

初空戦なのにリアル感欠けまくりです…。（；＿；）

１３３　空中戦

６月１１日（シリルティア王国６月１８日）　シリルティア王国北東部国境（防衛）ライン

苦戦した先鋒軍との情報交換会で従軍司教達が大騒ぎする場面があったものの、直ぐにゼベルスト教皇国軍は新たな手札による攻撃を開始した。
それは……彼らの言う『空飛ぶドラゴン』による攻撃だった。

ブーーーン……

単発複葉固定脚の機体と双発複葉固定脚の機体が空を飛んでいた。
但し、双発機は置いておくとして、単発機はシリルティア王国軍が採用していた機体より少し古めかしい。
どちらかと言えば、なんだか第一次大戦時の戦闘機に見える。
実はこれがゼベルスト教皇国軍の『空飛ぶドラコン』の正体…つまり、航空機だった。
単発機はイギリスのＲ．Ａ．Ｆ・Ｓ．Ｅ．５戦闘機、双発機はハンドレページＯ／４００爆撃機によく似た機体だ。
それが編隊を組んで飛んでいた……向かう先はシリルティア王国軍の防衛ライン。
双発機が搭載している爆弾で防衛ラインを爆撃する腹積もりであろう。
単発機はその護衛なのだが、どちらかと言うと爆撃後のだめ押し攻撃のつもりの出撃の様で警戒心は薄い。

だが……その警戒心の薄さが命取りだった。
何故なら……

ズダダダダダ！！

ゴワーン！！　ドガーン！！　ズゴーン！！

突然、数機の爆撃機が爆発・炎上・墜落した。
他の爆撃機や護衛の戦闘機が慌て周囲を見回す…しかし、水平面では異常はない。
漸く1機の爆撃機の旋回機銃手が太陽を背に猛スピードで降下してくる一団を発見した。
だが、既に遅かった。その一団は容赦無く爆撃機隊と護衛の戦闘機隊に襲い掛かった。
この一団の大半は自分達と同じ単発複葉固定脚機……こちらの方はスマートそうだ……だったが、残りは単発『単葉』固定脚機、しかも、機体は鉄板に包まれ、翼は変わった形をしていた。
いや、彼らにとってはそんな事はどうでも良かった。それよりも、自分達以外の人間が『空飛ぶドラコン』こと飛行機を持っている事が驚きであった。

さて、ゼベルスト教皇国軍『空飛ぶドラコン』隊を襲った者達の正体は……読者の皆様ならお分かりかも知れないが、シリルティア王国空軍の戦闘機隊だ。
４０機の編隊の内、艦上戦闘機『雷天』の陸上版２８機と新型の全金属戦闘機『神天』（外見は９７式戦闘機に９６式艦上戦闘機の逆ガル翼試作機の組み合わせ）１２機の戦闘機は無線で連絡を取りながら、一気に上空から太陽を背にして襲い掛かった。

実は増援の中には空軍部隊と日本帝国空軍から車載の防空レーダー隊が派遣されていた。
空軍は対地攻撃とその護衛に、防空レーダー隊は万が一に備えた前線防空を担当する為である。
そして、この防空レーダー隊は接近する編隊を捉えると直ぐに後方の野戦飛行場に連絡、連絡を受けたシリルティア王国空軍第一陣の戦闘機隊は全力出撃で迎撃に討って出た。
後に『初（異世界国同士）の空中戦』となった『国境ライン空中戦』は機体性能、無線通信、奇襲攻撃で迎え討ったシリルティア王国空軍は爆撃機２８機、戦闘機３４機を撃墜、被撃墜無しの圧倒的勝利を収めた。
対し、ゼベルスト教皇国軍は爆撃に失敗した上、戦闘機６機、爆撃機２機しか帰還せず、壊滅的克つ衝撃的被害を被った。

次号へ

１３３　空中戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３４　オンボロ戦車は役に立たず（前書き）

今日は開戦日ですね～。

福本
「今年で…４回目だっけ？」

ええぇ。大学でこの関連を専攻しているだけに色々と言いたくなりますが、今日は止めときます。

セルベリア
「では、読者の皆様も改めて大東亜戦争を見直すきっかけになる日と願いつつ、小説の方をどうぞ」

１３４　オンボロ戦車は役に立たず

６月１４日（シリルティア王国６月２１日）　北東部国境（防衛）ライン

セイバー
「…よし、撃て！！」

ズダダダダダ！　ズダダダダダ！　ズダダダダダ！
タタタタタタタ！　タタタタタタタ！　タタタタタタタ！　タタタタタタ！

第七艦隊陸戦隊の６４式軽機関銃・６４式小銃が一斉に発射された。
防衛ラインは各国の重軽機関銃と歩兵小銃による弾幕射撃が展開されて、敵兵の接近を阻む。
正に第一次世界大戦の塹壕戦の様相を呈していた。
反対にシグドー教圏国連合軍はゼベルスト教皇国軍を中心に攻撃を実行するが、装備に劣る連合軍は苦戦した。
ゼベルスト教皇国軍は『空飛ぶドラコン』こと航空機隊を１１日以後も戦闘に投入したが、レーダーと言う電波の目に監視され、更に性能面で優れた機体を持ち、順次送り込んでくるシリルティア王国空軍に制空権を握られては、ゼベルスト教皇国軍の航空機編隊は撃墜される為に行く様な物で、航空戦力は萎む一方であった。
また、ゼベルスト教皇国軍は防衛ライン攻略の為、攻城砲を自らの陣地前面に設置しようとしたが、偵察機にバレて、後方の砲兵陣地からの砲撃で設置完了前にスクラップにされていた。
そして……本日は……

石田
「あ、セイバー司令！　あれを見て下さい！」
６４式小銃を乱射し、弾倉を交換していた幸人は手を止めて、前方を指差した。
セイバーも一時射撃を止めて前を見た。
すると……

セイバー
「あれは…マークⅠ戦車！　動く菱形戦車を生で見るとは思わなかったわ」

第一次世界大戦でイギリスが使用し、戦車を『タンク』と呼ばせる事になった戦車だ。
日本陸軍でも聡明期にホイペット騎兵戦車と共に購入し、分析・研究に使われた事は有名だ。

石田
「あんなオンボロでこの防衛ラインを突破する気ですか？　舐められた物ですね」

セイバー
「案外そうとも言えないわ。何も知らなければ、鉄の塊が接近して来るのよ？　普通だったら逃げる」

石田
「おあいにく様でしたね。我々は戦車を見飽きてますよ。各国部隊に警戒警報を出します！」

セイバー
「お願い。総員、対装甲車両戦闘用意！」

これを聞いた陸戦隊員達は冷静に無反動砲や対戦車ミサイル、４０式携帯歩兵砲を引っ張り出してきて構える。

セイバー
「無反動砲は周囲に気を付けろ！　後ろにいると大変な目にあうぞ！」

苦笑を浮かべながら頷く陸戦隊員達。
何せ彼らは海軍第七艦隊陸戦隊……世界最強克つイザと成れば敵前上陸をも慣行するのが彼らである。
戦車ぐらいで恐れていては敵前上陸もやれない。

石田
「警報完了。これで多分、大丈夫かと」

セイバー
「わかった。敵戦車は出来る限り引き付けろ」

キュラキュラ…とキャタピラー音を響かせて近付いて来るマークⅠ戦車。

セイバー
「そうだ、もっと近付いて来い……そうだ、いいぞ……よーし…撃て！！」

シュポーン！シュポーン！シュポーン！……

ボーン！ボーン！ボーン！……

セイバーの指示に直ぐ様、対戦車ミサイル、４０式携帯歩兵砲、無反動砲が吠えた。
そして……

ドゴーン！ゴワーン！グオーン！ドゴーン！ゴワーン！グオーン！……

次々とマークⅠ戦車が直撃弾を受けて爆発・炎上した。

石田
「敵撤退して行きます！」

幸人の声に第七艦隊陸戦隊員達から歓声が上がる。

セイバー
「ふん、もう少し骨のある戦車を持って来い」

歓声を聞きながらセイバーは１人呟いた。

次号へ

１３４　オンボロ戦車は役に立たず（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３５　さあ、出撃だ！（前書き）

長らくお待たせしました。
いよいよ、第七艦隊の出番です！

福本
「随分長く待たされたけどな」

あはは……。

135　さあ、出撃だ！

6月24日（シリルティア王国7月1日）

シリルティア王国北東部での国境防衛ラインの戦いは未だに続いていた。
最初は航空機・攻城砲・戦車を出せば攻略出来ると踏んでいたゼベルスト教皇国も、連日展開される戦闘でシリルティア王国軍などに撃退される事実を突き付けられると、次第に手を打てなくなった。
対し、シリルティア王国軍は初空戦後から国内の空軍部隊を現地に派遣し、ゼベルスト教皇国軍航空部隊と戦っていた。
どうやら、敵航空隊と対抗出来る事を知り、今の内に実戦経験を各部隊に積ませる事にしたようだ。
相変わらず諦める事無く攻撃してくるシグドー教圏国連合軍も防衛ラインを抜けない為、またもや膠着状態に陥っていた。

その頃……ラバナスター

旗艦播磨　長官公室

福本
「航空機、戦車……この技術的に差のある世界では持つだけでも圧倒的な『武器』になると言う事か…」

前線からの報告を読みながらポツリと勇気は呟いた。

多分、何かしらの要因で手に入れた物をコピーして実用化したからこそ、ゼベルスト教皇国は６０ヵ国もの『連合』を作り上げたのだろう。
無論、これら兵器とシグドー教を組み合わせ、付近の国家を吸収した事は間違いない。

福本
（となると…もしかしたらシグドー教、あるいはゼベルスト教皇国の権威が崩れれば案外……ふむ、あり得るかもしれない）

『シグドー教圏国連合』が案外脆い物かもしれないと見当を付けた時、セルベリアが入って来た。

セルベリア
「まさかとは思うけど、このまま出番無しで終わり…なんてオチじゃあないでしょうね？」

福本
「…その様子だと、乗組員達はそろそろ我慢の限界に近付いているみたいだね」

セルベリア
「出番が無いまま終わったら、反乱発生間違い無しね」

福本
「あはは…だけど、大丈夫だよ。必ずシグドー教圏国連合は海軍を出してくる。特に今みたいに陸戦で膠着状態に陥った時はね」

セルベリア
「戦況打開の為に制海権を取りにくるって事ね？」

福本
「あぁ。このまま終わらす気は無いだろう。特にゼベルスト教皇国はね」

もし、（宗教的・盟主国的）面子を保とうとするなら圧倒的克つ自信のある海軍を出動させ、海上艦隊決戦を挑んで、敵艦隊を撃滅するしか無い。
それ以外の方法はシリルティア王国が交渉の席に着かずに無視するか、面子が邪魔して実行しない（あるいは出来ない）…のである。

福本
「絶対出て来るよ。近い内に必ず動きが…」

福田
「元帥！　副司令！　大変です！！」

ドアを蹴破らんばかりに征一が長官公室に入って来た。

福本
「そんな慌てんでも、俺もセルベリアも逃げないよ。で、なんだ？」

福田
「はい！　シリルティア王国諜報部より連絡！　敵ゼベルスト教皇国以下シグドー教圏国連合艦隊、出撃準備を整えつつ有り！」
興奮する征一の報告を聞いた勇気とセルベリアが顔を見合わせる。

セルベリア
「言った通りになっちゃったわね」

ピリリリ…ピリリリ…

福本
「はい、ケータイ勇気です。当たりましたね、先輩」

山城
『おぉ、ちゃんと届いた様だな。あぁ、予想通りだな』

ケータイの呼び出し音に通話ボタンを押して話す勇気と山城。

福本
「では、こちらも出撃といきますか？」

山城
『だな。散々待たされたから、これからは大変だぞ』

福本
「ですね…では、また後で」

山城
『あぁ、また後で』

そう言って通話を終わる。

福田
「では、元帥。出撃しますね？」

福本
「当たり前だ…第七艦隊は2時間以内に全艦出撃用意を完了せよ！」

福田

「了解！！　目標1時間以内を目指します！」

次号へ

１３５　さあ、出撃だ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３６　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　１（前書き）

長らくお待たせしました、漸く海戦でございます。

１３６　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　１

７月４日（シリルティア王国７月１１日）　海上

第七艦隊旗艦播磨艦橋

遠地
「予定では今日が会敵日なんだよな？」

大谷
「あぁ。但し、敵艦隊にトラブルがおきていなければ…だけどね」

……出撃してから１０日、敵シグドー教圏国連合艦隊と会敵する（飽くまで計算上の話だが）日になった。
スパイの続報で、敵艦隊もその日の内に出撃、互いの航行速度を計算に入れたところ、今日が会敵する日との結果が出ていた。
故に今日は警戒を厳にし、偵察・索敵機のパイロット達もやる気満々で出撃して行っている。

福田
「先ずはどちらが先に見付けるか？……ですね」

長門
「…大丈夫。索敵の偵察機の数・性能・範囲などから言ってこちらが先に見付けれる」

福田

「まあ、シミュレーションは信用しますけど…実際、何がおきるか解らないのが戦場ですし…」

福本
「そうだな、気が抜けない事は確かだ。いくら相手が技術的に劣っていると言ってもな」

技術的劣勢を敵の油断につけ込み、敵に大損害を与えた事例は幾つもある。
明日は我が身…と言うのも他人事では無い。

播磨
「そう言う割に、長官はリラックスしてますね？」

いつの間に来たのか、播磨が勇気の隣にいた。

福本
「おや、戦闘時は比較的リラックスしていたと本人から聞いておりますが？」

播磨
「…薩摩さんも言ってましたが、元帥の事を言うのはちょっと卑怯ですよ…」

福本
「ありゃりゃ、俺も爺ちゃんや婆ちゃんに比べればまだまだ未熟か」

苦笑しながら呟く勇気。

セルベリア

「2人で何をヒソヒソと話してるの？」

そう言いながら勇気の肩に寄り掛かるセルベリア。

福本

「お爺ちゃんとお婆ちゃんの昔話…と批評かな？」

セルベリア

「あらあら、その様子だと酷評みたいね」

お互いに軽口を言い合う。

そして、播磨はこの艦橋の空気を懐かしんでいた。

戦闘前であっても、緊張も不安も感じさせず、和気藹々としている艦橋……世代は代わっても、雰囲気は変わっていなかった。

無線

『こちら三番機、レーダーに反応有り。確認します』

この報告に艦橋の空気は一気に鋭くなった。

そして10分後……確認を終えた偵察機のデータが播磨の艦橋に入ってきた。

長門

「…映像データ受信、確認解析開始します」

福田

「偵察機の報告では戦艦60、正規空母6、軽空母2、重軽巡洋艦、駆逐艦多数…との事ですが…」

大谷
「敵も余り後が無いからね。全力で掛かってくるだろう」

遠地
「まあ、そうでないとこっちも出て来た意味も無いけどな」

長門の解析が終わるまで好きな事を各自で言う。

長門
「…解析完了。戦艦、空母の艦船数は報告通り。重軽巡洋艦と駆逐艦の数は…」

詳細を述べる長門、その報告を福田は通信で各国艦隊に通知していた。

第零艦隊旗艦天城艦橋

山城
「ふむ…パソコンとその関連情報は長門の十八番だが、ここまで詳細に報告してくるとはな」

佐野から受け取った播磨からの詳細報告を見た山城は呟いた。

シルヴィア
「後輩なのに今更何を言っておる？」

山城
「なに、久し振りだから、ちょっと驚いただけだよ」
そう言いながら、山城はこれだけ詳細なら大丈夫だと思った。

シリルティア王国艦隊旗艦セッツ艦橋

ドレイク大将
「さすが日本艦隊だ。これだけ詳細な報告は我々に利するな」

士官
「長官、空母部隊の攻撃目標はどうしましょう？」

ドレイク大将
「作戦通りだ。空母を撃滅せよ」

士官
「了解！」

次号へ

１３６　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３７　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　２

第七艦隊が発信した偵察機の情報は長門の解析結果も入れて直ぐ様、各国艦隊の旗艦へ通達され、旗艦から各空母に伝達された。
そして、たちまちの内に攻撃準備を終えていた艦載機が空母の飛行甲板に並べられていく。
ここでシリルティア・ネイラーン王国艦隊空母の艦載機とブリテニア王国艦隊空母の艦載機との違いが解る。
シリルティア・ネイラーン王国の艦上戦闘機は複葉固定脚『雷天』から全金属単葉固定脚『神天』の艦上機版に機種転換が完了したが、艦上攻撃機はソードフィシュこと『剣雷』で、新たに９６式艦上爆撃機をモデルにした艦上（急降下）爆撃機『剣星』が開発・配備されたぐらいだ。（これでも早い方だが）
対し、ブリテニア王国はそれなりに進んでいた。
艦上戦闘機はフォッカーＤ・ＸＸＩと似た機体で、シリルティア・ネイラーン王国と似た様な物だが、艦上（急降下）爆撃機は『シュトゥーカ』ことユンカースＪｕ８７スツーカに似た機体だし、艦上攻撃機にいたっては『三菱の艦攻』で有名な固定脚の９７式二号艦上攻撃に似た機体である。
まあ、現段階ではどちらも強力な戦力である。
何故なら、第七艦隊及び第零艦隊の空母艦上機は別命有るまで艦隊防空に徹する予定である。
いくらジェット機でも、速度の遅い複葉機では手に余る為、今回は留守番である。

ブリテニア王国艦隊　空母戦隊旗艦アテネ

飛行甲板で発艦前の調整で忙しい中、艦橋構造物に背を預ける人間がいた。

士官
「マリア様、やはりここに居られましたか」

空母戦隊司令付き士官がマリアに声を掛けた。

マリア
「やっぱり、艦橋よりここが一番落ち着くわ」

士官
「それは解っておりますが…貴女様は空母司令でありますので…」

士官が困った風に言う。
このやり取りを見れば解る通り、マリアは空母戦隊司令である。

マリア
「わかってるわ。艦橋で指揮を執る」

士官
「はい」

そう言うと、ツカツカと歩いて3階の艦橋に上がった。

マリア
「動きはあったか？」

通信士官

「いいえ、日本軍からは変化無しとの事です」

マリア
「そうか…」

日本軍を信用しない訳では無いが、始めて共に戦う為に不安がある。
ただ、話してみた限りでは大丈夫だと思うのだが……。

マリア
「…攻撃隊の用意はいいか？」

士官
「はい。第一次攻撃隊は準備完了。第二次攻撃隊は八割完了です」

マリア
「…先手を打つ。第一次攻撃隊発艦せよ！」

空母４隻（アテネを含む。あと３隻は飛龍型に相当）を率いるブリテニア王国空母戦隊から第一次攻撃隊が発艦した。
これに合わせ、シリルティア・ネイラーン王国両艦隊の空母からも第一次攻撃隊が次々と発艦した。

第零艦隊旗艦天城艦橋

佐野
「ブリテニア王国艦隊の第一次攻撃隊です」

窓の外の第一次攻撃隊を指差す佐野。

山城
「さすが、手慣れてるだけはあるな」

シルヴィア
「我が国は未だ未だか……絶対に追い抜いてやる」

山城
「頼むから喧嘩はしないでくれよ…」

山城が苦笑しながら言った。

風華
「艦長さん、飛龍の矢萩副長からです。1時間後に護衛の雷風隊の発進許可を求めていますが？」

山城
「ふむ…小澤長官、どうします？」

小澤大将
「念のための護衛だと思うから認可したいが…主席参謀はどうだ？」

山城
「私も同じです。では、許可の返事をしておきます」

2時間後……ブリテニア王国部隊を先頭にした第一次攻撃隊はシグドー教圏国連合艦隊の上空に到達した。

そして……各部隊は急降下爆撃機を先頭にして突入した。

次号へ

１３７　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３８　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　３

その頃……シグドー教圏国連合艦隊…と言うよりゼベルスト教皇国艦隊…は航空攻撃の為の準備中であった。
保有する大型空母６隻の飛行甲板では攻撃隊の準備がされていた。
艦上戦闘機と艦上攻撃機のみの編成らしく、爆弾を抱えた艦攻を並べられていた。
戦闘機はＲ．Ａ．Ｆ・Ｓ．Ｅ．５の艦上戦闘機版だが、攻撃機は日本の１３式艦上攻撃機である。
既に索敵用の１３式艦上攻撃機が敵を探していた。
しかし……実は１３式艦上攻撃機の時代には小型機用の小型電信機が未開発の為、見付けても艦隊に引き返すか、電信所のある陸地に引き返すかのどちらかであった。
これは日本艦隊以下４ヶ国艦隊から見たら、余りにも時代遅れである。
まあ、今まではそれで間に合っていたのだろう……それがこれから痛い目となって返ってくる事になる。

ある空母の飛行甲板

整備兵
「整備長、全機整備完了しました」

整備長
「よし、艦橋に報せて来い」

整備兵

「はい」

返事と共に艦橋に走って行った。
未だ敵は見付かっておらず、現在待機中だ。

水兵
「ん…なんだ、あれ？」

近くに居た見張りの水兵の呟きに整備長も空を見上げた。
視線の先には……見たことの無い機体がこれまた見た事も無い角度の降下で、自分達に向かって来ていた。

整備長
「て、敵機だ！！」

機体は解らなかったが、爆弾が見えた整備長は叫んだ。

水兵
「て、敵機上空！！！」

続けて水兵も叫ぶが、虚しい叫びとなった。
誰も遮る者の居ない敵機には悠々と抱えていた爆弾を切り離すとサッサと離脱していった。
爆弾はそのまま投下者の意思に従い、機体の並ぶ飛行甲板の中に命中した。

ズボ……ドガーン！！！

甲板を突き抜けた爆弾は下の格納庫甲板で信管を作動させた。

更に……

ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！

続けて５発が命中し、更に火災が発生する。
何せ飛行甲板に多数の羽布張り機体が燃料と爆弾を抱いている…正に可燃物の塊が飛行甲板に載っている状態だ。
そんな中に爆弾６発＋火災が発生すれば……ミッドウェーの再現である。

ゴオォォォォ！！！

整備長
「早く火を消せ！　拡がると厄介だぞ！」

水兵や整備兵が必死に水を掛けるが、『炎上物』に変わった艦上機が多くて役に立たない。

整備兵
「た、大変です！　整備長！」

艦橋へ行っていた整備兵が叫びながら走って来た

整備長
「バカ！　こっち以上に大変な事があるか！」

整備兵
「大変ですよ！　この艦を含めた空母４隻が被弾炎上しているんで

すよ！」

整備長
「なに！？」

漸くハッとなって整備長は周りを見た…味方空母が３隻燃えていた。

整備長
「まさか…あの瞬間に同時攻撃されたのか！？」

シリルティア・ネイラーン・ブリテニア王国の攻撃隊はそれぞれの急降下爆撃機を先頭に敵空母へと襲い掛かった。
無警戒な大型空母４隻（残りは雲の陰に隠れていた）の発艦前の艦上機群がある飛行甲板に次々と爆弾を投下、あっという間に飛行甲板が炎上した。
空母が炎上した為、漸く敵だと気付いた上空直衛の戦闘機隊は慌て急降下爆撃機を追尾したが、上空で待機していた３ヵ国の戦闘機隊に覆い被さられ、それどころではなくなってしまった。
周りにいた巡洋艦・駆逐艦は対空火器を撃ちまくったが、結局捕捉出来ずに逃がしてしまった。
更に、意識が上空警戒と炎上する空母に向いてしまったのがいけなかった。
何故なら、低空から別の刺客が迫っていたからだ。

次号へ

１３８　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３９　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　４（前書き）

ＦＸが漸く決まったよ。

福本
「Ｆ３５にな」

あんな（Ｆ２２ラプターに比べて）劣化ステルスとＶＳＯＬ機能だけが売りの機体で防空戦闘なんて出来んのか？

セルベリア
「知らないわよ」

まあ、見付かったらスホーイのフランカーやロシアステルスに捻り落とされそうな気がするけど。

福本
「レーダーはどうなんだ？」

解んないから評価しにくい。
つーか、レーダーの装換が可能ならタイフーンの方が心強い。

セルベリア
「運用面から批判されてるけど？」

なら、Ｆ３５もタイフーンも日本は最初から開発にも加わってないぜ？
失敗無くして兵器の運用なんて出来ないよ。
そもそも、どっちも多国籍開発・採用だし。

だいたい、アメリカが国防予算削るって言うし、一機の単価が高くなるって話はちゃんと検討材料にいれたのか？
それに本当に１９年に納入出来るのか？

……まあ、決まってから愚痴っても仕方ないし。

福本・セルベリア
（（かなり愚痴ったよ。作者…））

１３９　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　４

４空母が炎上し、克つ上空で空中戦をやっていた為、誰も彼も空母か上空に意識が向いていた。
故に１隻の駆逐艦が自分達の真横を通過した機影の集団に気付くまで、誰も気が付いていなかった。
無事な２隻の正規空母と２隻の軽空母を確認した艦爆隊は無線で艦攻隊に事を伝え、３王国合同攻撃隊の艦攻隊が隙だらけで無防備の横っ腹に襲い掛かった。
更に駆逐艦が慌て周辺の艦艇に報せている間に、何の妨害も受けていない艦攻隊は次々と射点に達すると航空魚雷を投下し、早々と離脱した。
不幸にも上空の空中戦を見ていた軽空母が慌て増援の戦闘機を上げていた。正規空母も邪魔にならない様に艦を動かしていた為、容易に艦攻隊は未来位置を予想出来た。
故に艦攻隊が空母の真上を通過し、魚雷の白い航跡が向かってくるのに気付いた瞬間には全てが手遅れだった。
一・二本は偶々外れても、大半の魚雷は命中した。

ある正規空母にて……

ズシャーン！！ズシャーン！！ズシャーン！！ズシャーン！！ズシャーン！！

水兵
「う、うわ！！」

艦長
「く…被害報告！！」

優々と引き上げる艦攻隊を苦々しく睨み付けながら艦長が叫ぶ。
艦長要員も忙しく動き回る。

士官
「魚雷６本命中！　被害は確認中ですが、かなり甚大かと…」

艦長
「とにかく、浸水を抑えろ！　火災の確認も急げ！　航空機は大丈夫なのか！？」

士官
「そ、それも確認中です！」

とにもかくにも、今は被害を抑えるのが急務だ。
しかし、それも被害が報告されるまでだった。

士官
「魚雷による浸水が大量です！　中々止まりません！　更に速度は１８ノットに低下！」

艦長
「なに！？　破孔はそんなに大きいのか！？」

士官
「はい…更に６本が左舷に集中した為、水圧が…」

艦長

「むう……僚艦はどうだ？」

士官
「４艦は未だに炎上中、もう1艦は本艦同様、軽空母は2隻共に多量の浸水で総員退艦が命じられたそうです」

艦長
「僅かな時間でこれ程の被害……やはり、上は敵を舐めすぎていたんじゃあないのか？」

士官
「艦長、出来るだけその発言は止めましょう。従軍司教に聞かれたら面倒です」

周りに聞こえ無いようにそっと士官が耳打ちする。

艦長
「……だな。くそ、いつの間にか敵は帰っちまったな」

静かになった上空を見て艦長が苦々しく呟いた。

士官
「とりあえず、浸水を止めてみます…問題は時間ですね」

艦長
「ここまでくると嫌な予感しかしないぞ。敵がここまでやるなら…」

そこから先は言わなくても士官には解った。
ぐずぐずしていると、更に傷口を広めてしまう。

その頃……播磨艦橋

無線
『敵正規空母４隻被弾炎上！　正規空母2隻・軽空母2隻被雷！
なお、軽空母2隻は大傾斜中！』

現場上空に留まっている雷雲から戦果報告が届く。
福田がそれをモールス信号を介して各国艦隊に伝える。

遠地
「一番槍は随分と大暴れしたみたいだな」

大谷
「この様子だと、敵は相当油断していたな…やれやれ」

戦果を聞いた砲術参謀と作戦作戦が呟いた。

福本
「軽空母は総員退艦が出ただろうから…あとは正規空母だな」

セルベリア
「第二次攻撃隊は？」

レイナ
「あと２５分４６秒８６で敵艦隊上空に到着します」

……アンドロイド故に凄く細かい。

福本
「そうか…（先輩、どうも嫌な予感がするですけど、私だけでしょうか？）」

次号へ

１３９　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４０　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　５

さて、第二次攻撃隊はレイナが言った通り、２５分４６秒８６後にシグドー教圏国連合艦隊上空へと到達した。
未だに炎上中の空母４隻、低速航行している空母2隻を確認すると、艦爆隊は低速航行の2隻、艦攻隊は炎上中の４隻に止めを刺すべく所定位置に就いた。
艦爆隊が2隻に対し急降下爆撃を開始、周りの艦艇は必死に対空火器を乱射したが、妨害するところまではいかなかった。
更に低空飛行で接近した艦攻隊は炎上する４空母へ充分に距離を詰めると、魚雷を投下した。
火災消火中で動けない４空母は次々と魚雷を命中させた。
急降下爆撃も低速航行しか出来ない2空母に爆弾を命中させた。
僅かな戦闘機は必死に艦爆・艦攻隊を追跡しようとしたが、艦戦隊に阻まれた。

暫くして……シグドー教圏国連合艦隊兼ゼベルスト教皇国艦隊旗艦『ナシャルト三世』

士官
「空母６隻は全滅です……炎上中の４空母は火災の激化と多量浸水により、2空母は新たに火災が発生した為、総員退艦、破棄されました」

士官の報告に艦橋に居た誰もが暗くなった。
明らかに想定していた状態より不利な結果に成っている為だ。

参謀１
「やはり、あの噂は本当だったのでは？」

参謀２
「『シリティア王国の背後には強大な同盟国がある』…予想はしていたが、これ程とは…」

……そもそも、今回の戦争に賛成していたのは武官や文官よりも教皇とその取り巻き、シグドー教組織と宗教家達だ。
武官や文官が様々な理由を挙げても『貴様達は神のご意志に逆らうのか！？』と言われれば黙るしかないと言う『政治事情』がある。
ゼベルスト教皇国では武官・文官より僧官が重んじられる様に政治組織が形成されているからだ。

「何をやっておるんだ貴様らは！？　あの様な低俗異教徒にヤられればかりでどうする！？」

そう言って艦橋に入って来たのは艦隊最大の厄介者である従軍司教長。
各艦に居る従軍司教を統括する……と言うと聞こえはいいが、実態は艦隊運用にも作戦にも口を出す様なただの厄介者・邪魔者の類だった。

従軍司教長
「よくも我が無敵な飛龍を焼きおった異教徒共め！」

『本当に無敵なのかよ？』と訊きたいが、後々面倒なので止めておく。

従軍司教長
「こうなっては仕方ない……奴らを使うか…」

これを聞いた瞬間、誰もが口を出した。

参謀1
「じゅ、従軍司教長！　そ、それだけは止めて下さい！」

参謀2
「そ、そうです！　あいつらが果たして我々と…」

従軍司教長
「ええい、うるさい！！　これは決定したのだ！　貴様、神に背く気か！？」

…これを持ち出して周りを抑え込む。

従軍司教長
「何をしておる！　サッサと伝えんか！！」

暫くして……シグドー教圏国連合艦隊上空

レーダー員
「なあ、もうそろそろ帰還してもいいんじゃないか？」

パイロット

「ん、あ、そうだな…」

敵艦隊上空に張り付いていた雷雲のレーダー員とパイロットが帰還するかどうか話していた。
その時……

レーダー員
「ん？」

パイロット
「どうした？」

レーダー員
「いや、レーダーに反応があって…その反応の速度が速いんだ」

パイロット
「なに？　それで、どっちにむかってるんだ？」

レーダー員
「艦隊の方だ…しかも、１つや２つじゃあない…１０以上はある！」

パイロット
「そんな、バ……いや、ここは異世界だから…くそ、艦隊に連絡だ！」

次号へ

１４０　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　５（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４１　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　６

播磨艦橋

福田
「なに、速度はマッハだと！？　しかも２０以上！！　こっちに向かってるだって！？」

敵艦隊に張り付いている雷雲からの緊急無線を受け取った征一は叫んだ。
そんな馬鹿な…と言いかけて飲み込む…いきなり核ミサイルが目の前に転移して来たっておかしく無いこの世界の『常識』からしてみればあり得ない話では無いからだ。

福本
「敵機種は解らないのか？」

落ち着いた様子で勇気が訊いた。

無線
『す、すみません…レーダーで確認したのみで、機種までは…』

福本
「いや、気にしなくていい。ご苦労様、大回りして一度帰還せよ」

無線
『わかました』

返事をすると無線がきれた。

福本
「さて、かなり面倒な事になったな…レイナ、マッハ１で来た場合、敵はどれぐらいでミサイル射程に着く？」

レイナ
「…４６分５６秒３２です」

セルベリア
「約５０分ね…ぐずぐずしている暇は無さそうよ」

福本
「わかってる…出雲に連絡、心神の戦闘機型及び偵察機型を発艦。海龍・神龍・戦鷹・勇鷹も迎撃機を発艦させろ。無線、天城に繋げ」

福田
「了解！」

遠地
「心神の艦偵も出すのか？」

福本
「あぁ、今は正体を知りたい。第七艦隊全艦対空戦闘用意！」

「「「「「「了解！！」」」」」」

その頃……天城艦橋

山城
「そうです、迎撃機は前に出して下さい。敵機は前面で迎撃します。対艦ミサイルは艦艇で迎撃します」

播磨と偵察機のやり取りを聞いた山城は飛龍の有馬中将と無線を介して話していた。
その途中で佐野から「播磨から通信」と耳打ちされ、早めに終わらせると、播磨と繋いだ。

福本
『一気に大変な事になりましたね、先輩』

山城
「まあ、何時もの事さ…で、なんだ?」

福本
『はい、攻撃隊を編成し、根元を叩きます』

一瞬、山城の眉がピクリと動いたが、ニヤリと笑う。

山城
「その様子だと、叩く気満々だな…ちょっと待て、余裕が有るか調べてみる」

福本
『わかりました。では、後でまた繋ぎます』

そう言うときれた。

シルヴィア
「相変わらず、手が早い後輩だな」

山城
「まあ、結局は叩く事になるからな。小澤長官、攻撃隊の方はどうします？」

小澤大将
「主席参謀と同じ意見だ。どうせ空襲が終われば直ぐに叩かなければならないからな。攻撃隊の都合は付きそうかね？」

山城
「とにかく、確認してみます。佐野、無線を鳳翔の君塚司令に」

佐野
「了解」

その頃……出雲艦橋

島津
「整備長、心神は全部出せるんだよな？」

整備長
『出せるんだよな…だと？　なに言ってんだよ、出す為に毎日整備してるんだよ！　出せるに決まってるだろう！』

島津

「あはは、すまんすまん。発進は先ず偵察機型、次に戦闘機型だぞ！」

整備長
『んなもんは甲板に言ってくれ』

そう言うと格納甲板の整備長側の艦内電話はきれた。

近衛
「……本当に大丈夫なのか？」

ある意味第三者として聞いていた百合奈が尊大な態度をとりつつ、呆れた様に訊いた。

島津
「大丈夫、大丈夫。あそこまで言うんだから、自信と誇りがあるんだよ」

ニヤリと笑いながら輝正が自信有りげに言った。

近衛
「……私の足を引っ張らないでほしいな」

ポツリと呟く百合奈。

島津
「…なあ、百合奈。お前、人を信用した事ってあるか？」

その呟きを聞いた輝正が訊いた。

近衛
「…はあ？」

島津
「いやな、勇気とお前の違うところはそこなんだよ。あいつは今頃、仲間を信頼してドンと腰を据えてるよ」

近衛
「……悪かったな、信頼が無くて」

素っ気なく答える百合奈。
その応えに内心苦笑する島津だった。

次号へ

１４１　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　６（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４２　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　７（前書き）

日の丸タイフーン・雷風（Ｆ２）・心神の出番です。

１４２　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　７

出雲飛行甲板

バシャャャャン！！

偵察機型の心神がリニアカタパルトによって射出された。
無論、現在接近中の敵攻撃隊の母艦を探す為だ。

整備員
「檜山少尉！　あなたの機体から発艦させます！」

檜山
「了解、時間が無いから早くして！」

てんやわんやの大騒ぎの中、檜山の心神はリニアカタパルトに載せられた。

カタパルト要員
「よし、射出！」

バシャャャャン！！

リニアカタパルトによって射出された心神は直ぐに上昇に移る。
その間にも次の心神がリニアカタパルトに載せられる。
また、海龍・神龍・戦鷹・勇鷹から雷風がリニアカタパルトで射出され、上空で旋回しながら待機している。

管制官
『檜山少尉機、応答して下さい』

檜山
「こちら檜山機。感度良好、機体に異常無し」

管制官
『わかりました。そのまま暫く待機して下さい』

檜山
「わかったわ」

リニアカタパルトの状態も良好な様で、たちまち出雲の心神隊も集結した。
また各空母の迎撃隊も集まり出した。

管制官
『出雲隊、全機ポイント6に前進して下さい』

檜山
「了解、全機続け」

心神は編隊を組んで前進する。
周りを見ると同じ様に編隊を組む雷風がいた。

沖田
『第七艦隊空母部隊司令部より、全第七艦隊所属機に告げる。こちら司令の沖田だ。今回の迎撃部隊の指揮は第零艦隊所属空母征龍のガーラント少将が執る。全体指示はガーラント少将に従うように。以上だ』

沖田からの通知が終わった時、タイミングを図っていたかの様にガーラント少将が乗るタイフーンが前に出た。
続いて、ハルトマン、マルセイユ、ルッキーニが乗ったタイフーンが並んだ。
更に後ろから第零艦隊の迎撃部隊が追い付いてきた。

ガーラント
『第七艦隊所属全機、私がガーラント少将よ。これより私が指揮を執る。確り付いて来なさい。以上よ』

福地
『ヒュ～、噂は聞いてたけど、流石『航空部隊のお姉さん司令』だ』

コルマ
『女性に成っても、パイロットの資質と指揮官としてのカリスマ性は失われてないみたいですね』

檜山
「さすがだわ…」

ガーラントからの無線を聞いて思い思いの感想を言い合う3人だった。

管制官
『数分後に敵編隊と接触！』

ガーラント

『全機安全装置解除！　戦闘用意！』

ホークアイの管制官からの声に続いて、ガーラント少将の指示が無線から響く。
直ぐに安全装置を外し、戦闘用意を整える。
暫くするとレーダー画面に敵編隊の反応を写し出す。

ガーラント
『出雲の檜山少尉、聞こえますか？』

檜山
「は、はい！」

いきなりの指名に驚きながら返事をする。

ガーラント
『貴女の隊の機体はステルス機と聞いてるわ。先行し、敵編隊を攻撃する…出来るわね？』

檜山
「わかりました！　出雲隊、先行し、敵編隊を攻撃します！」

直ぐに心神の翼を左右に揺らすと出雲隊は先行した。
暫くして、敵編隊が目視確認出来た…しかも、出雲隊の方が高度は高い。

檜山
「敵機種はＳｕ２７フランカーの艦上型Ｓｕ３３、攻撃を開始します！」

太陽を背にし、一気に急降下した出雲隊は攻撃システムを稼働させ、各自で照準を付ける。

檜山
「こちら、ライデンリーダー、撃て！」

心神のウェポンベイから発射された対空ミサイルが敵機に向かって行く。

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

被弾した僚機を見たＳｕ３３が急上昇する。
だが、心神の後方からタイフーン・雷風がやってきた。

ガーラント
『全機迎撃開始！』

次号へ

１４２　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　７（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４３　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　８

播磨艦橋

空戦を示す数多の飛行機雲が艦隊前方上空で作られていた。
その光景を艦橋の誰もが黙って見ていた。

福本
「…状況はどうだ？」

レイナ
「現在のところ、敵も全力で応戦していますが、こちらの迎撃隊が有利に空戦を進めている様です」

オペレーターのレイナが冷静に応えた。
レーダーの反応から既に１００機以上の攻撃編隊だと解っている。
対しこちらは１００機以上の戦闘機で迎撃戦を展開中だ。

遠地
「なんとか防ぎきれそうだな」

大谷
「あぁ……だが、何かおかしい」

福本
「日向、お前もおかしいか？」

セルベリア

「あら、やっぱり勇気も日向も感じてたのね」

福田
「…どうしたんですか、いったい？」

３人のやり取りに征一が訊いた。

大谷
「わからないか？　敵は約１００機だ。半数が対艦兵装なら戦闘機も半数だ。しかし、ここまで戦うとなると、いま戦ってる編隊が戦闘機で占めている事になる。つまり、敵の対艦機は少ない」

遠地
「…まさか、この後に本隊が…」

そこまで和馬が言った時、けたたましい警報音が艦橋に鳴り響いた。

福田
「レーダーに新たな敵編隊をキャッチ！　敵編隊は真っ直ぐこちらに接近中！　数は現在１００以上…更に増加中！」

レーダー画面をレーダー担当員の隣で眺めていた征一が叫ぶ。

福本
「やっぱりか…迎撃隊はどうだ？」

レイナ
「現段階で２０機が被弾により戦線離脱。また、我が艦隊所属機の大半が弾薬切れで母艦に帰還すると言っています」

セルベリア
「やっぱり、うちのパイロット達は初実戦で撃ち過ぎたようね」

福本
「まあ、予想は出来ていた事だ。それに被弾機は出たが被撃墜がなかった事は素直に喜びたいよ」

そう言うと勇気は一度スクリーンのレーダー画面を見た。

福本
「沖田に連絡、増援の迎撃隊を発艦させよ。全艦対艦ミサイル・対空戦闘用意！」

遠地
「突破される可能性有り…か」

大谷
「まあ、現実的に対応するとなると、その可能性を考慮した方がいいからね」

ＣＩＣを兼ねる播磨の艦橋は俄に騒がしくなった。

その頃……迎撃隊

ダダダダ！

ゴワーン！！

一機のＳｕ３３が銃撃を受けて爆散した。
その脇をタイフーンが通り過ぎた。
乗っているのはマルセイユだった。
ちなみにその僚機はルッキーニである。

福地
「さすがマルセイユさんだ…コルマ、後ろは頼んだ」

コルマ
『了解、後ろは任せて下さい』

バックを確認すると直ぐに近くにいたＳｕ３３に狙いを絞った。

ダダダダダ！

ガンガンガン…ゴワーン！！

福地
「撃墜…はしたが、弾を余計に使ってるな」

残弾数を確認した福地が呟いた。

福地
「コルマ、次は俺がバックに付くから攻撃しろ」

コルマ
『わかりました』

管制官
『新たな敵編隊接近！　数は１２０以上！』

ガーラント
『来たわね…残弾に余裕の有る機は迎撃しなさい』

檜山
「了解。出雲隊続け！」

檜山は素早く部隊を取り纏めるとフルスロットで新たな敵編隊に向かった。
そして、彼女が見た物は……

檜山
「さすがに…多いわね…」

１２０を優に越える敵機の編隊…いくら心神でも全部を阻止するのは無理だ。

檜山
「ライデンリーダーから出雲隊全機へ、なるべく弾薬消費を抑えつつ迎撃せよ」

そう言うと檜山機は敵編隊に突っ込んで行った。

暫くして……再び播磨艦橋

レイナ
「敵編隊約２００機更に接近…ミサイル射程まで後僅か」

福田
「迎撃隊は必死ですが…弾薬不足ですね」

福本
「だが、迎撃隊は良くやってくれたよ。次は艦隊の出番だ」

そう言ったと同時にレイナが叫んだ。

レイナ
「敵編隊よりミサイル発射！　数は約４００！」

福本
「全艦対空迎撃開始！」

次号へ

１４３　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　８（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４４　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　９（前書き）

本日中に『大帝国』の二次創作の方を更新いたします。

１４４　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　９

駆逐艦　神波艦橋

オペレーター
「対艦ミサイル、我が方に接近！」

敵編隊から放たれた約４００発のミサイルは間違いなく、第七艦隊・第零艦隊に向かって接近しつつあった。

神童
「征空対空ミサイル用意。一発でも多く迎撃します」

砲術長が対ミサイルに照準を合わせ、ミサイルサイロンの扉が開き、発射態勢が終わる。

士官
「準備完了」

神童
「発射！」

シュボボウ！

発射された対空ミサイルが対艦ミサイルに向かって飛んでいく。
空母を除けば第七・第零艦隊は１２０隻近くも艦艇がいる為、迎撃の対空ミサイルも１００発を越える。

士官
「迎撃第一波成功です！」

神童
「まだ３００発はあるわ。迎撃第二波発射！」

数分後……播磨艦橋

レイナ
「対艦ミサイル１００発、我が方に接近」

『征空』対空ミサイルにより、なんとか約３００発の迎撃に成功したが、未だ多数の対艦ミサイルがすり抜けてきていた。

福本
「全艦取り舵一杯！！」

ソフィヤ
「よーそろ！　取り舵一杯！」

播磨が取り舵をとると後続の艦艇も左へ曲がり始める。
これにより、ミサイルとは垂直になる……つまり……

福田
「対艦ミサイル、迎撃ラインに入りました！」

福本
「全速射砲・自動稼働機関銃、迎撃開始！！」

セルベリア
「撃て！！！」

ドンドンドンドンドン！！
ドンドンドンドンドン！！
ドンドンドンドンドン！！
ドダダダダダダ！
ドダダダダダダ！
ドダダダダダダ！
ブオオオオオオン！
ブオオオオオオン！
ブオオオオオオン！

各艦に搭載されていた１５，５・１２，７ｃｍ速射砲、４０・２５ｍｍ六銃身単装自動稼働機関銃が唸りだした。
巡洋艦以上の艦艇の大半は側舷に多数の火砲を搭載出来る様に設計されているから、どちらかに向けてしまえば火力を発揮出来る。

グワーン！　グワーン！

ソフィヤ
「本艦に接近中の対艦ミサイル２発、迎撃しました！」

福田
「迎撃は順調の様ですね」

大谷

「それはどうかな。こう言う時こそ、気を抜くと…」

レイナ
「大変です！　敵ミサイル４発、迎撃網を突破し、第七航空戦隊に向かっています！」

福本
「なに！？」

勇気は思わず絶叫した。

出雲艦橋

オペレーター
「ミサイル、未だ第七航空戦隊に接近中！」

島津
「ちっ、なんて運の良いミサイルだ」

苦々しく呟く島津。
第二次大戦の編成から出雲の抜けた第七航空戦隊は鳳鷹が編入され、鳳鷹・勝鷹の２隻で組んでいた。
そして、この２隻は攻撃隊の準備をしている事を島津は知っていた。
だから余計に苦々しく思っていた……実は近くにもう１人苦々しく思う人間がいたりする。

近衛

「島津！！」

島津
「なんだよ、百合奈……！？」

名前を呼ばれたから振り向いたら、物凄い怒りのオーラを沸き出している百合奈が居た。

近衛
「島津、対空屋の貴様ならあれを迎撃出来るだろう！？」

島津
「あ、あぁ、出来ない事はない。しかしだな…」

近衛
「グダグダ言って無いでやれ！！」

島津
「お、おう…機関長！　速度一杯！」

機関長
『了解！　機関出力全快！！』

普段なら少々お堅く、尊大な百合奈の姿は吹っ飛んでいて、ついつい島津も押されたまま、指示を出した。
そして、出雲は37ノットに増速すると第七航空戦隊とミサイルの間に割り込んだ。

島津
「主砲以外の全火器はミサイルを迎撃しろ！！」

ドンドンドンドンドン！
ドンドンドンドンドン！
ドンドンドンドンドン！
ブオン！ブオン！ブオン！
ブオン！ブオン！ブオン！
ブオン！ブオン！ブオン！
ドダダダダダダダ！
ドダダダダダダ！
ドダダダダダダ！
ブオオオオオオン！
ブオオオオオオン！
ブオオオオオオン！

４発のミサイルに向けて速射砲・電磁砲・自動稼働機関銃が唸る。

播磨艦橋

ドガーン！グワーン！ゴワーン！ズドーン！

レイナ
「ミサイル４発迎撃成功！」

福本
「ふう…よかった」

ホッとした様に呟いた。

福田
「対艦ミサイル全弾迎撃出来ました…被弾艦は無し」

セルベリア
「そう…ところで、迎撃隊は？」

レイナ
「被弾機は５０機、大半は第七艦隊所属機です。迎撃数は３００機以上」

遠地
「攻撃隊の大半は撃墜した訳だが……さて、問題は相手の正体だな」

大谷
「うん、そろそろ心神の偵察型が見付けてもいい頃だけど…」

福田
「あ、心神から報告きました！　データを回します！」

そう言ってスクリーンに出た映像に福本達は絶句した。
何故なら……その空母はある本を読んでいれば知っている空母だった。

福田
「あ、あれは…イエローストーン！？」

次号へ

１４４　１３ヶ国艦隊ＶＳ４ヶ国艦隊　９（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7073r/

新第七独立機動艦隊奮戦記　～第七艦隊復活せよ！！～

2011年12月18日09時56分発行